

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第26集

泉坂下遺跡 V

一人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群—

保存整備事業に伴う第4次確認調査報告及び総括報告

平成28年12月

常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 26 集

いずみ さか した い せき
泉 坂 下 遺 跡 V

一人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群—

保存整備事業に伴う第 4 次確認調査報告及び総括報告

平成 28 年 12 月

常陸大宮市教育委員会



調査区全景（南から）



S K 164確認状況（北から）



SK 5・152・153確認状況（東から）



SK26出土壺形土器



SK1出土人面付壺形土器



SK23・24・26・30確認状況（北東から）

ごあいさつ

常陸大宮市は茨城県北西部に位置し、県都水戸市から北へ約20kmの、平成の大合併で誕生した人口約4万2千人の市です。

市域の北側には八溝・久慈山系からなる山地が連なり、南西端是那珂川が、東側を南北に縦断する久慈川が流れる景勝の地です。また、市域の中央には久慈川支流の玉川と那珂川支流の緒川が南北に流れ、高度に応じた緑豊かな丘陵・台地・低地を形成し、原始・古代からの重要な遺跡が多く残されています。

昭和55年頃、久慈川右岸の泉地区字坂下で、菊池榮一氏が転居後の宅地を水田として整地する際に偶然2個の弥生土器を発見し、大宮町歴史民俗資料館（当時）に寄贈されました。このことを発端として、平成18年に鈴木素行氏による学術調査が行われ、再葬墓が確認されるとともに国内最大の人面付壺形土器が出土し、多くの考古学関係者や市民の注目するところとなりました。この時に出土した遺物は、平成26年1月27日付けで茨城県指定有形文化財の指定を受けています。

市といたしましては、この貴重な遺跡を未来永劫に引き継ぐためには、国史跡の指定を受けることが肝要との考えから、平成22年10月に常陸大宮市泉坂下遺跡保存委員会を立ち上げ、保護・保存策について御検討をお願いしました。そして、遺跡の範囲や性格等を明らかにするための確認調査を行う運びとなり、平成24年度から毎年度調査を実施し、すでに第3次までの報告書を刊行しております。

このたびの報告書は、平成27年9月から10月にかけて実施した第4次調査の成果をまとめたものであるとともに、平成18年度調査及び4年度にわたった確認調査を総括する報告書です。第4次調査についても、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けて実施しており、泉坂下遺跡の重要性を世に伝えるとともに、これからの整備計画の基本資料として活用されるものと固く信じているところです。

なお、第4次確認調査中であった平成27年10月、泉坂下遺跡の地権者の一人である菊池榮一氏が永眠されました。菊池氏は、先述のとおり再葬墓発見につながった弥生土器寄贈者であり、その後続いた調査にも、多大な御支援・御協力をいただきました。心より御冥福をお祈りいたします。

最後になりますが、発掘調査にあたり御指導いただきました文化庁文化財部記念物課、茨城県教育庁文化課、泉坂下遺跡保存委員会委員の皆様、全般にわたり御協力いただきました地元の皆様及びその他御指導・御協力いただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

平成28年12月

常陸大宮市教育委員会
教育長 上久保 洋一

例 言

- 1 本書は、国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けて、常陸大宮市教育委員会が実施した、泉坂下遺跡の第4次確認調査の報告書である。あわせて、4次にわたった確認調査を総括する報告書でもある。第4次確認調査の報告を第1部、総括を第2部として構成した。
- 2 泉坂下遺跡は、茨城県常陸大宮市泉字坂下918番地ほかに所在する。
- 3 この調査は、泉坂下遺跡の将来の保存活用・国史跡指定のための資料を得ることを目的とした確認調査である。今回は4次計画の確認調査の第4次調査であり、主目的は再葬墓遺構分布範囲の確認及び第9号溝跡の走向の確認と性格等の把握である。また、第1次調査結果の検証のため、第4トレンチの再調査を行った。区域内に4か所のトレンチを設定して調査を行い、すべて人力により掘削した。調査対象面積は7,697㎡、実際の調査面積は135.25㎡である。
- 4 現地調査及び整理期間は以下のとおりである。

現地調査 平成27(2015)年9月1日～同年10月29日

整理作業 平成27(2015)年11月2日～平成28(2016)年11月30日

- 5 現地調査及び整理は、常陸大宮市教育委員会生涯学習課係長後藤俊一、同主事小林香澄、同嘱託職員萩野谷悟、同・同相田尚人(平成28年4月1日～)が担当した。本書の執筆は、本文のうち、第2部第1章を中林が、同第2章第1節を萩野谷が、また外部に委託した第1部第3章第1節、同第4章第4節2・3を下記6・7・10の者が担当し、その他を後藤が担当した。図・表は、中林と萩野谷が担当した。また調査に関する本市教育委員会の組織は以下のとおりである。平成28年度から、当事業は機構改革により発足した生涯学習歴歴史文化振興室に移管されている。

【平成27年度】 上久保洋一(教育長)、木村雅之(教育部長)、山本洋一(次長兼生涯学習課長)、笠井慎二(同課長補佐)、山田聡(同社会教育主事)、井坂仁(同係長)、武藤由香里(同主幹)

【平成28年度】 上久保洋一(教育長)、山本洋一(教育部長)、櫻村英子(次長)、桐原英夫(生涯学習課長)、石井聖子(同歴史文化振興室長)、中村直人(同主任)

- 6 地中レーダー探査計測については、有限会社三井考測に委託し、桜小路電機有限会社の協力のもと実施し、桜小路電機有限会社の西口和彦氏に本文第1部第3章第1節を執筆いただいた。
- 7 土器付着炭化物の放射性炭素年代測定については、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施し、本文第1部第4章第4節2を執筆いただいた。

管理：赤堀岳人 担当・分析：田中義文

- 8 再葬墓等の三次元計測については、有限会社三井考測に委託して実施した。
- 9 調査にあたっては、地権者である菊池榮一、菊池清、菊池隆広、菊池きよの各氏から多大なる御理解と御協力をいただいた。
- 10 調査は、文化庁文化財部記念物課榎直田佳男主任文化財調査官、茨城県教育庁文化課後藤孝行主任文化財保護主事、常陸大宮市泉坂下遺跡保存委員会から全般にわたり御指導をいただきながら実施した。なお、泉坂下遺跡保存委員会を構成する委員は、以下の各氏である。
川崎純徳(座長)、相田美樹男、石川日出志、鈴木素行、谷口陽子
また、鈴木氏には第1部第4章第4節3を執筆いただいた。
- 11 調査は、以下の方々の御協力のもと実施した。

相田尚人（平成28年3月31日まで）、小野千里、久米美夏、篠原とよ子、田硯照、須藤公子、関根史比古、田辺伸子（以上、現地調査及び整理作業）、海老原四郎、久保本要、佐藤兼理、佐藤里香、高橋宏昂、土井翔平、中村萌、廣水一真（以上、現地調査）、河西恵子、中村美肖、宮崎郁子（以上、整理作業）

- 12 現地調査及び整理作業にあたっては、以下の方々及び諸機関から種々御教示や御協力をいただいた（敬称略）。記して謝意を表する。

荒井世志紀、荒蒔克一郎、石井實、井上慎也、植木雅博、梅沢重昭、梅田由子、海老澤稔、大網信良、大塚初重、岡田利美、鴨志田篤二、川口武彦、川井正一、瓦吹堅、菊池健一、菊池雄一、菊池芳文、忽那敬三、古田土正、小玉秀成、後藤一成、齋藤弘道、設楽博己、柴田忠良、清水哲、仙波亨、高橋龍三郎、瀧瀬芳之、田中耕作、田中裕、永井茂文・ゆわえ、長崎調一、西口和彦、白田正子、橋本勝雄、原田昌幸、比毛君男、吹野富美夫、松本直人、三井猛、村越俊貴、森嶋秀一、野内智一郎、横倉要次、綿引太一、千葉県多古町教育委員会、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、明治大学博物館

- 13 出土遺物及び関係資料は、常陸大宮市教育委員会において保管している。

- 14 本書に掲載した出土遺物拓本の一部には、茨城県指定無形文化財保持団体本西の内紙保存会の渡いた西ノ内紙を用いた。

- 15 本書では、設楽博己氏の『弥生再葬墓と社会』（塙書房、2008年）に倣い、以下のとおり再葬墓を分類、記述した。

1 基の土坑に、1点の再葬土器が埋納されている再葬墓…単数土器再葬墓、単数型（土器棺墓という表現は用いない）

1 基の土坑に、複数の再葬土器が埋納されている再葬墓…複数土器再葬墓、複数型
ただし、調査経過等の記述では調査当時の呼称のままとした場合がある。

- 16 当遺跡において、第3次確認調査で確認された2群の再葬墓群について、当時は $a \cdot \beta$ 群と呼称していたが、判り易くするため、それぞれ東・西群と本書では呼称を改めた。

- 17 平成18年調査の際の遺構名称を、総括の場合等には、便宜上確認調査時の名称に統一した場合がある。

例) 第○号墓塚→第○号土坑、第○号遺構→第○号性格不明遺構






凡 例

- 1 地区設定については、平成18(2006)年の調査時に鈴木素行氏が現在の地形を考慮してグリッドを設定しているため、これを踏襲した。グリッドの南北軸はN-23°-Wである。

平成18年の調査時に設定した北西端の杭を基準とし、遺跡範囲内を東西・南北各々20mの大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し、2m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ1, 2, 3・・・、西から東へA, B, C・・・とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。なお、平成18年の調査区はF6区となる。さらに小調査区は北から南へ1, 2, 3・・・0、西から東へa, b, c・・・j, とし、名称は大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b1区」のように呼称した。
- 2 トレンチは、平成18年調査時のものを第1トレンチとし、それを中心として東西南北に延ばすように設定し、さらに必要に応じて設定している。番号は随時、時計回りで付した。なお、作業の便宜上、トレンチを5mごとに区切って、中心側から1区、2区・・・等と称した場合がある。また、第3次調査においては、再葬墓集中区でトレンチ間を調査する必要が生じたため、第24トレンチ以北をA地区、第24トレンチ南側・第15トレンチ北側をB地区、第15トレンチ南側・第8トレンチ北側をC地区、第8トレンチ南側・第17トレンチ北側をD地区、とそれぞれ呼称した。
- 3 本文・実測図・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構等 SB-掘立柱建物跡, SD-溝, SE-井戸跡, SI-堅穴住居跡, SK-土坑,
SX-性格不明遺構, P-柱穴, T-トレンチ, K-攪乱

遺物等 P-土器・土製品, Q-石器・石製品, S-石
- 4 土層と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原英雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 5 トレンチ・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。
 - (1) 全体図は400分の1、トレンチ実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
 - (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。
 - (3) トレンチ・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	竈材、黒色処理、黒色物質付着		須恵器（断面）
	釉		赤彩、赤色顔料付着
	その他（使用する図で解説）		
 - (4) トレンチ・遺物実測図中の●は土器・土製品、■は石器・石製品、▲は鉄・銅製品、★は骨製品の、それぞれ出土位置を示す。
- 6 遺物観察表の表記については以下のとおりである。
 - (1) 欠損がある場合、現存値は（ ），推定値は[]を付して示した。計測値の単位は原則、cmで、重量はgで示した。有効数字は表示のとおりである。記すべきものがない場合、-で示した。
 - (2) 備考欄は、写真図版番号（PL）、残存状況その他必要と思われる事項を記した。
- 7 「主軸」は、竈を持つ堅穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については、長軸（長径）を軸とみなした。「主軸・長軸（長径）方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-W）。

目次

ごあいさつ	
例言	ii
凡例	iv
目次	v
挿図・付図目次	vi
表目次	viii
写真図版目次	ix
第1部 第4次確認調査	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の目的と方法	4
第3節 調査経過	7
第2章 位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	11
第3章 地中レーダー探査計測	15
第1節 地中レーダー探査計測	15
第4章 調査の成果	40
第1節 遺跡の概要	40
第2節 基本層序	40
1 上位層	40
第3節 遺構と遺物	47
1 第4トレンチ	47
2 第14トレンチ	65
3 第22トレンチ	79
4 第27トレンチ	87
5 表面採集	134
第4節 考察	135
1 地中レーダー探査結果の検証	135
2 出土炭化物の放射性炭素年代測定	139
3 泉坂下遺跡における石棒製作について	146
第5節 まとめ	161
第2部 調査の総括	163
第1章 調査の成果	165
第1節 調査概要	165
第2節 遺跡の範囲	170
第3節 遺跡の変遷	173
第4節 弥生時代再葬墓遺構と出土遺物	189
第5節 まとめ	228
第2章 総括	231
第1節 弥生時代再葬墓遺跡の中の泉坂下遺跡	231
第2節 地域の文化遺産としての泉坂下遺跡	243
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 ・ 付 図 目 次

第1図	泉坂下遺跡周辺遺跡分布図	12	第43図	G地区50-60ns成果合成図	37
第2図	茨城県北部及びその周辺の弥生時代中期前半の遺跡	13	第44図	G地区75-85ns成果合成図	38
第3図	探査測定風景	15	第45図	80-90ns成果全体合成図	38
第4図	泉坂下遺跡探査位置図(F地区・G地区)	18	第46図	泉坂下遺跡遺構推測図	39
第5図	泉坂下遺跡探査位置図F地区	18	第47図	泉坂下遺跡平面図	41
第6図	泉坂下遺跡探査位置図G地区	19	第48図	基本土層分類及び土層解説	42
第7図	F地区断面図(抜粋)	19	第49図	第4トレンチ実測図	45・46
第8図	F地区断面成果図(1)	20	第50図	第19～21・160・163号土坑実測図	48
第9図	F地区断面成果図(2)	20	第51図	第163号土坑出土遺物実測図	49
第10図	G地区断面図(抜粋)	21	第52図	第5・152・153号土坑実測図	50
第11図	G地区断面成果図(1)	21	第53図	第5号土坑出土遺物実測図	51
第12図	G地区断面成果図(2)	22	第54図	第152号土坑出土遺物実測図	52
第13図	F地区地中レーダー・タイムスライス平面図	22	第55図	第153号土坑出土遺物実測図	53
第14図	F地区平面図(1)	23	第56図	第164号土坑実測図	55
第15図	F地区平面図(2)	23	第57図	第164号土坑出土遺物実測図	56
第16図	F地区平面図(3)	24	第58図	第8号溝跡出土遺物実測図	58
第17図	F地区平面図(4)	24	第59図	第175号土坑出土遺物実測図	61
第18図	F地区平面図(5)	25	第60図	第4トレンチ遺構外出土遺物実測図(1)	62
第19図	F地区平面図(6)	25	第61図	第4トレンチ遺構外出土遺物実測図(2)	63
第20図	F地区平面図(7)	26	第62図	第14トレンチ実測図	65
第21図	F地区平面図(8)	26	第63図	第165・166号土坑実測図	66
第22図	F地区平面図(9)	27	第64図	第165号土坑出土遺物実測図	67
第23図	F地区平面図(10)	27	第65図	第9号溝跡出土遺物実測図	69
第24図	G地区地中レーダー・タイムスライス平面図	28	第66図	第14号竪穴住居跡実測図	71
第25図	G地区平面図(1)	28	第67図	第14号竪穴住居跡出土遺物実測図	71
第26図	G地区平面図(2)	29	第68図	第15号竪穴住居跡出土遺物実測図	74
第27図	G地区平面図(3)	29	第69図	第173号土坑出土遺物実測図	76
第28図	G地区平面図(4)	30	第70図	第14トレンチ遺構外出土遺物実測図	77
第29図	G地区平面図(5)	30	第71図	第22トレンチ1・2区実測図	80
第30図	G地区平面図(6)	31	第72図	第22トレンチ5・6区実測図	81
第31図	G地区平面図(7)	31	第73図	第2号掘立柱建物跡出土遺物実測図	82
第32図	G地区平面図(8)	32	第74図	第22トレンチ遺構外出土遺物実測図	86
第33図	G地区平面図(9)	32	第75図	第27トレンチ実測図(1)	88
第34図	G地区平面図(10)	33	第76図	第27トレンチ実測図(2)	89
第35図	15-25ns成果全体合成図	33	第77図	第26号竪穴住居跡実測図	89
第36図	F地区5-15ns成果合成図	34	第78図	第26号竪穴住居跡実測図	91・92
第37図	F地区15-25ns成果合成図	34	第79図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	93
第38図	F地区50-60ns成果合成図	35	第80図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	94
第39図	F地区75-85ns成果合成図	35			
第40図	F地区合成図(1)	36			
第41図	F地区合成図(2)	36			
第42図	G地区15-25ns成果合成図	37			

第81図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)	95	第115図	再葬墓西群分布範囲図	161
第82図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)	96	第116図	第7トレンチ実測図	170
第83図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(5)	97	第117図	第16トレンチ実測図(東部)	171
第84図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(6)	98	第118図	泉坂下遺跡の範囲	172
第85図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(7)	99	第119図	縄文時代前期の主な出土遺物実測図	173
第86図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(8)	100	第120図	第32号土坑・出土遺物実測図	174
第87図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(9)	101	第121図	縄文時代遺構分布拡大図	175
第88図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(10)	102	第122図	第9・10号竪穴住居跡実測図	175
第89図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(11)	103	第123図	第9号竪穴住居跡出土遺物実測図	176
第90図	第179号土坑出土遺物実測図	118	第124図	第10号竪穴住居跡出土遺物実測図	177
第91図	第176号土坑出土遺物実測図	119	第125図	第11・12号竪穴住居跡実測図	177
第92図	第180号土坑実測図	120	第126図	第11号竪穴住居跡出土遺物実測図	178
第93図	第180号土坑出土遺物実測図	121	第127図	第12号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	179
第94図	第4号掘立柱建物跡出土遺物実測図	123	第128図	第12号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	180
第95図	第181号土坑実測図	126	第129図	第26号竪穴住居跡実測図	180
第96図	第182号土坑出土遺物実測図	127	第130図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	181
第97図	第185号土坑出土遺物実測図	129	第131図	第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	182
第98図	第27トレンチ遺構外出土遺物実測図(1)	130	第132図	縄文時代晩期後葉の主な出土遺物実測図	182
第99図	第27トレンチ遺構外出土遺物実測図(2)	131	第133図	弥生時代前期の主な出土遺物実測図	183
第100図	表面採集遺物実測図	134	第134図	弥生時代後期の出土遺物実測図	183
第101図	第4トレンチ西部付近遺構配置図	136	第135図	古墳時代の出土遺物実測図	183
第102図	第4トレンチ西部付近の電波反射 (第15～18・21図から抜粋)	137	第136図	第3号竪穴住居跡出土遺物実測図	184
第103図	第7・8号溝跡を示す電波反射 (第18図から抜粋)	138	第137図	縄文時代遺構分布図	185
第104図	遺構毎の較正年代	145	第138図	弥生時代遺構分布図	186
第105図	調査区における石棒の分布密度	146	第139図	古代遺構分布図	187
第106図	泉坂下遺跡における石棒の製作工程	149	第140図	中近世遺構分布図	188
第107図	敲打段階の工具	148	第141図	第1号土坑実測図	189
第108図	研磨段階Ⅰの未成品と成品	150	第142図	第1号土坑出土遺物実測図	189
第109図	研磨段階Ⅰの工具	151	第143図	弥生時代再葬墓等遺構分布図	190・191
第110図	研磨段階Ⅱの工具	152	第144図	第2号土坑実測図	192
第111図	擦り切り折断の資料	153	第145図	第2号土坑出土遺物実測図	193
第112図	関東地方東部における石棒の変遷	154	第146図	第3号土坑実測図	194
第113図	小野天神前遺跡の石棒未成品	155	第147図	第3号土坑出土遺物実測図	194
第114図	泉坂下遺跡第27トレンチ土壌サンプルから 水洗選別で検出されたタイ料の歯	155	第148図	第4号土坑実測図	195
			第149図	第4号土坑出土遺物実測図	195
			第150図	第5号土坑実測図	196
			第151図	第5号土坑出土遺物(土器1～6)実測図	196
			第152図	第6号土坑実測図	197
			第153図	第6号土坑出土遺物・土器1内遺物実測図	197
			第154図	第21号土坑出土遺物実測図	197
			第155図	第19～21号土坑実測図	198
			第156図	第23号土坑実測図	199

第157図	第23号土坑出土遺物実測図	199	第173図	第118号土坑出土遺物実測図	206
第158図	第24・30号土坑実測図	200	第174図	第136号土坑・出土遺物実測図	206
第159図	第25号土坑実測図	200	第175図	第152・153号土坑実測図	207
第160図	第26号土坑実測図	201	第176図	第152・153号土坑出土遺物実測図	207
第161図	第26号土坑出土遺物実測図	201	第177図	第164号土坑実測図	208
第162図	第59～61号土坑実測図	202	第178図	第1号性格不明遺構・出土遺物実測図	208
第163図	第59号土坑土器1実測図	202	第179図	再葬墓以外の弥生時代土坑分布図	221
第164図	第61号土坑土器1実測図	202	第180図	第9号土坑・出土遺物実測図	221
第165図	第108号土坑実測図	203	第181図	第67号土坑・出土遺物実測図	222
第166図	第110号土坑・出土遺物実測図	203	第182図	第81号土坑・出土遺物実測図	223
第167図	第113号土坑実測図	204	第183図	第83号土坑・出土遺物実測図	224
第168図	第114～116号土坑実測図	204	第184図	弥生時代再葬墓遺跡の分布	233
第169図	第115号土坑出土遺物実測図	205	第185図	弥生時代再葬墓等遺構分布図	234
第170図	第117号土坑実測図	205	第186図	主な人面付土器	239
第171図	第117号土坑出土遺物実測図	205			
第172図	第118号土坑実測図	206			

表 目 次

第1表	泉坂下遺跡周辺遺跡一覧表	13	第22表	第176号土坑出土遺物観察表	120
第2表	茨城県北部及びその周辺の弥生時代中期前半の遺跡一覧表	14	第23表	第180号土坑出土遺物観察表	122
第3表	泉坂下遺跡V第1部収載遺構一覧表	43	第24表	第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表	124
第4表	第163号土坑出土遺物観察表	49	第25表	第182号土坑出土遺物観察表	128
第5表	第5号土坑出土遺物観察表	51	第26表	第185号土坑出土遺物観察表	129
第6表	第152号土坑出土遺物観察表	52	第27表	第27トレンチ遺構外出土遺物観察表	131
第7表	第153号土坑出土遺物観察表	53	第28表	表面採集遺物観察表	134
第8表	第164号土坑出土遺物観察表	56	第29表	放射性炭素年代測定結果	141
第9表	第8号溝跡出土遺物観察表	58	第30表	暦年較正結果	142
第10表	第175号土坑出土遺物観察表	61	第31表	泉坂下遺跡2012-2015年度調査の粘板岩製石棒一覧表	157
第11表	第4トレンチ遺構外出土遺物観察表	63	第32表	泉坂下遺跡第27トレンチ土壌サンプルから水洗選別で検出された粘板岩製石棒一覧表	158
第12表	第165号土坑出土遺物観察表	68	第33表	泉坂下遺跡2012-2015年度調査の非粘板岩製石棒一覧表	159
第13表	第9号溝跡出土遺物観察表	69	第34表	泉坂下遺跡2012-2015年度調査の砥石一覧表	159
第14表	第14号堅穴住居跡出土遺物観察表	72	第35表	泉坂下遺跡第27トレンチ土壌サンプルから水洗選別で検出された砥石一覧表	159
第15表	第15号堅穴住居跡出土遺物観察表	74	第36表	泉坂下遺跡遺構一覧表	166
第16表	第173号土坑出土遺物観察表	76	第37表	再葬墓内埋納土器一覧表	209
第17表	第14トレンチ遺構外出土遺物観察表	78	第38表	再葬墓出土遺物観察表	214
第18表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	82	第39表	人面付土器出土遺跡一覧表	238
第19表	第22トレンチ遺構外出土遺物観察表	86			
第20表	第26号堅穴住居跡出土遺物観察表	103			
第21表	第179号土坑出土遺物観察表	118			

写真図版目次

- 巻頭図版1 調査区全景, SK164確認状況
- 巻頭図版2 SK5・152・153確認状況, SK26出土壺形土器
- 巻頭図版3 SK1出土人面付壺形土器
- 巻頭図版4 SK23・24・26・30確認状況
- 図版1 遺跡遠景(1)～(3), 調査区全景(1)・(2)
- 図版2 調査区全景(3)～(7)
- 図版3 調査区全景(8)・(9)
- 図版4 第4・14トレンチ全景, 第4トレンチ全景(1)・(2), 河北拡張区確認状況, 同南拡張区確認状況
- 図版5 SK5・152・153確認状況(1)～(3), SK5確認状況(1)・(2)
- 図版6 SK152確認状況(1)・(2), SK153確認状況, SK19確認状況, SK19～21・163確認状況
- 図版7 SK20確認状況, 同保護措置状況(1)～(3), SK21・161・162確認状況, SK163確認状況, SK164確認状況(1)・(2)
- 図版8 SK164確認状況(3)～(5), 同保護措置状況, SK160確認状況
- 図版9 SD8確認状況, SK174・175確認状況, 第14トレンチ全景, 同トレンチセクション(1)・(2)
- 図版10 第14トレンチセクション(3)・(4), SD9確認状況(1)・(2), SI14・SD9重複状況
- 図版11 SI14確認状況, SI14竈確認状況(1)～(3), SK165遺物出土状況, 同調査状況(北から), SK165・166調査状況, SK172・173確認状況
- 図版12 SK172・173セクション, 第22トレンチ1・2区全景, 第22トレンチ全景, 同5・6区全景(1)・(2)
- 図版13 第22トレンチ1・2区セクション(1)・(2), 同5・6区セクション(1)～(5), SI25確認状況
- 図版14 SI25竈確認状況, SB2P1・2確認状況, SB2P2遺物出土状況, SB5P1・2確認状況, SK171確認状況(1)・(2), 第27トレンチ出土状況(1)・(2)
- 図版15 第27トレンチ全景, 第27トレンチ遺物出土状況(3)～(5)
- 図版16 第27トレンチ完掘状況(1)・(2), 第27トレンチセクション(1)～(4)
- 図版17 第27トレンチセクション(5)～(7), SI26遺物出土状況(1)・(2), 同確認状況
- 図版18 SI26遺物出土状況(3)・(4), 同完掘状況, 同サブトレンチ
- 図版19 SI26竈確認状況, SI26粘土ブロック(1)・(2), SB3確認状況, SB4P1確認状況
- 図版20 SB4P2確認状況, SK176確認状況, SK177確認状況, SK178確認状況, SK178セクション, SK179確認状況, SK180確認状況, SK181確認状況(1)
- 図版21 SK181焼土ブロックセクション, 同確認状況(2), 同焼土ブロック除去後セクション, SK182確認状況, 作業風景(1)
- 図版22 作業風景(2)～(5), 現地説明会風景(1)・(2), 調査参加者, 調査終了後全景
- 図版23 SK163出土遺物, SK5出土遺物, SK152出土遺物, SK153出土遺物, SK164出土遺物, SK175出土遺物, SD8出土遺物(1)
- 図版24 SD8出土遺物(2), 第4トレンチ遺構外出土遺物(1)
- 図版25 第4トレンチ遺構外出土遺物(2), SK165出土遺物, SD9出土遺物(1)
- 図版26 SD9出土遺物(2), SI14出土遺物
- 図版27 SI15出土遺物, SK173出土遺物, 第14トレンチ遺構外出土遺物(1)
- 図版28 第14トレンチ遺構外出土遺物(2), SB2出土遺物, 第22トレンチ遺構外出土遺物, SI26出土遺物(1)
- 図版29 SI26出土遺物(2)

図版30	S I 26出土遺物 (3)
図版31	S I 26出土遺物 (4)
図版32	S I 26出土遺物 (5)
図版33	S I 26出土遺物 (6)
図版34	S I 26出土遺物 (7)
図版35	S I 26出土遺物 (8)
図版36	S I 26出土遺物 (9)
図版37	S I 26出土遺物 (10)
図版38	S I 26出土遺物 (11), S K 179出土遺物
図版39	S K 176出土遺物, S K 180出土遺物
図版40	S B 4 出土遺物
図版41	S K 182出土遺物, S K 185出土遺物, 第27トレンチ遺構外出土遺物 (1)
図版42	第27トレンチ遺構外出土遺物 (2), 表面採集遺物
図版43	S K 1 出土遺物, S K 2 出土遺物 (1)
図版44	S K 2 出土遺物 (2)
図版45	S K 2 出土遺物 (3), S K 3 出土遺物 (1)
図版46	S K 3 出土遺物 (2), S K 4 出土遺物
図版47	S K 5 出土遺物, S K 6 出土遺物
図版48	S K 26出土遺物, S X 1 出土遺物

第 1 部

第 4 次 確 認 調 査

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

泉坂下遺跡は、当時の地権者菊池榮一氏（故人）の自宅敷地であったが、菊池氏が転居後水田にするため整地して土出した遺物を、当時の大宮町歴史民俗資料館と同町立上野小学校に寄贈したことから、一部に知られていた。歴史民俗資料館に寄贈されていた遺物は、石棒破片及び未成品7点、弥生土器2点である。うち壺形土器1点は、平成7（1995）年、大宮町歴史民俗資料館特別展「大宮の考古遺物」で展示され、図録（大宮町歴史民俗資料館「大宮の考古遺物」大宮町教育委員会、平成7年）にも記載されたことから広く知られ、再葬墓遺跡の可能性のある遺跡として注目されるようになっていた。

これらの遺物のうち、特に石棒関係の資料に着目した鈴木素行氏が、平成18（2006）年1月から2月にかけて、石棒製作遺跡の実態解明を目的として学術調査を実施した。ところが、調査当初から再葬墓遺構が良好な遺存状態で確認されるに及び、調査の目的が再葬墓の実態解明に変更となった。再葬墓が稀少な遺構である上に、調査初日から人面付壺形土器が出土し、調査目的の変更は自然な動きであった。

その後、調査で得られた資料は慎重に整理され、詳細な考察とともに調査報告書『泉坂下遺跡の研究—人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について—』（鈴木素行編集・発行、平成23年8月25日。以下「鈴木2011」）にまとめられた。なお、同報告書は、同年8月31日、鈴木氏の好意により実質同内容で「茨城県常陸大宮市泉坂下遺跡」として当市教育委員会から発行されている。また、調査で出土した遺物は、平成21（2009）年11月末日に鈴木氏から常陸大宮市に移管されている。

当市はこれら資料の文化財としての重要性に鑑み、歴史民俗資料館で平成21年度企画展「再葬墓と人面付土器のふしぎ」（期間：平成21年12月15日～平成22年2月7日）を開催し、研究者や一般の注目を集めた。併せて開催されたシンポジウム（平成22年1月31日）は市外からも多くの参加者を得、関心の高さを裏付けたものであった。

これらの再葬墓出土物については、平成22年3月31日付で市指定文化財に指定され、さらには平成26年1月27日付で県指定文化財に指定されている。

また、遺跡の重要性も極めて高いことから、当市としては保存・整備の上、活用することとし、そのために常陸大宮市泉坂下遺跡保存委員会（以下、保存委員会）を組織して、その指導のもとに調査・保存・整備・活用をすることとした。以降、保存委員会では測量・確認調査についての検討・指導、整備の基本理念・基本計画等の具体的な検討を進めた。保存委員会では、今後保存・整備・活用を円滑に進めるためには国史跡指定を得ることが肝要との考えから、その基礎資料を得ることを目的とした確認調査を、当初は3か年計画で実施することが立案された。

そして、平成24年10月から11月にかけて第1次、平成25年8月から10月にかけて第2次の確認調査を実施し、再葬墓遺構の分布範囲の確認や原地形の確認といった成果を挙げた。これらについては『泉坂下遺跡Ⅱ 保存整備事業に伴う第1次確認調査報告』（常陸大宮市教育委員会編集・発行、平成25年7月31日。以下、「報告書Ⅱ」）及び『泉坂下遺跡Ⅲ 保存整備事業に伴う第2次

確認調査報告】(同、平成26年7月31日。以下、「報告書Ⅲ」)にそれぞれまとめている。しかし、ここまでの調査を終えた時点で、3か年の確認調査を補足する調査の必要が生じた。このため、3か年だった計画を4か年へと変更することとした。

平成26年9月から12月にかけて実施した第3次調査では、再葬墓密集域を面的に広げて調査し、分布範囲を概ね把握できた。しかし、第10トレンチ1・2区で新たな再葬墓が確認されて、再葬墓が2群をなすことが判明し、新たな再葬墓群の範囲把握が最重要課題として浮上した。また、第9号溝跡についても、平安時代の竪穴住居跡との重複関係を捉えることが課題として残った。なお、再葬墓の性格・特徴等の把握のため、再葬墓をサンプル的に1基だけ(第26号土坑)掘り込み、精査した。これらの結果については、「泉坂下遺跡Ⅳ 保存整備事業に伴う第3次確認調査報告」(常陸大宮市教育委員会編集・発行、平成27年7月31日。以下、「報告書Ⅳ」)にまとめている。

また、この第3次調査の現地調査期間に合わせて、様々な取り組みが行われた。10月2日、泉坂下遺跡を会場に、文化財写真技術研究会主催の「文化財写真技術ミニ講習会 in いばらき」が開催され、県内の文化財担当者8名が参加した。さらに、市歴史民俗資料館では10月14日から11月24日にかけて、平成26年度企画展「Mission !! 東日本の弥生時代を解明せよ!—ここまでわかった泉坂下遺跡—」を開催し、第2次調査までの成果を発表した。11月9日には、午前10時から泉坂下遺跡で現地説明会を開催し、参加者104名を、午後には市文化センターで泉坂下遺跡シンポジウムを開催し、参加者230名を集めた。

平成27年5月には、第4次調査に先駆けて、泉坂下遺跡の一部に地中レーダー探査を実施した。これは、第9号溝跡の走向の確認を主目的とするもので、できるだけ遺跡の保存に配慮した調査方法を探っていく必要があると考えたため実施した。この成果については第1部第3章に掲載する。

ここまでの調査結果や地中レーダー探査結果を踏まえて、第4次調査を平成27年9月1日から10月29日にかけて実施した。

第2節 調査の目的と方法

調査の目的は上記したとおり、「泉坂下遺跡整備の基本理念」(pp.5-6)に則り、将来の保存・活用、及び国史跡指定申請のための基礎資料を得ることである。「泉坂下遺跡第4次確認調査要項」(pp.6-7)のとおり、第4次調査の主目的としては、第10トレンチの再葬墓の周辺への広がりを確認し、再葬墓の全体像を把握すること、また、第9号溝跡と平安時代の住居跡との切り合い関係を確認し、走向の確認と性格等を把握すること、の2点を掲げた。

調査の目的を達成するために、以下のことを行った。まず、第10トレンチ西方の再葬墓の広がりを掴むため、新たなトレンチ(第27トレンチ)を設置し、また、第9号溝跡と平安時代の住居跡との切り合いを確認するため、第2次調査で調査済の第14トレンチの一部再発掘を行った。これに加え、不安が残った第4トレンチ全体を再発掘するとともに、地中レーダー探査で反応のあった部分の確認のためにトレンチを拡張した。さらに、遺跡の所在する低位段丘面内でも、西側の斜面近くは未調査となっていたため、第22トレンチを設置して調査した。

トレンチの掘削は、下層に存在する遺構を保護するため、全て人力で行なうこととした。また

埋め戻しも同様に人力で行った。

調査中に確認された遺構は原則として掘り込まず、従って遺構に伴う遺物の取り上げもせず、確認のためやむを得ない場合のみサブトレンチを掘削して調べる、という基本方針は第1～3次調査から踏襲した。再葬墓遺構の精査にあたっては、有限会社三井考測に委託して、遺構形状・出土遺物も全て3次元計測を実施した。周辺のトレンチ・遺構も同時に計測して、再葬墓遺構の位置情報を周辺の状況と併せて記録した。また、再葬墓遺構の分析には、可能な限り自然科学的調査を行っていくこととした。

なお、調査区域は主に陸田であり、調査した遺構が耕作により破壊されることが危惧されることから、遺構保護のため、これまでに引き続いて調査区域の借上げを行なうこととした。これによって耕作による遺構破壊の危惧がなくなることから、トレンチ幅は2mを基本とすることとした。

調査は常陸大宮市教育委員会が主体となって実施し、保存委員会が指導する体制を採ることとした。また状況によって文化庁、茨城県教育庁文化課にも指導を仰いだ。

調査区割については、平成18年調査の際のトレンチを基本とするグリッドによることとしたため、南北軸がN-23°-Wの傾きを見せるが、これは調査地の地形に合わせたものとなっている。無論今後に生かせるよう、世界測地系（新・平面直角座標系）に反映できるようにした。

「泉坂下遺跡整備の基本理念」(抜粋)

1 当市の教育政策と泉坂下遺跡

(中略) 泉坂下遺跡とその出土遺物は、当市の多くの優れた文化財の中でも、とりわけ大きな重要性を持つものであり、「郷土の誇れるもの」の中でも白眉といえる。泉坂下遺跡とその出土遺物の保存・活用は、当市の教育と教育政策の中核をなすべきものである。当市としては、泉坂下遺跡とその出土遺物を後世に向けて万全な保存をし、十分に活用していかななくてはならない。

(中略)

2 泉坂下遺跡の基本的性格と構造

(中略) 当市域の再葬墓の遺跡としては、当遺跡のほか小野天神前遺跡、中台遺跡が知られており、また周辺では那珂市域に海後遺跡なども所在する。当市域及び周辺は再葬墓の遺跡が密な分布を示す地域であり、再葬墓を有する文化が大きく展開している地域といえる。

当遺跡は、そうした時期と地域の中で営まれた再葬墓群に強く特色づけられる。その上、一次葬の土壙墓群を伴っており、当時の墓制の実相を示唆している。ただ、再葬墓群や関連する遺構の範囲については、平成18年の調査が部分的なものであり、現在のところ不明である。また、生活の拠点としての集落遺跡や生業の場としての水田等の遺跡の所在も不明である。

(中略) 当遺跡は再葬墓の遺跡として、縄文時代から弥生時代への転換期における当地域の文化の様相を象徴的に示している可能性がある。一方で遺跡の範囲や年代、性格等は不明の部分が大きく、遺跡の全体像は捉えられていない。(中略) 今後、調査を実施して明らかにしていく必要がある。

3 泉坂下遺跡の重要性

(中略) きわめて遺存状況がよいことである。再葬墓遺跡が少ない上に多くは遺存状況が悪く、

調査研究に支障を来しており、遺存状況が良好な当遺跡の今後の調査によっては、弥生時代墓制の解明、ひいては弥生時代の社会や文化の解明が大きく進展する可能性がある。さらに言えば、前回調査で出土したような遺構・遺物が周辺に埋没している可能性があり、そうした状況が明らかになれば弥生時代の解明に計り知れない意義がある。当遺跡の持つ学術上の、また教育上の意義がさらに増大する可能性があるのである。

4 国史跡指定と整備の基本理念

以上に述べた重要性に鑑み、今後さらに遺跡の性格等の把握に努め、当市として保存・整備・活用を推進していく。これを適切かつ円滑に推進するためにも、国史跡指定を受け、国の史跡として整備することを目指す。(中略)

泉坂下遺跡は、耕作等による遺構の破壊が軽微であり、保存状況がきわめて良好である。当遺跡を特色づける再葬墓群の他に縄文晩期・古墳時代・奈良・平安時代の遺構も存在し、各時代の土地利用がそのまま保たれている可能性がある。しかし表土層が薄く、従って深耕の影響をうけやすく、このまま放置しておけば湮滅の恐れもある。当遺跡全体をできるだけ現状のまま保存することを念頭に整備を進める。また、周辺には歴史的環境が自然景観を含めて良く残されている。

台地上には前小屋城跡があり、一帯には縄文時代以来の自然景観が広く保たれている。これらが一体となってこの地域の歴史的環境を形成しているのである。こうした歴史的環境をできるだけ保全しつつ整備を進める。(以下略)

「泉坂下遺跡第4次確認調査要項」(抜粋)

1 調査目的・方針等

(1) 調査目的

- ①「泉坂下遺跡整備の基本理念」に則り、将来の保存活用・国史跡指定のための資料を得ることを目的とする。
- ②第4次調査の具体的な目的は、以下のとおりとする。
 - i) 再葬墓遺構の全体像の把握(分布範囲の確定、第3次確認調査で第10トレンチに再葬墓遺構が確認されたためその周辺の広がりを確認)
 - ii) 溝(SD9)の走向の確認と性格等の把握。平安時代の住居との切り合い関係を確認。

(2) 調査方針

- ①上記目的に沿った調査とするため、可能な限り現状が保存できる調査方法をとることを原則とする。

2 調査対象区域

- (1) 調査範囲 常陸大宮市泉字坂下918-2ほか21筆
- (2) 調査対象面積 7,697㎡

3 日程・工程

- (1) 全体計画 4年計画(平成24・25・26・27年度)
 - (2) 調査期間 平成27年9月1日～10月16日(土日祝日を除き30日)
- (中略)

4 調査体制

- (1) 調査主体 常陸大宮市教育委員会（着手後、法第99条による報告）
- (2) 指導体制 保存委員会による指導（期間中、日時未定。その他随時）
文化庁・県文化課の指導（期間中、日時未定）
- (3) 調査体制 調査員：市教育委員会 後藤俊一係長、中林香澄主事、萩野谷悟頼託職員
補助員：大学（院）生若干名 作業員：補助員と合わせて10名程度

5 調査方法

- (1) 調査範囲の土地借上げ 遺構の保存のため、公有地化まで継続
- (2) 掘り込み
 - ①トレンチ調査 幅2mのトレンチを基本として遺構の平面形や性格の把握に努め、トレンチ拡張は原則としてしない。
 - ②人力による掘削
 - ③遺構の掘り込み 原則、しない。必要な場合もサブトレンチまで。
 - ④遺物の取り扱い 遺構内出土遺物は、原則、取り上げない。取り上げる場合の判断は、学術上の観点（自然科学的調査の試料採取を含む）及び保護上の観点から慎重に行なう。
- (3) 記録
 - ①実測 縮尺：遺構は原則1/20、必要に応じ1/10等も。
原地形は1/100でコンター測量。
調査用方眼により実施。世界測地系（新・平面直角座標系）に変換可能に。
原則、調査員・補助員等で実施。
再葬墓は業務委託により三次元計測を行う（29㎡）。
 - ②写真撮影 35mmモノクロ・カラーリバーサル、デジタルカメラ
 - ③空中写真 業務委託。ラジコンヘリ等を使用。
6×7判カラーリバーサル・モノクロ、デジタルカメラ
- (4) 埋め戻し 人力により実施

6 報告書の作成

- (1) 刊行計画 平成28年5月を目途に刊行。
4次調査の報告を含む総括的な報告書を刊行
 - (2) 作業工程 原稿作成は平成28年3月までに行なう。
- (以下略)

第3節 調査経過

調査期間は、平成27年9月1日から10月16日までとした。8月31日に調査準備し、9月1日に掘削（第1層除去）を開始し、予定より遅れて10月29日に現場での調査を終了した。整理作業は11月2日から開始し、予定より遅れて平成28年11月30日に終了した。以下、調査日誌から抄録する。

【調査日誌抄録】

9月1日（火）曇。テント設置後、作業開始。第4トレンチでは第3次調査の発掘底面まで表土除去。第27トレンチでは第1層を除去

- 9月2日(水) 晴。第4トレンチでは西部の土器棺墓を精査。第27トレンチでは第ⅠB層を除去し、第Ⅱ層上面を精査
- 9月3日(木) 曇。第4トレンチではサブトレンチ内遺構の再検討。第27トレンチでは第Ⅱ層をやや下げたところでビットⅠ基確認、撮影後、サブトレンチ掘削。第14トレンチでは第2次調査の発掘底面まで表土除去
- 9月4日(金) 晴のち雨。第4トレンチではサブトレンチを掘削し、精査。第14トレンチのサブトレンチ内ではSⅠ14の床面の可能性のある面を確認し、記録の上掘削を継続。第27トレンチでは柱穴を掘立柱建物跡とし、サブトレンチ掘削を継続したところ、土器・礫の集中が見られた
- 9月7日(月) 雨。現地作業は中止
- 9月8日(火) 雨。現地作業は中止。歴史民俗資料館で遺物水洗
- 9月9日(水) 雨。現地作業は中止。歴史民俗資料館で遺物水洗
- 9月10日(木) 雨。現地作業は中止
- 9月11日(金) 曇。天気は回復したが、トレンチ水没のため現地作業は中止
- 9月14日(月) 曇のち晴。第4トレンチではレーダー探査で反応のあった土器棺墓3基の北側をトレンチ拡張、第Ⅰ層除去。第14トレンチではSⅠ14・15の切り合い付近を精査。第27トレンチではサブトレンチ掘削。遺物が集中して出土し、遺構の可能性が高まる
- 9月15日(火) 晴。第4トレンチ拡張区では第ⅠB層を除去。第14トレンチではサブトレンチ内の写真撮影、実測。第22トレンチ5・6区では、第ⅠB層を除去中、中央部に黒い部分があり、サブトレンチを入れたが遺構は確認できず。第27トレンチではサブトレンチ底面の高さまで、サブトレンチ外を下げた
- 9月16日(水) 曇一時晴。第4トレンチではセクションを精査し、SK163を確認。拡張区では第Ⅱ層上面を精査。第14トレンチではSⅠ14下でSD9らしき覆土を確認し、セクション検討。第22トレンチ1・2区では湧水のためサブトレンチ掘削を止め、セクション検討に移る。5・6区では第Ⅱ層上面を精査、ビットを確認し、平面実測。第27トレンチでは遺物がトレンチ北寄りに分布する傾向を掴むがプランは確認できず
- 9月17日(木) 雨。現地作業は中止。歴史民俗資料館で遺物水洗
- 9月18日(金) 晴のち雨。トレンチ水没のため現地作業は中止。歴史民俗資料館で遺物水洗
- 9月24日(木) 第4トレンチでは、三井考測による土器棺墓の写真計測。拡張区では第Ⅱ層上面で弥生土器が確認されたため、その付近にベルトを残して周辺を下げる。第14トレンチではSD9のプラン西部を確認するため、調査区を2m拡張。第27トレンチでは遺物の集中する区域を掘り下げ
- 9月25日(金) 雨。第4トレンチ拡張区にテントを掛けて作業、弥生土器の確認された地点は再葬墓と確認され、SK164の遺構番号付与。13時30分から泉坂下遺跡保存委員会開催、委員による調査指導等
- 9月26日(土) 曇のち晴。第4トレンチではセクション検討、第1次調査でSK34としていたものが、SD7となると考えられる。第4トレンチ拡張区ではSK164のプランを引けなまま写真撮影、平面実測。第14トレンチではSD9のプラン確認、合わせてSⅠ14下にビット確認。第27トレンチを第5トレンチに掛かるよう北側に拡張し、第1次調査の発掘底面まで掘削

- 9月28日(月) 快晴。第4トレンチではセクション検討。北側拡張区ではSK164のベルトに直行するサブトレンチ設定。南側では、第10トレンチとの間に拡張区を設定し、第1・IB層掘削。第14トレンチではSD9の覆土掘削、SI15のセクション検討。第22トレンチ5・6区ではサブトレンチ掘削も、まだルームまで届かない。第27トレンチ拡張区では確認面を精査
- 9月29日(火) 快晴。第4トレンチ拡張区ではSK164のサブトレンチ内から新たに壺形土器2個体を確認。第14トレンチでは、SD9掘り込み完了、セクション検討中に土坑を確認し、SK165・166の遺構番号付与。第22トレンチ5・6区では、第II層が厚く堆積していたため、サブトレンチ内を坪掘りし、地表から150cmでルーム上面を確認。第27トレンチ拡張区ではサブトレンチから遺物が多量出土
- 9月30日(水) 曇。第4トレンチでは東端のSK152の再発掘。SD8のサブトレンチ内を掘削。第14トレンチではSK165の精査。第27トレンチでは、引き続き掘削
- 10月1日(木) 曇。第4トレンチではSD8のサブトレンチ内を掘削。北拡張区のSK164のプラン確認、南拡張区ではサブトレンチ掘削。第14トレンチではSK165完掘、セクション検討。第27トレンチでは遺物出土状況写真撮影
- 10月2日(金) 晴。明け方の風雨の影響で、午前中は歴史民俗資料館で遺物水洗。午後は現地作業実施。第4トレンチではSD8のサブトレンチ内を掘削。第14トレンチではSK166掘り込み。第22トレンチ5・6区ではセクション検討。第27トレンチではサブトレンチ内遺物取り上げ
- 10月3日(土) 晴。第4トレンチでは石川委員による再発掘観察。第22トレンチでは確認状況・セクションの写真撮影、平面実測。第27トレンチではサブトレンチ内遺物取り上げ
- 10月4日(日) 晴。10時から現地説明会、70名参集。13時30分から泉坂下遺跡保存委員会開催、委員による調査指導等。午後は現地作業実施。第4トレンチではSK164のベルトに沿ってサブトレンチを設定。第14トレンチではSK165・166の平面・セクション実測。第22トレンチ1・2区では平面実測。第27トレンチではサブトレンチ内掘削
- 10月5日(月) 曇。第4トレンチではSK5・152・153の写真撮影、SD8のセクション写真撮影。第22トレンチ1・2区では平面実測、5・6区ではセクション写真撮影・実測。第27トレンチでは遺物取り上げ、セクション・プラン検討
- 10月6日(火) 晴。第4トレンチ南拡張区ではサブトレンチ掘り込み後、実測。第14トレンチではSK166の掘削を終え、SK165・166の写真撮影、実測。第27トレンチでは遺物取り上げ、掘り込み。遺物の集中区は縄文晩期の住居跡の可能性が高い
- 10月7日(水) 晴、強風。第4トレンチでは平面・セクション実測。南拡張区のルームの巻き上げは風倒木痕と考える。第14トレンチではSK165・166の土層観察。第22トレンチでは平面・セクション図点検。第27トレンチでは遺物取り上げ、掘削。三井考測によるトータルステーション実測
- 10月8日(木) 晴、強風。第4トレンチ南拡張区では平面実測。第14トレンチではSK165・166の土層観察。第27トレンチでは遺物取り上げ、掘削
- 10月9日(金) 晴。空中写真のための清掃。10時から10時40分まで、日本特殊撮影による空中写真撮影。その後、第27トレンチでは北側のプラン精査のため、ベルト除去
- 10月10日(土) 曇。第4トレンチではSK5・152・153の石川委員による観察。北拡張区では、

- 遺構精査。南拡張区では、写真撮影。第14トレンチでは写真撮影。第22トレンチではS I 25のプラン確認やり直し
- 10月11日(日) 雨。テントを掛けて作業。第4トレンチではS K 5・152・153の実測。北拡張区ではS K 164のプラン確認、実測
- 10月13日(火) 快晴。第4トレンチ南拡張区では確認面精査。第14トレンチではS K 172・173のセクション検討、写真撮影。第22トレンチでは写真撮影、実測完了。第27トレンチではサブトレンチを掘り込んで床を確認し、縄文の住居跡と判断してS I 26の遺構番号付与
- 10月14日(水) 快晴。第4トレンチ南拡張区では確認面精査。北拡張区では写真撮影。第14トレンチではセクション・平面実測。第27トレンチではS I 26の掘り込み、遺物取り上げ
- 10月15日(木) 晴。第4トレンチでは南北拡張区の実測完了。第14トレンチでは実測完了。第22トレンチ5・6区の埋戻し開始。第27トレンチでは遺物出土状況の写真撮影
- 10月16日(金) 雨。第4トレンチ南拡張区では写真撮影、土層観察。第27トレンチではS I 26覆土を掘り下げ、焼けた粘土塊の南半分サブトレンチを入れた。午後からは雨が強くなくなったため、歴史民俗資料館で遺物水洗
- 10月19日(月) 晴。第4トレンチでは再葬墓の実測・土層観察完了。第14トレンチでは土層観察完了。第27トレンチでは掘り下げを進める
- 10月20日(火) 晴。第4トレンチでは全体写真撮影。その後、埋戻し開始。第22トレンチでは5・6区の埋戻し完了、1・2区の埋戻し着手。第27トレンチではS I 26のセクション検討
- 10月21日(水) 晴。第4トレンチでは埋戻し。第14トレンチではセクション検討、写真撮影、実測。第27トレンチではS I 26を掘り込み、床がほぼ全面出て、焼土ブロックを確認
- 10月22日(木) 晴。第4・22トレンチでは埋戻し。第14トレンチではS I 14竈・S D 9の平面実測、土層観察。第27トレンチではS I 26の遺物取り上げ、焼土ブロックの写真撮影、実測後、断ち割り
- 10月23日(金) 曇。第4・14トレンチでは埋戻し。第27トレンチではS I 26内焼土ブロックのセクション検討、遺物出土状況写真撮影。S K 177・178の写真撮影
- 10月26日(月) 晴。第4トレンチでは埋戻し完了。第27トレンチではS I 26を1/10実測。三井考測がトータルステーション実測
- 10月27日(火) 晴。第27トレンチではS I 26の遺物取り上げ、写真撮影、セクション検討。南部のセクション検討中、土坑を確認しS K 179の遺構番号付与。機材等整備し、撤収準備
- 10月28日(水) 晴。第27トレンチではセクション写真・実測。S I 26の床面確認。S K 178～182の写真撮影、実測
- 10月29日(木) 晴。第27トレンチではS K 183の写真撮影、S K 176のセクション実測。土層観察、埋戻し完了。機材を整備・撤収し、現地作業を終了した

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 (第1・2図)

泉坂下遺跡(第1図1、第2図1)は、茨城県常陸大宮市泉字坂下918番地ほかに所在する。

常陸大宮市は茨城県北西部に位置し、西は栃木県と境を接する。市域の多くは八溝山地の一部である鷲子山塊及びその周縁の台地または低地である。市域のほぼ東端を久慈川が南流し、南端付近を那珂川が南東に流れている。久慈川は市域南東端で支流である玉川と合流するが、当遺跡はこの合流点から北西約3kmに所在する。

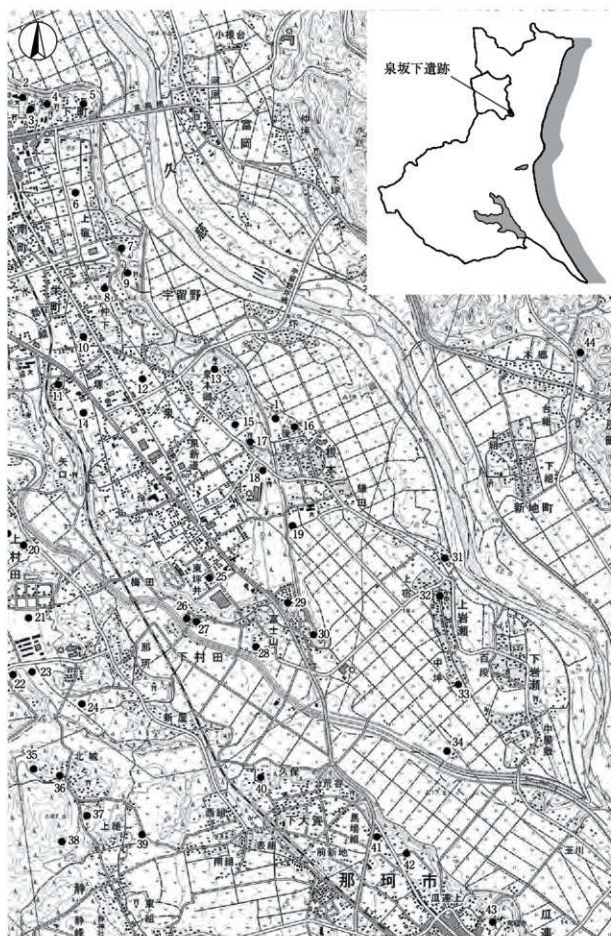
当遺跡は、鷲子山塊に連続する那珂台地から東に下った久慈川右岸の低位段丘上に立地している。久慈川の現在の河道からの距離は700～800mの位置にある。河道近くには自然堤防が形成され、北方の自然堤防上には宇留野環の集落が立地している。自然堤防との間は氾濫原(後背湿地)で、現在は水田になっている。当遺跡の立地する低位段丘は標高20mほどで、東側の水田面からの比高は2mほどである。この低位段丘は、台地からの湧水によって切断されながら、玉川との合流点まで南東に大きく展開しており、ここには根本の集落、さらに南東に上岩瀬・下岩瀬の集落が立地している。当遺跡西側の那珂台地上とは比高が30mほどあり、その斜面には水戸藩三大江堰の一つ岩崎江堰用水路が南流し、これに伴う地形の改変が見られる。

第2節 歴史的環境 (第1・2図、第1・2表)

常陸大宮市で周知されている遺跡の多くは久慈川・那珂川の両水系によって形成された河岸段丘から低地にかけて分布し、山間地への分布は比較的少ない。旧石器から近世に至る多様な遺跡が所在しており、以下各時代の主な遺跡をもって概要を説明する。

まず、旧石器時代である。久慈川右岸の山方遺跡では、昭和39(1964)年に茨城県内初となる旧石器が発見されており、この時出土した石核は約30,000～28,000年前のもので、現時点においても市内最古の遺物である。また、那珂川左岸の赤岩遺跡では、礫群3基と石器・剥片集中地点3か所が確認されており、礫群はいずれも大型で、中でも1号礫群は礫数197点、総重量で43kgを超え、高萩市赤浜遺跡を上回る県内最大の事例となった。

縄文時代の遺跡は市内に多く所在し、調査例も多い。早期では、那珂川支流緒川右岸の岡原遺跡で戸下層式期の堅穴住居跡が1軒確認されている。中期になると、西境遺跡で有段堅穴遺構4軒・土坑378基等、赤岩遺跡・三美中道遺跡で土坑101基等、滝ノ上遺跡で堅穴建物跡8軒・土坑289基等、高ノ倉遺跡で土坑223基等が確認されるなど、那珂川左岸段丘上に大規模な環状集落が立地していたことを示す調査事例が近年累積している。このほか特筆されるのは、久慈川支流玉川の左岸段丘上に広がる坪井上遺跡(第1図25)である。泉坂下遺跡の南方約12kmに位置する坪井上遺跡は、平成5・8年度の二度にわたり調査が行われ、堅穴住居跡19軒、袋状土坑75基が確認された中期の集落跡であり、1遺跡から8個の硬玉製大珠が出土していることで特に知られている。これらは新潟県糸魚川市の姫川流域で産出される翡翠製であり、この集落は中期における茨城県北部地域の一大交流拠点であったと考えられている。



第1図 泉坂下遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 1:25,000 地形図「常陸大宮」)

第1表 泉坂下遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	番号	遺跡名	種類	旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	
第1回	1 泉坂下遺跡	集落跡	○	○	○	○				第1回	23 堂山B遺跡	集落跡							○	
2	部重城跡	城館跡				○				24	堂山A遺跡	集落跡		○	○					
3	松吟寺遺跡	集落跡	○		○	○				25	坪井上遺跡	集落跡	○	○	○					
4	松吟寺古墳群	古墳群								26	念仏塚	経塚								○
5	宮中遺跡	集落跡	○		○					27	念仏塚遺跡	集落跡				○				
6	上ノ宿遺跡	集落跡	○	○	○	○				28	西坪井遺跡	集落跡	○	○	○	○				
7	上宿上坪遺跡	集落跡	○	○	○	○				29	上岩瀬富士山遺跡	集落跡		○	○					
8	神下遺跡	集落跡	○	○	○	○				30	富士山古墳群	古墳群								
9	字留野城跡	城館跡				○				31	川岸遺跡	集落跡							○	
10	大塚遺跡	集落跡	○		○					32	岩瀬城跡	城館跡	○				○			
11	六丁遺跡	集落跡				○				33	上岩瀬中坪遺跡	集落跡			○	○				
12	駄木所遺跡	集落跡				○				34	本宮遺跡	集落跡	○		○	○				
13	前小屋館跡	城館跡				○	○			35	溜前遺跡	集落跡								
14	上高作遺跡	集落跡	○							36	上坪遺跡	集落跡							○	
15	春日神社前遺跡	集落跡				○	○			37	滝前遺跡	集落跡	○							
16	根本後坪遺跡	集落跡				○				38	城菩提城跡	城館跡								
17	根本遺跡	集落跡				○				39	新宿古墳群	古墳群				○				
18	根本古墳群	古墳群				○				40	久保遺跡	集落跡						○	○	
19	根本向井坪遺跡	集落跡				○	○	○		41	下大賀遺跡	集落跡	○	○	○	○				
20	北村田B遺跡	集落跡				○	○			42	十林寺古墳群	古墳群				○				
21	一騎山古墳群	古墳群				○				43	瓜達遺跡	集落跡	○	○	○	○				
22	高野A遺跡	集落跡				○				44	寺山寺院跡	寺院跡								○

弥生時代としては、泉坂下遺跡の南方約15kmの上岩瀬富士山遺跡（第1回図29）や那珂川支流緒川右岸の山根遺跡などで後期後半十王台式期の集落跡が確認されている。しかしここで特筆すべきは小野天神前遺跡（第2回図8）であろう。昭和51（1976）年に茨城県歴史館によって学術調査され、16m四方ほどの調査区から20基の土坑が確認されて、茨城県北部の再葬墓研究に大きく寄与した。一般に人面付壺形土器は再葬墓遺跡1遺跡から1点しか出土しないとされているが、小野天神前遺跡では1遺跡から3点が出土しており、特異な事例である。これらを含む出土土器19点は茨城県有形文化財に指定され、現在茨城県立歴史館に所蔵されている。那珂川沿いの小野天神前遺跡は、今回調査された久慈川沿いの泉坂下遺跡と並び称される遺跡である。このほか市内では、桑の木の植え替えの際に弥生中期の壺形土器がまとまって出土したという、久慈川右岸の山方宿遺跡（第2回図7）も再葬墓遺跡と考えられており、中台遺跡の名で広く知られている。従って、市内には泉坂下遺跡と合わせて計3箇所の再葬墓遺跡が存在することになる。



第2回 茨城県北部及びその周辺の弥生時代中期前半の遺跡

（鈴木2011 第122回図から引用）

第2表 茨城県北部及びその周辺の弥生時代中期前半の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	備考	番号	遺跡名	所在地	備考
第2図 1	泉坂下遺跡	茨城県常陸大宮市		第2図 11	坂口遺跡	茨城県常陸太田市	
2	屋の上遺跡	福島県榑倉町		12	大塚遺跡	茨城県那珂市	
3	中森平遺跡	福島県榑倉町		13	森戸遺跡	茨城県那珂市	
4	三枚畑C遺跡	栃木県那珂川町		14	龍内遺跡	茨城県那珂市	
5	滝田内遺跡	栃木県那珂川町		15	海後遺跡	茨城県那珂市	
6	箕ノ輪遺跡	栃木県茂木町		16	小場遺跡	茨城県高萩市	
7	山方宿遺跡	茨城県常陸大宮市	通称中台遺跡	17	明神越遺跡	茨城県日立市	
8	小野天神前遺跡	茨城県常陸大宮市		18	十王堂遺跡	茨城県日立市	
9	北方遺跡	茨城県城里町		19	大沼遺跡	茨城県日立市	
10	瑞龍遺跡	茨城県常陸太田市		20	女方遺跡	茨城県筑西市	

なお、弥生時代の再葬墓は東日本に広く分布するが、久慈川・那珂川流域を中心とした茨城県北部地域では特に分布密度が高い。久慈川右岸の那珂市には、昭和42（1967）年、耕作中に人面付壺形土器が出土したことで知られる海後遺跡（第2図15）が所在し、那珂川右岸の城里町には、北方遺跡（第2図9）が所在している。これらに加えて、再葬墓の可能性のある遺跡が分布する地域の、概ね中央に泉坂下遺跡は位置する。

古墳時代では、梶川遺跡等で集落跡が確認されており、古墳も多く所在している。中でも、泉坂下遺跡の南方約1.5kmに所在する富士山古墳群（第1図30）にある富士山4号墳は前期の前方後方墳で、茨城県内でも最も古い古墳の一つと考えられている。中期古墳としては、同じく富士山古墳群の全長60mの五所皇神社裏古墳、糠塚古墳群の全長90mの糠塚古墳といった前方後円墳が所在している。後期古墳としては、一騎山古墳群（第1図21）が知られ、中でも4号墳は6世紀前半の小規模な前方後円墳で、人物・動物等の形象埴輪や円筒埴輪が出土している。このほか岩崎古墳群、鷹巣古墳群などがあり、これら古墳は概ね久慈川右岸またはその支流玉川兩岸の段丘上に立地するが、その例外として、岩崎古墳群及び富士山古墳群の丸山古墳は、久慈川の低位段丘面に立地する。また玉川左岸には、雷神山横穴群などの横穴墓も所在している。

奈良・平安時代の遺跡は、時代別としては最も多く市内に所在し、集落跡の調査例も多い。県内有数の大規模集落として知られるのは、久慈川右岸の段丘上標高55mの上ノ宿遺跡（第1図6）である。4次までの調査でこの時期の堅穴住居跡は計128軒が確認され、風字硯や耳皿2点などが出土しており、この地域の拠点集落であったと考えられている。同様に久慈川右岸に所在する北原遺跡では、平成25・27年の調査で計108軒の堅穴住居跡が確認されている。どちらの集落も9世紀代に最盛期を迎え、10世紀に入ると衰退しているなど類似点が多く、久慈川流域の歴史的推移を検証していくうえで貴重な資料である。このほか、岡原遺跡では多文字・人面墨書土器や朱墨書土器が出土しており、源氏平遺跡では、底面に「土垣倉」と墨書され、内側に「解」と記された漆紙文書の付着した土師器坏が出土している。また、「文」の烙印が出土した上村田小中遺跡や、茨城県指定有形文化財「文永私印」の銅印が出土した小野中道遺跡など、文部氏関連と考えられる遺跡も確認されている。

中世では、久慈川右岸の部垂城跡（第1図2）、宇留野城跡（第1図9）、前小屋館跡（第1図13）、その支流玉川左岸の東野城跡、那珂川左岸の長倉城跡、野口城跡、小場城跡、その支流緒川左岸の高部館跡などに代表される城館跡が市内各地に点在しており、そのほとんどが何らかの形で佐竹氏の影響を受けたものである。とりわけ前小屋館跡は、本郭が泉坂下遺跡の北西約500m、宿は泉坂下遺跡の西約100mという至近距離に所在しており、これまでの泉坂下遺跡確認調査では、前小屋館が当遺跡に与えた影響について想起させる成果が得られている。

第3章 地中レーダー探査計測

第1節 地中レーダー探査計測

業務名	泉坂下遺跡地中レーダー探査業務
遺跡名	泉坂下遺跡
所在地	茨城県常陸大宮市泉字坂下918番地ほか
探査面積	1,800㎡
探査期間	平成27年5月25日～5月27日（現地業務実施期間）
委託者	常陸大宮市
請負者	有限会社三井考測 特殊業務協力者 桜小路電機株式会社

1 はじめに

常陸大宮市教育委員会では「泉坂下遺跡」の国指定史跡を目指し2012年から確認調査を進めている。調査は主にトレンチ調査である。調査で遺構が確認されても極力発掘を行わない様に進められている。

今回、調査を継続するに於いて今まで確認された、再葬墓や土壌墓の拡がり、溝の流路などを求め、物理探査を実施することになった。物理探査では地中レーダー探査が採用された。

現地作業では地形計測や探査位置の設定・計測は三井考測有限会社が主にを行い、レーダー探査作業は桜小路電機有限会社が協力実施することになった。

2 探査の方法と測定範囲（第3～6図）

地中レーダー探査はアンテナから地中に向け電波を送信し、地層の境界面や石などから反射して戻ってくる反射電波を受信する。受信した電波をコンピュータで戻ってきた順に信号の強弱として置き直し、色を付けて土層の疑似断面図や平面図（タイムスライス平面図）として視覚化する。

電波の速度は空中では1秒間に地球を7周半する。しかし、地中では土壌の含水率や土質（火山灰土・沖積層土など）の違いなどで1ナノ秒（ns, 10億分1秒）に約3～4cmと推測している。

今回作業に使用したレーダー・アンテナは光電製作所製GPR-8型で周波数は300MHzである。

測定範囲は中央の圃場で南北約90m、東西20mである。探査では北側F地区、南北50m・東西18m、南側G地区、南北50m・東西18mに分割した。中央部で南北10mの重複がある。アンテナ走査は南北方向とし、走査線間隔は0.25mに設定した。総走査距離は7,258mである。



第3図 探査測定風景

3 探査成果 (第7～34図)

探査成果はカラー表示の成果図とし走査線 (d x - * . * m c) 毎の断面図とタイムスライス平面図を作成した。探査深度は電波の速度で表現した。通常, 1ns(ナノ秒)を約3～4cmと推測し, 10nsの場合は10×3cmで深度は約30cmとなる。また, タイムスライス平面図では10ns間隔の幅で50%の相互ダブリで表示している。成果図深度は10-20nsでは15×3=45cm前後を表示している。

本遺跡の場合, 電磁波の伝達が遅く1ns当たり2cmの速度と推定できる。

レーダー・データ解析にはDr.Goodman作成の「GPR-Slice Software」を使用した。

電波が強く反射した箇所は赤色に, 電波が反射せず進んでいった箇所は青色に表現されている。各成果図で注意を引く箇所には白線や破線を付けた。

断面図 (第7～12図)

アンテナ走査本数は間隔を0.25mとしたため, F地区73本, G地区73本となる。また断面図も各73枚, 計146枚。全てを図化できないので, 数本分を本報告では記載する。他はJPG画像で記録している。

F地区 25nsに一面, 40nsに一面, 電波の反射面が認められる。20ns前後に円に囲った強い反射がある。特にX=14mの32m付近の反射は大きく強い。X=4mでは広く(24-34m)拡がる。斜めの変化面も認められる。(第8図)

G地区 各断面の深さ40nsで20～35mに強く大きな反射がある。X=8m以降では深度が増し, 規模が小さくなる。(第11・12図)

タイムスライス平面図 (第13～34図)

F地区 (第13～23図)

- *15-25ns平面図でX.14m・Y.32mの位置に円形の強い反射が現れる。(第15図)
- *20-30ns平面図から点々と小さな強い反射が現れる。(第16・17図)
- *40-50ns平面図でX.3m・Y.44mの箇所に大きな強い反射が現れる。(第18図)
- *75-85ns, 80-90nsの画面に弓状の細い反射が認められる。(第21・22図)

G地区 (第24～34図)

- *15-25ns平面図に小さな反射が点々と現れる。(第26・27図)
- *30-40ns平面図にL字状の区画が認められる。(第28図)
- *40-50ns平面図の西側にまとまった大きな反射が現れ, 深さを増すに従い東へ移動する。
(第29～33図)
- *50-60ns平面図に40-50ns平面図で認められた反射を分断するように電波の反射が無い箇所がある。(第32・33図)
- *80-90ns平面図に細い棒状の反射が認められる。(第33・34図)

4 おわりに (探査成果の解析) (第35～46図)

第35図のF地区・G地区に長方形の赤色または淡青色に表現されている箇所は第14トレンチや第4トレンチなどである。断面図(第8図)の赤色反射は第13トレンチ5・6区の掘削断面底部

である。F地区15-25nsの円形の強い反射は第23トレンチで一部が確認された円形の遺構と推測される。(第15図)

F地区の深度20-30ns以下の平面図に認められる点々と観られる反射は集石か土塚の底部とも推測される。G地区でも同様に観られる。(第16・27図)

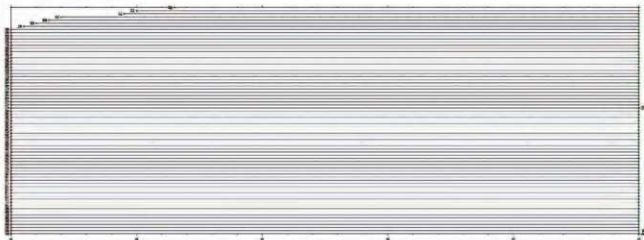
F地区の深度75-85ns、80-90nsの平面図を詳細に観察すると第39図ではトレンチにて確認された溝底部に当たる。第45図の80-90ns平面図ではG地区にまで延びている様である。地山面にV字状に掘られた溝底部の反射と推測する。

第43図や第44図で確認されている大きな反射の纏まりは、旧地形で深い、西から東へ窪地もしくは水路に堆積した石と推測される。さらに50-60ns平面図からはF地区の深度75-85ns、80-90nsの溝で切断されている。G地区断面図、第11図や第12図でも確認される。

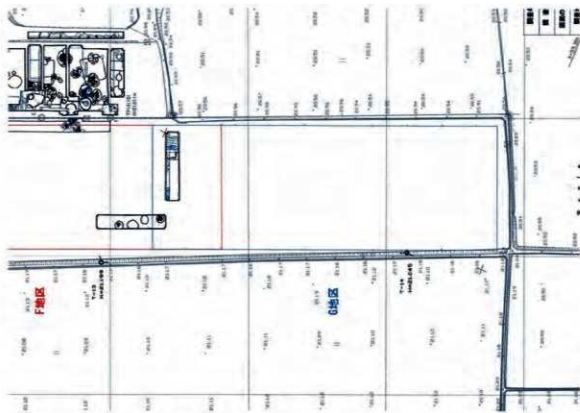
第28図の30-40ns平面図にL字状の区画は旧地形の痕跡とも取ることができる。

タイムスライス平面図では再葬墓や土塚墓などの個々の遺構の確認・明示は出来ないが、F地区には何らかの遺構が多く埋没しているものと考ええる。

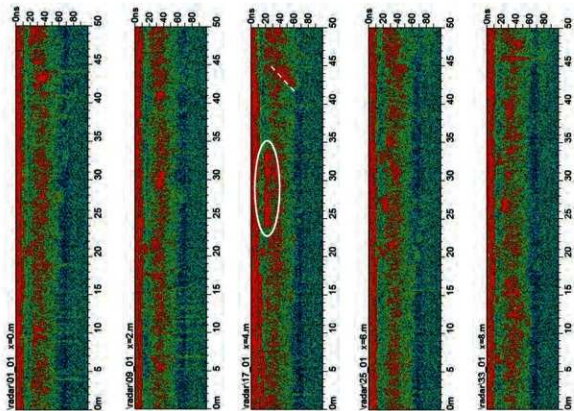
敢えて探査深度に関係なく遺構位置を推測すると第46図となる。



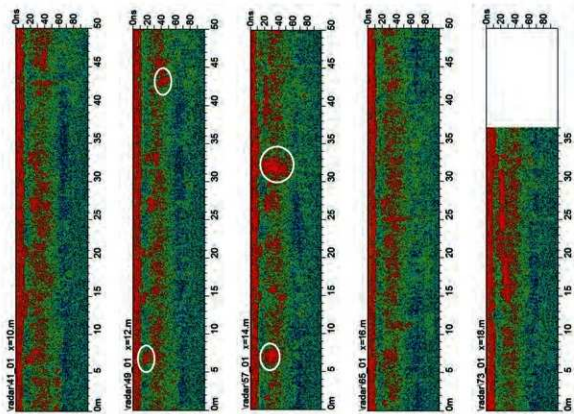
第7图 F地区断面图(续前)



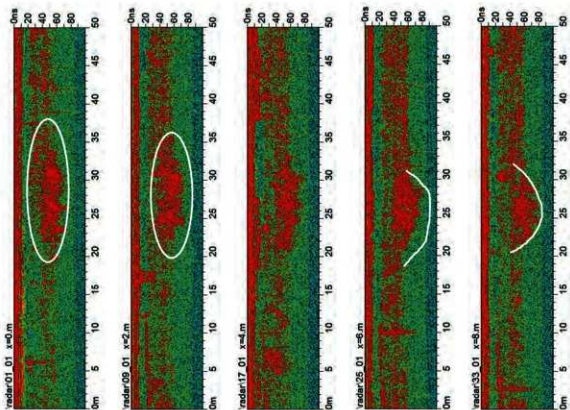
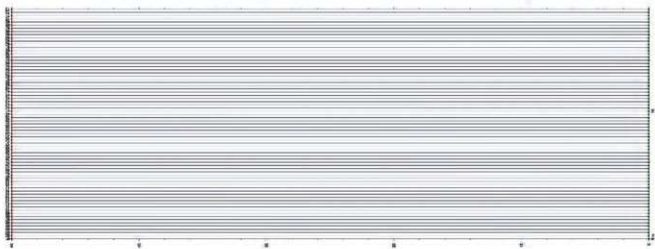
第6图 奥坎下通坎单位置图G地区(青色)



第8图 F地区新形成暴雨区(1)

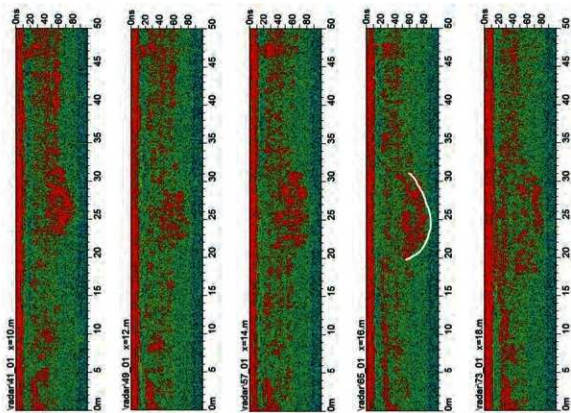


第9图 F地区新形成暴雨区(2)

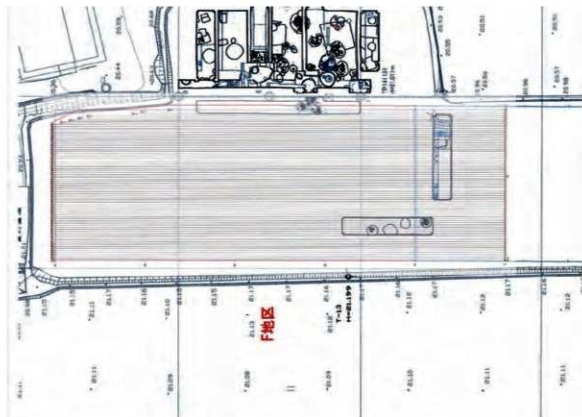


第10图 G地区断面图(续)

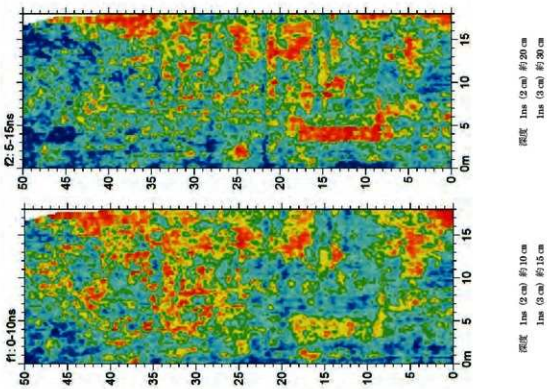
第11图 G地区断面图(1)



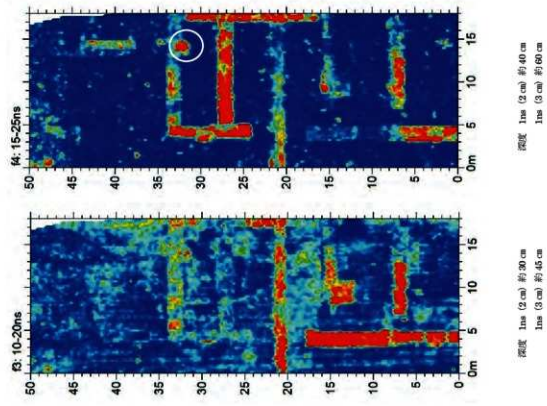
第12図 G地区断面成層図(2)



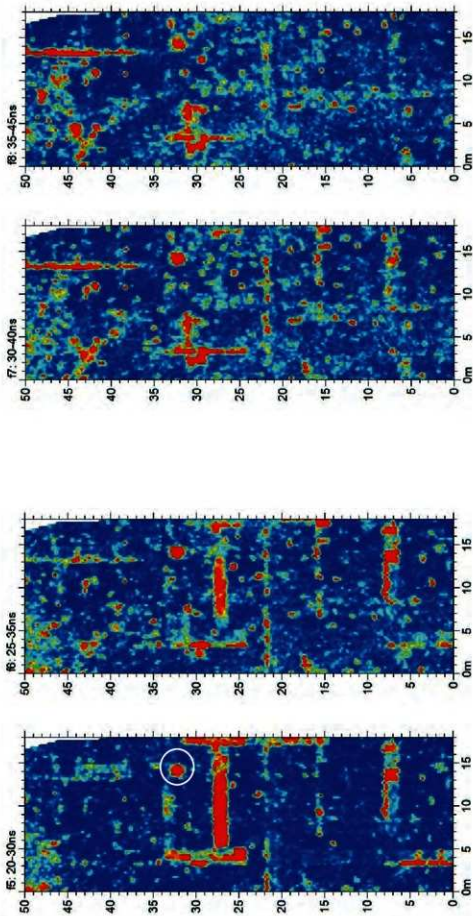
第13図 F地区地中レーダー・タイムスライス平面図



第14回 F地区平面図 (1)

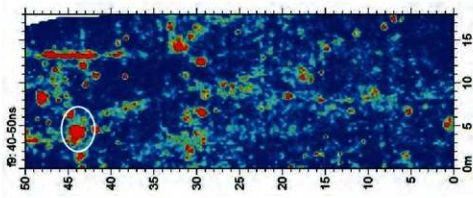


第15回 F地区平面図 (2)

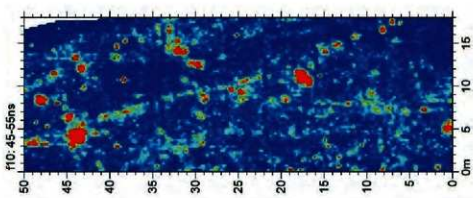


第16回 F地区平面図 (3)

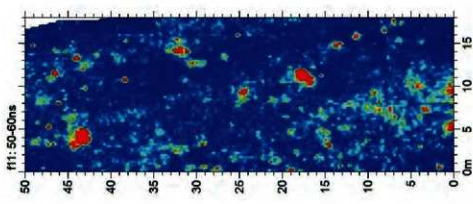
第17回 F地区平面図 (4)



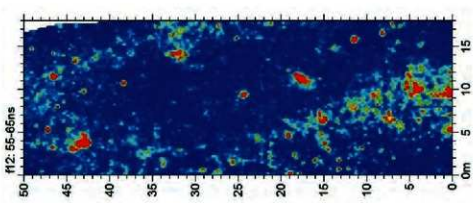
深度 Ins (2 cm) 約 90 cm
Ins (3 cm) 約 135 cm



深度 Ins (2 cm) 約 100 cm
Ins (3 cm) 約 150 cm



深度 Ins (2 cm) 約 110 cm
Ins (3 cm) 約 165 cm

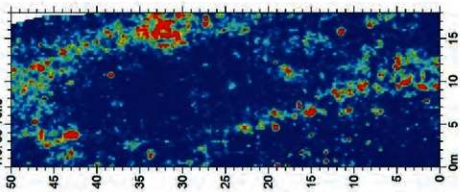


深度 Ins (2 cm) 約 120 cm
Ins (3 cm) 約 180 cm

第 18 図 F 地区平面図 (5)

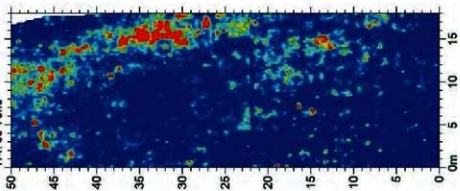
第 19 図 F 地区平面図 (6)

f13: 60-70ns



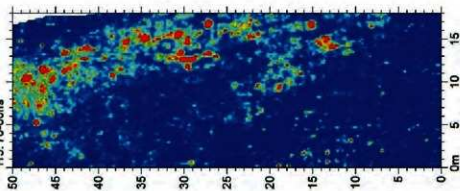
深度 1ns (2 cm) 約 1300 cm
1ns (3 cm) 約 1956 cm

f14: 65-75ns



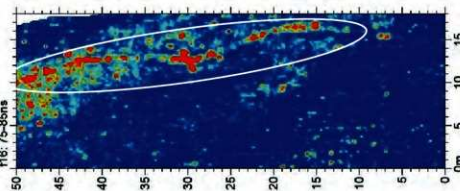
深度 1ns (2 cm) 約 1405 cm
1ns (3 cm) 約 2103 cm

f15: 70-80ns

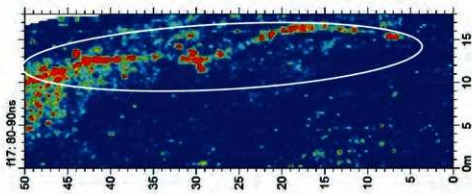


深度 1ns (2 cm) 約 1500 cm
1ns (3 cm) 約 2253 cm

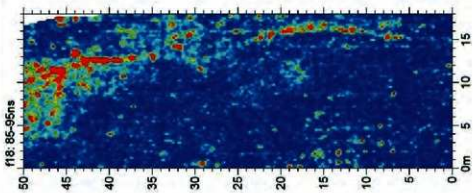
f16: 75-85ns



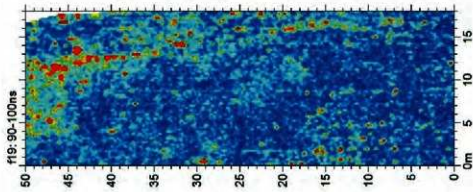
深度 1ns (2 cm) 約 1600 cm
1ns (3 cm) 約 2403 cm



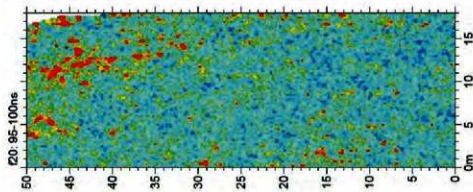
深度 1km (2 cm) 約 160 cm
1km (5 cm) 約 255 cm



深度 1km (2 cm) 約 180 cm
1km (5 cm) 約 270 cm



深度 1km (2 cm) 約 190 cm
1km (5 cm) 約 285 cm



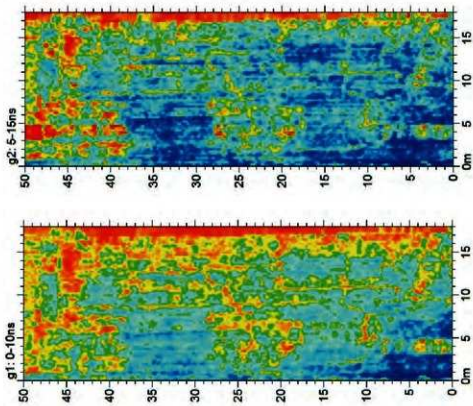
深度 1km (2 cm) 約 200 cm
1km (5 cm) 約 300 cm

第 22 回 F 地区平面図 (9)

第 23 回 F 地区 平面図 (10)



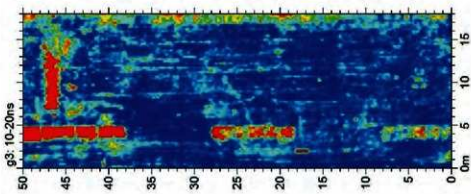
第24図 G地区構中レーダー・タイムスライス平面図



第25図 G地区平面断面 (1)
 深度 1m (2cm) 約10cm
 1m (3cm) 約15cm

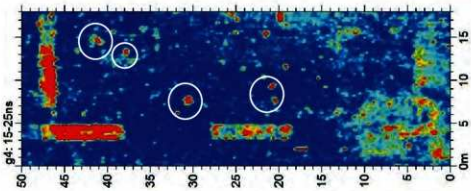
深度 1m (2cm) 約20cm
 1m (3cm) 約30cm

g3: 10-20ns



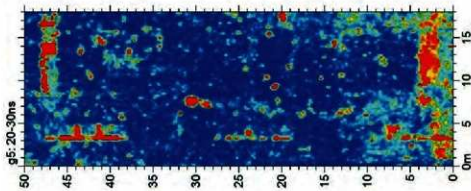
深度 1ns (2 cm) 約 30 cm
1ns (3 cm) 約 45 cm

g4: 15-25ns



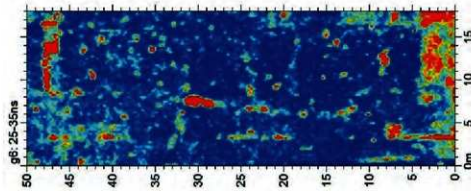
深度 1ns (2 cm) 約 40 cm
1ns (3 cm) 約 60 cm

g5: 20-30ns

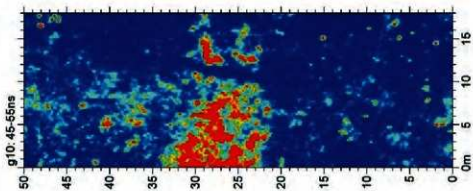


深度 1ns (2 cm) 約 60 cm
1ns (3 cm) 約 75 cm

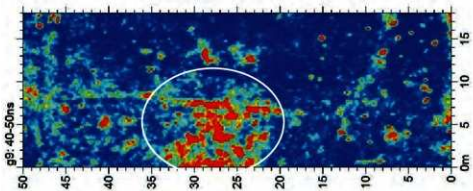
g6: 25-35ns



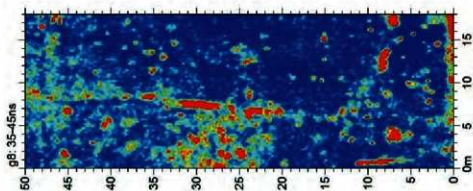
深度 1ns (2 cm) 約 60 cm
1ns (3 cm) 約 90 cm



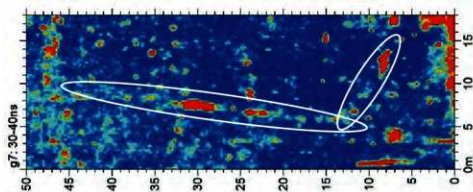
深度 1ns (2 cm) 約 100 cm
1ns (3 cm) 約 150 cm



深度 1ns (2 cm) 約 90 cm
1ns (3 cm) 約 135 cm



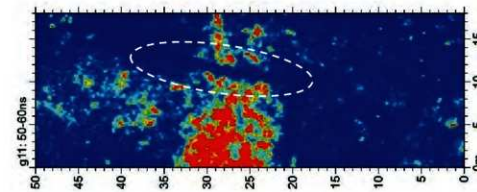
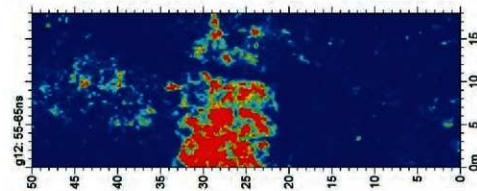
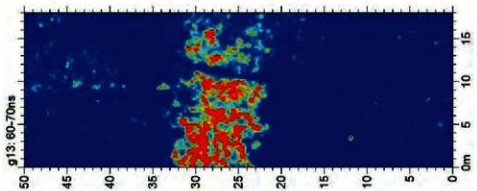
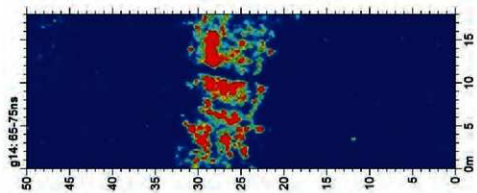
深度 1ns (3 cm) 約 80 cm
1ns (3 cm) 約 120 cm



深度 1ns (2 cm) 約 70 cm
1ns (3 cm) 約 105 cm

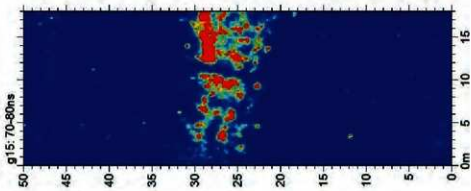
第28回 G地区平面図 (4)

第29回 G地区平面図 (5)

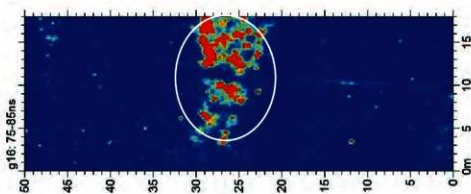


第31回 G地区平面図 (7)

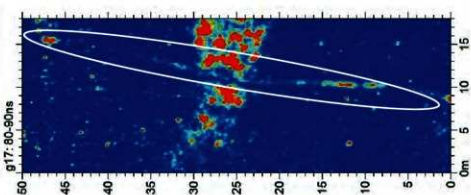
第30回 G地区平面図 (6)



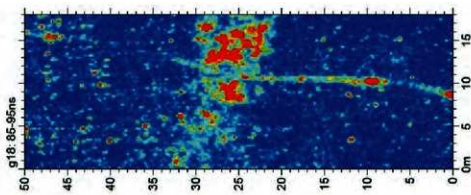
深度 1ms (2 cm) 約 150 cm
1ms (3 cm) 約 225 cm



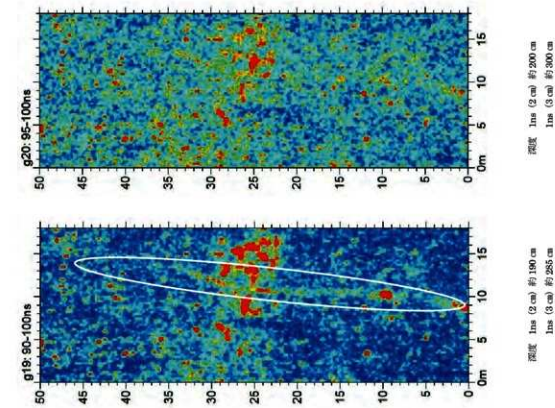
深度 1ms (2 cm) 約 100 cm
1ms (3 cm) 約 240 cm



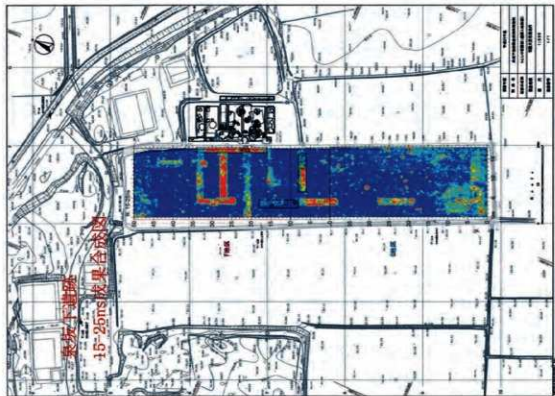
深度 1ms (2 cm) 約 170 cm
1ms (3 cm) 約 225 cm



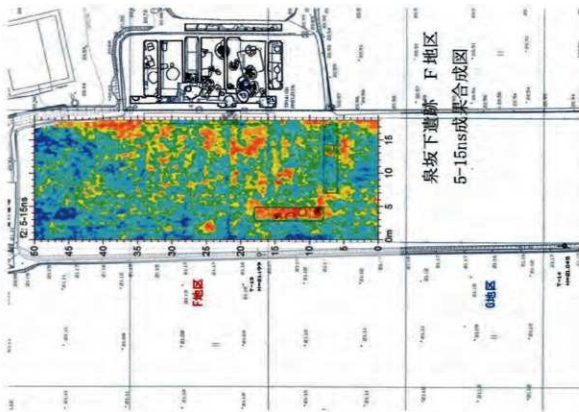
深度 1ms (2 cm) 約 180 cm
1ms (3 cm) 約 270 cm



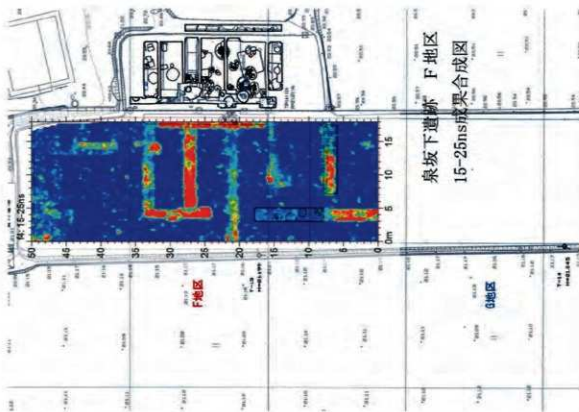
第34回 G地区平面図 (10)



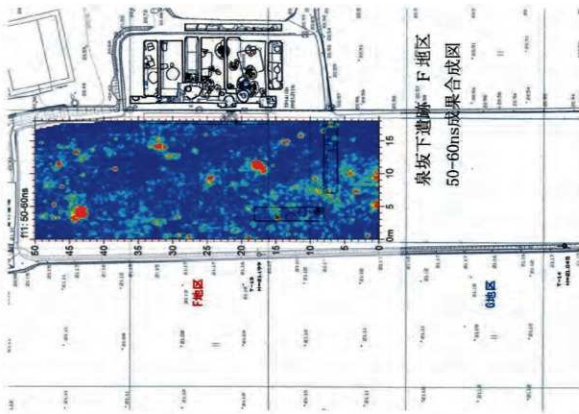
第35回 15-25ms 成果合成図



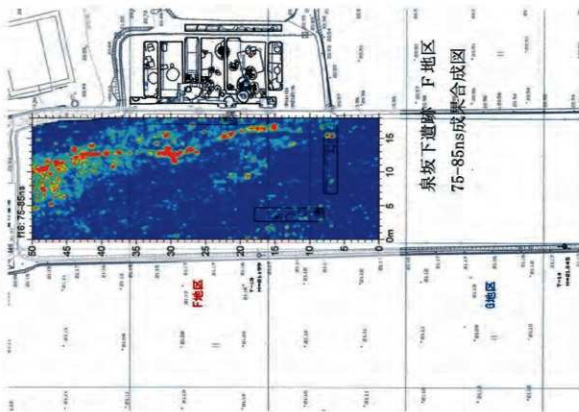
第36回 F地区 5-15ns 成果合成図



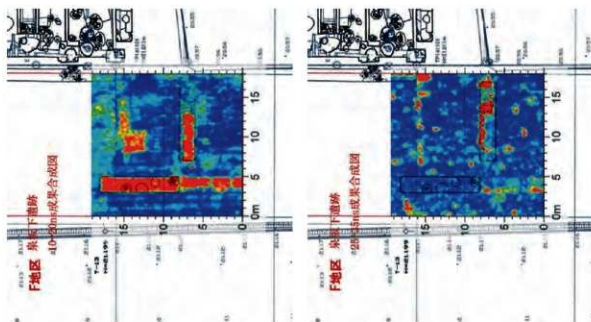
第37回 F地区 15-25ns 成果合成図



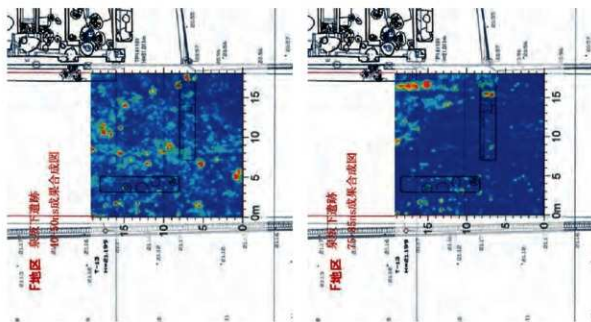
第38図 F地区 50-60ns 成果合成図



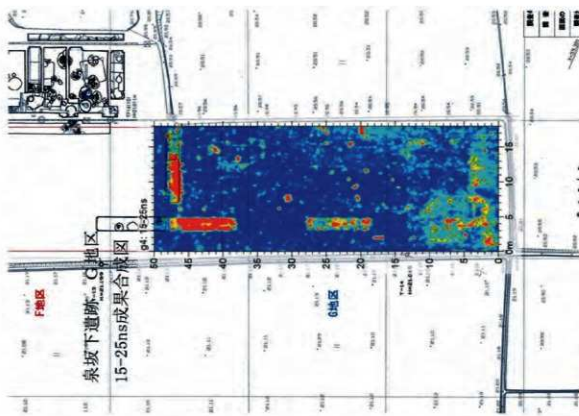
第39図 F地区 75-85ns 成果合成図



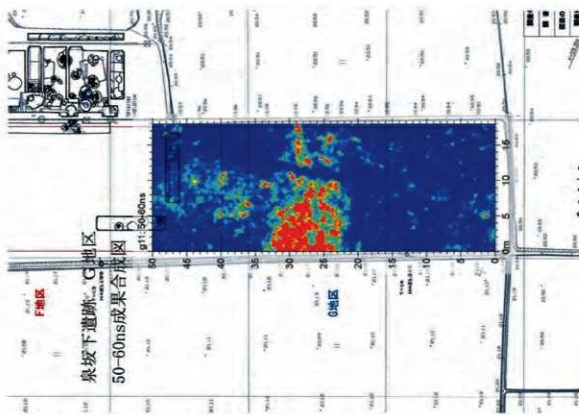
第40图 F地区合成图(1) 上: 10-20ms · 下: 20-30ms



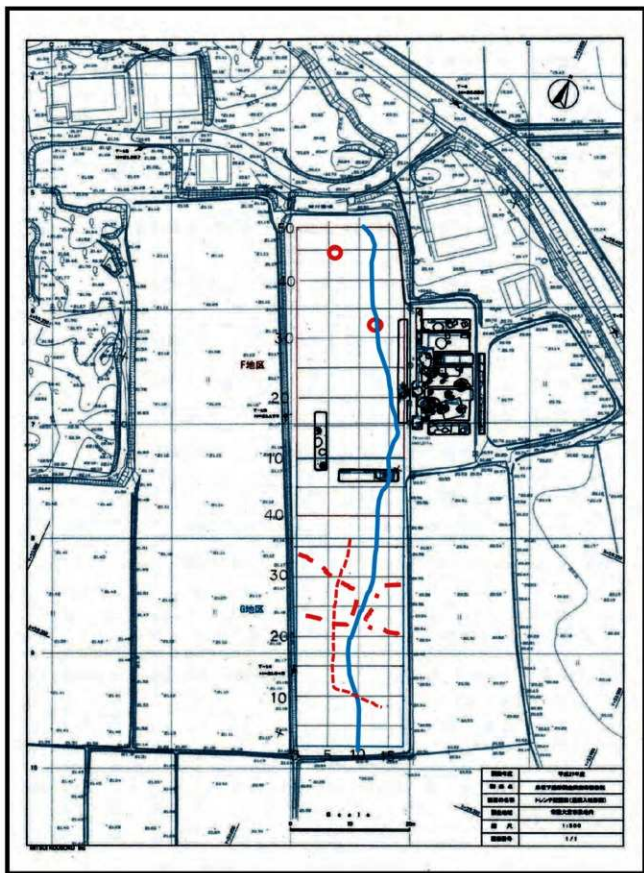
第41图 F地区合成图(2) 上: 30-60ms · 下: 75-90ms



第42图 G地区 15-25ns 成果合成图



第43图 G地区 50-60ns 成果合成图



第 46 図 泉坂下遺跡遺構推測図

第4章 調査の成果

第1節 遺跡の概要 (第47・付図, 第3表)

泉坂下遺跡は、茨城県常陸大宮市泉字坂下918番地ほかに所在し、久慈川右岸の低位段丘面上に立地している。標高20～21mで、東側の水田面からの比高は2mほどであり、現況は水田（陸田）、宅地、原野である。平成18年に調査されたトレンチを第1トレンチとして調査区の中心に捉え、これを南北に延長し、また東西に直交する形でトレンチを設定し、状況に応じてこれらを補足するトレンチを入れる方針をとった。

まず南に向かって第2・3トレンチ、西へ向かって第4・5トレンチ、北へ向かって第6・7トレンチ、東へ向かって第8・9トレンチを設定して調査した。これらが進捗してきたところで、補足の必要が生じた部分に第10～26トレンチを追加で設定した。これらのうち、第1次調査で第2～9・11・16トレンチ、第2次調査で第10・12～15・18・23トレンチを調査した。第3次調査では、第10・17・19・24～26トレンチを調査するとともに、第15・24トレンチ間をB地区、第8・15トレンチ間をC地区、第8・17トレンチ間をD地区とそれぞれ呼称し、付近のトレンチと同様に調査した。さらに、調査済の第1・8・15トレンチの再発掘を行った。

今次調査では、第3次調査までの結果を受けて必要が生じた第4・14トレンチの再発掘を行うとともに、第10トレンチ西方に第27トレンチを設定して調査した。また、未着手となっていた第22トレンチについても調査し、計4本のトレンチで135.25㎡を調査対象とした。

遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑2基、弥生時代の土坑11基、溝跡1条、平安時代の竪穴住居跡4軒、土坑1基、掘立柱建物跡1棟、中世の溝跡2条、掘立柱建物跡3棟、時期不明の土坑30基が確認されている。弥生時代の土坑11基のうち4基は複数土器再葬墓、3基は単数土器再葬墓である。遺物は、収納コンテナで39箱（内寸530mm×356mm×234mm 2箱、内寸530mm×356mm×170mm 37箱）出土している。主な遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器・石製品、骨製品である。

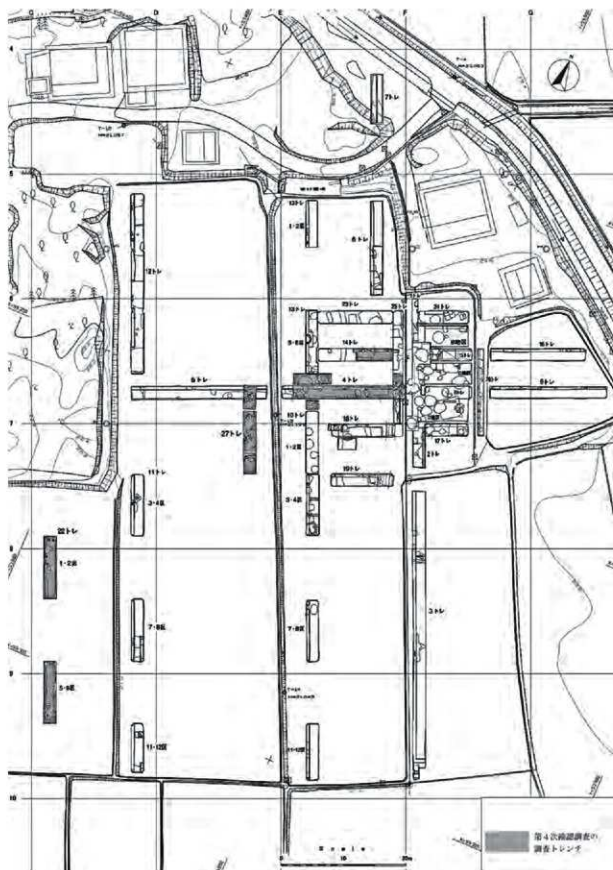
なお、先に実施したレーダー探査によって第9号溝跡の走向を抑えられたため、第19トレンチ南方に設定した第20・21トレンチは調査不要と判断し、調査は実施しなかった。また、第24トレンチ北側をA地区としていたが、再葬墓分布域から外れると判断し、調査は実施しなかった。

第2節 基本層序 (第48図)

1 上位層

調査区における土層の堆積は、鈴木2011に倣い、整地・耕作により攪乱された層を第I層、ローム層を第III層、その中間の層を第II層と大きく分類し（大分類）、そこからアルファベットを付して分層し（中分類）、さらに細分するものはアラビア数字を付して表記する（小分類）こととした。それぞれの土層については第48図のとおりである。本書においては、出土遺物観察表中での出土層位は中分類、セクション図における層位は小分類を用いて表記している。

また、今次調査では下位土層の確認は実施していない。テストピット掘削は第2次調査で実施



第47図 泉坂下遺跡平面図

しており、その成果は、報告書Ⅲのとおりである。

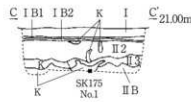
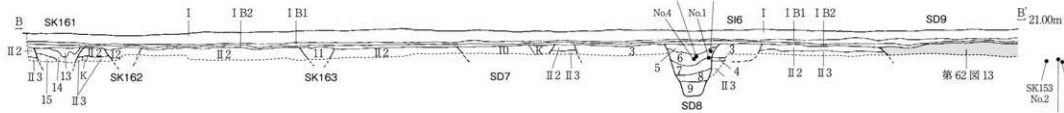
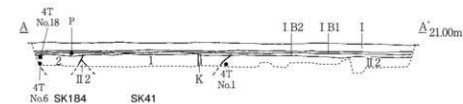
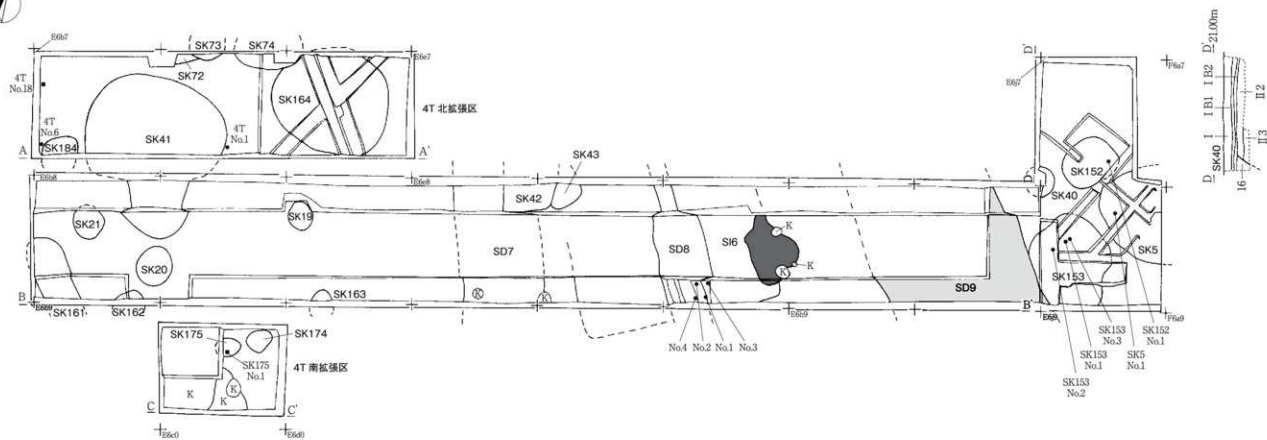
大分類	中分類	小分類	土層解説
第Ⅰ層	第Ⅰ層	第Ⅰ層	現在の耕作土。灰褐色、締まり弱
	第Ⅱ層	第ⅡB1層	水田耕作の床土。暗褐色、締まり極強
		第ⅡB2層	水田耕作の床土。暗褐色、締まり極強。第ⅡB1層と比べると黒味がやや強く、締まりはやや弱い
第Ⅲ層	第Ⅲ層	第11トレンチの11・12区にのみ見られる層。水田耕作の床土層の一部であるが黄褐色粒子を含有する。暗褐色、締まり強	
第Ⅱ層	第Ⅱ層	第Ⅱ1層	遺物包含層。褐色、締まり強、粘性中。この層が失われているトレンチも多い
		第Ⅱ2層	遺物包含層。暗褐色、締まり強、粘性中
		第Ⅱ3層	遺物包含層。暗褐色、締まり強、粘性中。第Ⅱ2層と比べると黒味がやや強く、締まりはやや弱い
	第ⅡB層	第ⅡB層	第Ⅲ層への漸移層。暗褐色土と黄褐色ローム土の混合層で、ローム粒子が不均一に混じる。締まり中
第Ⅲ層	第Ⅲ層	第Ⅲ層	橙色ローム層。締まり強。最上面に今市スコリア(Nt-I)と考えられる橙色の火山礫を混入する。なおNt-Iの上位にはほぼ同一期に降灰した七本桜パミス(Nt-S)と呼ばれる白色火山灰が堆積しているはずであるが、上層に取り込まれたためか層としては認められなかった

第48図 基本土層分類及び土層解説

第3表 泉坂下遺跡V第1部収載遺構一覧表

No	遺構番号	掲載ページ	位置		時期	過去調査での確認トレンチ				備考
			グリッド	トレンチ		平成18年	第1次	第2次	第3次	
1	S B 2	80	C8b1,C8b2	22トレ	中世					
2	S B 3	125	D7h3	27トレ	中世					
3	S B 4	122	D6b8,D6b9,D7h1,D7h2	27トレ	平安					
4	S B 5	82	C7b0	22トレ	中世					
5	S D 7	57	E6c8,E6f8	4トレ	中世			14・23トレ		旧S K 34 旧S D 12
6	S D 8	58	E6f8,E6g8	4トレ	中世		4トレ	18トレ	19トレ	旧K
7	S D 9	56・68	E6g5,E6h5,E6h8,E6g8	4・14トレ	弥生		4トレ	18トレ	19・25トレ	旧S X 4・5
8	S I 6	57	E6f8,E6g8	4トレ	平安		4トレ			
9	S I 14	70	E6g5,E6h5	14トレ	平安			14トレ		
10	S I 15	73	E6h5,E6i5	14トレ	平安			14トレ	25トレ	
11	S I 25	79	C7b0～C8b2	22トレ	平安					
12	S I 26	87	D6b8～D7h3	27トレ	縄文					
13	S K 5	49	E6j7,E6j8	4トレ	弥生	1トレ	4トレ		25トレ	複数土器再調査
14	S K 19	51	E6d8	4トレ	弥生		4トレ			単数土器再調査
15	S K 20	51	E6b8,E6c8	4トレ	弥生		4トレ			単数土器再調査
16	S K 21	51	E6b8	4トレ	弥生		4トレ			単数土器再調査
17	S K 40	59	E6j7,E6j7,E6g8,E6g8	4トレ	不明		4トレ			
18	S K 41	59	E6b7,E6c7,E6b8,E6c8	4トレ	不明		4トレ			
19	S K 72	59	E6c7	4トレ	不明			13トレ		
20	S K 73	59	E6c7	4トレ	不明			13トレ		
21	S K 74	60	E6c7,E6d7	4トレ	不明			13トレ		
22	S K 152	52	E6j7,E6j8	4トレ	弥生				25トレ	複数土器再調査
23	S K 153	52	E6b8,E6j8	4トレ	弥生				25トレ	複数土器再調査
24	S K 160	54	E6c8	4トレ	弥生					
25	S K 161	60	E6b8	4トレ	不明					
26	S K 162	60	E6b8	4トレ	不明					
27	S K 163	47	E6d8	4トレ	縄文					
28	S K 164	54	E6c7,E6d7	4トレ	弥生					複数土器再調査
29	S K 165	66	E6i5	14トレ	弥生					
30	S K 166	76	E6i5	14トレ	不明					
31	S K 167	82	C9b2,C9b3	22トレ	不明					
32	S K 168	83	C9b3	22トレ	不明					
33	S K 169	83	C9b2	22トレ	不明					
34	S K 170	83	C9b3,C9b4	22トレ	不明					
35	S K 171	83	C8b2	22トレ	不明					
36	S K 172	76	E6g5	14トレ	不明					
37	S K 173	75	E6g5	14トレ	平安					
38	S K 174	60	E6c9	4トレ	不明					
39	S K 175	60	E6c9	4トレ	不明					

No	遺構番号	掲載ページ	位置		時期	過去調査での確認トレンチ				備考
			グリッド	トレンチ		平成18年	第1次	第2次	第3次	
40	S K 176	119	D6@9	27トレ	弥生					
41	S K 177	136	D7b3,D7b4	27トレ	不明					
42	S K 178	136	D7b4	27トレ	不明					
43	S K 179	118	D7b3	27トレ	縄文					
44	S K 180	130	D6b8	27トレ	弥生					
45	S K 181	136	D6a0	27トレ	不明					
46	S K 182	127	D7b1	27トレ	不明					
47	S K 184	61	E6b7	4トレ	不明					
48	S K 185	128	D6a9	27トレ	不明					
49	S K 186	83	C9b4	22トレ	不明					
50	S K 187	84	C9b3,C9b4	22トレ	不明					
51	S K 188	84	C9b4	22トレ	不明					
52	S K 189	84	C9b4	22トレ	不明					
53	S K 190	84	C9b4	22トレ	不明					
54	S K 191	85	C9b4	22トレ	不明					
55	S K 192	85	C9b3	22トレ	不明					
56	S K 193	85	C9b3	22トレ	不明					



土層解説

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| SD7 : 57ページ | SD8 : 58ページ | |
| SI 6 : 57ページ | | |
| SK40 : 59ページ | SK41 : 59ページ | SK161 : 60ページ |
| SK162 : 60ページ | SK163 : 47ページ | SK184 : 61ページ |

第9号溝跡



第49図 第4トレンチ実測図

第3節 遺構と遺物

本節においては、今回の調査で確認された遺構と遺物をトレンチごとにまとめて解説し、所見を付す。以下、トレンチ順に記す。

1 第4トレンチ (第49図)

(1) 調査概要

第4トレンチは、第1次調査時にE6a8区からE6j8区まで、長さ20m、幅2mの東西に長く設定して調査し、その結果、単数土器再葬墓3基(第19～21号土坑)や第4号性格不明遺構(第2次調査時に第9号溝跡に改称)等を確認した経緯がある。しかし、第3次調査時の第25トレンチにおいて、第4トレンチと重複させたE6j8区から第152・153号土坑が新たに確認されるに及び、第1次調査時の確認面の高さに不安が生じたため、再発掘を行ったものである。

平安時代の第7号堅穴住居跡が所在するE6a8区は不必要と判断したため、再発掘はE6b8区からE6j8区まで、長さ18m、幅2mを対象とし、適宜拡張した。まず、第5・152・153号土坑の再度の観察のため、E6j7区の東西幅1.5m、南北幅2mを拡張した。このほか、単数土器再葬墓3基(第19～21号土坑)の南北の分布状況を把握することを主目的に、併せて、先に実施した地中レーダー探査での反応を検証することも睨んで、E6b7区からE6d7区までの東西幅6m、南北幅2m、及びE6c9区の東西幅2m、南北幅2mを拡張した。最終的に今次調査での第4トレンチの面積は55㎡となった。

第Ⅱ2層上面での遺構確認に努め、サブトレンチは第1次調査時のもののほか、新たに南壁に沿って幅50cmで掘削している。ただし、この南壁沿いのサブトレンチは第Ⅲ層まで掘りぬかず、第Ⅱ層中程までで止めており、また、遺構保護が必要な箇所は掘削していない。拡張区におけるサブトレンチは、それぞれの状況に合わせて掘削した。さらに、確認された再葬墓等は、三次元計測を実施した。

調査後は目印としてトレンチ全体に山砂を薄く撒き、掘り上げた土をかけて埋め戻している。

(2) 遺構と遺物

A 遺構とそれに伴う遺物

①縄文時代

(i) 土坑

第163号土坑 (SK163, 第49・50図)

位置 E6a8区に位置する。南側サブトレンチ底面及び南壁のセクションで確認できた。

規模と形状 平面は、概ね円形と考えられ、セクションで確認できる最大径は53cmである。確認できる深さは20cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

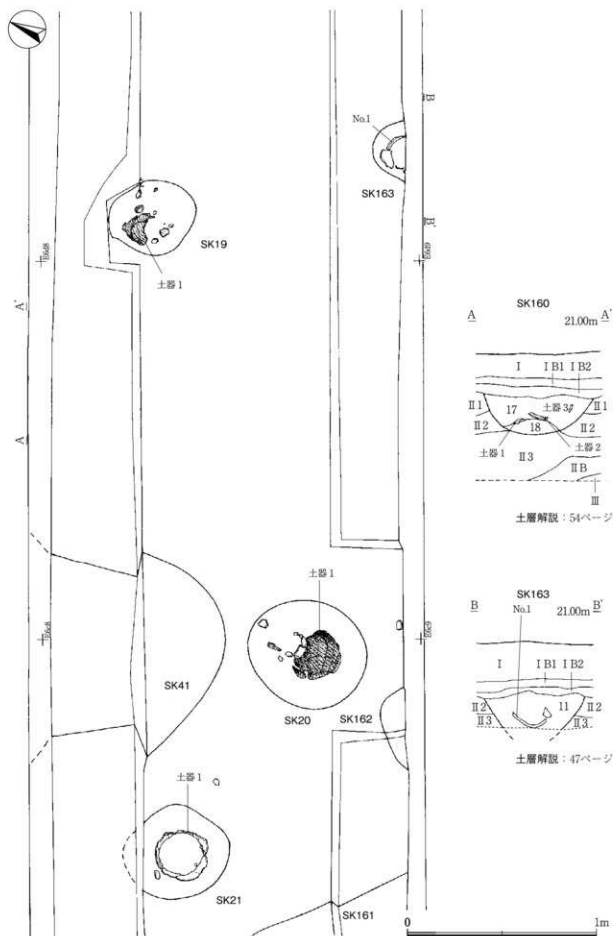
土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説 (第50図)

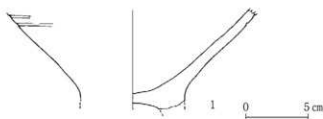
II 暗褐色 (75YR3/3) ローム粒子少量, Nt-S極少量, 締まり中, 粘性中

遺物 縄文土器1点(台付鉢)が出土しており掲載する(第51図, 第4表)。この土器は土坑底面から離して、わずかに北に傾くがほとんど正位で据えられている。

所見 出土遺物から、縄文時代晩期の所産と考えられる。



第50図 第19～21・160・163号土坑実測図



第51図 第163号土坑出土遺物実測図

第4表 第163号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第51図 1	縄文 土器か	台付 鉢	胴～底 部, 5 %	— (8.0)	外傾。外面横走沈線2本、ミ ガキ。内面と底面ミガキ。台 部欠損	メノウ粒少量、 メノウ礫・石 英粒・白色砂 粒微量	普通。 焼けムラ	内外面黒褐色	覆土中	3片	PL23

②弥生時代

(i) 土坑

第5号土坑 (SK5, 第49・52図)

位置 E6j7区, E6j8区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と形状 平成18年調査の成果と合わせると、平面は長軸185cm程度、短軸170cm、長軸方向がN-80°-Eのいびつな楕円形である。

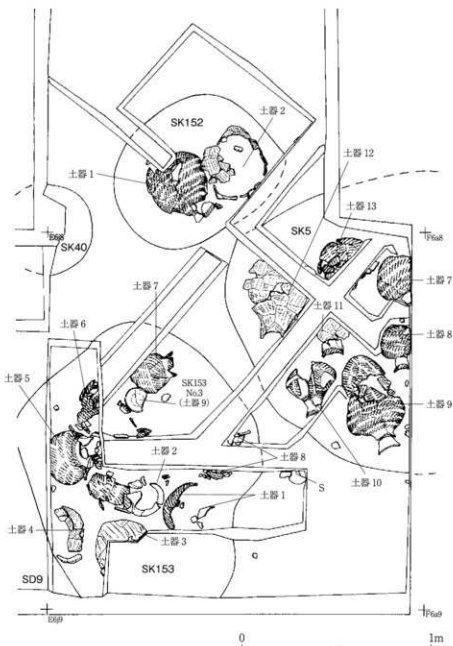
遺物 土器等3点が出土している。うち弥生土器1点(広口壺)を掲載する(第53図, 第5表)。再葬のため埋納された土器は計13点確認されている。土器1～6は、平成18年調査ですでに取り上げられているが、以下の土器7～13は取り上げていない。この7点の土器の据え置き順は、まず土器9が置かれた後、土器8・7の順と土器10・11の順の二筋があるが、この二筋の新旧関係は不明であり、その後土器13が置かれている。土器12は、土器11の後に置かれていて、土器10・11及び土器13との新旧関係は不明であるが、全体に南から北へ向かう据え置き手順が復原できる。

土器7 平成18年調査及び第1・3次調査で確認された淡茶褐色の壺形土器で、器高は35～40cmと推測する。口縁部を欠く。頸部は無文でミガキが施され、頸径は12～13cmで、胴部と頸部は刺突文で区画される。胴部は球形で、胴径は30～35cmで、外面に施されるのはこれまで単筋縄文LRと考えていたが、今次調査の観察により擬縄文(オオバコ文)と訂正する。主軸をN-133°-Eに向けて横転する。

土器8 平成18年調査及び第1・3次調査で確認された明茶褐色の壺形土器で、器高は35～40cmと推測する。平縁の複合口縁で、口唇部外面には単筋縄文LRまたはLが施される。頸部は無文でミガキが施される。胴部は肩張りで、外面には単筋縄文LRまたはLが施される。主軸をN-151°-Eに向けて横転する。

土器9 第1・3次調査で確認された明褐色の壺形土器で、器高は50～55cmと推定する。平縁の単純口縁で、頸部は無文でミガキが施され、頸径は14cmである。胴部外面にはLR R R縄文が施され、所々結節文が施される。主軸をN-143°-Eに向けて横転する。

土器10 第3次調査で確認された淡明茶褐色の壺形土器で、器高は35～38cmと推定する。小波状の複合口縁で、口径は約12cmで、口唇部外面には単筋縄文LRが施される。頸部



第52図 第5・152・153号土坑実測図

は無文で、胴部と頸部は刺突文で区画される。胴部は胴径28cmで、胴上部には単節縄文L RまたはLに磨消縄文と沈線が施され、胴下部にはまばらに単節縄文L RまたはLが施される。主軸をN-152°-Eに向けて横転する。

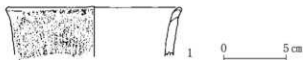
土器11 第3次調査で確認された明茶褐色の壺形土器で、器高は45～50cmと推定する。平縁の複合口縁で、口径は12cmで、口唇部外面には単節縄文L Rが施される。頸部は無文で、横位の粗いミガキが施される。胴部は粗い条痕文が施され、胴径は30cm以上である。主軸をN-155°-Eに向けて横転する。

土器12 第3次調査で確認された淡明褐色の壺形土器で、器高は45～50cmと推定する。口縁部から胴部外面には粗い条痕文が施され、口径は14cm、胴径は約40cmである。主軸をN-157°-Eに向けて横転すると考えられる。

土器13 第3次調査で確認された明茶褐色の壺形土器である。頸部は無文で、ミガキが施され

ている。胴部は球形形で、外面には単節縄文LRが施され、所々結節文が施され、下部に炭化物が付着する。主軸をN-115°-Eに向けて横転する。

所見 平成18年調査で東部を、第1・3次調査で西部を調査した複数土器再葬墓である。今次調査では、埋納土器に詳細な観察を加えている。



第53図 第5号土坑出土土遺物実測図

第5表 第5号土坑出土土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第53図 1	弥生土器	広口壺か	口縁部、5%以下	[13.8] (3.8)	外反外傾。外面縦位条痕文。内面ナデ。風化により調整不明瞭	石英粒・メノウ粒少量、赤褐色砂礫・子ヤマト粒・雲母細粒微量	やや不良。焼き甘い	外面にふい黄褐色。内面黒褐色	覆土中	-	PL23 土器13

第19号土坑 (SK19, 第49・50図)

位置 E6a8区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と形状 平面は長軸48cm, 短軸35cm, 長軸方向がN-28°-Wの楕円形である。

遺物 再葬のため埋納された土器は以下の1点で、これは取り上げていない。

土器1 第1次調査で確認された淡明褐色の壺形土器である。口縁部を欠く。頸部は無文である。胴部は細かい単節縄文LRが施される。底部は径6~7cmと推定される。主軸を概ね南東に向けて横転する。

所見 第1次調査で確認されていた弥生時代中期の単数土器再葬墓である。今次調査では、改めて平面形の確認を行うとともに埋納土器により詳細な観察を加えている。

第20号土坑 (SK20, 第49・50図)

位置 E6b8区, E6c8区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径60~63cmの不整形円形である。

遺物 再葬のため埋納された土器は以下の1点で、これは取り上げていない。

土器1 第1次調査で確認された淡黄褐色の壺形土器である。平縁の単純口縁で、口径は14cmである。頸部は無文である。胴部外面は単節縄文LRまたはRRが施され、胴径は26~27cmである。主軸を概ね北に向けて斜位に据えられている。

所見 第1次調査で確認されていた弥生時代中期の単数土器再葬墓である。今次調査では、改めて平面形の確認を行うとともに埋納土器により詳細な観察を加えている。

第21号土坑 (SK21, 第49・50図)

位置 E6b8区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径52~54cmの不整形円形である。

遺物 再葬のため埋納された土器は以下の1点で、これは取り上げていない。

土器1 第1次調査で確認された淡明黄褐色の壺形土器である。頸部は無文で、頸径は10~11cmである。胴部は球形形で、胴部外面は単節縄文LRが施され、胴径は30cm以上である。倒立し、わずかに斜位に据えられている。

所見 第1次調査で確認されていた弥生時代中期の単数土器再葬墓である。今次調査では、改めて平面形の確認を行うとともに埋納土器により詳細な観察を加えている。

第152号土坑 (SK152, 第49・52図)

位置 E6j7区, E6j8区に位置する。第II2層上面で確認できた。

規模と形状 平面は長軸86cm, 短軸70cm, 長軸方向がN-28°-Eの楕円形である。

遺物 土器等15点が出土している。うち弥生土器1点(壺)を掲載する(第54図, 第6表)。再葬のため埋納された土器は以下の2点で, これは取り上げていない。土器の据え置き順は, 土器1が先, 土器2が後である。

土器1 第3次調査で確認された明茶褐色の壺形土器で, 器高は約45cmである。平縁の複合口縁で, 口径は14~15cmで, 口唇部外面には単節縄文LRが施される。頸部は無文で, ミガキが施されている。胴部はやや隙間のある単節縄文LRが施され, 胴径は30cmである。胴下部は攪乱を受け一部失われている。主軸をN-102°-Eに向けて横転する。

土器2 第3次調査で確認された淡明黄褐色の壺形土器で, 残存高は35cmである。口縁部に欠く。頸部から胴部には浅く急傾斜の条痕文が施される。主軸をN-113°-Eに向けて横転する。



第54図 第152号土坑出土遺物実測図

第6表 第152号土坑出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高或径径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第54図 1	弥生土器	壺	胴部上手, 5%以下	—	内壁, 内傾。外面斜位の浅い条痕文。内面ナデ	メノウ粒少量, チャート粒・石英粒・雲母細粒・海綿骨針微量	良好	外面黄灰色, 内面明褐色	覆土中	—	PL23 土器2

所見 第3次調査で確認されていた弥生時代中期の複数土器再葬墓である。今次調査では, 埋納土器に詳細な観察を加えている。

第153号土坑 (SK153, 第49・52図)

位置 E6j8区, E6j8区に位置する。第II2層上面で確認できた。

規模と形状 西部と南部がトレンチ外に延びるが, 平面は長軸197cm, 短軸140cm前後, 長軸方向がN-40°-Wの楕円形になると考えられる。重複関係 第9号溝跡に切られる。

遺物 土器等12点, 石器1点が出土している。うち弥生土器3点(壺2, 蓋1)を掲載する(第55図, 第7表)。再葬のため埋納された土器は以下の8点で, これは取り上げていない。なお, 西側の未調査部分にさらに埋納土器がある可能性がある。土器の据え置き順としては, まず土器1・3・7・8が置かれているが, これらの新旧関係は不明である。土器1・3の後に土器2, 土器3の後に土器4・6, 土器2・6の後に土器5という新旧関係が確認でき, 全体に東から西へ向かう据え置き手順が復原できる。

土器1 第3次調査で確認されたごく淡い黄褐色の壺形土器である。平縁の単純口縁で, 口径は13~15cmで, 無文である。頸部は無文で, ミガキが施される。胴部外面は単節縄文LRが施され, 胴径は33~35cmで, 胴上半部を欠く。主軸をN-95°-Eに向けて

横転する。

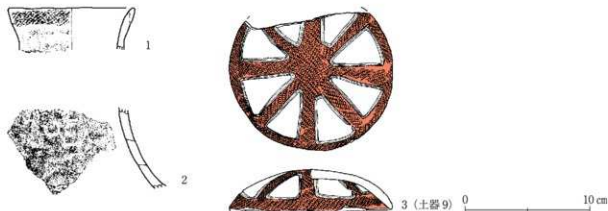
土器2 第3次調査で確認された淡明茶褐色の壺形土器である。平縁の単純口縁で、口縁部から頸部は無文、口径は14～15cmである。胴上部～中央部は細かい単節縄文L R、胴下部は粗い単節縄文L Rが施される。主軸をN-90°-Eに向けて倒れていると考えられる。

土器3 第3次調査で確認された淡暗褐色の壺形土器である。胴部外面は縦位の粗い条痕文が施され、炭化物が付着する。主軸をN-117°-Eに向けて倒れている。

土器4 第3次調査で確認されたごく薄い淡明褐色の壺形土器で、器高は約30cmと推定する。頸径は14～15cmで、頸部から胴部には縦位の条痕文が施される。主軸をN-138°-Eに向けて倒れている。

土器5 第3次調査で確認された明茶褐色の壺形土器である。頸部は無文で、ミガキが施されている。胴部は球形で、胴部上端は2段の結節縄文で区画され、外面には単節縄文L Rが密に施される。主軸をN-42°-Eに向けて横転する。

土器6 第3次調査で確認された明茶褐色の壺形土器である。平縁の複合口縁で、口唇部外面には単節縄文L Rが施される。頸部は無文で、ミガキが施される。胴部外面には細かい単節縄文L Rが施され、胴径は30cm前後と推定する。主軸をN-79°-Eに向けて倒れている。



第55図 第153号土坑出土遺物実測図

第7表 第153号土坑出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第55図 1	弥生土器	壺	口縁～頸部、5%以下	[10.0] (3.3)	外反、外傾。口縁部をわずかに肥厚させ、外面縄文。頸部外面粗いミガキ。内面ナデ	メノウ粒少量、チャート粒、石英粒、白色砂粒・赤色砂粒・雲母細粒微量	普通、焼けムラ	内外面赤褐色	覆土中	-	PL23土器6
2	弥生土器	壺	頸部、5%以下	-	外反、内傾。頸部外面無文、胴部近くに縄文。内面ナデ	メノウ粒少量、チャート粒、石英粒、白色砂粒・赤色砂粒・雲母細粒微量	普通、焼けムラ	内外面赤褐色	覆土中	-	PL23土器5
3	弥生土器	蓋	天井～裾部、80%	13.0 3.4	内彎、内傾。丸い天井部。外面縄文を地文に、沈線で区画した8つの三角形を均等に配し、内側を磨り消し。内面荒いミガキ。縄文施文部分に赤色塗彩	精良。石英粒・泥岩粒・雲母細粒・海綿骨針微量	普通、焼けムラ	サンドイッチ状。内外面にぶい黄褐色、内部褐色	覆土中	-	PL23土器9植物片圧痕

土器7 第3次調査で確認された淡明褐色の壺形土器である。平縁の単純口縁で、口唇部外面には単節縄文L Rが施され、口径は13cm前後と推定される。頸部は無文である。胴部外面には細かい単節縄文L Rが施され、胴径は約30cmである。主軸をN-29°-Eに向けて横転する。

土器8 第3次確認調査で確認された淡明褐色の壺形土器である。平縁の複合口縁で、口唇部外面には単節縄文L Rが施される。頸部は無文である。胴部外面には細かい単節縄文L Rが施され、胴径は約30cmと推定される。主軸をN-52°-Eに向けて倒れていると考えられる。

所見 出土遺物から、弥生時代中期の複数土器再葬墓と考えられる。今次調査では、埋納土器に詳細な観察を加えている。

第160号土坑 (S K 160, 第50図)

位置 E 6 c 8区に位置する。北壁のセクションで確認できた。

規模と形状 平面は不明である。確認できる深さは20cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

土層 2層が確認でき、人為堆積である。

土層解説

17 黒褐色 (7.5Y R 3/1) ローム粒子少量、締まりやや強、粘性中

18 黒褐色 (7.5Y R 3/1) ローム粒子中量、締まりやや強、粘性中

遺物 以下の土器3点がセクションで確認できる。セクションでの確認であったため、無理に取り上げると遺構を破壊する恐れがあると判断し、これらは取り上げていない。

土器1 小型壺胴部と考えられる。薄手で、外面は細かい単節L R縄文、内面は横位のミガキが施される。

土器2 器種不明の底部である。厚手で、外面は無文である。

土器3 小型壺胴部と考えられる。外面は無文で、ミガキが施される。

所見 出土遺物から、弥生時代の所産と考えられるが、性格は不明である。

第164号土坑 (S K 164, 第49・56図)

位置 E 6 c 7区, E 6 d 7区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と形状 平面は長軸186cm, 短軸160cm, 長軸方向がN-79°-Eの楕円形である。サブトレランチで確認できる深さは16cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

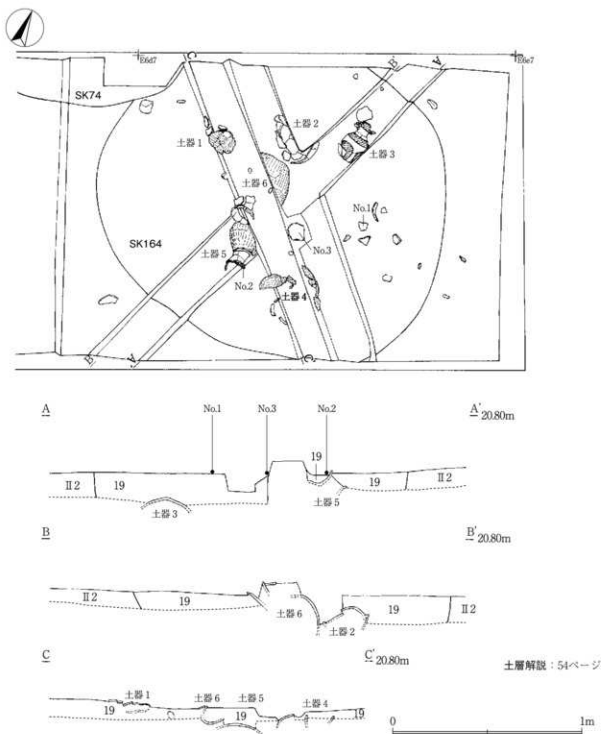
重複関係 第74号土坑に切られる。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説 (第56図)

19 黒褐色 (10Y R 3/2) ローム粒子少量, N t - S 極少量, N t - I 極少量, 締まり中, 粘性中。II層よりも粒子がやや粗く、ローム粒子が多い

遺物 土器等64点, 石器等13点, 骨片5点が出土している。うち縄文土器1点(鉢), 弥生土器3点(壺)を掲載する(第57図, 第8表)。土器1は浅鉢で、性格は不明であり取り上げていない。再葬のため埋納された土器は土器2~6の5点で、これは取り上げていない。土器の据え置き順としては、土器1・3は不明であるが、土器4・5・6・2の順が確認でき、全体に南から北へ向かう据え置き手順が復原できる。



第56図 第164号土坑実測図

土器 1 暗褐色の浅鉢である。口径は16cmで、平縁で外面に横走沈線が施され、穿孔が1か所ある。胴部外面には単節縄文LRが施される。底径は約5cmである。逆位で置かれている。

土器 2 淡褐色の壺形土器である。胴部は球胴形で、胴部外面は無文で、やや雑なミガキが施されている。主軸をN-57°-Wに向けて倒れている。

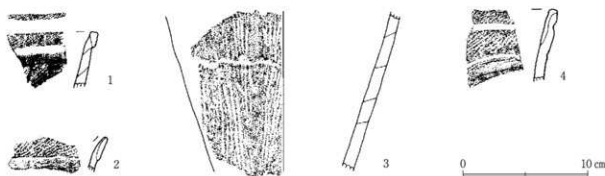
土器 3 淡灰褐色の壺形土器で、いわゆる「瓢形」である。口径は6~7cm、胴部外面は磨消縄文が施され、胴径は20~25cmである。主軸をN-1°-Eに向けて倒れている。

土器4 淡明褐色の壺形土器である。平縁の複合口縁で、口唇部外面には単節縄文L Rが施される。胴部外面は単節縄文L Rが施され、胴径は約30cmである。主軸をN-174°-Wに向けて倒れている。

土器5 淡明褐色の壺形土器である。小波状の複合口縁で、口唇部外面には単節縄文L Rが施される。頸部は無文で、凹凸がある。胴部外面は条痕文が施され、条痕下に単節縄文L Rが残る部分もある。胴径は30cm前後と推定する。主軸をN-173°-Wに向けて倒れている。

土器6 淡明褐色の壺形土器である。波状の複合口縁で、口唇部外面には単節縄文L Rが施される。頸部は無文である。胴部外面は条痕文が施される。主軸をN-167°-Wに向けて倒れている。

所見 出土遺物から、弥生時代中期の複数土器再葬墓である。



第57図 第164号土坑出土遺物実測図

第8表 第164号土坑出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第57図 1	弥生土器	壺	口縁～頸部、5%以下	—	わずかに外反、外傾。口縁部を肥厚させ、口縁端部・口縁部外面に縄文。頸部外面縄文と結節縄文。口縁部と頸部の境はナデ消して粗いミガキ。内面粗いミガキ	メノウ粒・石英粒・赤褐色粒・雲母細粒・海綿骨針微量	良好	外面にふい黄褐色、内面褐色	覆土中	—	PL23
2	弥生土器	壺	口縁～頸部、5%以下	—	外反、外傾。小波状口縁。粘土を外面に貼り付け縄文施文。頸部外面無文でナデ調整。内面ナデ	メノウ粒・石英粒少量、チャート礫・白色砂粒・雲母細粒微量	良好	外面灰黄褐色、内面黒褐色	覆土中	—	PL23 土器5
3	弥生土器	壺	胴部下半、5%以下	(12.7)	外傾。外面縦位の条痕文。内面ナデ	メノウ粒中量、石英粒、チャート礫・砂礫・雲母細粒微量	やや不良。焼き甘い	内外面にふい黄褐色	覆土中	2片	PL23
4	縄文土器	鉢	口縁～胴部、5%以下	—	外傾。胴部で外反。口縁部外面縄文に横走沈線1条。胴部弧状沈線に区画された部分を磨り消し。内面ナデ	メノウ粒少量、チャート礫・石英粒・泥岩粒・雲母細粒、海綿骨針微量	良好	内面明赤褐色、外面暗赤褐色	覆土中	—	PL23 安行3a ～3b式

(ii) 溝跡

第9号溝跡 (SD9, 第49・62図)

(68ページに掲載)

③平安時代

(i) 竪穴住居跡

第6号竪穴住居跡 (S16, 第49図)

位置 E6f8区, E6g8区に位置する。第II2層上面及び南壁のセクションで確認できた。

規模と形状 平面は長軸3.60m, 短軸2～2.2m程度。長軸方向がN-53°-Eの隅丸長方形になると考えられる。確認できる壁高は25cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

重複関係 第8号溝跡に切られる。

土層 2層が確認できる。覆土は1層(第3層)からなり、堆積状況は不明である。第4層は硬化しており、床と考えられる。

土層解説

- 3 暗褐色(75YR3/3) ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量, 締まり中, 粘性中
4 褐色(75YR4/4) ローム粒子中量, 締まりやや強, 粘性やや強

床 平らに踏み固められていることがセクションで確認できる。

竈 東壁南寄りに砂質粘土で付設されている。

柱穴 確認していない。

遺物 出土していない。

所見 第1次調査で確認された遺構で、当時は西壁を抑えることができなかったが、今次調査ではサブトレンチを掘削することで、長軸を掘むことができた。形状から平安時代の竪穴住居跡と考えられる。

④中世

(i) 溝跡

第7号溝跡 (SD7, 第49図)

位置 E6e8区, E6f8区に位置する。南側サブトレンチ内の第II層及び南壁セクションで確認できた。

規模と形状 確認できる上端の幅は130～140cm, 確認面からの深さ13cmである。走向はN-23°-Wを向く。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説

- 10 暗褐色(75YR3/4) ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, ローム小ブロック少量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。

所見 第1次調査で第34号土坑と判断していた遺構であるが、今次調査では、溝状に伸びることを確認し、本トレンチ北側の第14・23トレンチで確認されていた中世の溝跡である第7号溝跡と同一になると考え、所見を改めた。

なお、この調査結果によって、第7号溝跡は、第18・19トレンチで確認されている第10・11・12号溝跡のいずれかと同一となる可能性が浮上した。また、先に実施したレーダー探査結果でも同一遺構と示唆する結果が出ているため、中小のロームブロックを含む覆土の状況が似ている第12号溝跡が、第7号溝跡と同一遺構になるものと考えられる。

第8号溝跡 (SD8, 第49図)

位置 E6f8区, E6g8区に位置する。第Ⅱ層上面及び南壁セクションで確認できた。

規模と形状 上端の幅は85cm, 確認面からの深さ80cmの断面V字形の溝である。走向はN-36°-Wを向く。掘り込みは第Ⅲ層に達し、湧水する。

土層 5層が確認でき、レンズ状の自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----------------|--|
| 5 | 暗褐色 (7.5YR 3/4) | ローム粒子少量, 締まり中, 粘性中 |
| 6 | 暗褐色 (7.5YR 3/4) | ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, Nt-S少量, 締まり中, 粘性中 |
| 7 | 暗褐色 (7.5YR 3/4) | ローム粒子少量, 締まり中, 粘性中 |
| 8 | 褐灰色 (7.5YR 4/1) | ローム粒子中量, Nt-S極少量, 締まり中, 粘性やや強 |
| 9 | 褐色 (7.5YR 4/4) | ローム粒子中量, 締まり中, 粘性やや強 |

遺物 土器等136点, 石器等25点, 骨片3点が出土している。うち弥生土器4点(壺)を掲載する(第58図, 第9表)。弥生土器片はいずれも覆土上層から出土していて, 混入したものと考えられる。

所見 第1次調査で掘乱と判断していたが, 第2次調査の第18トレンチで溝状に伸びることを確認し, 所見を改めた経緯がある。また, 第3次調査の第19トレンチでは, 第9号溝跡を切ることが確認されている。形状から, 中世の溝跡と考えられる。確認面で弥生の壺形土器片が確認されたため, 念のため今次調査ではサブトレンチ中を第Ⅲ層上面まで掘り抜いて調査した。



第58図 第8号溝跡出土遺物実測図

第9表 第8号溝跡出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第58図 1	弥生土器	壺	口径～頭部, 5%以下	—	頭部外反, 外傾。口縁部外傾。複合口縁, 条痕文。頭部無文。内面ナデ	メノウ粒少量, 泥岩粒・雲母細粒微量	良好	サンドイッチ状。内外面にふい灰黄褐色。内部褐灰色	E6g8, 上層	—	PL23 外面炭化物付着
2	弥生土器	壺	頭～肩部, 5%以下	—	外反, 内傾。外面短条痕文。内面ナデ	メノウ粒少量, 雲母細粒・石英粒・海綿骨針微量	良好	サンドイッチ状。内外面黄褐色。内部褐灰色	E5g8, 上層	—	PL23
3	弥生土器	壺	頭～肩部, 5%以下	—	肩部内彎, 内傾。頭部で屈曲し外反。肩部外面縄文を施文後に下方に条痕文。頭部と肩部の間に結節縄文。頭部無文。内面ナデ。補修孔1孔	メノウ粒少量, 石英粒・雲母細粒・メノウ礫・泥岩礫・砂礫微量	良好	内外面にふい黄褐色	E6g8, 上層	3片	PL24
4	弥生土器	壺	肩部, 5%以下	—	わずかに内彎, 大きく内傾。外面条痕文。内面ナデ	石英粒・海綿骨針微量	良好	内外面にふい黄褐色	E6g8, 上層	—	PL23

⑤時期不明

(i) 土坑

第40号土坑 (SK40, 第49図)

位置 E6i7区, E6j7区, E6is区, E6js区に位置する。第II 2層上面及びセクションで確認できた。

規模と形状 平面は径46cmの円形である。確認できる深さは22cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説

16 黒褐色 (7.5YR3/2) ローム粒子極少量, Ni-S極少量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。

所見 第1次調査時に、セクションで確認された土坑である。今次調査では平面形を捉えることができた。遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第41号土坑 (SK41, 第49・50図)

位置 E6b7区, E6c7区, E6b8区, E6c8区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と形状 第1次調査の成果を合わせると、平面は長軸255cm, 短軸220cm, 長軸方向がN-26°-Wの楕円形である。第1次調査では、深さは70cmと確認している。

土層 今次調査では1層しか確認できない。第1次調査では5層を確認し、レンズ状の自然堆積と判断できた。

土層解説 (第49図)

1 暗褐色 (7.5YR3/3) ローム粒子少量, 締まり中, 粘性弱

遺物 出土していない。

所見 第1次調査で確認された土坑である。今次調査では、平面全体を掘むことができた。遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第72号土坑 (SK72, 第49図)

位置 E6c7区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と形状 第2次調査の成果を合わせても大部分が調査区外に延びているが、楕円形を指向するものと考えられる。

重複関係 第73号土坑に切られる。

遺物 出土していない。

所見 第2次調査で確認された土坑の南部である。遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第73号土坑 (SK73, 第49図)

位置 E6c7区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と形状 第2次調査の成果を合わせると、平面は径60cmの円形である。

重複関係 第72号土坑を切っている。

遺物 出土していない。

所見 第2次調査で確認された土坑の南部である。遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第74号土坑 (SK74, 第49図)

位置 E6c7区, E6d7区に位置する。第Ⅱ2層上面で確認できた。

規模と形状 第2次調査の成果を合わせると、平面は長軸110cm前後、短軸72cm、長軸方向がN—85°—Eの楕円形である。

重複関係 第164号土坑を切っている。

遺物 出土していない。

所見 第2次調査で確認された土坑の南部である。遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第161号土坑 (SK161, 第49図)

位置 E6b8区に位置する。第Ⅱ2層上面及び南壁セクションで確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に延びるが、平面は、長軸方向がN—45°—Wの隅丸長方形と考えられる。確認できる深さは23cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

土層 3層が確認でき、ブロック状の人為堆積である。

土層解説 (第49図)

13 極暗褐色 (7.5YR 2/3) ローム粒子極少量、締まり中、粘性中

14 暗褐色 (7.5YR 3/3) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、Nt—S極少量、締まり中、粘性中

15 暗褐色 (7.5YR 3/3) ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、Nt—S極少量、締まり中、粘性中

遺物 出土していない。 所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第162号土坑 (SK162, 第49・50図)

位置 E6b8区に位置する。第Ⅱ2層上面及び南壁セクションで確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に延びるが、平面は楕円形を指向すると考えられる。確認できる深さは18cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説 (第49図)

12 黒色 (7.5YR 2/1) ローム小ブロック極少量、ローム粒子極少量、締まり中、粘性中

遺物 出土していない。 所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第174号土坑 (SK174, 第49図)

位置 E6c9区に位置する。サブレンチ内の第Ⅲ層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径33～40cmの不整形円形である。

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。第175号土坑と類似性が認められる。

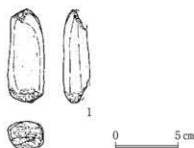
第175号土坑 (SK175, 第49図)

位置 E6c9区に位置する。サブレンチ内の第Ⅲ層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径28～30cmの不整形円形である。

遺物 石器1点(敲石)が出土しており掲載する(第59図, 第10表)。状況から、混入と考えられる。

所見 時期・性格は不明である。第174号土坑との類似性が認められる。



第59図 第175号土坑出土遺物実測図

第10表 第175号土坑出土遺物観察表

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第59図 1	敲石	7.4	2.8	2.1	(61.2)	ホルンフェルス	断面四角形の棒状の礫を利用。両端に使用痕。先端と側縁に使用痕があり、円運動と上下運動の両方による敲打痕。一部使用による剝離	確認面	—	PL23 一部欠損

第184号土坑 (SK184, 第49図)

位置 E6b7区に位置する。第Ⅱ2層上面及びベルトセクションで確認できた。

規模と形状 南部は調査区外に延びるが、平面は楕円形を指向すると考えられる。確認できる深さは16cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説

2 暗褐色 (7.5YR3/4) ローム粒子多量、締まり中、粘性中

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

B 遺構外出土遺物

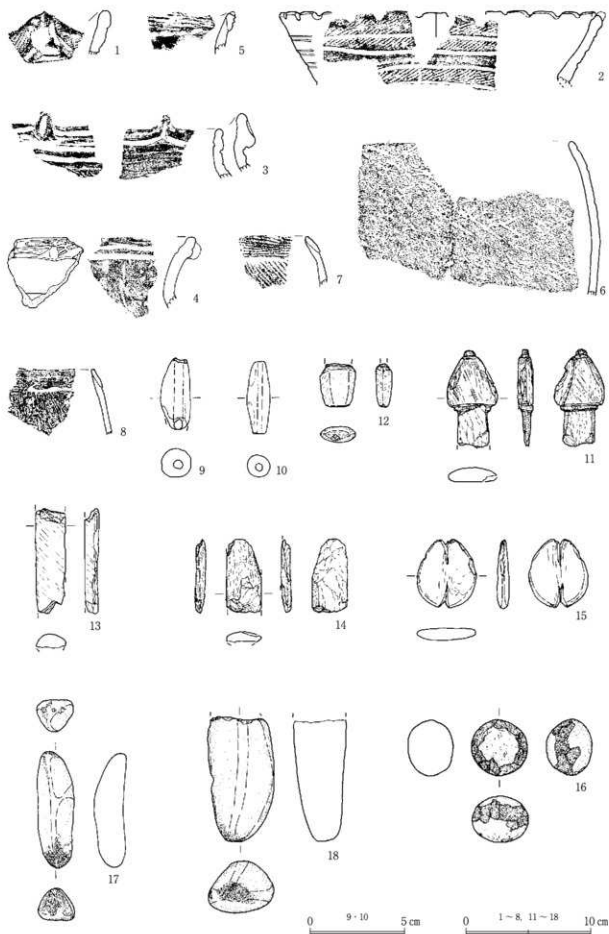
遺構外で確認された遺物について解説する。(第60・61図, 第11表)

遺物 土器等1808点, 石器等443点, 骨片37点が出土している。うち縄文土器8点(深鉢5, 鉢3), 土製品2点(管状土錘), 石器・石製品13点(敲石5, 石鏃3, 石刀2, 石棒1, 石剣1, 石錘1)を掲載する。

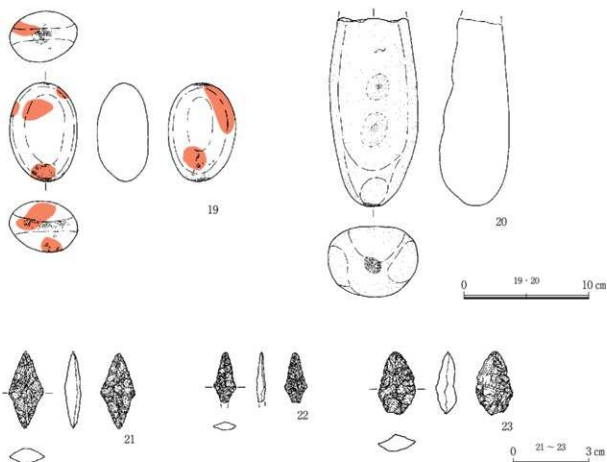
(3) 所見

南壁沿いで掘削したサブトレンチによって、第7～9号溝跡や第6号堅穴住居跡のプランを把握することができ、また第161～163号土坑を新たに確認することができた。すなわち、第1次調査で見落とし、または誤認していた遺構が複数あったということである。今次調査で補うことができたとはいえ、大きな反省材料である。

再葬墓集中域の確認という点からは、北側に拡張したE6c7区, E6d7区において、第164号土坑を確認することができた。この拡張区は、再葬墓西群範囲内の未調査域であったが、想定されたとおり、再葬墓を確認することができた。西群の範囲把握は、西側に設定した第27トレンチの調査結果に委ねられることとなった。



第60図 第4トレンチ遺構外出土遺物実測図(1)



第61図 第4トレンチ遺構外出土遺物実測図(2)

第11表 第4トレンチ遺構外出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第60図 1	縄文土器	鉢	口縁部、5%以下	—	波状口縁。外傾。外面縄文に、波状口縁に沿う弧状沈線と横走沈線で三角区画文。その中に刺難痕。内面ナデ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・泥岩粒・雲母細粒微量	普通。焼けムラ	外面にふい黄褐色。内面黄褐色	E6c7, II層	—	PL24 安行3a ~3b式
2	縄文土器	深鉢	口縁~胴部、5%以下	[26.6] (5.4)	小波状口縁。わずかに内彎。外傾。下部で屈曲し。胴部内傾か。外面縄文に平行沈線4条を引き。2条目と3条目の間を磨り消し。内面ミガキ	輝石粒少量、メノウ粒・石英粒・チャート粒微量	普通。使けムラ	サンドイッチ状。外面にふい橙色。内面褐灰色。内部黒褐色	E6c7, I B層	3片	PL24 大洞B1式
3	縄文土器	深鉢	口縁~胴部、5%以下	—	胴部内傾。口縁部外反し直立。口縁部外面に縦長の突起を貼り付け。沈線で凹ませる。その両脇から2本ずつ横走沈線を引き。その下に2本の平行沈線。胴部外面縄文。内面に突起の形状に合わせた三叉文と横走沈線	メノウ粒・白色砂粒・石英粒・チャート・泥岩粒・雲母微量	普通。焼けムラ	外面黒褐色。内面にふい黄褐色	E6b7, II層	—	PL24 晩期中業 ~後業
4	縄文土器	鉢	口縁~胴部、5%以下	—	外反。外傾。口縁部外面を肥厚させ突起を作り。その両脇から2条ずつ横走沈線。胴部外面ナデ。内面口縁部に2条の横走沈線。胴部内面ナデ	メノウ粒少量。チャート粒・石英粒・白色砂粒・雲母細粒微量	普通。焼けムラ	外面にふい黄褐色。内面にふい黄褐色	E6d7, I B層	—	PL24 晩期後業
5	縄文土器	鉢	口縁~胴部、5%以下	—	口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ。外面撫糸文口縁端部を凹ませ小波状口縁。胴部外面と内面ミガキ	メノウ粒少量。石英粒・白色砂粒・雲母細粒微量	良好	内外面黒褐色	E6d8, II層	—	PL24 晩期粗製土器

挿入番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第60図	6	縄文土器	口縁～胴部、5%以下	— — —	胴部やや外傾、内彎して口縁部内傾。外面網目状捺糸文。内面ナデ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・雲母細粒微量	やや不良、焼き甘い	外面にふい、黄褐色。内面褐色	E6d7、II層	2片	PL24 晩期粗製土器 破片(後外面炭化物付着)
	7	縄文土器	口縁～胴部、5%以下	— — —	複合口縁。内彎、内傾。口縁部外面横位の捺糸文。胴部外面斜位の捺糸文。内面ナデ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・雲母細粒微量	やや不良、焼けムラ	内外面浅黄褐色	E6d7、II層	—	PL24 晩期粗製土器
	8	縄文土器	口縁～胴部、5%以下	— — —	内彎、内傾。複合口縁・口縁部外面横方向の捺糸文。胴部外面斜位の捺糸文。内面ナデ	メノウ粒少量、砂礫・メノウ礫・石英粒・雲母細粒・海綿骨針微量	普通、焼けムラ	サンドイッチ状。外面灰黄褐色。内面にふい、黄褐色。内部褐色	E6d8、第1次確認調査埋土中	—	PL24 晩期後葉粗製土器

挿入番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考	
第60図	9	管状土鉢	(38)	1.6	0.5	(8.2)	太形で、両端を細く作る。長軸に貫通孔。外面ナデ	輝石粒・石英粒・白色砂粒・雲母細粒微量	普通	灰黄褐色	排土中	—	PL24 一部欠損、使用によるものか
	10	管状土鉢	38	1.2	0.3	5.5	細形で、中央部をわずかに太く作る。長軸に貫通孔。外面縦方向のナデ	輝石粒・石英粒・雲母細粒微量	良好	にふい、黄褐色	E6d7、I層	—	PL24

挿入番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考	
第60図	11	石棒類	(76)	(39)	(1.2)	(37.2)	粘板岩	石剣もしくは石刀の頭部。先端がすはまる三角形で、頂点に突起。断面楕円形。全体に研磨痕が明瞭で、一部に敲打痕が残る。身部に移行する部分に段差	第3次確認調査25T土部の埋土中	—	PL24 一部残存
	12	石剣	(34)	(28)	(1.3)	(18.9)	緑色片岩	石剣の先端部。先端がすはまる逆台形。断面杏仁形。全体に研磨痕。剣身に移行する段差部分で折損。剣身断面杏仁形	E6d8、II層	—	PL24 一部残存
	13	石刀	(8.3)	2.4	(1.1)	(31.6)	粘板岩	扁平。1個縁が峰状。他の個縁は破損のため不明。斜方向の擦痕(調整痕)	E6b7、I B層	—	PL24 一部残存
	14	石刀	(5.8)	2.8	(0.8)	(17.6)	粘板岩	扁平。断面が稜状。1個縁が峰状。他の個縁は稜で、軸直交方向の擦痕(調整痕)	E6d7、II層	—	PL24 一部残存
	15	石鉢	5.4	4.7	1.0	(34.1)	粘板岩	扁平な不整形円形の礫を利用。両端表裏面に磨りによる溝。溝周辺に作製時の擦痕	E6c7、I B層	—	PL24 一部欠損
	16	敲石・磨石	4.4	4.4	3.6	91.3	花崗岩	球形の礫を利用。上下面に擦痕があり、磨石として使用か。上面の周縁に敲打痕	北拉張区排土中	—	PL24 完存
	17	敲石	9.3	2.9	2.6	93.5	砂岩	断面三角形の棒状の礫を使用。両端に使用痕。一端は先端部近くの個縁に使用痕があり、円運動による敲打。他端の上下運動による敲打痕	南拉張区排土中	—	PL24 完存
	18	敲石	(9.9)	5.2	4.1	(266)	砂岩	断面三角形の棒状の礫を使用。端部に敲打痕	E6d7、II層	—	PL24 一部欠損
第61図	19	敲石	7.8	5.3	4.0	236.0	流紋岩か	楕円形の卵状。両端に上下運動による敲打痕	E6c7、I B層	—	PL25 完存 一部に赤色顔料付着
	20	敲石・凹石	(14.8)	7.0	5.5	(768)	砂岩	やや太い棒状の礫を使用。一端に敲打痕。一面に凹みが2所	E6b7、I B層	—	PL25 一部欠損
	21	石礫	(3.0)	1.4	0.6	(1.8)	頁岩	凸基有茎礫。丁寧な調整で、厚みがあるものの整った形状。先端部に小さな欠損。使用による衝撃剥離痕か	E6b8、第1次確認調査埋土中	—	PL25 一部欠損
	22	石礫	(2.0)	0.9	0.3	(0.4)	メノウ	小型で細身の凸基有茎礫。丁寧な調整で整った形状。基の一部を欠損	E6e8、II層	—	PL25 一部欠損
	23	石礫未成品	2.5	1.4	0.8	2.2	メノウ	一部に自然面が残る。基部付近が厚いまま。形状も整わないため調整未了と判断。尖基礫を志向か	E6b8、第1次確認調査埋土中	—	PL25 一部欠損

2 第14トレンチ (第62図)

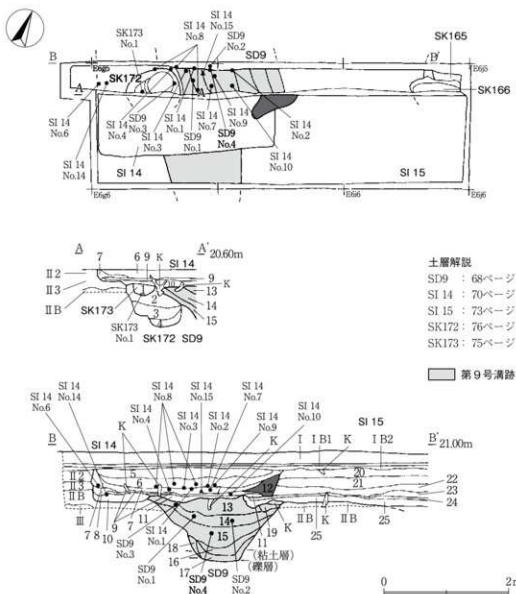
(1) 調査概要

第14トレンチは、第2次調査時にE6d5区からE6j5区まで、長さ13m、幅2mの東西に長く設定して調査し、その結果、竪穴住居跡2軒(第14・15号竪穴住居跡)等を確認した経緯がある。しかし、第9号溝跡の検証が進むにつれ、古代の住居跡との重複関係を確認しておく必要性が生じたため、再発掘を行ったものである。

再発掘は、第9号溝跡が所在すると推定されるE6g5区からE6i5区まで、長さ6m、幅2mを対象とした。調査を進める中で、第14号竪穴住居跡の西壁を確実に捉えるため、E6f5区の0.5m四方を拡張し、最終的に今次調査での第14トレンチの面積は、12.25㎡となった。

第Ⅱ2層上面での遺構確認に努め、サブトレンチは北壁に沿って幅50cmで掘削している。このサブトレンチは第Ⅲ層上面まで掘ることを基本とした。

調査後は目印としてトレンチ全体に山砂を薄く撒き、掘り上げた土をかけて埋め戻している。



第62図 第14トレンチ実測図

(2) 遺構と遺物

A 遺構とそれに伴う遺物

①弥生時代

(i) 土坑

第165号土坑 (SK 165, 第62・63図)

位置 E 6 i 5区に位置する。第Ⅲ層上面及び北壁のセクションで確認できた。

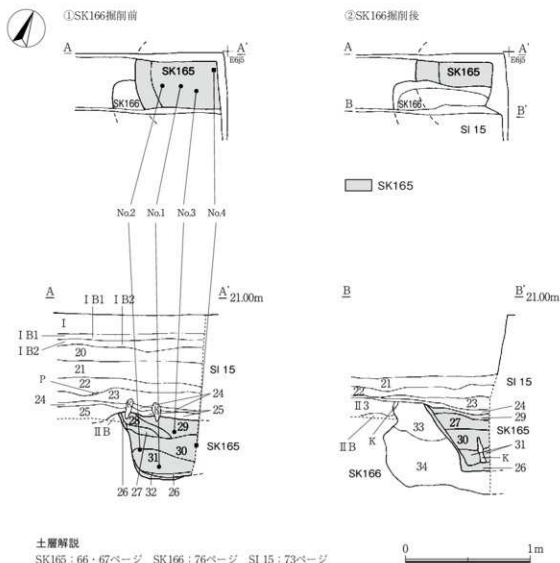
規模と形状 平面は楕円形を指向すると考えられるが、大部分が調査区外に延びるため不明である。確認できる深さは50cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。壁にはやや薄く、底面には3～7cm程度とやや厚く、粘土が貼られている。

重複関係 第15号竪穴住居跡に切られ、第166号土坑を切っている。

土層 7層が確認でき、人為堆積であるが、最下層の第32層は自然堆積の可能性がある。第26層は壁及び底面に貼られた粘土である。

土層解説 (第63図)

26 褐色 (10Y R 4/4) 黄褐色～灰黄褐色粘土中ブロック多量, 黄褐色～灰黄褐色粘土小ブロック多量, 部分的に灰白色粘土少量, 締まり強, 粘性極強

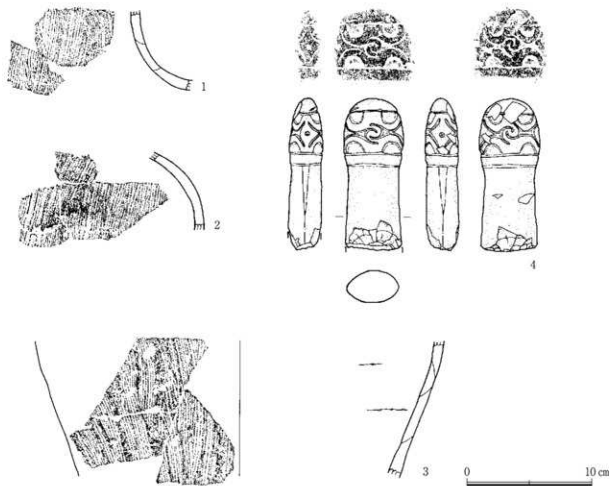


第63図 第165・166号土坑実測図

- 27 黒褐色 (10Y R 2/2) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, N t - S 極少量, 締まり弱, 粘性強
- 28 暗褐色 (10Y R 3/4) ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック極少量, 灰色粘土中ブロック極少量, N t - I 極少量, N t - S 極少量, 締まり弱, 粘性やや強
- 29 黒褐色 (10Y R 2/3) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, N t - I 極少量, N t - S 極少量, 締まりやや弱, 粘性やや強
- 30 におい黄褐色 (10Y R 4/3) ローム中ブロック多量, ローム小ブロック多量, ローム粒子多量, N t - I 極少量, N t - S 極少量, 締まり弱, 粘性強
- 31 黒褐色 (10Y R 2/3) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, N t - I 極少量, N t - S 極少量, 締まり弱, 粘性強
- 32 黒褐色 (10Y R 2/2) ローム粒子少量, ローム中ブロック極少量, 締まり極弱, 粘性強

遺物 土器等51点, 石器等7点, 骨片1点が出土している。うち弥生土器3点(壺), 石製品1点(石剣)を掲載する(第64図, 第12表)。

所見 出土遺物から, 弥生時代中期の所産と考えられる。状況から, 遺体を骨化した一次葬墓の可能性がある。



第64図 第165号土坑出土遺物実測図

第12表 第165号土坑出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径・器高・底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第64図 1	弥生土器	壺	頸部5%以下	— —	外反、内傾。外面縦位と斜位の条痕文。内面ナデ	メノウ粒中量、石英粒・チャート粒・雲母細粒微量	普通、焼けムラ	サンドイッチ状。内外面褐色。内部褐色	覆土下層	2片	PL25 (No 2, 3と同一個体か)
2	弥生土器	壺	胴部上5%以下	— —	内彎、内傾。外面縦位と斜位の条痕文。内面ナデ	メノウ粒中量、石英粒・チャート粒・雲母細粒微量	普通、焼けムラ	サンドイッチ状。内外面にふい褐色。内部褐色	覆土中層	3片	PL25 (No 1, 3と同一個体か)
3	弥生土器	壺	胴部5%以下	(10.9) —	内彎、内傾。外面縦位と斜位の条痕文。内面ナデ	メノウ粒中量、石英粒・チャート粒・雲母細粒微量	普通、焼けムラ	サンドイッチ状。内外面にふい褐色。内部褐色	覆土上層	3片	PL25 (No 1, 2と同一個体か)

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第64図 4	石剣	(12.2)	(4.7)	(2.7)	(146.4)	白色凝灰岩	石剣頭部から身。頭部断面楕円形、両面に雲形文を彫刻。剣身断面楕円形。丁寧な研磨	覆土中層	—	PL25 一部残存

(ii) 溝跡

第9号溝跡 (SD9, 第49・62・66図)

位置 第4トレンチのE6h8区, E6i8区, 第14トレンチのE6g5区, E6h5区に位置しており、本項でまとめて掲載する。第II 2層上面及び北壁のセクションで確認できた。

規模と形状 確認できる最大幅は2.35m, 深さ1.03m, 走向はN-42°-Wで断面V字形の溝である。掘り込みは粘土層を貫いてその下の礫層まで達し、ここで湧水する。底面の幅は53cmである。

重複関係 第14・15号堅穴住居跡, 第172号土坑に切られ, 第153号土坑を切っている。

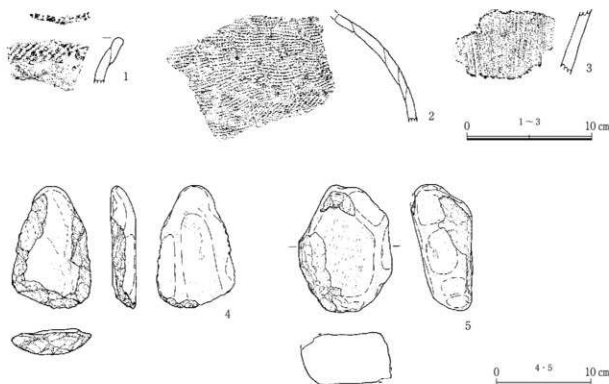
土層 7層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 13 褐色 (7.5YR 4/4) ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性中
 14 褐色 (7.5YR 4/4) ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性中
 15 褐色 (7.5YR 4/3) ローム小ブロック中量, ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性中
 16 暗褐色 (7.5YR 3/4) ローム粒子中量, ローム小ブロック極少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性やや強
 17 暗褐色 (7.5YR 3/3) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性やや強
 18 暗褐色 (7.5YR 3/4) ローム小ブロック少量, ローム粒子極少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性やや強
 19 にふい褐色 (7.5YR 5/4) ローム粒子少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性中

遺物 土器等91点, 石器等19点, 骨片7点が出土している。うち弥生土器3点 (壺), 石器・石製品2点 (筒状石器, 台石) を掲載する (第65図, 第13表)。

所見 これまでの確認調査において, 第4・18・19・25トレンチで確認されてきた溝跡で, 平安時代の堅穴住居跡・中世の溝跡に切られ, 再葬墓を切っている重複関係が確認されて, これまで出土した中・下層の遺物の中で最も新しいものは十王台式の土器片であった。しかし, その時期を考察するうえで平安時代の堅穴住居跡との重複関係をセクションで押さえておくことが必要との考えから, 今次調査での再発掘を実施したものである。平安時代の堅穴住居跡より古いことが改めて層位的に確認できた。時期については, 出土遺物から弥生時代後期の所産とする見解は変わらない。また, レーダー探査による走向確認については, 第3章のとおりである。



第65図 第9号溝跡出土遺物実測図

第13表 第9号溝跡出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第65図 1	弥生土器	甕	口縁～ 頸部、 5%以下	— — —	外反外傾。口縁端部に刻み口縁部をやや肥厚させ、外面縄文。頸部無文。内面ナデ	泥岩礫・メノウ粒少量、石英礫・チャート礫・泥岩粒・雲母細粒微量	やや不良。焼き甘い	サンドイッチ状。外面黄褐色内面にふい橙色。内部褐灰色	覆土中層	—	PL25
2	弥生土器	甕	肩部、 5%以下	— — —	内彎内傾。外面縄文。内面ナデ。頸部の幅積み部分で焼成時破損か	メノウ礫少量、石英礫・泥岩粒・雲母細粒微量	良好	サンドイッチ状。内面にふい灰黄褐色。外面にふい黄褐色内部褐灰色	覆土中層	—	PL25
3	弥生土器	甕	胴下半部、 5%以下	— — —	わずかに外反、外傾。外面密な条痕文。内面ナデ	メノウ粒少量、チャート礫・石英粒・雲母細粒微量	良好	サンドイッチ状。内面にふい灰黄褐色。外面にふい黄褐色内部褐灰色	覆土中層	—	PL25

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第65図 4	甕状石器	12.9	8.4	2.7	348	砂岩	扁平で縦長な三角形の礫を利用。3辺を片面から酒漉し。甕状に成形	覆土下層	—	PL26 完存
5	台石	13.4	(98)	6.4	(1084)	砂岩	不整形の礫を利用。表面と裏面の平らな面に使用痕	覆土中	—	PL26 一部欠損

②平安時代

(i) 竪穴住居跡

第14号竪穴住居跡 (S I 14, 第62・66図)

位置 E 6 g 5区, E 6 h 5区に位置する。第II 2層上面及び北壁のセクションで確認できた。

規模と形状 北部が調査区外に延びるため幅は不明だが、平面は主軸長290m, 主軸方向がN-69°-Eの隅丸長方形である。今回の調査で確認できた深さは52cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

重複関係 第15号竪穴住居跡, 第172・173号土坑, 第9号溝跡を切っている。

土層 8層が確認でき, うち第5～8層はレンズ状の自然堆積である。第9層は貼床材, 第12層は竈材, 第10・11層は床下の埋土である。

土層解説 (第62・66図)

5 暗褐色 (7.5YR 3/4)	ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量, N t-S極少量, 締まり強, 粘性中
6 暗褐色 (7.5YR 3/3)	ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量, N t-S極少量, 締まり強, 粘性中
7 暗褐色 (7.5YR 3/4)	ローム粒子極少量, N t-S極少量, 締まり強, 粘性中
8 黒褐色 (7.5YR 3/2)	ローム粒子極少量, 締まりやや強, 粘性中
9 褐色 (7.5YR 4/3)	ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, N t-I極少量, N t-S極少量, 締まり強, 粘性中
10 褐色 (7.5YR 4/3)	ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量, N t-S極少量, 締まり強, 粘性中
11 暗褐色 (7.5YR 3/4)	ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, N t-S極少量, 締まり強, 粘性中
12 褐色 (7.5YR 4/3)	ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 黄色粘土小ブロック少量, 焼土粒子少量, 締まりやや強, 粘性中

床 セクションで貼床が確認できる。

竈 東壁南寄りに砂質粘土で付設されている。4層が確認できる。

竈土層解説 (第66図)

36 灰褐色 (5YR 4/2)	灰黄色～赤色砂質粘土中ブロック多量, 灰黄色～赤色砂質粘土大ブロック中量, 灰黄色～赤色砂質粘土小ブロック中量, 灰黄色～赤色砂質粘土粒子少量, ローム粒子極少量, 炭化物粒子極少量, N t-S極少量, 締まり極強, 粘性弱。竈材が落ち込んだ層
37 暗褐色 (10YR 3/3)	褐色砂質粘土粒子中量, 褐色砂質粘土中ブロック少量, 褐色砂質粘土小ブロック少量, 炭化物粒子極少量, ローム粒子極少量, N t-S極少量, 締まり強, 粘性中
38 暗赤褐色 (5YR 3/3)	赤色砂質粘土小ブロック中量, 赤色粘土粒子中量, ローム粒子中量, 赤色砂質粘土中ブロック極少量, 炭化物粒子極少量, N t-S極少量, 締まりやや強, 粘性弱
39 灰黄褐色 (10YR 6/2)	一部被熱赤変した灰黄褐色砂質粘土大ブロック, 締まり極強, 粘性弱

柱穴 確認していない。

遺物 土器等156点, 石器等6点, 鉄製品2点が出土している。うち弥生土器2点 (壺), 土師器11点 (坏6, 甕3, 高台付坏2), 灰釉陶器1点 (瓶), 鉄製品1点 (不明) を掲載する (第67図, 第14表)。

所見 第2次調査で調査されている住居跡である。出土遺物から, 平安時代10世紀後半の所産と考えられる。

第14表 第14号壁穴住居跡出土遺物観察表

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第67図 1	土師器	坏	体～底 部、30 %	[11.6] 29 [7.0]	平底。体部内彎。外傾。外面 ロクロナデ。内面ミガキ・黒 色処理。底面回転糸切り	石英粒・赤色 砂粒・白色砂 粒・泥岩粒・ 雲母細粒微 量	良好	外面にふい黄 褐色。内面黒 色	E6g5 サブト レ。覆土 下層	3片	PL26
2	土師器	坏	口縁～ 底部、 10%	[14.2] 4.7 [8.2]	平底。体部内彎。大きく外傾。 外面ロクロナデ。内面ミガキ・ 黒色処理。底面手持ちヘラケ ズリ	石英粒・泥岩 粒・雲母細粒・ 海綿骨針微 量	普通。 焼けム ラ	外面灰黄褐色。 内面黒色	E6g5 サブト レ。覆土 下層	2片	PL26
3	土師器	坏	体～底 部、5 %	— (3.3) [6.0]	平底。体部内彎。外傾。外面 ロクロナデ。内面ミガキ・黒 色処理。底面手持ちヘラケ ズリ	精良。石英粒・ 泥岩粒・雲母 細粒・海綿骨 針微量	普通	外面灰黄色。 内面黒色	E6g5 サブト レ。覆土 下層	—	PL26片 植物片圧 痕
4	土師器	坏	体～底 部、5 %	— (3.0) [6.2]	平底。体部内彎。外傾。外面 ロクロナデ。内面ミガキ。底 面回転糸切り	メノウ粒少 量。石英礫・ チャート礫・ 石英粒・雲母 細粒・海綿骨 針微量	普通。 二次焼 成	内外面橙色。 内面黒色処理 が覗色か	E6g5 サブト レ。床 面直上	—	PL26
5	土師器	坏	口縁～ 体部、 5%	— (1.6) [6.1]	平底。体部大きく外傾。内彎。 外面ヘラケズリ。内面ミガキ・ 黒色処理。底面回転糸切り後 ヘラケズリ	石英粒・泥岩 粒・海綿骨針 微量	普通	外面灰黄褐色。 内面黒色	E6h5 サブト レ。覆土 中	2片	PL26
6	土師器	坏	体～底 部、5 %以下	— (1.6) [6.2]	平底。体部内彎。大きく外傾。 内外面ロクロナデ。底部回転 ヘラ切り	精良。メノウ 粒・石英粒・ 雲母細粒・海 綿骨針微量	良好	内外面にふい 黄褐色	E6g5 サブト レ。西壁 際。覆土 下層	—	PL26
7	土師器	高台付 坏	体～底 部、5 %以下	— (2.0)	平底から胴部内彎。大きく外 傾。底面に高台剥離痕。外面 ロクロナデ。内面ミガキ・黒 色処理。	メノウ礫・メ ノウ粒・石英 粒・赤色砂粒・ 泥岩粒・雲母 細粒微量	良好。 二次焼 成	外面にふい黄 褐色。内面黒 色	E6g5 サブト レ。床 面直上	—	PL26
8	土師器	高台付 坏	体～底 部、15 %	— (3.7)	平底から胴部大きく外傾。内 彎。底面回転糸切りに高台貼 り付け痕。外面ロクロナデ。 内面ミガキ・黒色処理。破損 後に一部二次焼成	赤色砂粒・白 色砂粒・泥岩 粒・雲母細粒 微量	良好	外面にふい橙 色。内面黒色	E6g5 サブト レ。覆土 下層	2片	PL26
9	土師器	甕	口縁～ 胴部、 5%以下	[13.0] (3.5)	胴部内彎。内傾。頸部くの字 に屈曲。口縁部外傾。口縁端 部つまみ上げ。胴部外面ヘラ ケズリ。内面ナデ。頸部と口 縁部の内外面は丁寧な横ナデ	石英粒・赤色 砂粒・泥岩 粒・雲母細粒 微量	良好	内外面明赤褐 色	E6g5 サブト レ。覆土 下層	—	PL26
10	土師器	甕	胴部、 15%	— (17.2)	内彎。外傾。外面ヘラケズリ。 上部縦方向の指ナデ。内面ヘ ラナデ上部指ナデ	赤色砂粒・白 色砂粒・泥岩 粒・雲母細粒 微量	良好。 二次焼 成	内外面にふい 黄褐色	E6h5 サブト レ。カマ ド内	2片	PL26
11	土師器	甕か	胴～底 部、5 %以下	— (2.6) [8.0]	平底。胴部大きく外傾。底面 と外面ヘラケズリ。内面ナデ	石英礫・泥岩 粒・石英粒・ 雲母細粒微 量	普通	外面褐灰色。 内面にふい黄 褐色	E6h5 サブト レ。カマ ド左 軸上	—	PL26
12	灰輪 陶器	瓶	口縁 部、5 %以下	—	大きく外傾。端部を上方向に まみ上げ。内外面ロクロナデ。 脇輪	精良。石英粒 微量	良好	器胎灰白色。 袖オリーブ灰 色	E6g5 サブト レ。覆土 中	—	PL26
13	弥生 土器	壺	胴下 部、5 %以下	—	反反気味。外傾。外面短条痕 (1単位3条)。内面ナデ	石英粒多量。 メノウ粒・黒 色砂粒・雲母 細粒・海綿骨 針微量	良好	内外面灰褐色	覆土中	—	PL26 混入

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第67図	14	弥生土器	胴-底部, 5%以下	— (29)	底面剥離。胴部外傾。外面磨消縄文によるヒトデ状文。内面ナデ	メノウ粒・石英粒少量、雲母細粒・海綿骨針微量	普通。焼けムラ	内外面にふい黄褐色	E6g5サブトレ西壁際、覆土中	—	PL26 外面赤色顔料付着。炭化物わずかに付着

挿図番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材料	形態・技法	出土状況	接合状況	備考	
第67図	15	不明鉄製品	(34)	(0.6)	(0.3)	(4.2)	鉄	先端が細くなる棒状。断面が長方形。錆が厚く覆っている。釘か	E6g5サブトレ、床面直上	—	PL26 一部残存

第15号竪穴住居跡（S I 15, 第62・63・66図）

位置 E6h5区, E6i5区に位置する。第Ⅱ2層上面及び北壁のセクションで確認できた。

規模と形状 第2・3次調査において、平面は主軸長4.57m, 幅3.15m, 主軸方向がN-67°Eの隅丸長方形と確認した。今回の調査で確認できた深さは59cmで、壁は外傾して立ち上がっている。セクションでは、西壁下に壁溝が確認できる。

重複関係 第14号竪穴住居跡に切られ、第165・166号土坑、第9号溝跡を切っている。

土層 7層が確認でき、うち第20～23層は覆土で、レンズ状の自然堆積である。第24層は貼床材、第25・35層は床下の埋土である。

土層解説（第62・63・66図）

- | | | |
|----|----------------|---|
| 20 | 暗褐色 (7.5YR3/4) | ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, N t-S少量, 締まり中, 粘性中 |
| 21 | 暗褐色 (7.5YR3/4) | ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性中 |
| 22 | 暗褐色 (7.5YR3/3) | ローム粒子少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性中 |
| 23 | 暗褐色 (7.5YR3/4) | ローム粒子少量, 焼土粒子少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性中 |
| 24 | 褐色 (7.5YR4/4) | ローム小ブロック中量, ローム粒子中量, 締まりやや強, 粘性やや強 |
| 25 | 暗褐色 (7.5YR3/4) | ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量, N t-S極少量, 締まり中, 粘性中 |
| 35 | 黒褐色 (10YR2/2) | ローム粒子極少量, N t-S極少量, N t-I極少量, 締まり強, 粘性中 |

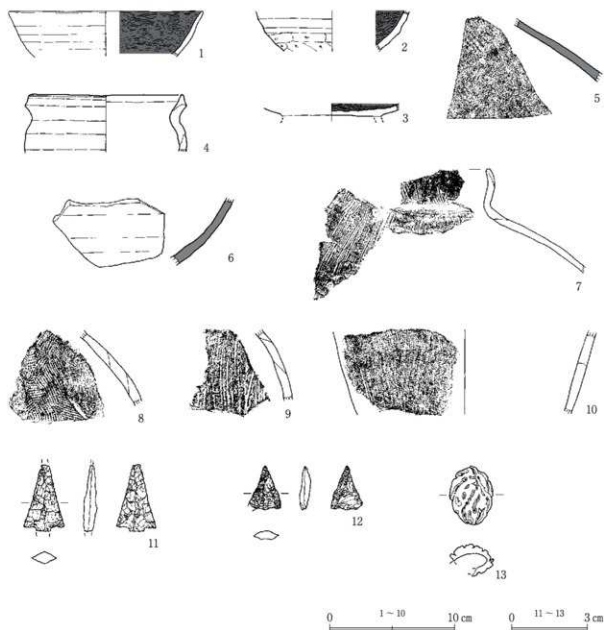
床 セクションで貼床が確認できる。

竈 第2・3次調査で、東壁やや北寄りに黄色砂質粘土で付設されていることを確認している。

柱穴 確認していない。

遺物 土器等124点, 石器等5点, 炭化種実1点が出土している。うち弥生土器4点(壺), 土師器4点(坏2, 高台付坏1, 小型甕1), 須恵器2点(大甕, 壺), 石製品2点(石鏃), 炭化種実1点を掲載する(第68図, 第15表)。炭化種実には、バラ科モモ属の核と考えられる。

所見 第2・3次調査で調査されている住居跡である。出土遺物から、平安時代9世紀後半の所産と考えられる。



第68図 第15号竪穴住居跡出土遺物実測図

第15表 第15号竪穴住居跡出土遺物観察表

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第68図 1	土師器	環	口縁～ 体部 10%	[15.2] (3.6) —	内埴、外埴。口縁端部でわずかに外反。外面ロクロナデ。内面ミガキ・黒色処理	石英粒・チャート粒少量	良好	外面にふい黄橙色。内面黒色	E6j5。 覆土中	2片	PL27
2	土師器	環	体部 5%以下	(3.3) —	内埴、外埴。外面上半ロクロナデ。下半ヘラズリ。内面ミガキ・黒色処理	メノウ粒・赤色砂粒・石英粒少量。海綿骨針微量	良好	サンドイッチ状。外面灰褐色。内面黒色。内部にふい橙色	E6j5。 床面直上	—	PL27
3	土師器	高台付環	底部。 5%以下	(1.0) —	平底から体部大きく外埴。内埴。底面に高台洞離痕。外面ロクロナデ。内面ミガキ・黒色処理	石英粒・チャート粒少量。雲母細粒微量	良好	外面にふい黄橙色。内面黒色	E6j5。 覆土中	—	PL27

挿入番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第68図 4	土師器	小型甕	口縁～ 体部、 5%以下	[12.0] (4.5)	内脣、内傾する体部から頸部 でくの字に屈曲し口縁部で外 傾。口縁端部つまみ上げ。体 部内面ナデ、外面輪積み重を そのまま残す。口縁～頸部の 内外面ヨコナデ	石英粒・泥岩 粒・雲母細粒 微量	良好	外面にふい・橙 色、内面黒色	E6j5、 覆土中	—	PL27
5	須恵器	大甕	胴部、 5%以下	—	わずかに内脣、大きく内傾。 外面並行タタキ、内面あて具 痕(無文)。外面自然釉付着	雲母粒少量、 石英細粒・石 英塵・泥岩塵 微量	良好	内外面灰褐色	E6j5、 床面直上	—	PL27
6	須恵器	壺	胴部下 半、5 %以下	—	内脣・外傾。内外面クロコ ナデ	石英粒・海綿 骨針微量	還元炎 焼成	内外面灰褐色	E6j5、 床面直上	—	PL27 Ⅱの 147No.51 と同一個 体
7	弥生 土器	壺	口縁～ 胴部、 5%以下	—	胴部内脣、大きく内傾。頸部 で屈曲し、口縁部内脣・外傾。 外面条痕文、頸部にヨコナデ、 内面ナデ	メノウ粒・石 英粒少量、チ ャート粒・雲 母細粒・砂塵 微量	良好	サンドイッチ 状。内外面に ふい黄褐色、 内部褐色	E6h5・ j5、下 層、床 面直上	3片	PL27 混入
8	弥生 土器	壺	胴部、 5%以下	—	内脣、大きく内傾。外面磨消 滅文による渦巻き状文か。内 面ナデ	メノウ粒少 量、チャート 粒・石英粒微 量	良好	内外面にふい 黄褐色	E6j5、 床面直上	—	PL27
9	弥生 土器	壺	胴部上 半、5 %以下	—	内脣、内傾。外面縦位の条痕 文。内面ナデ	メノウ粒少 量、泥岩粒・ 雲母細粒微 量	良好	サンドイッチ 状。内外面に ふい黄褐色、 内部褐色	E6j5、 床面直上	—	PL27 混入
10	弥生 土器	壺	胴部下 半、5 %以下	(6.6)	外傾。外面斜位・縦位の条痕 文。内面風化により不明瞭。 ヘラナデか	メノウ粒・砂 粒少量、雲母 細粒・石英粒・ 泥岩粒微量	やや不 良。焼 き甘い	サンドイッチ 状。内外面に ふい黄褐色、 内部褐色	E6j5、 床面直上	—	PL27

挿入番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第68図 11	石畿	(26)	1.5	0.5	(1.1)	珪質頁岩	凹基有茎畿。丁寧な調整により整った形。 先端と茎を欠く	覆土中	—	PL27 一部欠損
12	石畿	1.7	(1.2)	0.4	(0.6)	メノウ	平基無茎畿。軸線と側面線は彎曲。一部に 自然面と素材剥片時の剥離面を残す。調整 は概ね丁寧	覆土中	—	PL27 一部欠損

挿入番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	形態・特徴	出土状況	接合状況	備考
第68図 13	炭化種実 (七七)	(2.3)	1.8	(1.3)	(1.4)	小型の桃核。表裏面に特有の凹凸	覆土中	—	PL27 一部欠損

(ii) 土坑

第173号土坑 (SK173, 第62図)

位置 E6g5区に位置する。サブレンチのセクションで確認できた。

規模と形状 平面は不明である。セクションで確認できる上端の幅は35cm、深さは18cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

重複関係 第14号堅穴住居跡に切られ、第172号土坑を切っている。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 (7.5YR3/4) ローム粒子少量、Nt-S極少量、締まり中、粘性中

遺物 土器等2点が出土している。うち土師器1点(坏)を掲載する(第69図、第16表)。

所見 重複関係から平安時代の第14号竪穴住居跡以前の所産と考えられ、底面から出土した土師器から9世紀後半から10世紀前半の所産と考えられる。



第69図 第173号土坑出土遺物実測図

第16表 第173号土坑出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第69図	1	土師器	坏	口縁～底底部、5%	[11.7] 3.2 [6.8] 平底。体部内彎、大きく外傾。外面ロクロナデ、内面ミガキ。黒色処理。底面ヘラケズリ	メノウ粒・石英粒・白色砂粒少量、チャート種・雲母・海綿骨針微量	やや不良。焼き甘い。一部二次焼成	サンドイッチ状。外面褐色、内面黒色。内部にふい黄褐色	底面密着	-	PL27

③時期不明

(i) 土坑

第166号土坑 (SK166, 第62・63図)

位置 E6i5区に位置する。第Ⅲ層上面及び北壁のセクションで確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に伸びるが、平面は方形を志向し、確認できる南北幅は25cm、東西幅は75cmである。

重複関係 第15号竪穴住居跡、第165号土坑に切られる。

土層 2層が確認でき、ブロックを含む人為堆積である。

土層解説 (第63図)

- 33 黒褐色 (10YR2/3) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、Nt-I極少量、Nt-S極少量、締まり中、粘性やや強
- 34 暗褐色 (10YR3/3) ローム小ブロック中量、ローム粒子中量、ローム中ブロック極少量、粘土小ブロック極少量、締まり中、粘性強

遺物 出土していない。

所見 重複関係から弥生時代以前の所産と考えられるが、詳細は不明である。

第172号土坑 (SK172, 第62図)

位置 E6g5区に位置する。第Ⅲ層上面で確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に延びるが、平面は楕円形を志向すると考えられる。確認できる深さは65cmで、底面は径40cm前後の円形となり皿状を呈する。壁は外傾して立ち上がり、確認面からの深さ50cm付近で東壁だけは段状を呈する。

重複関係 第14号竪穴住居跡、第173号土坑、第9号溝跡に切られる。

土層 3層が確認でき、レンズ状の自然堆積である。

土層解説

- 2 暗褐色 (7.5Y R 3/3) ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量、Nt-S極少量、締まり中、粘性中
- 3 暗褐色 (7.5Y R 3/3) ローム小ブロック中量、ローム粒子中量、締まり中、粘性やや強
- 4 極暗褐色 (7.5Y R 2/3) ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、締まり中、粘性強

遺物 出土していない。

所見 重複関係から弥生時代以前の所産と考えられるが、詳細は不明である。

B 遺構外出土遺物

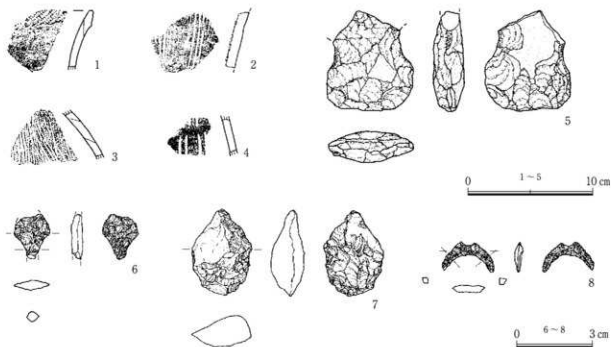
遺構外で確認された遺物について解説する。(第70図、第17表)

遺物 土器等271点、石器等40点、骨片20点が出土している。うち弥生土器4点(壺)、石器・石製品4点(打製石斧、石錐、石鏃、異形石器)を掲載する。

(3) 所見

今次調査の目標の一つであった、第9号溝跡と第14・15号竪穴住居跡の重複関係をセクションで押さえることができた。これによって、第9号溝跡は平安時代の竪穴住居跡に切られる状況が確定した。これまでの調査での出土遺物やレーダー探査で押さえた走向など、第9号溝跡の検証材料は揃えることができた。

なお、第15号竪穴住居跡の下から確認された第165号土坑は、壁と底面に粘土が貼られているが、出土遺物から弥生時代中期の所産と考えられ、再葬墓とはほぼ同時期となるため注意すべき遺構である。



第70図 第14トレンチ遺構外出土遺物実測図

第17表 第14トレンチ遺構外出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径・器高・底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第70図 1	弥生土器	壺	口縁部、5%以下	—	外反・外傾。口縁部をわずかに肥厚させ、外面縄文。頸部外面無文。粗いミガキ。内面ナデ	メノウ粒少量、石英粒・泥岩粒・雲母細粒微量	普通、焼けムラ	内外面黒褐色、にぶい褐色	E6h5、II層	—	PL27
2	弥生土器	壺	胴部下平、5%以下	—	やや外反・外傾。外面縦位の条痕文(3条1単位)。内面ナデか、内面風化により剥離	メノウ粒・石英粒少量、赤褐色砂粒・雲母細粒微量	普通、焼けムラ	外面にぶい黄褐色・褐灰色、内面にぶい黄褐色	排土中	—	PL27
3	弥生土器	壺	胴部上平、5%以下	—	内彎、内傾。外面縦位と斜位の条痕文。内面ナデ	メノウ粒・石英粒・チャート粒・雲母細粒微量	良好	サンドイッチ状。内外面にぶい黄褐色、内部黒褐色	E6j5、II層	—	PL27
4	弥生土器	壺	胴部、5%以下	—	内彎、内傾。縦位の短条痕文(2条1単位)。内面ナデ	メノウ粒・石英粒少量、チャート粒・雲母細粒・海綿骨針微量	普通、焼けムラ	外面にぶい黄褐色・褐灰色、内面褐灰色	排土中	—	PL27

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第70図 5	打製石斧	(7.8)	(6.8)	(2.5)	(149.2)	砂岩	扁平な體を分削形に整形。刃部両面調整剥離。くびれ部分は敲打による整形。使用による磨耗	排土中	—	PL27 一部欠損
6	石錐	(1.8)	1.4	0.5	(0.9)	メノウ	透明感のある良質メノウを利用。頸部の一部と錐部先端を欠損。頸部は薄く、錐部は断面変形	第2次確認調査埋土中	—	PL27 一部欠損
7	石錐未成品	3.4	2.4	1.3	8.6	メノウ	分厚く調整も粗い。潜在的な割れの入った素材を利用したため調整不良で製作の比較的早い段階で断念と判断。円基錐を志向中	第3次確認調査埋土中	—	PL28 完存
8	異形石器	2.0	1.1	0.3	0.4	メノウ	良質の赤メノウを利用。全面を押し剥離調整。全体は彎曲し両端は尖る。彎曲の外側に2個の突起を作出。左右わずかに非対称	E6j5、排土中	—	PL27 完存

3 第22トレンチ (第71・72図)

(1) 調査概要

C7b0区からC9b4区まで、長さ30m、幅2mの南北に長いトレンチを設定した。調査区域の南西端に設定したトレンチで、主目的は当遺跡西側にある台地斜面下部の状況を把握することである。

しかし、トレンチ全面を調査する必要はないと判断したため、そのうち実際に調査したのはC7b0区からC8b4区にまたがる1・2区(第71図)の長さ10m、C8b0区からC9b4区にまたがる5・6区(第72図)の長さ10mの合計20mである。

また、それぞれ西壁に沿って50cm幅のサブトレンチを入れてセクション及び下層の遺構を確認している。ただし、第22トレンチが設定されたのは、他のトレンチよりも約0.4～0.6mほど高い水田であり、第1B層下には他のトレンチで確認されたものと異なる以下の土層が堆積している。遺構確認は主に第1・2層上面で行い、必要に応じて確認面を下げ、あるいはサブトレンチを掘削するなどしている。

土層解説 (第71・72図)

- | | |
|------------------|---|
| 1 黒褐色 (5YR2/1) | ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、大礫少量、小礫少量、締まり中、粘性やや弱 |
| 2 褐灰色 (7.5YR4/1) | ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、大礫少量、小礫少量、締まり中、粘性中 |
| 3 褐灰色 (7.5YR4/1) | 大礫少量、小礫少量、ローム小ブロック極少量、ローム粒子極少量、締まり中、粘性中 |
| 4 褐灰色 (7.5YR2/2) | ローム粒子少量、締まり中、粘性中 |
| 5 黒褐色 (7.5YR2/2) | ローム粒子少量、締まり中、粘性やや強 |
| 6 黒褐色 (7.5YR2/2) | ローム粒子少量、締まりやや強、粘性強 |

なお、第2・3層を中心として各層に混じる大小の自然礫の多くは、久慈川では普遍的に見られる八溝系砂岩である。これらの礫は、崩落等の自然堆積と見るには大きすぎず小さすぎず粒が揃っていて、混じる層に偏りも見られるため、人為堆積の可能性も考えられる。しかし、平安時代の遺構は第2層上面で確認されている。

調査後は目印としてトレンチ全体に山砂を薄く撒き、掘り上げた土をかけて埋め戻している。

(2) 遺構と遺物

A 遺構とそれに伴う遺物

①平安時代

(i) 竪穴住居跡

第25号竪穴住居跡 (S125, 第71図)

位置 C7b0区からC8b2区に位置する。第2層上面及び西壁のセクションで確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に延びるが、平面は幅4.5m以上、主軸方向がN-71°-Eの方形または長方形と考えられる。

重複関係 第2号掘立柱建物跡に切られている。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

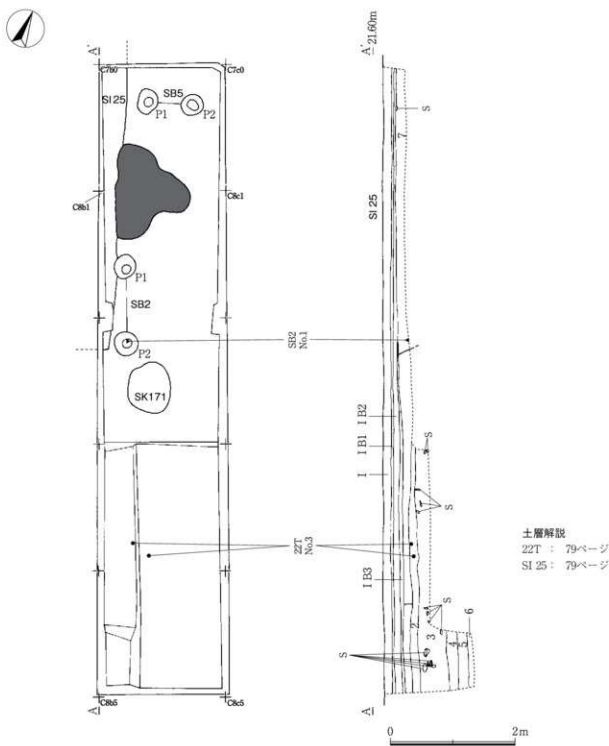
土層解説

- | | |
|-----------------|------------------------------------|
| 7 黒褐色 (10YR3/1) | ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、焼土粒子少量、締まり中、粘性中 |
|-----------------|------------------------------------|

床 確認していない。竈 東壁に黄色砂質粘土で付設されている。柱穴 確認していない。

遺物 出土していない。

所見 形状から、平安時代の所産と考えられる。



第71図 第22トレンチ1・2区実測図

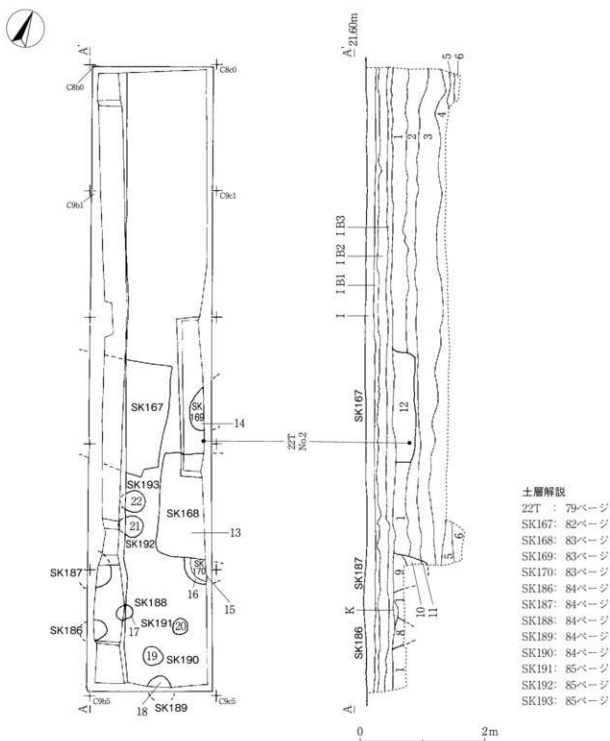
②中世

(i) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (SB2, 第71図)

位置 C8b1区, C8b2区に位置する。第2層上面で確認できた。

規模と構造 西部が調査区外に延びると考えられ、確認された桁行は1間である。桁行方向はN-24°-Wで、柱間寸法はP1-P2間が118cmである。



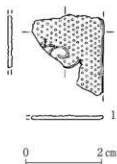
第72図 第22トレンチ5・6区実測図

重複関係 第25号竪穴住居跡を切っている。

柱穴 2箇所確認した。

P 1

規模と形状 平面は長軸40cm、短軸30cm、長軸方向がN-21°-Wの楕円形である。中央に円形で径13cmの柱痕がある。



P 2

規模と形状 平面は径38cmの円形である。中央に円形で径15cmの柱痕がある。

遺物 銅製品1点(不明)が出土しており、掲載する(第73図, 第18表)。

P 2柱痕の確認面からの出土である。

所見 形状及び出土遺物から、中世の所産と考えられる。

第73図 第2号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第18表 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

神図	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第73図	1	(21)	(19)	0.1	(0.5)	青銅	薄く平らな板状品。図右辺は直線的な端部で、全体は方形または長方形と推定される。他辺は破損。鑄造。表面に径0.5mmほどの珠文を互い違いに1cm角に8～9×8列と唐草文の一部かと思われる渦巻状の文様を鑄出す。裏面は平坦	P2柱痕 確認面	4片	PL28 一部残存

第5号掘立柱建物跡 (SB5, 第71図)

位置 C7b0区に位置する。第2層上面で確認できた。

規模と構造 北部が調査区外に延びると考えられ、確認された桁行は1間である。桁行方向はN-70°-Eで、柱間寸法はP1-P2間が70cmである。

柱穴 2箇所確認した。

P 1

規模と形状 平面は長軸40cm、短軸30cm、長軸方向がN-4°-Wの楕円形である。中央に円形で径14cmの柱痕がある。

P 2

規模と形状 平面は長軸38cm、短軸30cm、長軸方向がN-47°-Wの楕円形である。中央に楕円形で長軸15cm、短軸10cm、長軸方向N-45°-Wの柱痕がある。

遺物 出土していない。 **所見** 形状から、中世の所産と考えられる。

③時期不明

(i) 土坑

第167号土坑 (SK167, 第72図)

位置 C9b2区、C9b3区に位置する。第1層上面及び西壁のセクションで確認できた。

規模と形状 西部が調査区西側に延びるが、平面は、長軸180cm、短軸120cm以上、長軸方向がN-18°-Wの隅丸長方形を志向すると考えられる。深さは36cmで、底面は平坦で、壁はわずかに外傾して立ち上がっている。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説

12 黒褐色(5YR2/1) 大礫少量、小礫少量、ローム小ブロック少量、締まり中、粘性中

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。第168号土坑との類似性が認められる。

第168号土坑 (S K 168, 第72図)

位置 C 9 b 3区に位置する。第1層上面で確認できた。

規模と形状 東部が調査区東側に延びるが、平面は長軸165cm、短軸70cm以上、長軸方向がN-16°-Wの隅丸長方形を志向すると考えられる。

覆土平面解説

13 黒褐色(5Y R 2/1) 大礫少量、小礫少量、ローム小ブロック少量、締まり中、粘性中

重複関係 第170号土坑を切っている。

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。第167号土坑との類似性が認められる。

第169号土坑 (S K 169, 第72図)

位置 C 9 b 2区に位置する。サブトレンチ底面の第2層中で確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に延び、楕円形を志向すると考えられるが、詳細は不明である。

覆土平面解説

14 黒褐色(5Y R 2/1) ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、締まり弱、粘性中

遺物 出土していない。 所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第170号土坑 (S K 170, 第72図)

位置 C 9 b 3区、C 9 b 4区に位置する。第1層上面で確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に延び、楕円形を志向すると考えられるが、詳細は不明である。

覆土平面解説

15 暗褐色(7.5Y R 3/4) ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、締まり中、粘性中

16 暗褐色(7.5Y R 3/4) ローム粒子中量、締まり中、粘性中

重複関係 第168号土坑に切られる。

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第171号土坑 (S K 171, 第71図)

位置 C 8 b 2区に位置する。第2層上面で確認できた。

規模と形状 平面は、長軸80cm、短軸70cm、長軸方向がN-22°-Wの楕円形である。

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。付近の精査後に、乾燥のひび割れによって確認された経緯がある。

第186号土坑 (S K 186, 第72図)

位置 C 9 b 4区に位置する。第1層上面及び西壁のセクションで確認できた。

規模と形状 西部が区域外に延びるが、平面は径40cm前後の円形と考えられる。確認できる深さ

は18cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説

8 暗褐色(5YR3/3) ローム粒子少量, Ni-S極少量, 締まり中, 粘性やや強

遺物 出土していない。 所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第187号土坑 (SK187, 第72図)

位置 C9b3区, C9b4区に位置する。サブトレンチ底面の第2層上面及び西壁のセクションで確認できた。

規模と形状 西部が区域外に延びるが、平面は径50cm前後の円形と考えられる。確認できる深さは52cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

土層 3層が確認でき、自然堆積と考えられる。

土層解説

9 暗褐色(7.5YR3/3) ローム粒子少量, Ni-S極少量, 締まり中, 粘性中

10 褐色(7.5YR4/3) ローム粒子少量, 締まり中, 粘性中

11 褐色(7.5YR4/6) ローム粒子多量, 締まり中, 粘性強

遺物 出土していない。 所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第188号土坑 (SK188, 第72図)

位置 C9b4区に位置する。第1層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径25cmの円形である。

覆土平面解説

17 黒褐色(7.5YR3/3) ローム粒子中量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。 所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第189号土坑 (SK189, 第72図)

位置 C9b4区に位置する。第1層上面で確認できた。

規模と形状 南部が区域外に延びるが、平面は径40cm前後の円形と考えられる。

覆土平面解説

18 極暗褐色(7.5YR2/3) ローム粒子極少量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。 所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第190号土坑 (SK190, 第72図)

位置 C9b4区に位置する。第1層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径35cmの円形である。第186～193号土坑は、近くに所在し、形状も似通っているが、第190号土坑にだけ焼土粒子が混じる。

覆土平面解説

19 極暗褐色(7.5YR2/3) ローム粒子少量, 焼土粒子少量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため、時期・性格は不明である。

第191号土坑 (SK191, 第72図)

位置 C9b4区に位置する。第1層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径22～24cmの円形である。

覆土平面解説

20 極暗褐色 (7.5YR 2/3) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため, 時期・性格は不明である。

第192号土坑 (SK192, 第72図)

位置 C9b3区に位置する。第1層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径35cmの円形である。

覆土平面解説

21 極暗褐色 (7.5YR 2/3) ローム粒子少量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため, 時期・性格は不明である。

第193号土坑 (SK193, 第72図)

位置 C9b3区に位置する。第1層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径33cmの円形である。

覆土平面解説

22 黒褐色 (7.5YR 3/3) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため, 時期・性格は不明である。

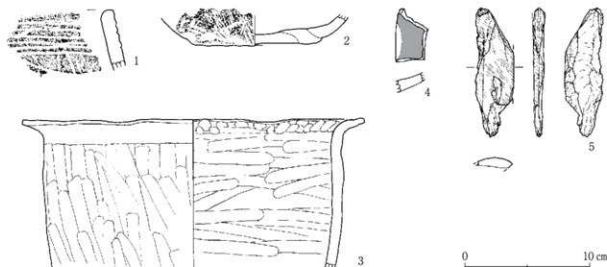
B 遺構外出土遺物

遺構外で確認された遺物について解説する。(第74図, 第19表)

遺物 土器等252点, 石器等53点, 古銭1点, 骨片2点が出土している。うち縄文土器2点(深鉢), 土師器1点(甌), 青白磁1点(碗), 石製品1点(石剣)を掲載する。当トレンチにおける遺物量は, 東隣の水田に設置した第11・27トレンチに比べて明らかに少なくなっている。

(3) 所見

第22トレンチ付近では, 再葬墓等の所在する遺跡中心部とは基本土層の堆積状況が異なる。しかし, 平安時代の堅穴住居跡や中世の掘立柱建物跡もその土層中に所在していて, 近現代の盛土等ではないことは明らかである。台地斜面下部においても, プライマリーな状態が確認できることは判明したが, 遺物の出土傾向も大きく変わってくるため, 第22トレンチ付近は縄文・弥生時代の遺跡中心部からは外れているものと考えられる。



第74図 第22トレンチ遺構外出土遺物実測図

第19表 第22トレンチ遺構外出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第74図 1	縄文土器	深鉢	口縁～胴部、5%以下	— — —	内傾か。胴部縦位の燃糸文を施した後、外面口縁部横走の柔線文と胴部弧状の沈線。内面ナデ	メノウ粒少量、メノウ礫・黒色砂粒・チャート粒微量	やや不焼良。き甘くムラ	サンドイッチ状。外面にふい黄褐色・内面明黄褐色・灰黄褐色。内部灰黄褐色	C9b1、II層サブトレ	—	PL28
2	縄文土器	深鉢	胴～底部、5%以下	— (20) [94]	平底から胴部が内彎し大きく外傾して立ち上がる。底部から胴部の接合部。外面斜位の燃糸文、内面ナデ。底部一部に木葉痕	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・泥岩粒・雲母微量	普通。焼けムラ	外面にふい黄褐色。内面にふい黄褐色・黒褐色	C9b2サブトレ、II層	—	PL28
3	土師器	瓶か	口縁～体部、15%	[26.8] (11.8) —	わずかに内彎、わずかに外傾する体部から頸部で屈曲し大きく外反する口縁。体部外面ヘラナデ。のち口縁～頸部横ヘラナデ。内面ナデ。口縁部に指頭圧痕が残る	メノウ粒少量、メノウ礫・石英粒・チャート粒微量	普通	内外面灰黄褐色・黒褐色。内部棕色	C8b4、I B層	12片	PL28
4	青白磁	碗	体部、5%以下	— — —	内彎気味、大きく外傾。ロウロ口成形。内外面施釉。見込み釉剥ぎ(蛇の目釉剥ぎか)	磁器胎土	良好。堅緻	胎土：灰白色 釉：明緑灰色	C8b2、I層	—	PL28 類似小片1片あり。既報の24TN15(報告Ⅲ)も類品。恐徳鎮遺集、13～14世紀

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第74図 5	石剣か	(10.1)	(3.0)	(0.9)	(28.3)	粘板岩	銅線に稜。断面杏仁形か。表面に軸斜交の擦痕(調整痕)	排土中	—	PL28 一部残存

4 第27トレンチ (第75・76図)

(1) 調査概要

D6h8区からD7h4区まで、長さ14m、幅2mの南北に長いトレンチを設定した。第3次調査で確認された再葬墓西群の西側に設定したトレンチで、主目的は再葬墓分布域の限界を掴むことである。

また、第Ⅱ層上面での遺構確認を基本としたが、後述する第26号竪穴住居跡が確認されたことによって、必要に応じて第Ⅲ層上面まで精査している。調査後は目印としてトレンチ全体に山砂を薄く撒き、掘り上げた土をかけて埋め戻している。

なお、第ⅠB層下には、新しい時期に堆積したと考えられる層があり、全ての遺構はこの層下に所在する。この層は、水田造成の際に客土されたものである可能性が高い。

土層解説 (第75・76・78図)

- 1 灰褐色 (7.5YR 4/2) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、締まり中、粘性中
- 31 灰褐色 (7.5YR 4/2) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、締まり中、粘性中

(2) 遺構と遺物

A 遺構とそれに伴う遺物

①縄文時代

(i) 竪穴住居跡

第26号竪穴住居跡 (S126, 第75～78図)

位置 D6h8区からD7h3区にかけて位置する。第Ⅱ層上面及び東西壁のセクションで確認できた。

規模と形状 大部分が調査区東西に延びるが、概ね円形になると考えられ、確認できる最大幅は9.60mである。円の中心はトレンチ西側となるため、径は10m前後と考えられる。確認できる深さは52cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

重複関係 第4号掘立柱建物跡、第176・180～182・185号土坑に切られる。

土層 7層が確認でき、レンズ状の自然堆積である。特に第4層は、多くの遺物を包含する。また、第4号掘立柱建物跡等、第4層の堆積前に廃絶された遺構も確認されており、完全に埋没するまで相当の期間がかかったものと推測される。

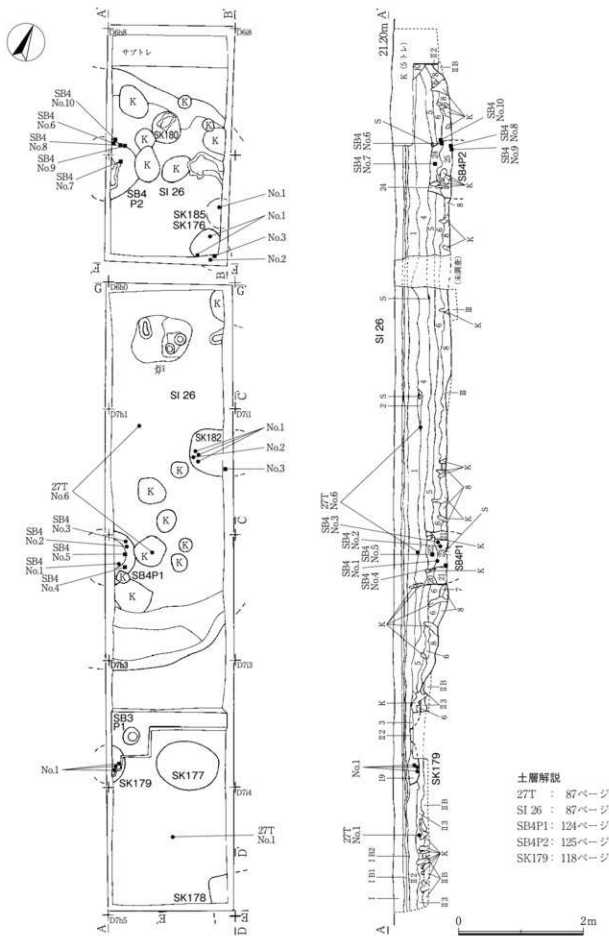
土層解説 (第75・76・78図)

- 2 暗褐色 (7.5YR 3/4) ローム小ブロック極少量、ローム粒子極少量、小礫少量、締まり中、粘性中
- 3 暗褐色 (7.5YR 3/4) ローム小ブロック極少量、ローム粒子少量、締まり中、粘性中
- 4 暗褐色 (7.5YR 3/4) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、小礫少量、骨片少量、締まり中、粘性中
- 5 暗褐色 (7.5YR 3/3) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、締まりやや強、粘性中
- 6 暗褐色 (7.5YR 3/3) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、Nt-S極少量、締まりやや強、粘性中
- 7 褐色 (7.5YR 4/3) ローム粒子中量、締まりやや強、粘性中
- 8 褐色 (7.5YR 4/3) ローム小ブロック少量、ローム粒子多量、Nt-S極少量、締まりやや強、粘性中

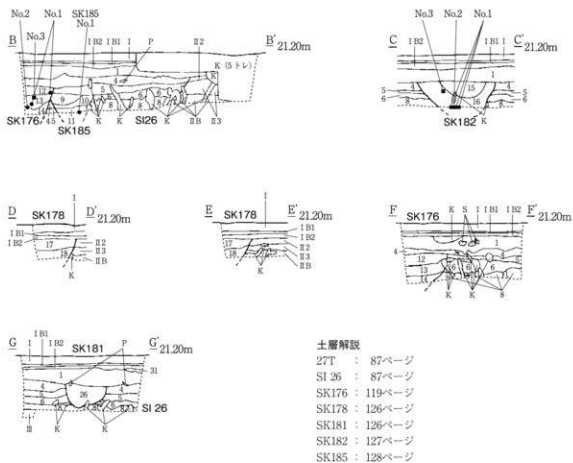
床 底面は概ね平坦となっており、床面と考えられる。

炉 中央やや東寄りに、明褐色 (7.5YR 5/6) の焼土ブロック・粒子の集中が確認できる。その密度と高まりから、東半部が炉本体と考えられる。

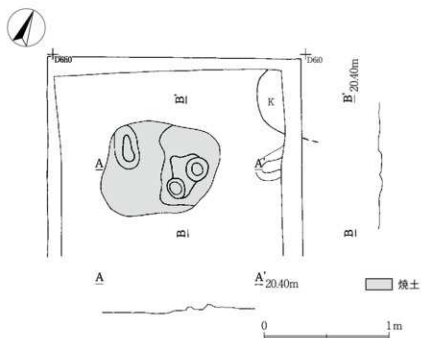
柱穴 確認していない。



第75図 第27トレンチ実測図(1)



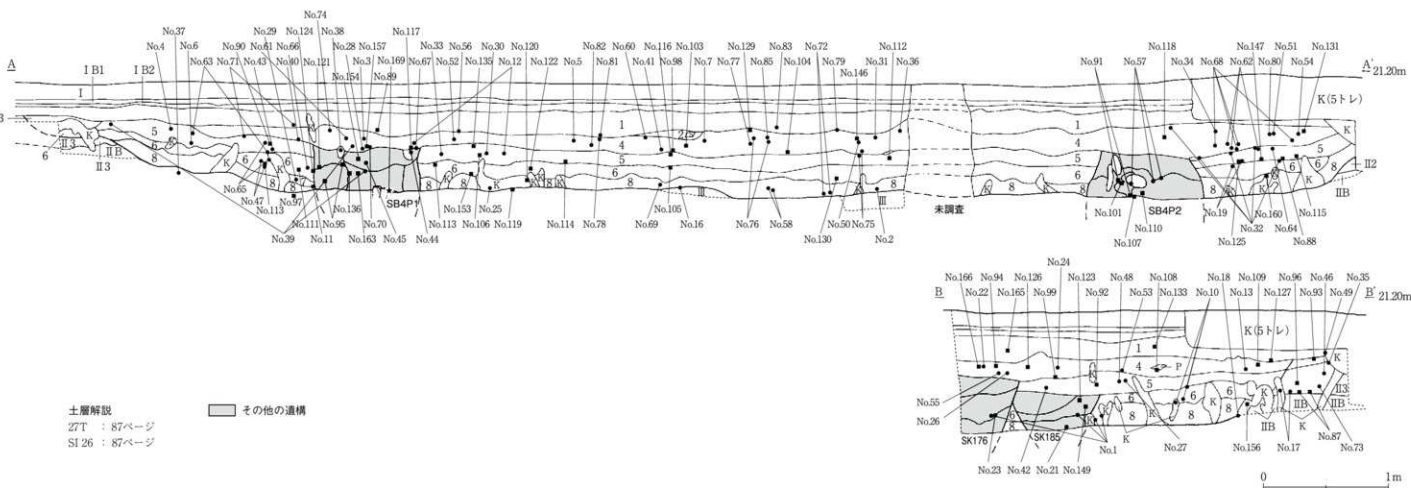
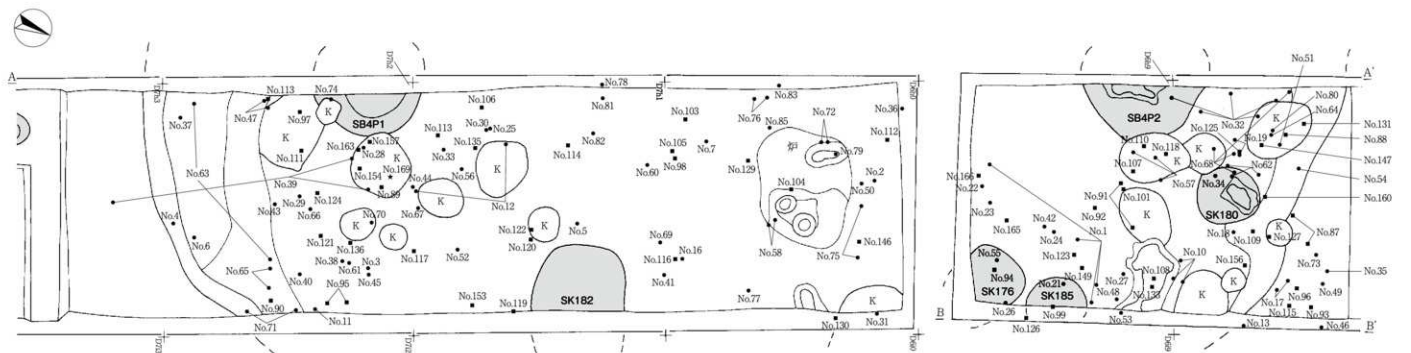
第76図 第27トレンチ実測図(2)



第77図 第26号壁穴住居跡炉実測図

遺物 土器等3,442点、石器等841点、骨製品等349点、炭化物3点が出土している。うち縄文土器74点（深鉢27、浅鉢14、壺8、鉢8、注口土器6、台付鉢5、小型壺3、小型深鉢1、小型鉢1、ミニチュア土器1）、弥生土器4点（壺3、小型壺1）、土製品8点（土偶3、土器片円盤2、耳飾1、土錘1、土製有孔円盤1）、石器・石製品81点（石鏃33、石剣10、敲石8、磨石2、磨石・敲石4、敲石・凹石1、石棒3、磨製石斧3、石錘3、石刀2、砥石2、台石2、垂飾2、独鈷石1、浮子1、石核1、石錐1、白玉1、丸玉1）、骨製品6点（刺突具1、髪針5）を掲載する（第79～89図、第20表）。弥生土器は第4層からの出土である。

所見 出土遺物から、縄文時代晩期前葉の竪穴住居跡と考えられる。



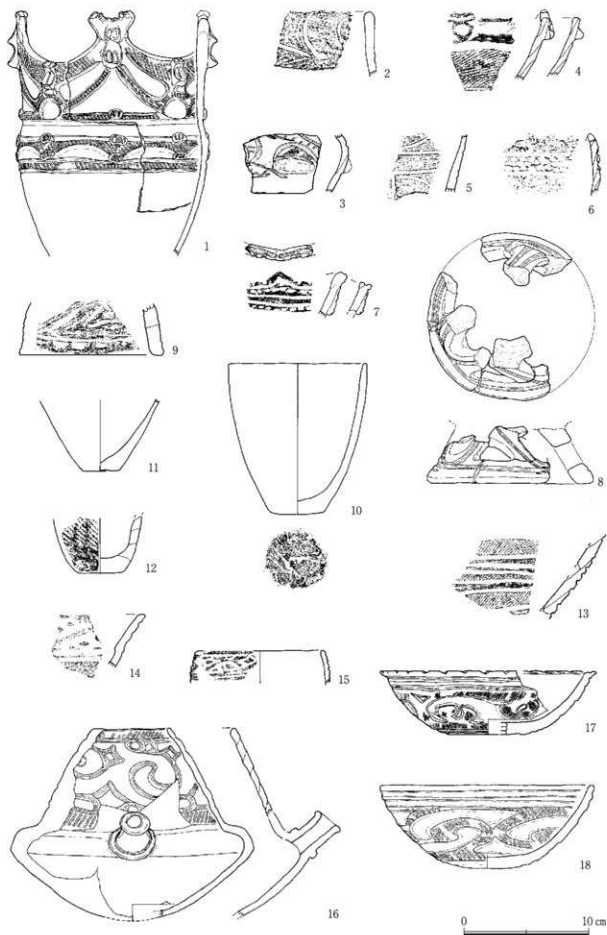
土層解説

ZT : 87ページ

SI 26 : 87ページ

□ その他の遺構

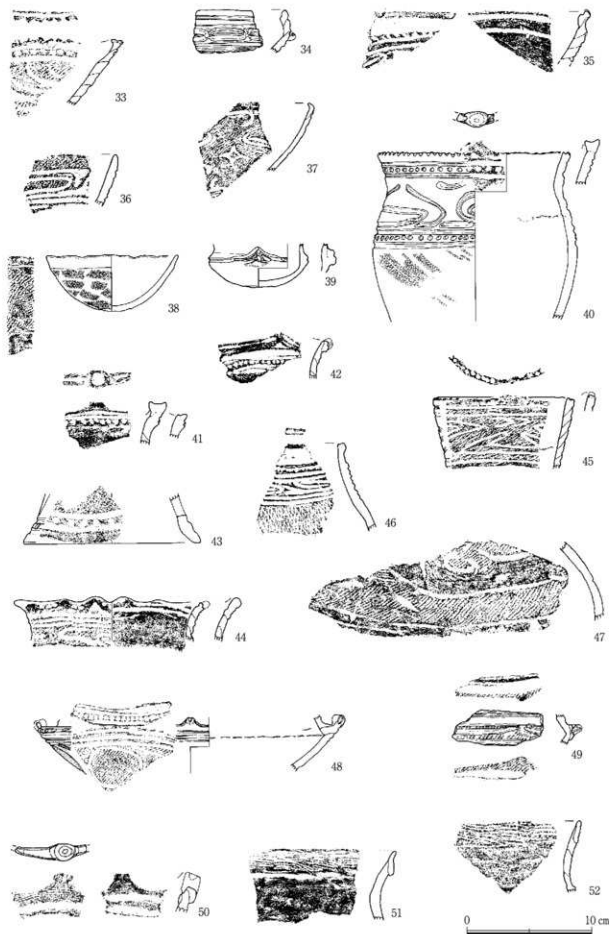
第78図 第26号竪穴住居跡実測図



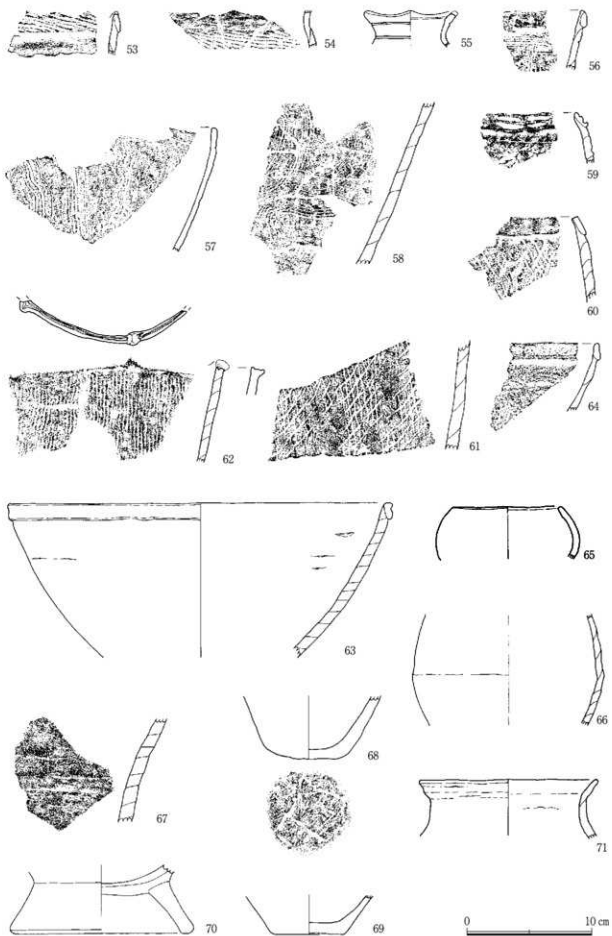
第79图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測図(1)



第80图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測図(2)



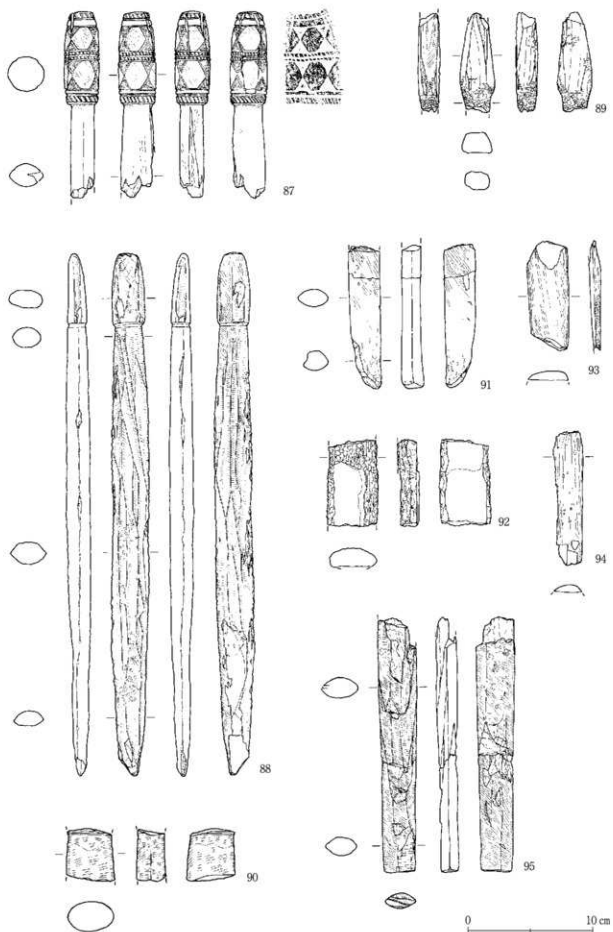
第81图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測图(3)



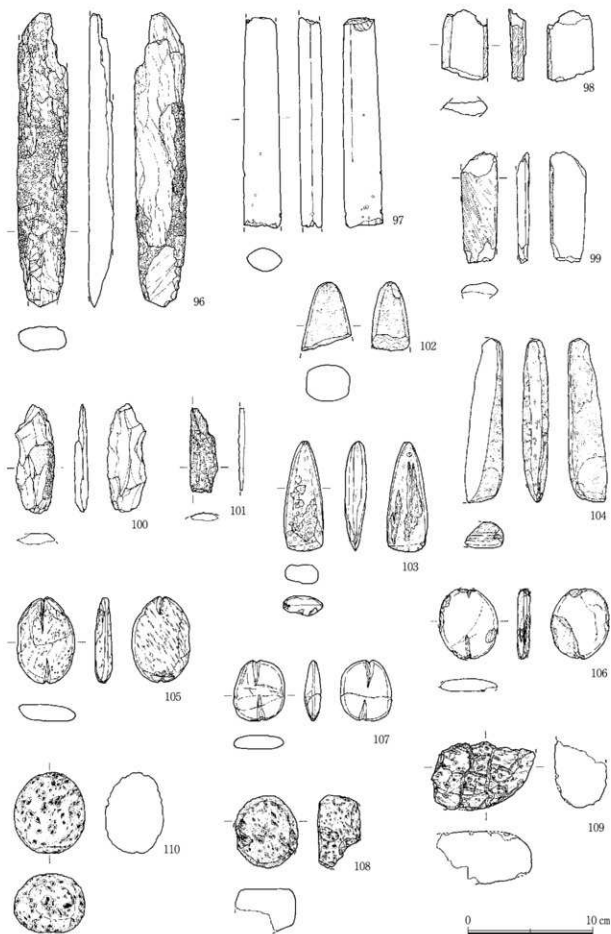
第82图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測图(4)



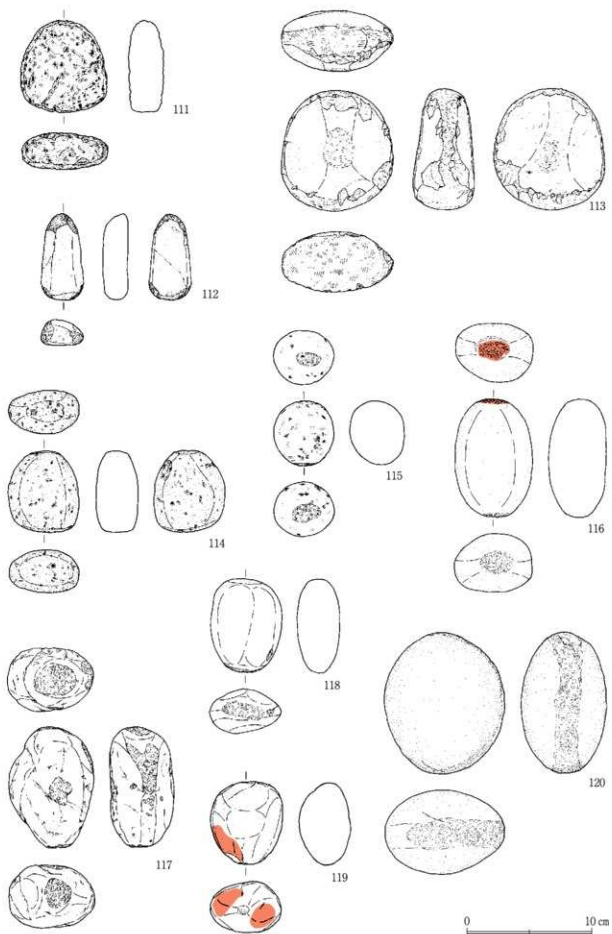
第83图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測图(5)



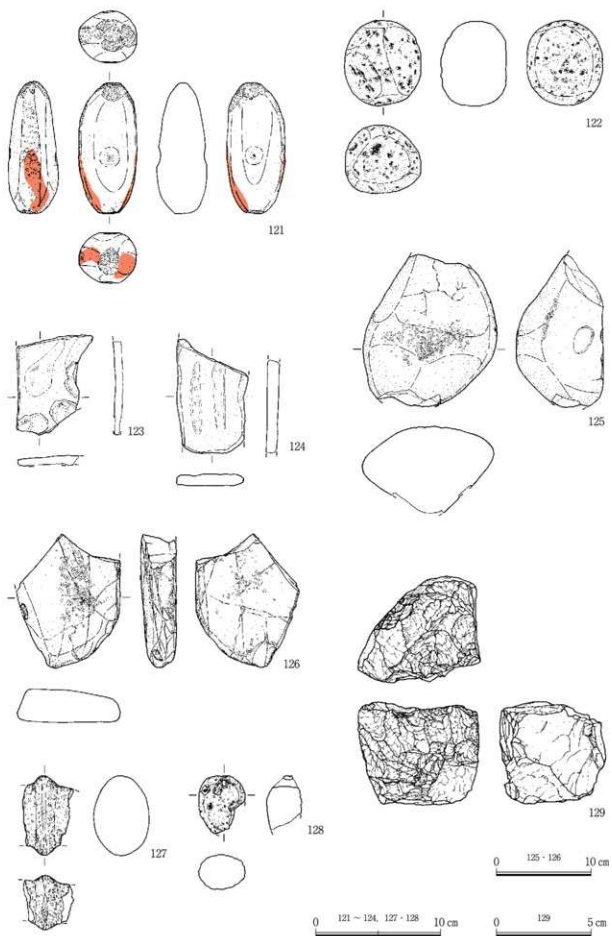
第84图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測図(6)



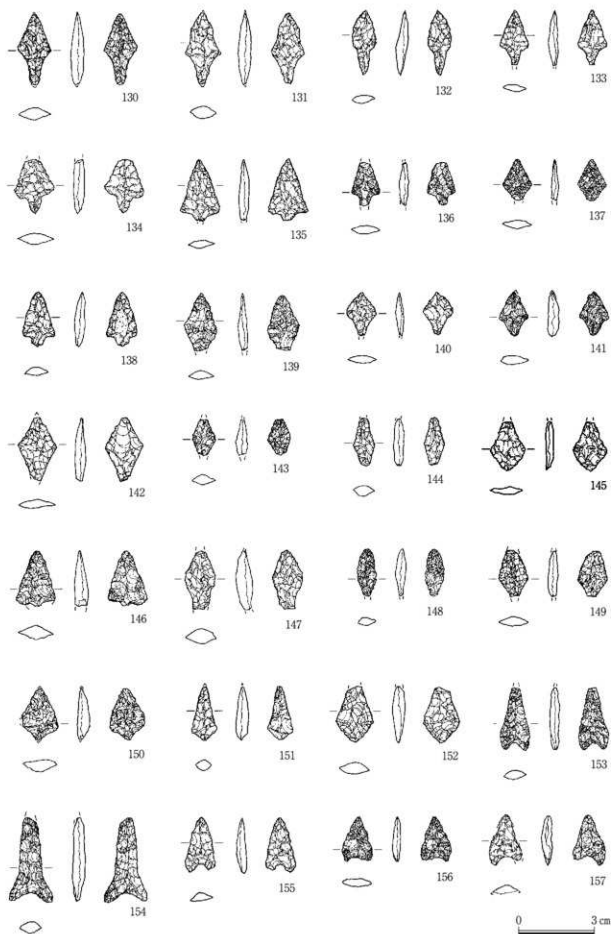
第85图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測図(7)



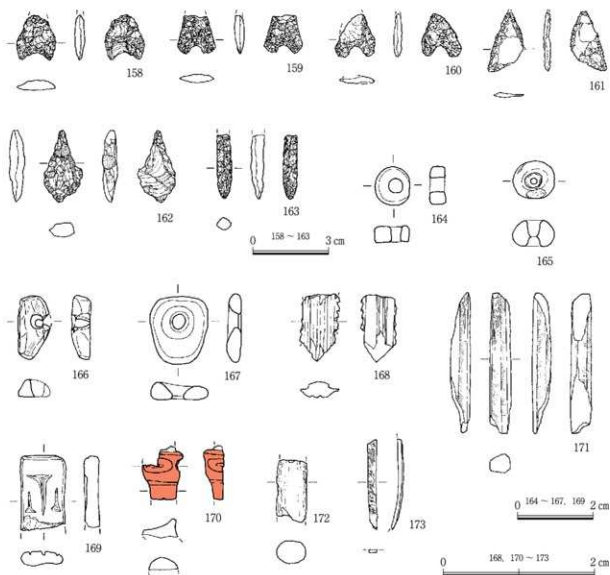
第86图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測図(8)



第87图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測図(9)



第88图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測図(10)



第89図 第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(11)

第20表 第26号竪穴住居跡出土遺物観察表

神国番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第79図	1	縄文土器	深鉢 口縁-胴部 20%	[15.4] (19.3) —	胴部は内野、外頰。最大径上位で一旦括れ、わずかに外頰する口縁部に移行。口縁は4単位の波状。波頂部に瘤を付け縦位のキザミ。波頂と波底に受け口状を呈する豚鼻状の瘤文。口縁部外面縄文を地文に三角形とハの字状及び半円形の区画文。三角形底辺中央に豚鼻状の瘤文。胴部最大径付近にも縄文を地文とする弧状の磨消杵状文とその連結部上下に豚鼻状の貼付文。胴下部外面ケズリ。内面ナデ、一部粗いミガキ	メノウ粒少量、メノウ礫・石英粒・褐色砂粒・雲母細粒微量	良好	内外面黒褐色・灰褐色、内面一部に赤い褐色	北部D6h9.床面上	4片。ほかに接合しない同一個体2片	PL28 安行3a式

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第79図											
2	縄文土器	深鉢	口縁部、5%以下	—	反外気味、内傾気味。口縁部外面弧状沈線。胴部無筋縄文。内面粗いミガキ。	メノウ粒少量、石英粒・凝灰岩粒・輝石粒・雲母・海綿骨針微量	良好	サンドイッチ状。外面にぶい赤褐色・灰黄褐色。内面灰褐色。器表下ぶい褐色。内部明褐色。	中央部D6h0、床面直上	—	PL28 安行3a式か
3	縄文土器	鉢	胴部、5%以下	—	直線的・外傾から上部で内彎・内傾。外面最大径やや下位に楕円状の突起。その周辺及び上位に磨消縄文手法による大粗文。下位ミガキ。内面ナデ、一部ミガキ状。	メノウ粒少量、チャート粒・凝灰岩粒・赤褐色砂粒・海綿骨針微量	普通・焼けムラ	サンドイッチ状。外面にぶい褐色。内面淡黄褐色。内部褐色。	南部D7h2、覆土上層	—	PL28 大洞B1式
4	縄文土器	鉢	口縁～胴部、5%以下	—	内彎、外傾。口縁部下外面に突起。端部B突起。その下位に突起にかけて円形浮文貼り付け。中央を挟んで円環状に作る。胴部縄文。現存下端に横位の細い沈線。内面丁寧なミガキ	やや精良。メノウ粒少量、石英粒・雲母細粒微量	良好	サンドイッチ状。外面にぶい赤褐色・褐色。内面にぶい褐色。内部褐色。	南部D7h2、覆土中層	—	PL28 安行3a式か
5	縄文土器	深鉢	胴部、5%以下	—	直線的、外傾。外面細密沈線を地区に縦横・弧状の沈線で区画し磨り消し。内面ナデ、一部ミガキ状	砂質。メノウ粒・泥岩粒少量	良好	サンドイッチ状。外面暗赤褐色。内面にぶい褐色。内部灰褐色。	中央部D7h1、覆土上層	—	PL28 安行3b式
6	縄文土器	深鉢	口縁～胴部、5%以下	—	薄手。内彎、内傾。口縁部やや大きなキザミの連続による小波状。口縁部下横走沈線2条。間2段に連続刺突。現存下端にL状縄文。内面ミガキ	メノウ粒少量、凝灰岩粒・石英粒・海綿骨針微量	普通・焼けムラ	サンドイッチ状。外面灰黄褐色・褐色。内面淡黄褐色。内部褐色。	南部D7h2、覆土中層	—	PL28 晩期中葉
7	縄文土器	深鉢	口縁部、5%以下	—	内彎気味、外傾。液状口縁。口縁端部に波頂部を始点とする沈線。端部外側にキザミ。外面粘土帯を貼り付けて肥厚させ。上からいずれも横位の連続刺突。沈線2条。連続刺突。内面ミガキ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・泥岩粒・黒色砂粒・海綿骨針微量	普通	サンドイッチ状。内外面にぶい黄褐色。内部褐色・灰褐色。	中央部D6h0、覆土上層	—	PL29 晩期中葉
8	縄文土器	台付鉢	脚台部、10%	(4.6) [13.4]	内傾するハの字形の脚台。器部との接合面で割線。三角形と逆三角形の透かしが交互に入る。透かしの形に沿って、1条もしくは2条の沈線を外面に施文	メノウ粒・石英粒少量、メノウ礫・チャート粒・泥岩粒・雲母細粒微量	普通・焼けムラ	内外面にぶい黄褐色・褐色・黒褐色。	中央部D6h0、覆土中層	併しかに接合しない同一個体3片	PL29
9	縄文土器	台付鉢	脚台部、5%以下	(4.1) [11.2]	厚手。内彎気味、内傾。透かしを有するが形状不明。外面雑な矢羽根状の沈線文。横走沈線1条。下端近くに浅いキザミ。内面粗いミガキ	メノウ粒少量、泥岩礫・雲母細粒・海綿骨針微量	普通・焼けムラ	サンドイッチ状。外面にぶい黄褐色。内面灰黄褐色・黒褐色。内部黒色。	北部D6h9、覆土上層	—	PL29 安行3c式
10	縄文土器	小型深鉢	口縁～底部、40%	[10.8] [12.0] 4.2	やや丸底気味の平底から胴部が内彎・外傾して立ち上がりそのまま口縁に至る。無文。外面ナデ。内面ヘラナデ。底部ササ状の植物繊維痕か	メノウ粒中量、メノウ礫・石英粒・チャート粒・雲母・海綿骨針微量	良好	サンドイッチ状。内外面赤褐色。一部黒色。内部黒色。	北部D6h8、覆土中層	上半3片、下半9片	PL29 上半・下半は接合しない同一個体。園上復元。安行3c式
11	縄文土器	深鉢	胴～底部、5%以下	(5.7) 2.8	薄手。平底から内彎気味の胴部が外傾して立ち上がる。底部は小さく、内面に平坦面なし。外面ナデ、底部付近ヘラケズリ。内面ナデ	やや砂質。白色細砂(凝灰岩粒)中量。メノウ粒・石英粒・雲母細粒微量	良好	外面黒褐色・灰黄褐色。内面にぶい赤褐色。	南部D7h2、覆土中層	—	PL29 安行系。内外面灰化付着
12	縄文土器	深鉢	胴～底部、5%以下	(4.5) 3.4	小さい平底から内彎気味の胴部が外傾して立ち上がる。胴部外面縄文を粗く縦に施文。底部外周辺ケズリ。内面指ナデ。底部ナデ	精良。メノウ細粒・泥岩礫・海綿骨針微量	やや不良。焼き甘い	内外面にぶい黄褐色・灰黄褐色。	南部D7h1、覆土中層	3片	PL29 安行3b式か

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第79図											
13	縄文土器	浅鉢	胴部、5%以下	— — —	わずかに内嚢。大きく外傾。外面縄文を地文に横走沈線8条で区画し、2・3・5・7段目を磨り消し。5段目左には1条の沈線が入る。内面丁寧なミガキ	精良。メノウ細粒・泥岩細粒・海綿骨針微量	良好。堅緻	サンドイッチ状。外面灰褐色。内面灰褐色・黒色。内面褐色	北部D6h9。覆土上層	—	PL29 大洞C2式
14	縄文土器	浅鉢	口縁部、5%以下	— — —	薄手。外傾する胴部から、段をもち外傾する口縁部。口縁部平直。口縁部外面半歯状文。段差部分に横走沈線1条。胴部縄文。内面丁寧なミガキ	やや精良。メノウ粒少量。凝灰岩粒微	良好	サンドイッチ状。外面灰黄褐色・褐灰色。内面黒褐色。器表下灰白色。内面褐色	北部D6h8。サブレ、一括	—	PL29 大洞B C式
15	縄文土器	鉢	口縁部、5%以下	[10.0] (28)	小型。薄手。わずかに内嚢。内傾。外面半歯状文。内面ミガキ	やや精良。メノウ粒少量。メノウ礫・赤褐色砂粒・雲母細粒微量	やや不 良。焼 き甘 い	外面にふい ね 黄褐色	中央部D6h0。覆土中	—	PL29 大洞B C式
16	縄文土器	注口土器	口縁～ 底部、 30%	[6.0] (15.2)	薄手。丸底(推定)から胴部が大きく外傾して立ち上がり、屈曲して肩部を形成し、屈曲して内傾する頸部・口縁部に至る。最大径部分に注口を付け基部には粘土を巻いて補強。口縁～頸部外面上下を縄文帯で区画し間に沈線区画とミガキによる雲形文。一部半歯状文に似る。胴部外面ミガキ。内面ナデ	やや精良。メノウ粒・石英粒・泥岩粒・赤褐色砂粒・雲母細粒微量	良好	外面灰黄褐色・黒褐色。内面褐色	中央部D6h0。覆土下層	6片	PL29 大洞B C式
17	縄文土器	浅鉢	口縁～ 底部、 30%	[17.0] 5.0 [6.8]	平底から胴部が内嚢・外傾して立ち上がり、口縁部で内側に稜をもち外側へ屈曲。口縁部はキザミ。外面上下各2条の横走沈線の間に縄文を地文に磨消縄文手法により雲形文を表現。彫法はやや浅い。内面周縁部にも浅い円。内面ミガキ	メノウ粒少量。輝石粒・雲母・海綿骨針微量	やや不 良。焼 き甘 い	内外面褐色 灰色。一部灰 白色・黒褐色	北部D6h8。覆土中層	4片	PL29 大洞C1式
18	縄文土器	浅鉢	口縁～ 底部、 40%	[16.8] 6.6 6.6	緩やかな丸底から胴部が内嚢・外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部外面と底部付近にそれぞれ沈線2条を並らし、その間に磨消縄文手法による雲形文。彫法はやや浅い。	メノウ粒少量。チャート粒・褐色砂粒・泥岩粒・白色粒子微量	普通。 二次焼 成	外面浅黄褐色。内面にふい ね 黄褐色。内 面褐色。浅 黄褐色。	北部D6h0。覆土下層	—	PL29 大洞C1式。底径は最下位の沈線の外径で計測
第80図											
19	縄文土器	浅鉢	口縁～ 底部、 70%	[20.0] 5.3 10.3	緩やかな丸底。周縁部に3重の沈線(この沈線による円形部分を底部とみなした)。胴部内嚢。大きく外傾。口縁部平直で端部平直。1か所に外側2個の突起と端部に4個のB突起。これが1単位で本来3単位か。胴部外面磨消縄文による雲状文と三叉文。内面ミガキ	やや精良。メノウ礫・メノウ粒・チャート粒・雲母・海綿骨針微量	普通。 二次焼 成	サンドイッチ状。外面黒色。内面黄褐色。内面にふい ね 黄褐色。黒 褐色。内面 褐色	北部D6h8。覆土中層	7片	PL30 口縁部分付近に焼成後穿孔2孔(修復孔ではない)。大洞C1式
20	縄文土器	鉢	口縁～ 胴部、 5%以下	— — —	内嚢。外傾。口縁部付近ではほぼ直立。薄手。外面口縁部直下に横走沈線2条、以下磨消縄文手法による雲形文。内面ナデ	メノウ粒少量。チャート粒・砂岩粒・赤褐色砂粒・海綿骨針微量	やや不 良。焼 けム ラ	外面にふい ね 黄褐色。内 面にふい ね 黄褐色。褐 灰色	北部D6h9。床土10cm以下一括	2片	PL30 大洞C1式
21	縄文土器	小型 壺	口縁～ 胴部、 5%以下	— — —	胴部内傾。内嚢。口縁部くの字に屈曲して外傾。口縁部小波状口縁。口縁部外面縄文。胴部外面沈線による入組文。後ミガキ。内面ミガキ	メノウ粒・石英粒・チャート粒・泥岩粒少量。雲母・海綿骨針微量	良好。 二次焼 成	内外面にふい ね 黄褐色・灰褐 色	北部D6h9。床面直上	—	PL30 大洞BC式か
22	縄文土器	壺	胴部、5%以下	— — —	胴部最大径付近及びその上位。最大径 [27～28] cm。無節縄文を地文に横位・斜位の沈線で区画し一部磨り消し。内面細いナデ	メノウ粒少量。石英粒・チャート粒・泥岩粒・海綿骨針微量	普通	外面灰黄褐色。内面・内面褐色	北部D6h9。覆土上層	—	PL30 晩期中葉(大洞C1式か)

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第80図											
23	縄文 土器	注口 土器	頸部・ 10% 以下	(7.4)	薄手。内壘・外傾から残をも って屈曲し内傾する胴部。屈 曲して頸部に内壘・内傾。最 大径 [17.2] cm。頸部外面縄 文。下位に磨消縄文による無 文帯。上部にも沈線（詳細不 明）。胴部外面ミガキ。内面 ナデ	メノウ粒少 量。高部小骨 片・石英粒・ 褐色砂粒・雲 母・海綿骨針 微量	良好	外面褐灰色 内面黄灰色	北部 D6h9。 覆土下 層	3片	PL30 大洞C1 式か
24	縄文 土器	注口 土器	注口 部。5% 以下	—	大型。斜め上向き注口。基 部に粘土を定し本体に接合。 口に向かつて徐々に寸法が 大きくなる。貫通孔内径1.3cm。外面 細かい無筋縄文。基部沈線文 とミガキ。内面ナデ	メノウ粒少 量。泥岩礫・ チャート粒・ 海綿骨針微 量	普通	内外面褐灰 色・灰褐色 内面にふい り色	北部 D6h9。 覆土上 層	—	PL30 晩期中葉
25	縄文 土器	注口 土器	脚台 部。5% 以下	—	斜め上方を向く注口土器注口 部。やや扁平。円孔が直線的 に貫通。円孔壁植物茎圧痕。 植物茎に粘土帯を巻き付け。 平たく絞って本体に貼り付 け。基部を粘土で補強。外面 ミガキ	メノウ粒少 量。チャート 粒・輝石粒・ 雲母・海綿骨 針微量	良好	内外面にふい り黄褐色。外 面一部褐色	中央南 寄り D7h1。 覆土下 層	—	PL30 晩期
26	縄文 土器	台付 鉢	脚台 部。5% 以下	—	厚手。中位が膨らむ脚台の下 部。外反臭味で内傾して立ち 上がり。屈曲して内壘・外傾。 外面上から横走沈線。縄文帯。 磨り消し。縄文帯。内面ナデ	やや砂質。メ ノウ粒中量。 泥岩礫・チャ ート粒少量。 石英粒微量	普通。 焼けム ラ	内外面にふい り黄褐色・橙 色・黒褐色	北部 D6h9。 覆土上 層	—	PL30 前甬式
27	縄文 土器	浅鉢	口縁～ 胴部。 5%以下	—	わずかに外反。大きく外傾。 波状口縁の一部。端部にB突 起2か所。外面縄文を地文に 2条の沈線間を磨り消し。そ の下位に弧状の沈線と磨り消 し。突起内面に弧状沈線文。 その下位に沈線。外面赤褐色 に塗彩。内面ミガキ	メノウ粒少 量。石英粒・ チャート粒 微量	良好	内外面にふい り黄褐色。外 面塗彩：明赤 褐色	北部 D6h9。 覆土上 層	—	PL30 前甬式
28	縄文 土器	浅鉢	口縁～ 胴部。 5%以下	—	薄手。内壘。大きく外傾。口 縁端部は厚く作り三叉状の沈 線を加えたB突起の連続。外 面横走沈線3条。以下磨消縄 文手法による雲形文か。内面 ミガキ	メノウ粒少 量。チャート 粒・凝灰岩粒・ 赤褐色砂粒・ 雲母細粒・海 綿骨針微量	良好	サンドイッチ 状。外面にふ いり褐色。内 面にふいり橙 色。内面褐灰 色	南部 D7h2。 覆土上 層	—	PL30 大洞C2 式か
29	縄文 土器	浅鉢	口縁～ 胴部。 5%以下	—	内壘。大きく外傾。口縁端部 にB突起連続。胴部外面入り 組んだ弧状沈線文とミガキ 口縁付近にわずかに縄文が残 る。内面ミガキ	メノウ粒少 量。石英粒・凝 灰岩粒微量	普通。 焼けム ラ	サンドイッチ 状。外面褐灰 色・褐灰色。 内面灰黄褐 色。器表下に ふいり橙色。内 面褐灰色	南部 D7h2。 覆土中 層	—	PL30 大洞BC 式
30	縄文 土器	浅鉢	口縁～ 胴部。 5%以下	—	内壘。大きく外傾。口縁端部 平坦。胴部外面横走沈線3条。 その下位に赤文を地文に磨消 縄文手法による雲形文。その 下位横走沈線2条。内面ミガ キ	メノウ粒少 量。メノウ礫・ 泥岩礫・泥岩 粒・チャート 粒・雲母・海 綿骨針微量	やや不 良。焼 けムラ	内外面にふい り褐色・褐灰 色	中央部 D7h1。 覆土中 層	—	PL30 外面赤色 顔料塗布 か。大洞 C2式
31	縄文 土器	浅鉢	口縁～ 胴部。 5%以下	—	内壘。外傾。口縁部は外に向 かって屈曲。端部にキザミ。 外面横走沈線2条。間に連続 刺突。以下縄文を地文に横走 沈線と三文文を施して一部磨 り消し。内面口縁部にキザミ 間の突起に対応する弧状細線 文。ミガキ	やや精良。メ ノウ粒・石英 粒・雲母細粒 微量	良好	サンドイッチ 状。外面明赤 褐色。内面に ふいり黄褐色 にふいり赤褐 色。内面褐灰 色	中央部 D6h0。 覆土上 層	—	PL30 大洞C1 または C2式
32	縄文 土器	鉢	口縁～ 胴部。 10%	[39.0] (10.3)	内壘。外傾。口縁部わずかに 内傾。口縁端部にわずかな突 起を付け（単位不明）。端面 は内斜させ外縁にキザミ。突 起以外の端面に沈線を施す。 胴部上位外面縄文を地文に 上下を沈線で区画しその間 に平板化した磨消縄文により 硬化した雲形文を表現。胴部 下位外面粗いミガキ。内面丁 塚なミガキ	メノウ粒少 量。メノウ礫・ 凝灰岩粒微 量	良好	外面灰黄褐 色・褐灰色。 内面黒色	北部壁 付近 D6h8。 覆土上 層～上層	2片。 ほか に接 合し ない 同一 個体 3片	PL30 大洞C2 式

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考	
第81図	33	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部、5%以下	— — —	わずかに内彎、大きく外傾。口縁部は内側に突出させ肩部に沈線。肩部外側にキザミ。外面2条の横走沈線の間に棒状施文具による連続刺突。以下沈線により区画して雲形文。内面ミガキ	メノウ粒少量、メノウ礫・チャート粒・泥岩粒・雲母細粒・海綿骨針微量	普通。焼けムラ	内外面にふい黄色。外面一部黒褐色	南部D7h1、覆土中層	—	PL30 内面赤褐色顔料付着か。大洞C1またはC2式
	34	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部、5%以下	— — —	内彎、外傾から屈曲して内傾。口縁部はわずかに外反。口縁部直下内外面に沈線。肩部外面に腿残状浮文。胴部に変形十字文。内面ミガキ。一部輪積み痕が残る	メノウ粒少量、メノウ礫・石英粒・チャート粒・泥岩粒微量	良好	外面灰黄褐色。内面褐色	北部D6h8、覆土上層	—	PL30 大洞C2式
	35	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部、5%以下	— — —	内彎、外傾。胴部から外側へ屈曲する口縁部。肩部に浮文が現状で1か所。1か所は脱落。肩部直下外面に溝。その下位隆帯に連続刺突。沈線で区画して雲形文状の沈線文。内面ナデ	メノウ粒少量、泥岩礫・泥岩粒・雲母細粒・海綿骨針微量	普通。焼けムラ	サンドイッチ状。外面にふい黄色。黒褐色。内面黄褐色。内部褐色	北部D6h8、覆土上層	—	PL30 大洞C2式
	36	縄文土器	鉢	口縁～胴部、5%以下	— — —	内彎気味。外傾。外面縄文を地文に。沈線で区画し磨消手法による雲形文。内面ナデ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・凝灰岩粒・黒色砂粒微量	良好	内外面にふい黄色。外面一部にふい褐色	中央部D6h0、覆土上層	—	PL31 晩期中業か
	37	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部、5%以下	— — —	薄手。器厚約4mm。内彎、大きく外傾。口縁端部わずかに内側に折れる。外面無筋縄文を地文に沈線で雲形文。磨消縄文で変形を作る。内面ミガキ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・雲母微量	普通	サンドイッチ状。内外面に黄褐色。器表下浅黄色。内部黒褐色	南部D7h2、覆土下層	—	PL31 大洞C1式
	38	縄文土器	鉢	口縁～底部、25%	[10.4] 4.8 [2.8]	やや小型。丸底から胴部が内彎して立ち上がりそのまま口縁に至る。口縁端部に緩やかなキザミ。現状で3か所。口縁部外面ミガキ。胴部縄文。底部ミガキ。内面ミガキ	やや精良。メノウ粒・石英粒・泥岩粒・海綿骨針微量	普通	サンドイッチ状。内外面にふい黄色。黒褐色。内部黒褐色	南部D7h2、覆土上層	—	PL31 外面炭化物付着。晩期中業（大洞C2式）か
	39	縄文土器	小型鉢	口縁～底部、70%程度か	— (3.5) 2.4	球体の一部のような胴部下半から屈曲して胴部上半が反し直立。最大径9cm。屈曲部に山形の胎付文1単位。胴下部中心部にわずかな凹み（これを底部として底径を計測）。内外面ミガキ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・泥岩粒・雲母微量	普通。焼けムラ	内外面にふい黄色。黒色	南部D7h2、b3、覆土中～上層	3片	PL31 大洞C2式か
	40	縄文土器	深鉢	口縁～胴部、25%	[15.0] (13.5) —	上位に最大径（[162] cm）をもつ胴部から頸部で緩やかに屈曲して外傾する口縁部。口縁端部には中央を凹ませた突起を貼付付け（単位不明）。突起を始点とする沈線をめぐらせる。肩部外側キザミ。口縁部外面横走沈線2条とその間に連続刺突。胴部から肩部沈線による雲形文。横走沈線と連続刺突。以下縄文。内面ミガキ	メノウ粒少量、メノウ礫・泥岩礫・泥岩粒・石英粒・チャート粒・雲母・海綿骨針微量	不良。焼き甘く脆弱で器表荒れ	内外面にふい黄色。暗褐色。黒褐色	南部D7h2、覆土上層	7片	PL31 同一個体4片。突起部は図上復元。大洞C2式
	41	縄文土器	深鉢	口縁部、5%以下	— — —	外反。外傾。口縁端部には頂部に円形の凹みをもつ突起と突起を始点とする沈線。口縁部外面横走沈線1条とその下に連続刺突をもつ隆線。以下無文（ミガキ）。内面ミガキ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・泥岩粒・海綿骨針微量	良好	サンドイッチ状。外面にふい黄色。内部褐色	中央部D7h1、覆土上層	—	PL31 大洞C2式か
	42	縄文土器	深鉢	口縁～胴部、5%以下	— — —	外反。外傾。口縁部は肥厚させ外上方へ向かう突起を付す。外面に突起を始点とする沈線。胴部上下を沈線で区画した連続刺突。内面ミガキ	やや精良。メノウ粒・泥岩粒・雲母微量	良好。一部二次焼成	サンドイッチ状。内外面黒褐色。一部にふい黄色。内部褐色	北部D6h9、覆土中層	—	PL31 内面炭化物付着。大洞C2式

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第81図											
43	縄文 土器	台付鉢	脚台部、5%以下	— (40) [14.0]	ハの字状に開く脚台部。接合部近くでやや大きく開く。外面縄文。現状で通し2か所(形状不明)。その下位沈線沈線2条。間に連続刺突。内面ナデ	やや粗悪。メノウ粒中量。チャート粒・凝灰岩粒・赤褐色砂粒・雲母微量	やや不良。焼き甘くムラ	サンドイッチ状。外面灰黄褐色。内面赤褐色。器表下に、灰褐色。内部褐灰色	南部D7h2.覆土中層	—	PL31 大洞C2式
44	縄文 土器	壺	口縁～ 頸部、5%以下	[15.0] (35) —	頸部外反・外傾。口縁部は波状で現存4個の突起。うち1個はやや大きく、外面に突起に沿った沈線。やや小さい3個は強く外反し。内面に横位の沈線。肩部には突起間に2～3か所の刺突。頸部外面には横走沈線3条とその下に雲形文状の沈線。地文縄文か。器表荒れ	メノウ粒少量。メノウ礫・石英粒・砂岩粒・雲母細粒微量	不良。焼き甘い	サンドイッチ状。内外面に、黄褐色。内部と表面の一部黒色	中央部D7h1.覆土中層	—	PL31 大洞C2式
45	縄文 土器	壺	口縁～ 頸部、10%	[11.0] (62) —	内彎気味・外傾。口縁端部に連続刺突とB突起(単位不明)。頸部外面無節縄文を地文に沈線で区画し一部を磨り消し(彫去せず)。強化した雲形文を表現。内面ナデ、一部輪積み痕	褐色礫・メノウ粒・石英粒・凝灰岩粒微量	良好	褐灰色。内面一部に、黄褐色	南部D7h2.覆土中層	—	PL31 大洞C2式
46	縄文 土器	壺	口縁～ 胴部、5%	— (7.0) —	内彎・内傾する胴部から緩やかに外反する頸部・口縁部。口縁端部に浅い沈線を巡らす。口縁部外面ミガキ。頸部外面連続刺突とその下に雲形文・三叉文。胴部外面網目状撫糸文。内面ナデ。上半ミガキ	メノウ粒少量。石英粒・輝石粒・雲母微量	良好	内外面黒褐色。一部暗褐色	推定北部D6h8.覆土中層	—	PL31 大洞C2式
47	縄文 土器	壺	胴部、5%	— — —	内彎。内傾。最大径22～23cmか。外面無節縄文を地文に磨消縄文手法により雲形文を抽出。磨消部は彫去しない。内面粗いミガキ	メノウ粒少量。メノウ礫・石英粒・凝灰岩粒・褐色砂粒・輝石粒・雲母。骨片微量	普通。焼けムラ	外面褐灰色。内面暗灰黄色	南部D7h2.覆土中層	3片	PL31 大洞C2式
48	縄文 土器	注口土器	胴部、5%以下	— (4.5) —	内彎・外傾から強く屈曲して外反・内傾。屈曲部に突起(単位不明)と、突起を始点とする沈線。外側に浅いキサミ。突起を除く最大径[24]cm。突起を上位に沈線と連続刺突。下位に横走沈線3条と磨消縄文。内面ミガキ。屈曲部内面粘土粒接合痕。上位粘土粒の接合面に浅いキサミ状押痕	やや精良。メノウ礫・メノウ粒・凝灰岩粒・凝灰岩粒微量	良好	サンドイッチ状。外面黒褐色。灰黄褐色。内面黒褐色。内部褐灰色	北部D6h9.覆土上層	同一個体2片接合せず	PL31 接合しな しい2片を 図上復元。大洞C1式
49	縄文 土器	注口土器か	胴部、5%以下	— — —	外傾から屈曲して内傾する胴部最大径〔22～23〕cm付近。最大部分に粘土粒を貼り一部に突起。突起を始点に左右に沈線。上下に横走する溝と沈線。内面ミガキ	メノウ粒少量。チャート粒・凝灰岩粒・雲母細粒・海綿骨針微量	良好	サンドイッチ状。外面に、黄褐色・黒褐色。内面に、黄褐色。内部褐灰色	北部D6h8.覆土上層	—	PL31 大洞C2式
50	縄文 土器	深鉢	口縁部、5%以下	— — —	内彎気味・外傾。波状口縁。波頂に、中央に凹みをもつ突起。口縁部外面横位の撫糸文。その下に横走沈線。口縁部直下内面横走沈線。その下粘土粒を貼って肥厚させる。内面ナデ	メノウ粒少量。メノウ礫・チャート粒・凝灰岩粒微量	良好	サンドイッチ状。内外面に、黄褐色。内部褐灰色	中央部D6h0.覆土上層	—	PL31 大洞A式
51	縄文 土器	深鉢	口縁～ 頸部、5%以下	— — —	外反・外傾。複合口縁。口縁部外面横位の撫糸文。頸部ミガキ。内面ナデ。一部ミガキ状	メノウ粒少量。凝灰岩粒・雲母微量	普通	サンドイッチ状。外面灰黄褐色。内面に、黄褐色。内部褐灰色	北部D6h8.覆土上層	—	PL31 大洞A式

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第81図	52	縄文 土器	口縁～ 胴部、 5%以下	— — —	薄手。外反する頸部から口縁部。頸部上半から口縁部外傾。複合口縁。外面横位の燃糸文。頸部下端肥厚。頸部外面ミガキ。内面ミガキ。一部輪積み痕	メノウ粒少量、メノウ礫・チャート粒・凝灰岩粒微量	普通	サンドイッチ状。外面黒褐色。内面にふい赤褐色。内部灰褐色	南部D7h1、覆土上層	2片	PL31 大洞A式
第82図	53	縄文 土器	口縁～ 胴部、 5%以下	— — —	外反気味。わずかに外傾。波状の複合口縁。口縁部外面斜位の燃糸文。胴部外面粗いミガキ。内面ミガキ	メノウ粒少量、メノウ礫・チャート粒・凝灰岩・雲母細粒微量	良好	サンドイッチ状。外面にふい黄褐色。内面にふい赤褐色。内部黒灰色	北部D6h9、覆土上層	—	PL31 大洞A式
54	縄文 土器	深鉢	口縁部、5%以下	— — —	薄手。外反する頸部からわずかに内彎・外傾する口縁部。複合口縁。口縁部外面横位の燃糸文。頸部ミガキ。内面ナデ	メノウ粒中量、メノウ礫・凝灰岩・黒色砂粒・褐色砂粒・雲母細粒微量	普通。焼けムラ	外面にふい赤褐色・黒褐色	北部D6h8、覆土上層	4片	PL31 大洞A式
55	縄文 土器	壺	口縁～ 頸部、 5%以下	[7.0] (28)	肩部から括れて外反・外傾する口縁部。4単位位の波状口縁。口縁部外面と頸部外面に細い沈線を巡らす。内外面ミガキ。外面は特に丁寧なミガキ	やや精良。メノウ粒・赤褐色砂粒微量	良好	外面にふい黄褐色。内面黒灰色	北部D6h9、覆土上層	—	PL32 大洞A式
56	縄文 土器	深鉢	口縁～ 胴部、 5%以下	— — —	直線的。外傾。複合口縁。粘土帯貼り付けの終始の重なり明瞭。胴部外面無文（指ナデ）。胴部外面横位の細い沈線4条。のらねの細い沈線3条。内面ナデ	メノウ粒少量、チャート粒・凝灰岩粒・凝灰岩・雲母細粒微量	良好	外面にふい黄褐色。内面にふい褐色	南部D7h1、覆土上層	—	PL32 晩期粗製土器
57	縄文 土器	深鉢	口縁部、5%	[12-13 前後] (98)	小型。薄手。わずかに内彎・外傾。口縁は単純な平縁。外面口縁部に横位の、胴部に縦位の波状条線文。条線の単位は3条。施文順は口縁部→胴部。内面ナデ、粗いミガキ	メノウ粒少量、チャート粒・赤褐色砂粒・雲母細粒微量	良好。二次焼（火ハネあり）	内外面黒褐色・灰黄褐色	北部D6h9、覆土中層	3片	PL32 後期粗製土器
58	縄文 土器	深鉢	胴部、5%以下	(126)	内彎気味。外傾。外面縦位の波状条線文。条線は6条単位。内面ナデ	メノウ粒少量、砂岩礫・石灰粒・チャート粒・赤褐色砂粒・海綿骨針微量	普通。二次焼成	サンドイッチ状。内外面にふい黄褐色。内部黒灰色	中央部如付近D6h0、覆土下層	9片	PL32 晩期粗製土器
59	縄文 土器	深鉢	口縁～ 胴部、 5%以下	— — —	内彎。内傾。複合口縁。口縁部外面2条単位の横位の短沈線。胴部太い網目状燃糸文。内面ナデ。内外面一部輪積み痕が残る	メノウ粒少量、チャート粒・凝灰岩・雲母細粒・海綿骨針微量	やや不 良。焼 き甘 い	外面にふい黄褐色。内面浅黄褐色	北部D6h9、床土10cm以下一括	—	PL32 晩期粗製土器
60	縄文 土器	深鉢	口縁～ 胴部、 5%以下	(67)	内彎・内傾。複合口縁。口縁部外面ナデ。胴部外面網目状燃糸文。輪積み痕。内面粗いミガキ	メノウ粒少量、凝灰岩・チャート粒・赤褐色砂粒微量	やや不 良。焼 き甘 い	内外面にふい黄褐色	中央部D7h1、覆土上層	—	PL32 晩期粗製土器（大洞C2式）
61	縄文 土器	深鉢	胴部、5%	— — —	内彎。わずかに外傾。現存部径26～27cm前後。外面網目状燃糸文。内面ミガキ	メノウ粒少量、メノウ礫・チャート粒・凝灰岩・赤褐色砂粒・雲母細粒微量	普通	サンドイッチ状。外面にふい黄褐色。内面にふい褐色。内部灰黄褐色	南部D7h2、覆土上層	—	PL32 晩期粗製土器（大洞C2式）
62	縄文 土器	深鉢	口縁～ 胴部、 10%	[14-20 程度] (81)	内彎気味。外傾。口縁部直み。口縁部現状1か所にA突起。頸部外側1か所に突起。頸部に突起を始点とする沈線を巡らす。外面縦位の燃糸文。内面ナデ	メノウ粒少量、メノウ礫・チャート粒・凝灰岩・褐色砂粒微量	やや不 良。焼 き甘 い	内外面褐色	北部D6h8、覆土上層	3片	PL32 ほかに同一個体片13片。晩期粗製土器

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第82図											
63	縄文 土器	深鉢	口縁～ 胴部、 10%	[30.0] (12.2)	内嚢、外傾。複合口縁。胴部 内外面粗いミガキ、一部輪積 み痕	メノウ粒少 量、石英粒・ 凝灰岩粒・赤 褐色砂粒微 量	普通	サンドイッチ 状。外面灰黄 褐色・黒褐色 内面、内ぶい 褐色。内部褐 灰色	南部 D7h2、 覆土中 層	4片	PL32 内外面炭 化物付 着。後・ 晩期粗製 土器
64	縄文 土器	深鉢	口縁～ 胴部、 5%以下	—	薄手。内嚢、外傾。複合口縁。 外面ナデ、内面粗いミガキ	メノウ粒少 量、石英粒・ 泥岩礫・海綿 骨針微量	やや不 良	外面・内部黒 色。内面、ぶ い黄褐色	北部 D6h8、 覆土中 層	2片	PL32 晩期粗製 土器
65	縄文 土器	鉢	口縁～ 胴部、 20%	[8.2] (4.2)	やや潰れた球形の中・下位 のような器形（底部不明）。直 口縁。内外面ミガキ	精良。メノウ 細粒・泥岩細 粒・海綿骨針 微量	普通。 焼きや や甘い	内外面、ぶい 黄褐色	南部 D7h2、 覆土中 層	2片	PL32 内面植物 茎(?)の 圧痕。晩 期か
66	縄文 土器	壺か	胴部、 15%	(8.7)	やや小型。内嚢、外傾して立 ち上がり。縦やかな後を持つ て内傾。楕円球状。最大径[約 15]cm。無文。外面ナデ、内 面ミガキ	メノウ粒少 量、凝灰岩礫・ 泥岩礫・黒色 砂粒・海綿骨 針微量	普通	サンドイッチ 状。外面灰黄 褐色・褐灰色 内面灰黄褐色 。内部褐灰 褐色	南部 D7h2、 覆土中 層	8片	PL32 大綱C1 式か
67	縄文 土器	深鉢	胴部、 5%以下	—	外反。外傾。外面ナデ、輪積 み痕顕著。内面ミガキ	メノウ粒少 量、チャート 粒・黒色砂 粒・雲母細粒 微量	普通。 二次焼 成	サンドイッチ 状。外面にぶ い黄褐色。内 面灰黄褐色。 内部黒褐色	南部 D7h1、 覆土上 層	—	PL32 同一個体 片4片。 うら1片 内外面に わずかに 炭化物付 着。晩期 か
68	縄文 土器か	深鉢	胴～底 部、10 %	(5.0) 6.7	やや丸底欠味。底面木葉痕の 跡付く。胴部外傾して立ち上 がる。内外面ナデ	チャート礫 少量、メノウ 礫・メノウ 粒・雲母細粒 微量	普通。 焼けム ラ	内外面明黄褐 色・内面灰 黄褐色・黒褐色	北部壁 付近 D6h8、 覆土上 層	5片	PL33
69	縄文 土器	深鉢	底部、 5%以下	(3.1) 5.4	平底から胴部が外傾して直線 的に立ち上がる。外面ヘラケ ズリ、粗いミガキ。内面ヘラ ナデ。底部ヘラナデ	メノウ粒少 量、メノウ礫・ 石英粒・チャ ート粒微量	普通。 二次焼 成	外面橙色・褐 灰色。内面灰 黄褐色	中央部 D7h1、 覆土下 層	—	PL33
70	縄文 土器	台付 鉢	底～脚 部、5 %	(5.4) [13.8]	厚手。平底にハの字状に開く 脚台が付く。内外面ミガキ。 脚台内部ナデ、一部ミガキ状 物微量	やや粗悪。メ ノウ粒・凝灰 岩粒少量、凝 灰岩礫・赤褐 色礫・黒色炭 化物微量	普通	サンドイッチ 状。鉢部内面 灰黄褐色。外 面にぶい黄褐 色。脚台内 部、ぶい黄褐 色。内部黒色	南部 D7h2、 覆土上 層	同一個 体2片 接合せ ず	PL33 接合しな い2片を 図上復元。 晩期か
71	縄文 土器	壺	口縁～ 胴部、 5%以下	[14.0] (4.7)	内傾する胴部から直線的に立 ち上がり外傾して口縁に至 る。内外面に縦い後。頸部外 面ケズリのちナデ、一部ミガ キ状。内面ミガキ	メノウ粒少 量、凝灰岩礫・ 石英粒・チャ ート粒・赤褐 色砂粒・雲母 細粒微量	普通。 焼けム ラ	サンドイッチ 状。内外面灰 黄色・にぶい 黄褐色。一部 褐灰色。内部 褐灰色	南部 D7h2、 覆土上 層	2片	PL32 晩期中葉
第83図											
72	縄文 土器	小型 壺	胴～底 部、80 %程度 か	(6.2)	丸底で胴部は扁球形。屈曲し て頸部が立ち上がるが欠損。 欠損部は摩耗しており欠損し た状態で再利用されたか。外 面無文（ミガキ）。内面ナデ、 一部輪積み痕。胴部下半の一 部が不整楕円形に脱落（意図 的かは不明。現状接合）	メノウ粒少 量、メノウ礫・ 石英粒・チャ ート粒・褐色 砂粒・海綿骨 針微量	普通。 焼けム ラ。二次 焼成	外面面、ぶい 赤褐色・灰黄 褐色・にぶい 黄褐色・黒色。 内面・内部黒 褐色	中央部 西側 D6h0、 覆土下 層	胴部 下半の 脱着部 接合	PL33 土器内か らメノウ 細片・焼 骨微細 片・炭化 粒が検出 されたが、 有意の ものとは 認めら れない。 安行3b 式か

神図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第83図 73	縄文 土器	小型 壺か	口縁～ 胴部、 20%程 度か	[52] (5.0)	内髷・内傾する胴部から外反する口縁部。薄手。外面ミガキ、内面指ナデ	精良。メノウ粒・海綿骨針微量	良好	にぶい黄褐色。黒褐色	北部壺形D6h8、覆土中層	2片	PL32 内面に一部赤色顔料付着(外面もか)
74	縄文 土器	ミニ チュエ 土器 (鉢)	口縁～ 底部、 95%	3.6	丸底から胴部が内髷・外傾して立ち上がり、強く内傾して口縁部にいたる。胴部上位で最大径5.3cm。手埴ね。内外面ナデ	メノウ粒少量。石英粒・チャート粒・雲母・海綿骨針微量	普通。焼けムラ	外面にぶい黄褐色・橙色。黒褐色。内面黒褐色	南部D7h2、覆土上層	—	PL33 晩期か
75	弥生 土器	小型 壺	胴～ 底部、 20%	— (5.3) [46]	丸底から内髷・外傾して立ち上がり、上部で強く内傾。外面肩部に2条の横走沈線と2段の連続刺突。胴部に3条1単位の縦位の沈線。6単位か。底面周囲に2条の沈線。施文具はいずれも角棒状。内面ナデ	メノウ粒少量。チャート粒・輝石粒・海綿骨針微量	普通。二次焼成	内外面褐灰色。一部褐色	中央部D6h0、覆土上層	2片	PL33 前期
76	弥生 土器	壺か	胴部、 5%以 下	—	外傾。内髷。外面斜交する附加条縄文。内面ナデ	石英粒少量。メノウ粒・チャート粒・雲母細粒・海面骨針微量	良好。二次焼成	内外面黒褐色。灰黄褐色	中央部D6h0、覆土上層	4片	PL32
77	弥生 土器	壺か	胴～底 部、5 %以下	— (4.2) 6.9	やや薄手。平底から胴部が外反・外傾して立ち上がる。外面粗いミガキ、内面ナデ。底面布目痕	メノウ粒少量。石英粒・チャート粒・輝石粒・雲母細粒微量	普通	外面にぶい黄褐色。内面にぶい橙色	中央部D6h0、覆土上層	—	PL33
78	弥生 土器	壺か	底部、 5%以 下	— (1.8) [96]	平底から胴部が外傾して立ち上がる。内外面ナデ。底部網代痕(旧・木葉痕(新))	メノウ粒少量。泥岩粒・雲母・海綿骨針微量	良好	サンドイッチ状。外面灰褐色。内面褐灰色。器表下にぶい褐色。内面褐灰色	中央部D7h1、覆土上層	—	PL33

神図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第83図 79	耳飾	径 1.6	厚さ 1.0	0.5	1.6	小型のいわゆる耳栓。中心に円孔を有し、断面はくの字に近い。表面ナデ	メノウ粒少量。石英粒・チャート粒微量	普通	灰褐色	中央部D6h0、覆土上層	—	PL33 完存
80	土偶	(52)	(33)	厚さ (2.9)	(425)	頭部。後下方の体部から連続(破損)。顔面は目を凹形の沈線で、口を棒による刺突で表現。鼻は剥落。周縁には部分的に連続刺突。頭部は高く作る。鬘の表現か。表面ナデ	メノウ粒少量。石英粒・褐色砂粒・雲母細粒・海綿骨針微量	やや不 良。焼 けムラ	にぶい 黄橙 色。黒 褐色	北部D6h8、覆土上層	—	PL33 一部残存
81	土偶	(47)	(38)	—	(190)	中空土偶の肩部か。外面縄文を地文に渦巻き状の沈線施文。一部磨り消し。内面ナデ。粘土帯折り曲げによる盛り上がり	メノウ粒中量。石英粒・凝灰岩粒・褐色砂粒・海綿骨針微量	普通	内外面 褐灰 色。器 表下 にぶ い橙 色	中央部D7h1、覆土上層	—	PL33 一部残 存。晩 期
82	土偶	(49)	(33)	厚さ (3.2)	(370)	形状及び表裏の調整からミミズク土偶の右腕と推定。粘土版の上腕外側に粘土紐2本を巻き付け、細かい連続刺突各2～4段。表面ヘラナデ。一部ヘラナメリが残る	メノウ粒少量。石英粒・チャート粒・褐色砂粒	普通	にぶい 黄橙 色。灰 褐色	中央部D7h1、覆土上層	—	PL33 後～晩 期
83	土鉢	49	27	—	31.6	長方形がかった長楕円形で厚さ21cm。有溝土鉢。溝は長軸方向に一周	メノウ粒中量。メノウ礫・石英粒・チャート粒・褐色砂粒微量	普通。焼けムラ	にぶい 黄橙 色。黒 褐色	中央部D6h0、覆土上層	—	PL33 完存

挿図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第83図												
84	土製有 孔円盤	(5.3)	(3.8)	[1.5] [0.4]	(18.8)	径[9]cm前後の円盤。中心にやや大きな貫通孔を1孔。中心から2〜2.5cm付近に小さな貫通孔を現状で1孔もつ。厚さは中心孔付近で1.0cm、周辺部で0.7cm。表面粗いミガキ	メノウ粒中量、石英粒・チャート粒微量	普通。焼けムラ	にぶい黄褐色、黒色	南部D7h2、覆土中	—	PL33 一部残存。植物片圧痕
85	土器片 円盤	5.2	4.8	—	20.4	土器片の周縁を折って整形。素材は赤褐色を施した縄文後晩期粗製土器	メノウ粒少量、チャート粒・雲母・海綿骨針微量	普通	内外面褐色、内部明褐色	中央部D6h0、覆土上層	—	PL33 完存
86	土器片 円盤	3.6	3.4	—	9.8	縄文土器片の周縁を切断して円形に作る。厚さ0.8cm。土器の外面に縄文器表泥れにより詳細不明	メノウ粒少量、チャート粒・輝石粒・雲母微量	二次焼成	褐色、浅黄褐色	南部D7h2、覆土中	—	PL33

挿図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第84図										
87	石剣	(14.6)	2.9	2.8	(134.9)	粘板岩	断面円形の縦長の頭部から断面杏仁形の剣身の一部が残存。頭部に上下刻文部に挟まれた1周4単位の六角形を二段彫刻。剣身部分は丁寧に研磨。一部被熱痕	北部壁際D6h8、覆土中層	細片多数	PL34 一部残存
88	石剣 未成品	41.1	3.1	1.9	320	粘板岩	頭部と剣身部の間に段を有する。頭部断面楕円形。剣身部断面杏仁形。軸に斜交する粗い研磨調整痕顕著。一部敲打成磨痕が残る	北部D6h8、攪乱中層	—	PL34 完存
89	石剣	(7.8)	(2.7)	(1.7)	(55.1)	粘板岩	図下部の挟り等から石剣頭部と判断。頭部剥離面にも敲打痕。挟りは敲打と磨りにより作出。剥離面の敲打は右上から左上に連続	南部D7h2、覆土上層	—	PL34 一部残存
90	石剣	(4.2)	(3.8)	(2.3)	(41.9)	白色凝灰岩	頭部直下の身部。境界は段差ない薄状。身部先端に向かってわずかに太さを増す。断面楕円形で身部の一部個縁に鋭い稜。身部表面に軸直交またはわずかに斜交する細かい丁寧な研磨調整痕。頭部近くの1cm程はより丁寧な調整によりわずかに細まり微妙な溝沢をもつ	南部D7h2、覆土中層	—	PL33 一部残存
91	石剣	(11.3)	(2.5)	(1.8)	(57.0)	粘板岩	断面杏仁形の棒状品。図下位は厚くなるが端部が自然面と思われ、先端部と判断した。表面軸平行及び斜交の研磨痕。一部敲打痕	北部D6h9、覆土中層・攪乱中層	2片	PL33 一部残存。被熱痕
92	石剣	(6.9)	4.0	(1.7)	(70.0)	粘板岩	両端破断。断面楕円形。正面と左右個縁に敲打整形。表面左個縁には成形時の剥離面が残る。個縁のわずかな括れは意図的か。被熱。図上端は被熱後破断、下端は破断後被熱。正面・表面の一部被熱後剥離	北部D6h9、覆土中層	—	PL33 一部残存
93	石刀	(8.7)	(3.3)	(0.8)	(35.3)	粘板岩	扁平。図右個縁が面をなし鋒の様相のため石刀と判断。下端に磨り切り痕。表面軸斜交のち軸方向の研磨調整。右個縁下部の明瞭な擦痕は二次的な加工か	北部D6h8、覆土上層	—	PL34 一部残存
94	石棒か	(10.6)	(2.3)	(0.6)	(21.3)	粘板岩	断面円形か。表面軸方向。一部斜交の研磨調整。一部敲打痕が残る	北部D6h9、覆土上層	—	PL34 一部残存
95	石剣 未成品	(20.0)	(3.0)	(1.6)	(133.1)	粘板岩	断面杏仁形の棒状品。図下端は磨り切り後研磨調整。剣身部表面軸直交に近い斜交の粗い研磨痕が顕著で、研磨面ごとに稜をもつ。一部敲打痕が残る	南部D7h2、覆土中層・下層	—	PL34 主要な5片残存。被熱痕
第85図										
96	石剣 未成品	(23.2)	4.0	1.9	(257.0)	粘板岩	石剣の剣身部分か。扁平な棒状。断面楕円形。全体に敲打痕。一端は折損、もう一端は徐々に細くなるため先端部分に近いと推定	北部壁際D6h8、覆土中層	—	PL34 一部残存
97	石剣	(16.6)	(2.9)	(1.8)	(155.8)	緑色片岩	断面杏仁形の剣身部。両端を欠くが、図上位が幅が小さいにもかかわらずわずかに厚く、頭部個と判断した。研磨調整。調整痕が残らないまでに丁寧に研磨	南部D7h2、床面直上	—	PL34 一部残存

神図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第85図										
98	石剣	(5.6)	(3.6)	(1.4)	(33.8)	緑色片岩	側縁は稜をもち、断面杏仁形の様相。石剣 身部と推定。表面軸斜交の研磨調整痕	中央部 D6h0. 覆土上 層	—	PL34 一部残 存。一部 に被熱か (煤状物 質付着。 亀裂)
99	石刀	(8.7)	2.8	(1.0)	(30.7)	粘板岩	両端破断、裏面剥離。断面楕円形に近いが、 因石側縁は刃、左側縁は峰の縁相のため石 刀と判断。表面軸斜交の粗い研磨調整。一 部敲打痕が残る	北部 D6h9. 覆土上 層	—	PL34 一部残存
100	石棒錘	(8.6)	(3.1)	(0.9)	(24.7)	粘板岩	やや扁平な様相と整形面の彎曲からは石剣 頭部か。表面敲打整形	中央部 D7h1. 床土10 ~20 cm土塊 の水洗 選別	—	PL34 一部残存
101	石棒	(6.7)	(2.2)	(0.7)	(10.6)	粘板岩	断面円形か。表面敲打痕	北部 D6h9. 覆土中 層	—	PL34 一部残存
102	磨製 石斧	(5.5)	(4.0)	(3.0)	(85.0)	緑色片岩	頭部片。敲打成形後、研磨調整。一部に敲 打痕が残る。断面隅丸長方形	北部 D6h9. 覆土上 層 覆土 中	—	PL35 一部残存
103	磨製 石斧	8.7	3.2	1.6	68.6	緑色片岩	薄い稜の表裏と周囲を研磨調整。表裏面 の一部に素材時の自然面が残る。一端に両方 の刃部を作出	中央部 D6h0. 覆土上 層	—	PL35 完存
104	磨製 石斧	(12.9)	(3.1)	(2.1)	(84.5)	緑色片岩	節理で破損。両刃。表裏面に斜交する研 磨調整。部分的に敲打痕が残る	中央部 D6h0. 覆土上 層	—	PL35 一部残存
105	石錘	6.7	4.6	1.4	59.3	黄青色ホ ルンフェ ルス	扁平な不整形円礫を利用。両端に磨りによ る切れ目。切れ目は表で長く、裏で短い	中央部 D6h0. 覆土中 層	—	PL35 完存
106	石錘	(5.6)	(4.7)	1.0	(37.2)	粘板岩	扁平な楕円礫をそのまま利用。両端に磨 りによる切れ目。一端から側縁の一部に敲打 痕	中央部 D7h1. 覆土中 層	—	PL35 一部欠損
107	石錘	4.8	4.1	1.3	35.2	泥質ホル ンフェル ス	扁平な楕円礫を利用。両端に磨りによる切 れ目。切れ目は幅広く長い	北部 D6h9. 擾乱中	—	PL35 完存
108	磨石	(5.8)	(5.0)	(3.4)	(81.2)	多孔質 安山岩	やや扁平な不整形楕円礫を利用。表面と周 縁を一部研磨整形して使用。裏面は多くを欠 失するが尾根状に盛り上がる様相	北部 D6h9. 覆土上 層	—	PL35 一部欠損
109	磨石	(8.1)	(5.4)	4.1	(40.9)	浮石	やや扁平な楕円礫を利用。加工・使用とも 不明だが、形が整い上面がやや平滑なこと から磨石と推定	北部壁 際 D6h8. 覆土上 層	3片	PL35 一部残 存。被熱。 同一個体 片1片
110	敲石	6.4	5.6	4.7	191.0	多孔質 安山岩	楕円礫を利用。両端を使用。使用痕はわず か	北部 D6h9. 擾乱中	—	PL35 完存
第86図										
111	磨石・ 敲石	7.3	6.8	2.9	212	多孔質 安山岩	扁平な不整形楕円礫を利用。全面を研磨 整形の上、やや平坦な一端(図下部)を主に 使用か	南部 D7h2. 覆土中 層	—	PL35 完存
112	敲石	6.8	3.3	2.0	72.0	砂岩	やや扁平な不整形楕円礫をそのまま利用。 両端周辺を回転運動による敲打で使用	中央部 D6h0. 覆土中 層	—	PL35 完存
113	敲石・ 磨石	9.5	8.8	4.8	537	砂岩	やや扁平な楕円礫を利用。周縁を敲石、両 端を磨石として使用。厚みのある下端は特 に激しい使用。表裏面中心部を敲石または 白石として使用。裏面中央部はわずかに凹 みが発生	南部 D7h2. 覆土中 層	—	PL35 一部欠損

神図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考	
第86図	114	磨石・ 敲石	6.5	5.6	3.4	178.0	多孔質 安山岩	やや扁平な不整楕円磔を利用。表裏面を一 部研磨整形の上、両端を使用	中央部 D7h1、 覆土中 層	—	PL35 完存
	115	敲石	5.1	4.8	4.3	155.9	安山岩	球形磔を利用。わずかに長い軸の両端を敲 打に使用。全面に擦痕。磨石としても使用 か	北部 D6h8、 覆土中 層	—	PL35 完存
	116	敲石	9.4	6.1	4.6	370	砂岩	やや扁平な楕円磔を利用。両端を使用。一 端に赤色顔料付着。側縁も若干使用か	中央部 D6h0、 覆土中 層	—	PL35 完存
	117	敲石	9.5	6.8	5.0	463	石英	不整楕円磔をそのまま利用。両端・1側縁・ 表面を使用	南部 D7h1、 覆土上 層	—	PL35 完存。赤 色顔料わ ずかに付 着か
	118	敲石	7.4	5.7	3.5	204	砂岩	やや扁平な楕円磔をそのまま利用。一端を 敲打に使用。使用面は角度の違う2面が連 続	北部 D6h9、 覆土上 層	—	PL35 完存
	119	敲石	6.5	5.6	4.1	215	石英	楕円磔をそのまま利用。一端を使用。使用 痕はわずか。使用痕付近に赤色顔料付着。 赤色顔料製造用か	中央部 D7h1、 覆土下 層	—	PL35 完存
	120	敲石	11.2	9.5	6.7	901	砂岩	やや扁平な楕円磔をそのまま利用。両端と 1側面を使用。使用痕はあまり顕著ではない	中央部 D7h1、 擾乱中	—	PL35 完存
	121	敲石・ 凹石	10.4	4.6	4.0	263	砂岩	長楕円磔をそのまま利用。両端と一端周辺、 側縁の一部を使用。両端は上下運動。一端 周辺は回転運動による敲打。表裏面はほぼ 中央に凹み	南部 D7h2、 覆土中 層	—	PL35 完存。部 分的に赤 色顔料付 着
	122	磨石・ 敲石	6.7	6.0	5.4	263	多孔質 安山岩	不整楕円磔をはほぼそのまま利用。両端と側 面の一部を使用	中央部 D7h1、 擾乱中	—	PL36 完存
第87図	123	砥石	(7.9)	(6.0)	(0.8)	(35.5)	砂岩	扁平な磔を利用。表面を砥面として使用。 表面は全体に滑らかで、部分的に特に滑ら かな部分あり。表面は剥離が激しく砥面と しての使用は不明	北部 D6h9、 覆土中 層	—	PL36 一部残存
	124	砥石	(9.1)	(5.6)	0.9	(56.0)	砂岩	長く扁平な磔を利用。表面を砥面として使 用。裏と側面は自然面。表面は全体にやや 滑らかで、2条のごく浅い溝状の使用痕	南部 D7h2、 覆土中 層	—	PL36 一部残存
	125	台石	(16.1)	14.1	9.2	(2180)	砂岩	大型磔を利用。両端から裏側は被熱により 大きく剥離。使用痕(敲打痕)は被熱して いない側の緩やかな頂部に集中し、一部積 にも。被熱と使用の先後関係は不明	北部 D6h8、 覆土中 層	—	PL36 一部欠損
	126	台石	(14.1)	(11.0)	(3.8)	(745)	砂岩	扁平な不整形磔をそのまま利用。表裏面と 一部側面に使用痕	北部 D6h9、 覆土上 層	—	PL36 一部欠損
	127	独鈷石	(4.0)	6.4	4.4	(112.1)	ホルンブ ェルス	独鈷石の節部と推定。断面は節・身部とも に楕円形。表面敲打整形、のち軸直交方向 の研磨調整	北部 D6h8、 覆土上 層	—	PL36 一部残存
	128	浮子	(4.6)	3.7	2.8	(10.6)	浮石	楕円球形の磔を利用。一端付近に貫通孔1 孔。孔は不整形形で長さ0.5cm、短径0.3cm。 孔以外の加工痕等は不明	北部 D6h9、 覆土中 層	—	PL36 一部残存
	129	石核	5.5	6.4	5.6	249	メノウ	外面は自然の剥離面がローリングを受け、 内部には細かい割れが随所に入った。石質 のやや不良な磔を利用。上面を剥離したの ち正面を剥離。不定形の薄片を剥離。利用 は2面のみ	中央部 D6h0、 覆土上 層	—	PL36 完存
第88図	130	石鏃	(28)	1.3	0.5	(1.2)	メノウ	凸形有茎鏃。先端と基部をわずかに欠損。 丁寧な剥離で整った形。茎部が長い	中央部 D6h0、 覆土中 層	—	PL36 一部欠損

神図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第88図										
131	石鏡	(29)	(13)	0.5	(1.2)	流紋岩	凸基有茎で身部銅線に段をもつ。いわゆる飛行機鏡の一種。先端部の小さな剥離は衝撃剥離痕か	北部 D6h8 +フレ 覆土上 層	—	PL36 一部欠損
132	石鏡	25	0.9	0.5	0.6	硬質頁岩	凸基有茎鏡。身に対し茎がやや長い。石材のため調整がやや粗く不安定	北部 D6h9. 床上0 ~10 cm土壌 の水洗 選別	—	PL36 完存
133	石鏡	(22)	1.1	0.4	(0.6)	流紋岩	凸基有茎鏡。身部の調整剥離やや不安定	北部 D6h9. 覆土上 層	—	PL36 一部欠損
134	石鏡	(21)	1.5	0.5	1.1	チャート	凸基有茎鏡。丁寧な調整	中央部 D7h1. 床上10 ~20 cm覆土 中	—	PL36 一部欠損
135	石鏡	(24)	1.5	0.4	(1.2)	メノウ	凸基有茎鏡。裏面に素材剥片時の剥離面が残る。両銅線は細かく丁寧な調整が連続	中央部 D7h1. 覆土上 層	—	PL36 一部欠損
136	石鏡	(17)	1.1	0.4	(0.6)	メノウ	平基有茎鏡。先端と茎の一部を欠損。一部に素材剥片時の剥離面が残る。一部に基部から先端部に至る長い剥離。先端の欠損は使用による衝撃剥離か	南部 D7h2. 掘乱中	—	PL36 一部欠損
137	石鏡	(16)	1.1	0.3	(0.4)	メノウ	凸基有茎鏡。透明感のある良質なメノウを利用。薄手。丁寧な調整。一部に素材剥片時の剥離面が残る	中央部 D7h1. 土壌サ ンプル の水洗 選別	—	PL36 一部欠損
138	石鏡	22	1.2	0.4	0.8	メノウ	平基有茎鏡。表表面を作出後、両銅線に微細な調整剥離を施し、鋸歯状に仕上げる。一部に自然面を残す	中央部 D7h1. 床上10 ~20 cm土壌 の水洗 選別	—	PL36 完存
139	石鏡	(22)	1.2	0.4	(0.9)	メノウ	透明感のある良質なメノウを利用。凸基有茎鏡。剥離がやや不安定。先端部に衝撃剥離痕	中央部 D6h9. 床上0 ~10 cm土壌 の水洗 選別	—	PL36 一部欠損
140	石鏡	(17)	1.1	0.3	(0.4)	メノウ	凸基有茎鏡。身に対し茎がやや長い。調整がやや粗く、素材剥片時の剥離面が残る	北部 D6h9. 床上0 ~10 cm土壌 の水洗 選別	—	PL37 一部欠損
141	石鏡	(17)	1.2	0.5	(0.7)	メノウ	小型の凸基有茎鏡。透明感のある良質なメノウを利用。先端を欠損。使用による衝撃剥離か	中央部 D7h1. 覆土中 層	—	PL37 一部欠損
142	石鏡	(25)	1.5	(0.4)	(1.0)	メノウ	凸基有茎鏡。裏面に先端部から入る大小の剥離面は使用による衝撃剥離痕	中央部 D6h0. 床上10 ~20 cm土壌 の水洗 選別	—	PL37 一部欠損
143	石鏡	(14)	0.9	0.5	(0.4)	メノウ	凸基有茎鏡。小型。一部に石英の結晶。先端と茎の一部を欠損	D7h1. ベルト 土壌か ら水洗 選別	—	PL37 一部欠損

神図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第88図										
144	石甌	(18)	08	0.4	(06)	メノウ	凸基有茎甌。剥離角が大きく、細身の割に厚みがある。茎先端部付近に自然面、裏面に素材剥片時の剥離面が残る	中央部D6h0。床面直上土壌の水洗選別	—	PL37 一部欠損
145	石甌	(19)	14	0.3	(08)	メノウ	尖基甌。薄く作るが、調整はやや粗く、裏面に素材剥片時の剥離面が残る。横長剥片を利用	中央部D6h0。床上10～20cm土壌の水洗選別	—	PL37 一部欠損
146	石甌	(22)	15	(0.6)	(12)	メノウ	基部欠損。凸基有茎甌か、全体が被熱・白化。正面に被熱による小剥離。基部の破損も被熱が原因か	中央部D6h0。覆土上層	—	PL37 一部欠損
147	石甌	(23)	12	0.7	(15)	メノウ	透明感のある良質なメノウを利用。凸基有茎甌。剥離角が大きく厚さが残る	北部D6h8サブトレ、覆土中層	—	PL37 一部欠損
148	石甌	(18)	0.7	0.4	(05)	メノウ	凸基有茎甌。柳葉形甌に近いが茎が明瞭。小型。剥離はやや不安定	北部D6h8。土壌から水洗選別	—	PL37 一部欠損
149	石甌	(18)	12	0.4	(07)	メノウ	凸基有茎甌。丁寧な調整で薄い器体。先端と茎を欠損。先端は使用による衝撃剥離か。破断面を含め表面白濁	北部D6h9。覆土中層	—	PL37 一部欠損
150	石甌	(20)	(1.4)	0.5	(1.1)	メノウ	尖基甌。先端と基部・側縁の一部を欠損。被熱により白濁と器表の一部剥離	中央部D7h1。覆土中層	—	PL37 一部欠損
151	石甌	(21)	1.0	0.5	(0.7)	メノウ	透明感のある良質なメノウを利用。尖基甌。丁寧な調整だが、剥離角が大きく、幅に比して厚みがある	中央部D7h1。床上10～20cm土壌の水洗選別	—	PL37 一部欠損
152	石甌	(22)	14	0.5	(1.1)	メノウ	透明感のある良質なメノウを利用。尖基甌。調整が一側縁から他の側縁近くまで横断するなどやや不安定	中央部D7h1。ベルト土壌から水洗選別	—	PL37 一部欠損
153	石甌	(24)	12	0.4	(09)	メノウ	細身の凹基無茎甌。調整剥離はやや不揃い。先端部欠損。使用による衝撃剥離か	南部D7h1。覆土中層	—	PL37 一部欠損
154	石甌	(3.3)	1.7	0.5	(1.7)	メノウ	凹基無茎甌。身部長く伸びる。側縁は屈曲。先端を欠損。使用による衝撃剥離か。基部付近に黒色物質が多数の点状に付着	南部D7h2。擾乱中層	—	PL37 一部欠損
155	石甌	22	12	0.4	0.7	メノウ	ピンクがかかった白色のメノウを利用。凹基無茎甌。一部に石英の結晶をもつ凹みが残る	中央部D7h1。床上10～20cm土壌の水洗選別	—	PL37 完存
156	石甌	17	12	0.3	0.5	メノウ	凹基無茎甌。透明感のある良質なメノウを利用。一部に自然面と素材剥片時の剥離面が残る	北部壁際D6h8。覆土中層	—	PL37 完存
157	石甌	20	1.3	(0.4)	(0.7)	メノウ	凹基無茎甌。被熱により特に裏面は大きく剥離	南部D7h2。覆土上層	—	PL37 一部欠損

神図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第89図 158	石鏡	(17)	1.6	0.4	(1.0)	メノウ	凹基無茎鏡。一部に素材剥片時の剥離面が残る。先端部欠損。使用による衝撃剥離か	中央部 D6h0。 覆土中	—	PL37 一部欠損
159	石鏡	(15)	1.5	0.4	(0.8)	メノウ	凹基無茎鏡。先端部を欠損。丁寧な剥離調整により薄手。刃部調整は微細。	中央部 D7h1。 床土10 ~20 cm土壌 の水洗 選別	—	PL37 一部欠損
160	石鏡	(17)	1.6	(0.3)	(0.6)	メノウ	凹基無茎鏡。被熱のため白濁と大きな剥離	北部 D6h8。 覆土下 層	—	PL37 一部欠損
161	石鏡	(24)	(1.4)	(0.3)	(0.6)	チャート	凹基無茎鏡。一部自然面が残るが刃部調整は微細で丁寧。先端と脚部等欠損。先端は使用による衝撃剥離。他は被熱による剥離	中央部 D7h1。 ベルト 土壌か ら水洗 選別	—	PL37 一部残存
162	石鏡 未成品	28	1.5	0.6	20	メノウ	一部に自然面。裏面に素材剥片時の剥離面を残す。正面基部付近に調整を加える。尖基鏡を志向か。天地逆で石鏡未成品の可能性も	中央部 D6h0。 床土10 ~20 cm土壌 の水洗 選別	—	PL37 完存
163	石鏡	(25)	(0.6)	(0.5)	(0.9)	メノウ	頸部を欠損。鏡部は細く長い。断面は両側縁からの剥離角の大きな剥離により菱形ないしほぼ方形	南部 D7h2。 掘乱中	—	PL37 一部残存
164	白玉	1.0	0.9	0.4	0.6	ヒスイ	表裏及び周縁を磨りにより整形。一部に割れ面が残る。中心に円孔1孔。孔径は終始一定	南部 D7h2。 床面直 上土壌 の水洗 選別	—	PL38 一部欠損
165	丸玉	径1.1		0.7	1.5	ヒスイ	ほぼ全面を研磨調整。一部に自然面が残る。中央に円形の貫通孔。両面穿孔。穿孔面はそれぞれ工具先端の形状を反映し筒形。孔径表裏面側4mm、最小1.4mm	北部 D6h9。 覆土上 層	—	PL38 完存
166	垂飾	1.7	(0.8)	0.5	(1.1)	ヒスイ	不整楕円形の礫を利用。周囲と表裏面の一部を研磨調整。中央やや上(太い面)に円形の貫通孔1孔。片側穿孔。穿孔面は工具先端の形状を反映し筒形。孔径表面側4mm、裏面側2mm	北部 D6h9。 覆土上 層	—	PL38 一部欠損
167	垂飾	1.8	1.5	0.3	0.9	凝灰岩	扁平な礫に片側穿孔の円孔1孔。位置は中心から長軸方向にずれる。穿孔孔径0.9cm以上	中央部 D7h1。 床土10 ~20 cm土壌 の水洗 選別	—	PL38 完存

神図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第89図 168	刺突具	(0.9)	0.5	0.2	(<0.1)	エイ類 尾棘	断面扁平で中央に膨らみをもち両側縁が鋭角状。加工痕等は認められない刺突具と推定	北部 D6h9。 床土0 ~10 cm土壌 の水洗 選別	—	PL38 一部残存
169	髪針	(2.0)	1.2	0.4	(1.5)	骨	骨の外面を利用。裏面と図下部を除く周囲を磨り切り。表面にT字状文を大小3個刻む。髪針頭部と推定	南部 D7h2。 掘乱中	—	PL38 一部残存
170	髪針	(0.7)	(0.5)	(0.3)	(<0.1)	骨	頂部破片だが上部を欠損。身体は径約4mmの断面円形で、頂部から約2mmを残し欠損。頂部は径6mm前後と太く、側面に4単位(推定)の横長の楕円形を彫り込む。全体に赤色塗彩。段差・楕円形彫り込み部分に顔料が厚く残る	南部 D7h2。 床面直 上土壌 の水洗 選別	—	PL38 一部残存

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第89図 171	髪針	(1.9)	(0.3)	(0.25)	(<0.1)	骨	断面不整形の棒状品片。表面に調整痕と思われる軸斜交、一部直交の擦痕	北部D6h9, 床上0~10cm土壌の水洗選別	—	PL38 一部残存。写真 は部分
172	髪針	(0.8)	0.4	0.3	(0.1)	骨	断面楕円形の棒状品片。加工痕等は認められないが髪針と推定	中央部D7h1, 床上10~20cm土壌の水洗選別	—	PL38 一部残存。被熱 し表面風 化。出土 時は破損 後被熱。 下端は被 熱後破損
173	髪針か	(1.2)	(0.1)	断面 (0.04)	(<0.1)	骨	1面に骨表面が残り、表面側に反る。反りは破損または被熱によるものか。表面に軸斜交の擦痕(調整痕か)	南部D7h2, 床上10~20cm土壌の水洗選別	—	PL38 一部残存。被熱 黒化

(ii) 土坑

第179号土坑 (SK179, 第75図)

位置 D7h3区に位置する。第II 2層上面及び西壁のセクションで確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に延びるが、平面は径60cm前後の円形になると考えられる。深さは18cmで、断面は皿状を呈する。

土層 1層しか確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説

19 暗褐色(7.5YR3/3) ローム粒子少量、締まり中、粘性中

遺物 土器等8点、石製品1点が出土している。うち縄文土器1点(深鉢)を掲載する(第90図, 第21表)。

所見 出土遺物から、縄文時代後期の所産と考えられる。



第90図 第179号土坑出土遺物実測図

第21表 第179号土坑出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第90図 1	縄文土器	深鉢	口縁~ 胴部 5%	[45.8] (11.3) —	内彎, 内脣。口縁部を肥厚させ指頭による押し文。胴部外面縄文。内面ナデ	Mノウ粒少量 石英粒・ 雲母片・白色 砂粒・黒色砂 粒・チャート 粒微量	良好	サンドイッチ 状。内外面に ぶい黄褐色内 部褐色	覆土中	3片	PL38 ほかにも同 一器体6 片。 後期後葉 粗製土器

②弥生時代

(i) 土坑

第176号土坑 (S K 176, 第75・76図)

位置 D 6 h 9区に位置する。第Ⅲ層上面及び東壁のセクションで確認できた。

規模と形状 平面は、確認できる長軸が57cm、短軸48cm、長軸方向がN-24°-Eの楕円形である。

確認できた深さは45cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

重複関係 第26号竪穴住居跡、第185号土坑を切っている。

土層 3層が確認でき、レンズ状の自然堆積である。

土層解説 (第76図)

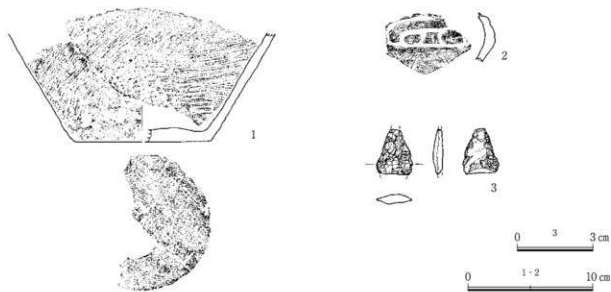
12 暗褐色 (7.5Y R 3 / 3) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、骨片少量、締まり中、粘性中

13 黒褐色 (7.5Y R 3 / 2) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、小礫少量、N t - S極少量、締まり中、粘性中

14 黒褐色 (7.5Y R 3 / 2) ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、N t - S極少量、締まり中、粘性中

遺物 土器等10点、石器等2点が出土している。うち縄文土器1点(注口土器)、弥生土器1点(壺)、石製品1点(石鏃)を掲載する(第91図、第22表)。No 1の弥生土器は中～下層から出土しており、時期決定に用いた。

所見 出土遺物から、弥生時代中期後半の所産と考えられる。セクションから、第26号竪穴住居跡が完全に埋没する前に構築され、廃絶されたことが判る。



第91図 第176号土坑出土遺物実測図

第22表 第176号土坑出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第91図 1	弥生土器	壺	胴～底部 10%	— (8.5) [10.6]	内脣、外脣、外面斜位の附加条縄文。内面ナデ。底部布目痕	メノウ粒・メノウ粒少量 チャート粒・石英粒・海綿骨針微量	普通、焼げムラ	内外面にふい 黄橙色・褐灰色	D6h9 覆土中 ～下層	7片	PL39 中期後半
2	縄文土器	注口土器	胴部、 5%以下	— — —	内脣、外脣から稜をもって屈曲し、内脣する最大径部。最大径21cm前後。稜上位外面平歯状文、下位ミガキ。内面ナデ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒、褐色砂粒・凝灰岩粒微量	普通、焼きや甘くムラ	外面褐灰色・灰黄色。内面にふい黄橙色	覆土中	—	PL39 大淵B C式

挿図番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第91図 3	石籤	(1.8)	1.4	0.4	(0.9)	メノウ	先端と基部を欠損。裏面に素材剥片時の剥離面が大きく残る	覆土中	—	PL39 一部欠損

第180号土坑 (SK180, 第75・92図)

位置 D6hs区に位置する。第Ⅲ層上面で確認できた。

規模と形状 平面は径50～53cmの不整形円形である。確認できた深さは11cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

重複関係 第26号竪穴住居跡を切っている。

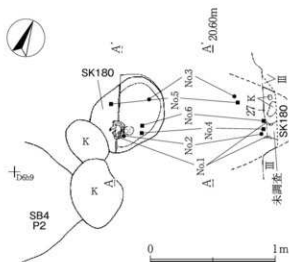
土層 1層が確認でき、ローム中ブロックを含む状況から人為堆積と考えられる。

土層解説 (第92図)

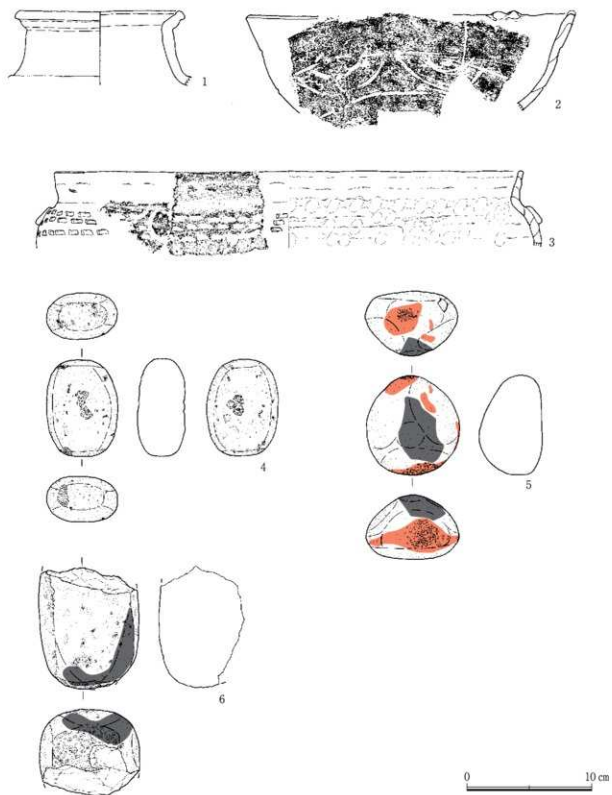
27 黒褐色 (25Y 3/2) ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、ローム小ブロック少量、Nt-S極少量、粘まりやや強、粘性中

遺物 土器等12点、石器等7点が出土している。うち縄文土器2点(針1, 深針1)、弥生土器1点(壺)、石製品3点(磨石2, 敲石1)を掲載する(第93図, 第23表)。

所見 出土遺物から、弥生時代前期の所産と考えられる。



第92図 第180号土坑実測図



第93图 第180号土坑出土遗物实测图

第23表 第180号土坑出土土遺物観察表

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第93図 1	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部 5%	[12.8] (5.8) —	頸部外反やや内傾。口縁部 で屈曲し外傾。口縁端部内 外に肥厚し、内面は受け口状。 頸～胴部境界に隆帯か。内外 面ナデ	メノウ礫・メ ノウ粒中量 石英粒・チャ ート粒・雲母 細粒微量	普通。 焼けム ラ	内外面にふい 黄褐色	覆土 中、倒 立	3片	PL39 前期
2	縄文 土器	鉢	口縁～ 胴部 5%以下	[25.6] (7.6) —	内彎、外傾。口縁部下で屈曲。 口縁端部B突起。外面横走と 弧状の沈線文。外面粗いミガ キ、内面ナデ、粗いミガキ	メノウ粒少 量、凝灰岩粒、 雲母微量	普通。 二次焼 成	外面黒褐色・ 橙色、内面灰 黄褐色・黒褐 色	覆土 中、SI26攪 乱中、 SI9確認 面	3片	PL39 外面に炭 化物大量 付着。安 行Ⅲa式 か、SI9 は報告道 で既報。 SI26に 由来の可 能性
3	縄文 土器	深鉢	口縁～ 胴部 5%以下	[37.0] (6.0) —	内彎・内傾する胴部から屈曲 してわずかに外傾して立ち上 がる口縁部。肩部外面に円形 浮文を貼り付け（単位不明）、 3段の連続刺突。刺突は角棒 状施工具で右方向から。内外 面ナデ。外面わずかな輪植み 痕、内面顕著な輪植み痕と横 以下に指頭圧痕	メノウ粒少 量、石英粒・ チャート粒・ 雲母・海綿骨 針微量	普通	内外面にふい 黄褐色・橙色	D6h8・ h9、覆 土中	4片	PL39 晩期中葉 混入

挿図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第93図 4	磨石・ 敲石	7.7	5.6	3.7	256	多孔質 安山岩	やや扁平な不整形円礫をそのまま利用。両 端を使用	覆土中	—	PL39 完存
5	敲石	7.9	7.4	5.1	374	砂岩	やや扁平でわずかに楕円がかった円礫をそ のまま利用。両端を使用。使用痕付近に赤 色顔料付着。赤色顔料製造用か	覆土中	—	PL39 完存。ク ール状物 質付着
6	磨石・ 敲石	(9.6)	8.0	(6.8)	(779)	砂岩	やや大型の礫を利用。3面は磨石として使 用し、一端は敲石として使用	覆土中	—	PL39 一部残 存。一部 に煤付着

③平安時代

(i) 掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡 (SB4, 第75図)

位置 D6h8区、D6h9区、D7h1区、D7h2区に位置する。第Ⅲ層上面及び西壁のセクションで確認できた。

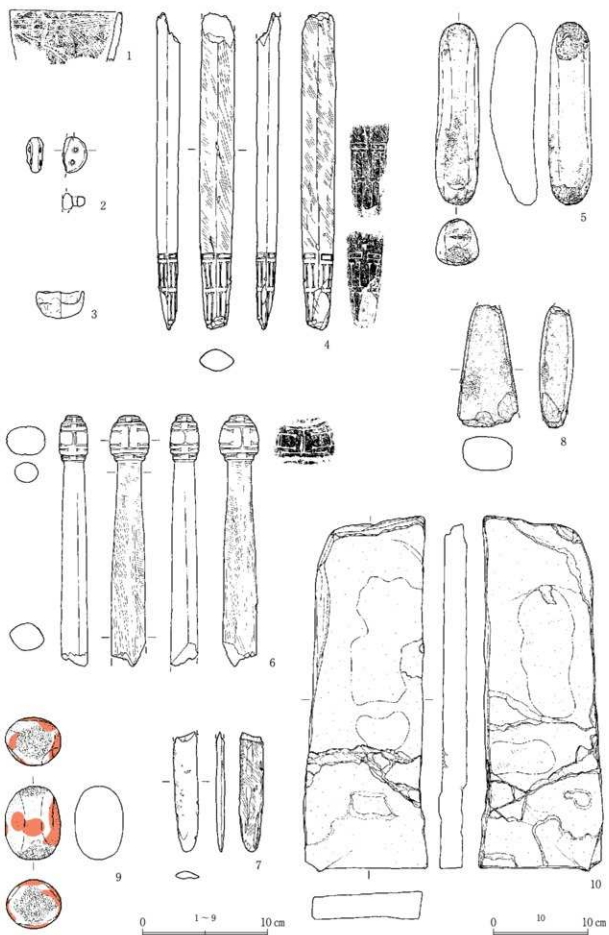
規模と構造 P1-P2間は6.1mと離れており、側柱建物の可能性が考えられる。仮にこの2基の柱穴が対になるならば、桁行3間程度、桁行方向はN-23°-Wとなる可能性が浮上するが、詳細は不明である。

重複関係 第26号竪穴住居跡を切っている。

柱穴 2箇所確認できた。

P1

規模と形状 平面は径約75cmの円形と考えられ、中央部に不整形で径50cmの抜取痕がある。確認できる深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、上端付近でわずかに外傾する。



第94图 第4号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第24表 第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第94図	1	縄文土器	壺	口縁部、5%以下	[88] (39)	わずかに内彎、わずかに外傾。口縁端部外側からキザミ。口縁部外面細い横走沈線3条。その下位に細い斜位の沈線2条と3条。施文順は横走→斜位。内面ナデ	メノウ粒少量、チャート粒・石英粒・雲母細粒微量	良好	内外面橙色、内面一部黄褐色	P1内	2片 PL40 安行3c 式か 混入
2	縄文土器	深鉢か	突起、5%以下	—	—	耳状の突起。長さ28cm、厚さ1.3cm、突出高15cm。縦に2孔の貫通孔。孔径0.3cm。表面ナデ。一部器体内面が残る	やや粗悪。メノウ粒中量、石英粒・チャート粒・褐色砂粒・海綿骨針微量	普通	サンドイッチ状。内外面にふい黄褐色、内部褐色	P1内	— PL40 混入
3	土師器	ミニチュア土器(碗)	口縁～底部、100%	3.5 2.1	—	手握ね成形。厚い丸底から胴部が内彎・外傾して立ち上がり、急激に厚みを減じて口縁部に至る。内外面ナデ。外面に一部粘土紐接合痕が残る	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・泥岩粒・褐色砂粒・雲母細粒微量	良好	内外面にふい褐色	P1内	— PL40

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第94図	4	石剣	(25.0)	2.7	1.8	(164.0)	粘板岩	断面杏仁形の石剣の剣身及び先端部。先端部には両面にそれぞれ頭部備から長方形2単位、1字状文4単位の刻文を配列。さらに先端部片面には2条の刻線が認められ、両面に施文されていたと推定される	P1内	— PL40 一部残存 混入
5	敲石	14.4	3.4	3.7	271	砂岩	わずかに彎曲した長楕円礫をそのまま利用。一端と両端付近の髄縁を使用。一端は上下運動、両端周辺は円運動による敲打	P1内	— PL40 完存 混入	
6	石剣	(19.8)	3.1	2.3	(178.7)	粘板岩	頭部と剣身上半部。頭部は断面楕円形で全体は球形に近いが、上下に段をもつ。中央部には端部に三角形を付けた大小の工字状文各2単位を組み合わせて刻文。上下の段には1字状文を各4単位刻む。剣身は断面杏仁形で、頭部近くは軸直交。他は軸平行及び軸方向に近い斜交の研磨調整	P2内	— PL40 一部残存 混入	
7	石剣	(9.4)	1.9	0.6	(15.7)	粘板岩	石剣の先端部分。石棒か石剣が割れたものを、研磨し再加工。断面半月状。表面は丁寧に研磨され痕痕不明瞭。表面は擦痕明瞭	P2内	— PL40 一部残存 混入	
8	磨製石斧	(9.6)	(4.8)	2.7	(182.1)	緑色片岩	敲打成形後、研磨調整。一部に敲打痕が残る。断面隅丸長方形。刃部と頭部に激しい潤離。敲石として再利用の可能性	P2内	— PL40 一部欠損 混入	
9	敲石	5.8	4.4	3.9	143.0	石英	楕円礫をそのまま利用。両端を使用。使用痕を除く表裏面と側面に赤色顔料付着。赤色顔料製造に関連か	P2内	— PL40 完存 混入	
10	砥石	37.6	13.2	3.0	(179.1)	砂岩	層状の節理に沿って割れた板状の大型礫を利用。表裏面に部分的な使用痕	P2内	2片と他小片多数 PL40 ほぼ完存 混入	

土層 4層が確認できた。第20・21層は柱穴埋土、第22・23層は採取痕の埋土で、全て人為堆積である。

土層解説

- 20 極暗褐色 (7.5YR 2/3) ローム粒子極少量、締まり中、粘性中
 21 褐色 (7.5YR 4/4) ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム小ブロック少量、黄色粘土小ブロック少量、締まり中、粘性中
 22 暗褐色 (7.5YR 3/4) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、骨粉少量、締まり中、粘性中
 23 暗褐色 (7.5YR 3/3) ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、小礫少量、締まり中、粘性中

P 2

規模と形状 平面は径約95cmの円形と考えられ、中央部に不整円形で径50cmの抜取痕がある。確認できる深さは35cmで、壁はオーバーハングする。

土層 2層が確認でき、ブロック状の人為堆積である。

土層解説

24 暗褐色 (7.5Y R 3 / 3) ローム粒子少量、小礫少量、骨粉少量、締まり中、粘性中

25 黒褐色 (7.5Y R 3 / 2) ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、黄色粘土小ブロック少量、締まり中、粘性中

遺物 土器等6点、石器等14点が出土している。うち縄文土器2点（壺、深鉢）、土師器1点（ミニチュア土器）、石器・石製品7点（石剣3、敲石2、磨製石斧1、砥石1）を掲載する（第94図、第24表）。

所見 状況から、平安時代の所産と考えられる。セクションから、第26号竪穴住居跡が完全に埋没する前に構築され、廃絶されたことが判る。

④中世

(i) 掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡（SB3、第75図）

位置 D7h3区に位置する。第II 2層上面で確認できた。

規模と構造 柱穴1箇所のみ確認のため、詳細は不明である。

柱穴 1箇所確認した。

P 1

規模と形状 平面は径25.5～28.0cmの不整円形である。中央部にある柱痕は、径13～16cmの不整円形である。柱穴埋土にはローム中・小ブロック・粒子が多く、柱痕には少ない。

遺物 出土していない。

所見 形状から、中世の所産と考えられる。

⑤時期不明

(i) 土坑

第177号土坑 (SK177, 第75図)

位置 D7h3区, D7h4区に位置する。第Ⅲ層上面で確認できた。

規模と形状 平面は長軸100cm, 短軸80cm, 長軸方向がN-110°-Wの楕円形である。ピンポールで探ったところ, 深さは40~70cmと考えられる。

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため, 時期・性格は不明である。

第178号土坑 (SK178, 第75・76図)

位置 D7h4区に位置する。第Ⅲ層上面で確認できた。

規模と形状 大部分が調査区外に伸び, コーナー部のみの確認であるが, 長方形を指向すると考えられる。ピンポールで探ったところ, 深さは45cm前後と考えられる。

土層 2層が確認でき, レンズ状の自然堆積である。

土層解説 (第76図)

17 暗褐色 (7.5YR3/4) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 締まり中, 粘性中

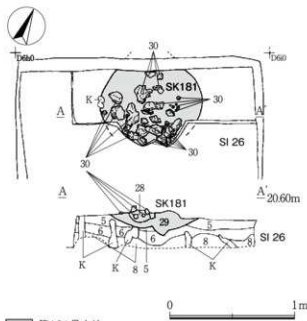
18 暗褐色 (7.5YR3/4) ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, Nt-S極少量, 締まり中, 粘性中

遺物 出土していない。

所見 遺物を伴わないため, 時期・性格は不明である。

第181号土坑 (SK181, 第76・95図)

位置 D6h0区に位置する。第27トレンチと北拡張区の境界ベルトの南側セクションで確認できた。



第181号土坑

土層解説 SI 26: 87ページ SK181: 127ページ

規模と形状 平面形は不整形になると考えられ, 確認できる上端の幅は80cmである。深さは35cmで, 壁は外傾して立ち上がっている。重複関係 第26号竪穴住居跡を切っている。土層 北側ベルトのセクション (第76図) では1層しか確認できないが, 半載したセクション (第95図) では2層が確認でき, ブロック状の人為堆積である。被熱した泥岩片や粘土・焼土が混じる様子から, 竈材を廃棄したものと考えられる。

土層解説 (第76図)

26 暗褐色 (7.5YR3/4) ローム中ブロック少量, ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 黄色粘土小ブロック少量, 焼土少量, 締まり中, 粘性中

第95図 第181号土坑実測図

土層解説 (第95図)

- 28 褐色 (7.5YR 4/3) 粘土粒子 (被熱) 多量, ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 泥岩粒子 (被熱) 極少量, 締まりやや強, 粘性中
- 29 黒褐色 (7.5YR 2/2) 泥岩小ブロック (被熱赤化) 少量, 泥岩粒子 (被熱赤化) 少量, 黄灰色粘土小ブロック少量, 黄灰色粘土粒子少量, ローム小ブロック極少量, ローム粒子極少量, 締まり中, 粘性やや弱
- 30 被熱赤化した泥岩片

遺物 出土していない。

所見 覆土の状況から, 竈材等を廃棄した土坑と考えられる。セクションから, 第26号堅穴住居跡がほぼ埋没した後に構築された土坑であることが判る。

第182号土坑 (SK182, 第75・76図)

位置 D7h1区に位置する。第Ⅲ層上面及び東壁セクションで確認できた。

規模と形状 東部が調査区外に延びるが, 平面は短軸72cm, 長軸方向がN-99°-Wの楕円形と考えられる。確認できる深さは40cmで, 壁は外傾して立ち上がっている。

重複関係 第26号堅穴住居跡を切っている。

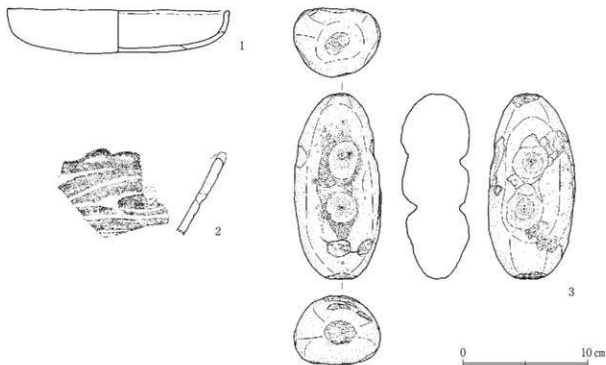
土層 2層が確認でき, レンズ状の自然堆積である。

土層解説 (第76図)

- 15 暗褐色 (7.5YR 3/3) 小礫少量, ローム粒子極少量, 締まり中, 粘性中
- 16 黒褐色 (7.5YR 3/2) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 小礫少量, Nt-S極少量, 締まり中, 粘性中

遺物 土器等8点, 石器等2点が出土している。うち縄文土器2点(皿1, 浅鉢1), 石製品1点(凹石)を掲載する (第96図, 第25表)。

所見 セクションから, 第26号堅穴住居跡がほぼ埋没した後に構築された土坑であることが判る。



第96図 第182号土坑出土遺物実測図

第25表 第182号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	種別	器種	部位・ 残存率	口径 器高 底径 (cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土 状況	接合 状況	備考
第96図 1	縄文 土器	皿	口縁～ 底部 60%	[17.4] 3.4 —	緩やかな丸底から胴部が内湾 しながらわずかに立ち上がり 直立した口縁部に至る。薄手。 外面ナデ、内面ミガキ（器表 荒れ）	メノウ粒少量、 メノウ礫・ チャート粒・ 凝灰岩粒・雲 母・海綿骨針 微量	やや不 二焼成	外面に白い黄 褐色、内面に 白い褐色・灰 白色・褐灰色	覆土中	5片	PL41 混入
2	縄文 土器	浅鉢	口縁～ 胴部 5%以 下	— — —	内彎気味、外傾。口縁端部に 大きなB突起。外面沈線によ る三叉文。内外面ミガキ。破 断面に焼成後穿孔痕。外側か ら片側穿孔。補修孔か	メノウ粒少量、 凝灰岩粒・黒 褐色砂粒・赤 褐色砂粒・雲 母・海綿骨針 微量	良好。 黒斑あり	サンドイッチ 状。外面にお い黄褐色・黒 色、内面に白 い褐色。内部 褐灰色	覆土中	—	PL41 安行 3a 式か 混入

挿図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第96図 3	凹石・ 敲石	14.7	6.9	5.4	571	凝灰岩	やや扁平な長楕円盤をそのまま利用。両端 に敲石としての使用痕。表裏面に2か所ずつ の不整形の凹み。凹みは径25～30cm。 深さ0.5～1.0cm。表面を中心に敲打痕。台石 としても使用か	覆土上 層	—	PL41 定存 混入

第185号土坑（SK185, 第75・76図）

位置 D6hg区に位置する。第Ⅲ層上面及び東壁のセクションで確認できた。

規模と形状 平面は径45cm前後の不整形円形と考えられる。確認できた深さは30cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

重複関係 第176号土坑に切られ、第26号竪穴住居跡を切っている。

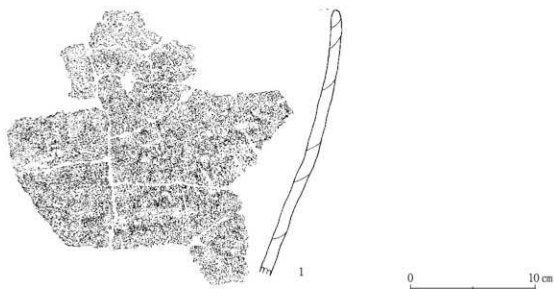
土層 3層が確認でき、レンズ状の自然堆積である。

土層解説（第76図）

- 9 黒褐色（7.5Y R 3/2） ローム粒子少量、骨片少量、ローム小ブロック極少量。締まり中、粘性中
- 10 黒褐色（7.5Y R 3/2） ローム粒子中量。締まり中、粘性中
- 11 暗褐色（7.5Y R 3/3） ローム粒子中量、ローム小ブロック少量。締まり中、粘性中

遺物 土器等15点が出土している。うち縄文土器1点（深鉢）を掲載する（第97図、第26表）。混入の可能性も捨てきれず、時期判断には用いなかった。

所見 重複関係から、縄文時代晩期以降、弥生時代以前の所産と考えられるが、詳細は不明である。セクションから、第26号竪穴住居跡が完全に埋没する前に構築され、廃絶されたことが判る。



第97図 第185号土坑出土遺物実測図

第26表 第185号土坑出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第97図 1	縄文土器	深鉢	口縁~胴部 20%	— — —	内罅、外粗。無文。内外面ナデ。口縁部径約44cm前後	メノウ粒少量、メノウ礫・石英粒・チャート粒・雲母微量	普通。焼けムラ	サンドイッチ状。内外面に、ふい黄褐色・褐灰色・黒褐色。内部褐灰色	確認面	14片	PL41 内面炭化物付着 混入

B 遺構外出土遺物

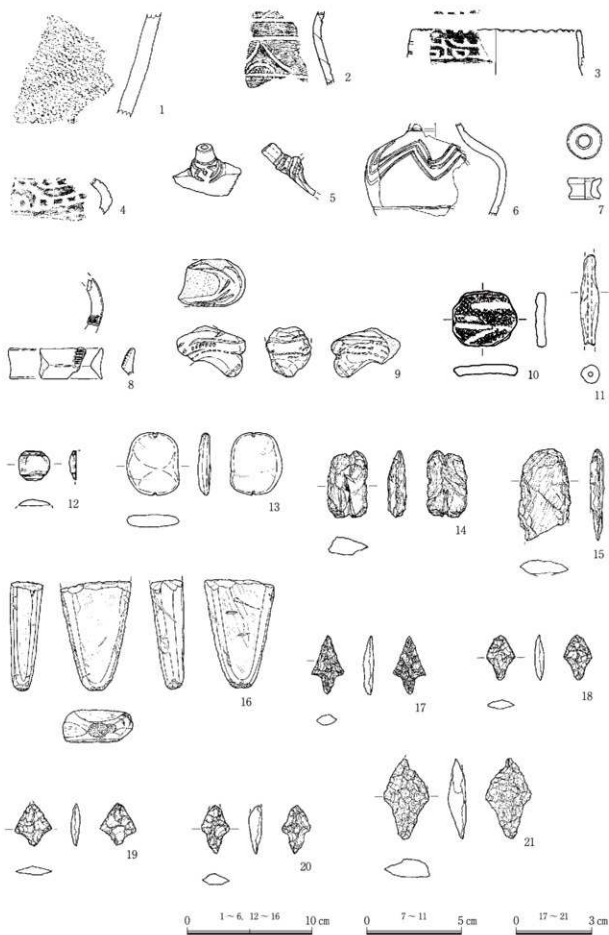
遺構外で確認された遺物について解説する。(第75・98・99図, 第27表)

遺物 土器等11,054点, 石器等2,345点, 骨片1,790点, 炭化物計84gが出土している。うち縄文土器5点(注口土器3, 深鉢2), 弥生土器1点(小型壺), 土製品5点(耳飾2, 土偶1, 土器片円盤1, 管状土錘1), 石器・石製品18点(石鏃13, 石錘2, 石棒1, 石剣1, 敲石1)を掲載する。多量に出土した土器等は、その多くが小片である。

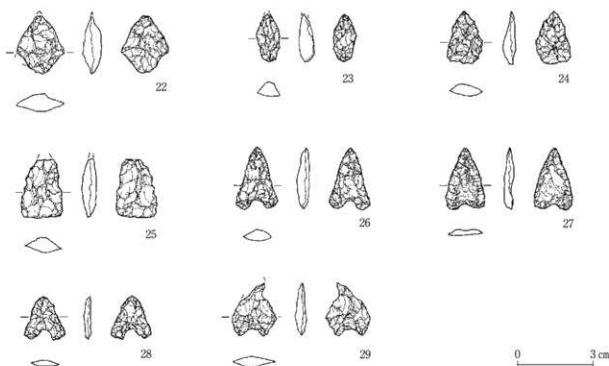
(3) 所見

新たな再葬墓等は確認できず、再葬墓西群は、第3次調査で想定していた範囲より西へ広がることはないものと考えられる。よって、本トレンチの目的である西群の西側の限界を抑えることは達成できた。

その一方、縄文時代晩期の堅穴住居跡が確認されたことは特筆すべき点である。弥生再葬墓と縄文晩期との関係は再葬墓研究の課題の一つであり、泉坂下遺跡保存委員会との協議の結果、トレンチ内については掘り込んで調査する方針となったものである。第26号堅穴住居跡からは多量の遺物が採集でき、先述のとおり成果を得ることができた。



第98図 第27トレンチ遺構外出土遺物実測図(1)



第99図 第27トレンチ遺構外出土遺物実測図(2)

第27表 第27トレンチ遺構外出土遺物観察表

種目番号	種別	器種	部位・残存率	口径器高底径(cm)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第98図 1	縄文土器	深鉢	胴部, 5%以下	—	厚手。織維土器(織維痕顕著)。外面異節縄文。内面粗いミガキ	メノウ粒少量、凝灰岩粒・雲母細粒微量	普通	外面黒色。内面・内部黒褐色	D7h4, II層	—	PL41 前期前半、開山式か
2	縄文土器	深鉢	胴部, 5%以下	—	内彎気味・内傾から外反・外傾。外面細密沈線を横走と弧状の沈線で区画し、外はミガキ。一部区面に刺突。内面粗いミガキ	やや精良。メノウ粒・石英粒・凝灰岩粒微量	良好	サンドイッチ状。内外面黒褐色。器表下にぶい橙色。内部にぶい黄褐色	D7h1, サブトレ一括	—	PL41 安行3b式
3	縄文土器	注口土器か	口縁部, 5%以下	[130] (37)	薄手。精製。わずかに内彎・内傾。口縁端部にギザミ。外面羊歯状文。内面ミガキ	メノウ粒少量、凝灰岩粒・雲母・海綿骨針微量	良好	内外面黒褐色	D7h1, サブトレII層	—	PL41 大割B C式
4	縄文土器	注口土器か	肩部, 5%以下	—	強く内彎。内傾から外傾。外面最大径の上に羊歯状文。下に細い沈線1条。内面ナデ	メノウ粒少量、メノウ礫・泥岩粒・凝灰岩粒・雲母細粒微量	普通・焼けムラ	外面灰黄褐色・黒褐色。内面にぶい黄褐色	D7h1, 一括	—	PL41 大割B C式
5	縄文土器	注口土器	注口部, 5%以下	—	算盤玉状の胴部の最大径部分に付けられた、斜め上方を向く注口。胴部最大径 [10-11] cm。注口の基部には粘土線を巻いて補強し沈線による裝飾。一部玉抱き三叉文状。外面ミガキ。内面ナデ	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・赤褐色砂粒・雲母細粒微量	良好	外面にぶい黄褐色・灰黄褐色。内面黒褐色	D7h2, サブトレ一括	—	PL41 大割B式
6	弥生土器	小型壺	頸部, 15%	(72)	胴部外傾。屈曲して肩部内傾。外反して頸部。胴部最大径 [11.2] cm。頸部と胴部下外面に横走沈線。肩部から胴部上半にかけて3条の沈線による鬚面文。内面ナデ	メノウ粒少量、メノウ礫・チャート粒・赤褐色砂粒・雲母細粒・海綿骨針微量	普通	外面灰黄褐色。内面にぶい黄褐色	D7h1・h2, II層サブトレ	4片	PL41 ほかに同一個体片1片あり

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	口径 (cm)	重量 (g)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第98図												
7	耳飾	径 1.8	厚さ 1.2	0.6	(20)	小型のいわゆる耳栓。中心に円孔を有し。断面はややコの字に近い。正面ミガキ。他はナデ	メノウ粒少量、メノウ塵・凝灰岩粒・雲母・海綿骨針微量	良好	赤色	D6h8、第1次確認調査5 T埋土中	—	PL41一部欠損
8	耳飾	径 [4.8]	厚さ 1.6	[3.8]	(24)	輪状で断面がくの字に近い。いわゆる滑車形(板形)耳飾。輪の内面のうち外向きの面に放射状(推定)に深帯を貼り付け(単位不明)。細か・刺突による7条のキザミ状の文様。表面ミガキ	精良。メノウ粒・黒色鉱物微量	良好	表面にふい橙色。内部褐色	D6h0、II層	—	PL41一部残存
9	土偶	(3.6)	(2.5)	0.1	(15.1)	肩部から腕と推定。左右は不明。弧状の破断面は胴体に接合の痕跡か。肩部は横に張り、細い刺突の連続が3列。腕は短く垂下する突起。先端付近に長さ11cm、径1mm弱の円形の貫通孔。	石英塵少量、凝灰岩塵・凝灰岩粒・メノウ粒微量	普通。焼きやや甘い	外面にふい黄色。内部褐色	D6h0、一括	—	PL41
10	土器片円盤	長径 3.4	短径 2.9	—	6.8	土器片の周縁を折って整形。素材は沈殿を施文した縄文土器	メノウ粒少量、石英粒・チャート粒・雲母・海綿骨針微量	普通	内外面褐色。内部橙色	D7h2、II層	—	PL42定存。表面炭化物付着
11	管状土錘	(4.8)	径 1.0	0.2	(4.1)	細形。中央部が太くなる。輪方向に貫通孔。表面指ナデ。一部指紋が残る	精良。メノウ細粒・石英細粒・黒色粒子微量	良好	にふい黄色	D7h1、II層	—	PL42一部欠損。糠圧痕

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土状況	接合状況	備考
第98図										
12	石棒(石剣か)	(2.3)	(2.5)	(0.5)	(3.4)	粘板岩	頭部破片。頭部は扁平な球状に作り、上部は段をもって頭頂部に至り、下部は2段まで確認できる。頭部にわずかに擦痕(研磨調整痕)。段差部分に軸直交方向の顕著な擦痕	排土中	—	PL42一部残存。被熱
13	石錘	4.9	4.1	1.0	33.4	ホルンフェルス	扁平な不整形円錐をそのまま利用。両端に磨りによる長さ2～3mmの小さな切れ目	D6h0、II～III層一括	—	PL42完存
14	石錘	5.3	3.1	1.5	(28.9)	粘板岩	扁平な長方形礫の両端に磨りによる切れ目。石剣の頭部を転用。下端付近に頭部と身部の段差の加工痕	D6h9、I B層一括	—	PL42一部欠損(欠)
15	石剣未成品	(7.2)	4.0	(1.1)	(37.6)	粘板岩	粗磨りして頭部の原形を作出した扁平な素材を敲打整形する段階。下端の括れは身部への移行を意図	D7h3、II層一括	—	PL42一部残存
16	敲石・砥石	(8.6)	(5.5)	(2.6)	(145.8)	砂岩	扁平な自然礫を利用。一端は折損。一端を敲打に使用。表裏面と左側縁(右もか)を砥面として使用	D7h2、II層一括	—	PL42一部残存。被熱赤変(折損後)
17	石礫	2.3	1.3	0.4	0.7	メノウ	凸基有茎礫(平基に近い)。丁寧な調整で整った形状	D6h8、一括	—	PL42完存
18	石礫	1.8	1.1	0.4	0.5	メノウ	透明感のある良質なメノウを利用。小型の凸基有茎礫。丁寧な調整	D7h2、II層一括	—	PL42完存
19	石礫	(1.7)	1.4	0.4	(0.5)	メノウ	凸基有茎礫。先端部の欠損は鉄製農具等による後世のもの	D7h1、II層一括	—	PL42一部欠損。被熱白変。鉄製農具による擦痕
20	石礫	(1.9)	1.1	0.5	(0.7)	メノウ	凸基有茎礫。先端部に衝撃剝離痕	D6h0、一括	—	PL42一部欠損
21	石礫	(3.2)	1.8	0.7	(2.5)	メノウ	凸基有茎礫。被熱により剝離(火ハネ)	D7h1、II層一括	—	PL42一部欠損

神図 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法	出土 状況	接合 状況	備考
第99図 22	石鐮	(23)	(19)	0.7	(22)	メノウ	尖基鐮。調整剥離がうまく抜けず厚みが残る。先端部に衝撃剥離痕	D6h0, II層一 括	—	PL42 一部欠損
23	石鐮	(18)	09	0.6	(09)	メノウ	尖基鐮。裏面に素材時の剥離面を残す。横長の剥片を利用し周縁を調整剥離。剥離角が大きく、厚みを残す。先端部欠損は衝撃剥離か	D7h3, II層一 括	—	PL42 一部欠損
24	石鐮	21	1.4	0.5	1.0	メノウ	平基無茎鐮。調整やや粗く不安定	D6h0, II層一 括	—	PL42 完存。被 熱白変
25	石鐮	(23)	1.6	0.6	(20)	珪質頁岩	平基無茎鐮。調整やや粗く不安定	D6h9, 一括	—	PL42 一部欠 損。鉄製 農具による 擦痕
26	石鐮	24	1.6	0.4	(10)	メノウ	凹基無茎鐮。丁寧な調整で整った形。全体に被熱・白変。一部被熱による剥離	排土中	—	PL42 一部欠損
27	石鐮	24	1.5	0.4	1.0	メノウ	凹基無茎鐮。正面に原石の表面、裏面に素材剥片時の剥離面が残る。刃部無縁細かく丁寧な剥離	D7h1, 一括	—	PL42 完存。被 熱白変
28	石鐮	1.7	1.6	0.3	0.6	メノウ	凹基無茎鐮。裏面に素材剥片時の剥離面が残る。先端部に衝撃剥離痕	D7h1, I B層 一括	—	PL42 完存
29	石鐮 未成品	(21)	1.7	0.4	(09)	メノウ	先端部付近未成のまま欠損。凹基無茎鐮を志向。基部付近の調整は丁寧	D7h1, II層一 括	—	PL42 一部欠損

5 表面採集

(1) 調査概要

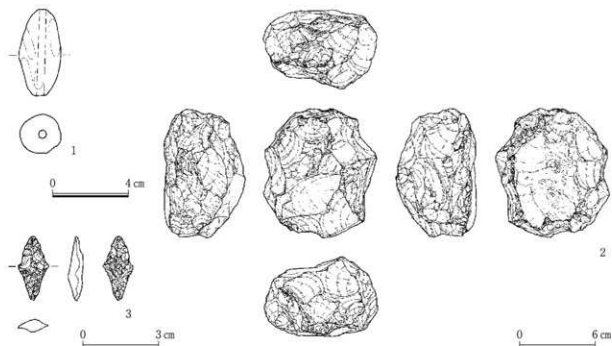
トレンチによる確認調査と同時に、調査区付近の地表面の遺物採集を試みた。

(2) 採集遺物

土器等17点、石器等7点を採集した。うち土製品1点(管状土錘)、石製品2点(石核1、石鏃1)を掲載する。(第100図、第28表)

(3) 所見

再葬墓密集域が対象となった第3次調査と打って変わって、今次調査では中心部から外れる第22トレンチや、再調査となった第4・14トレンチ付近での表面採集となったため、採集できた遺物は少ない。



第100図 表面採集遺物実測図

第28表 表面採集遺物観察表

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	形態・技法	胎土	焼成	色調	出土状況	接合状況	備考
第100図 1	管状土錘	4.6	2.2	0.4	16.6	太形で、両端を細く作る。外面縦方向のナア	メノウ粒・チャート粒・石英粒・雲母細粒微量	良好	にぶい黄橙色	B地区(埋め戻し後)	—	PL42
挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	形態・技法		出土状況	接合状況	備考	
第100図 2	石核	10.2	9.1	6.4	716	メノウ	厚い板状の礫を利用。主に自然面を打面として上下転回しながら幅広い剥片を剥離		D4区(北側駐車場)	—	PL42 完存	
3	石鏃	2.5	1.2	0.6	1.1	メノウ	凸蓋有茎鏃。全体形状は整っているが、調整剥離はやや不揃い。特に茎部分で厚みが残る		27T東側	—	PL42 完存	

第4節 考察

本節においては、泉坂下遺跡確認調査結果に考察を加えたものを掲載する。

1 地中レーダー探査結果の検証

(1) 経緯

今次調査に先駆けて実施した地中レーダー探査では、第3章のとおり、第9号溝跡の走向の把握といった所期目的達成に加え、埋没谷の確認といった収穫も得られた。また、ある程度想定はしていたが、不明の電波反射も数多く確認された。電波反射の原因については、石・金属等埋蔵物、攪乱や遺構等掘り込みといった可能性が挙げられる。そこで、電波反射の強い(赤色)・弱い(黄色)・ない(青色)の三段階に合わせて、不明の電波反射の一部を実際に掘削して検証した。

第4次調査では、第10トレンチ1・2区等で確認された再葬墓西群の範囲確定が調査目的として掲げられており、第10トレンチ北側・第4トレンチ南側、第4トレンチ北側・第13トレンチ南側を調査する計画であった。そこで、これに乗じて検証を試みたものである。

(2) 電波速度(第13～23図)

今回の作業に用いた機器等は第3章のとおりである。地中の電波速度は、土壌の含水率や土質の違いなどによって速度に差が生じ、1 ns(ナノ秒)あたり約3～4cmと通常は推測されるが、かなりばらつきがあるようである。そこで、泉坂下遺跡で地中レーダー探査を行った当日の電波速度を掴んでおくことは、この後に続く検証に有益と考えるため考察する。

探査結果を示す図を概観すると、第1～3次調査で掘削したトレンチの確認面が強く(赤く)反射していることが判る。これは確認面と埋戻土の密度差によって生じるもので、これを電波速度推定の目安として利用する。第4トレンチは地表から確認面までの深さは約30cm、第18トレンチでも同様に約30cmで、これらを示す電波反射を最もはっきり反映するのはf3(10～20ns)である。この結果から、電波速度は1 nsあたり約2cmである可能性が浮上する。

この他に、第14トレンチは地表から確認面までの深さは約50cmで、これを最もはっきり反映するのはf4(15～25ns)とf5(20～30ns)、第13トレンチ5・6区は地表からサブトレンチ底面までの深さは約80cmで、これを最もはっきり反映するのはf7(30～40ns)である。また、地表面からの深さ170～160cmが底面と考えられている第9号溝跡を最もはっきり反映するのはf16(75～85ns)とf17(80～90ns)である。

電波速度は一様ではないが、これらの状況から、本稿ではこの調査区でのこの日の電波速度を1 nsあたり約2cmと推定する。

(3) 反射の検証

①土坑(第101・102図)

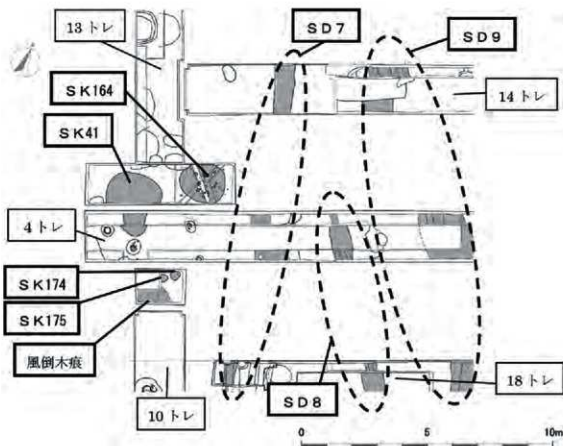
着目したのはf5(20～30ns)・f6(25～35ns)である。電波速度を1 nsあたり約2cmと想定すると、f5は地表面から約40～60cm、f6は約50～70cmの反射を示していると考えられる。これは、再葬墓の検証を行う上で手頃な深さであるため、再葬墓西群内での未調査区域

で、かつf5・f6で反射が見られる付近の調査結果をもとに検証する。

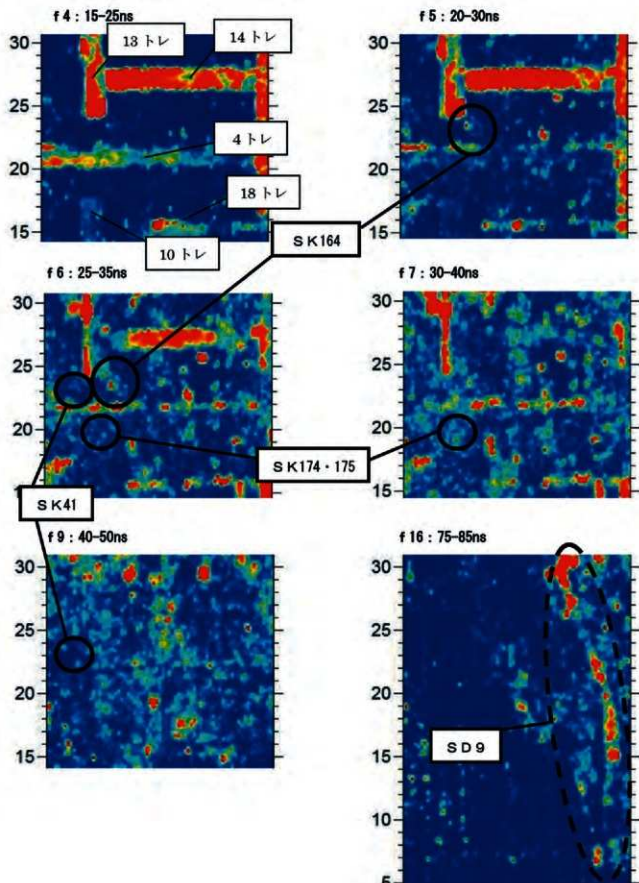
まず、第4トレンチ北側となるE6b7区からE6d7区までの東西幅6m、南北幅2mであるが、f5・f6で強い反射（赤色）のあった位置において、地表から25cmで再葬墓である第164号土坑が確認できた。この第164号土坑については、第I B層と第II層の境界付近という比較的浅い位置から埋納土器が出土するため、示した反射は、埋納土器を捉えていたわけではなく、土坑底面を捉えていた可能性が高い。通常でも、強い反射（赤色）は土坑等の可能性が考えられる反射であり、この結果からは、レーダー探査でも再葬墓の土坑底面を捉え得ると考えることができる。

その一方、第41号土坑が確認された付近では、f5・f6ではほとんど反射がない（青色）。第41号土坑は、第1次調査で地表面からの深さが90cmを超えることが確認された大きな土坑であり、f5・f6の深さで反射がないのは順当である。ならば、底面に相当する深さで反射が確認されて然るべきだが、f9（40-50ns）・f10（45-55ns）にはそのような反射は見られない。径が2mを超える第41号土坑の規模からして、25cm間隔のレーダーで捕捉できないとは考えにくく、この原因は不明である。

次に第4トレンチ南側となるE6c9区の2m四方であるが、f6で弱い反射（黄色）のあった付近には、地表から約70cmで第174・175号土坑と風倒木痕と考えられる攪乱が確認された。この反射は、f7（30-40ns）でやや範囲の広がりを見せるものの、決して強い反射ではない。第174・175号土坑はいずれも径30cm前後と小規模であること、あるいは風倒木痕という性質上、しっかりした掘り込みの形状を呈さないことなどがその原因になったと考えられる。



第101図 第4トレンチ西部付近遺構配置図



第102図 第4トレンチ西部付近の電波反射 (第15～18・21図から抜粋)

②溝跡（第103図）

地中レーダー探査の所期目的である第9号溝跡の走向把握については、第3章のとおり確認することができた。

さらに探査結果をみると、これ以外に2条の溝跡の走向が認められる。第103図中、北-南の走向の溝跡と、北西-南東の走向の溝跡で、これらはf 8 (35-45 n s)・f 9 (40-50 n s)・f 10 (45-55 n s)で確認できるため、地表からの深さは70～110cmと推測される。これらはこれまでの確認調査で確認されている溝跡の特徴に合致し、それぞれ第7号溝跡、第8号溝跡に対応するものと考えられる。

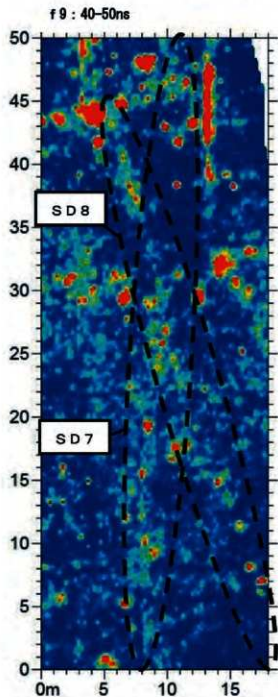
第7号溝跡は第14・23トレンチで確認されている。しかし、この溝跡を示す反射が所在する位置では、第4トレンチでは第34号土坑がセクションで確認され、また第18・19トレンチでは第10・11・12号溝跡が確認されていた。その後、第4次調査での第4トレンチ再調査の際、第34号土坑が平面で北-南の走向で溝状に延びることが確認でき、これが第7号溝跡と同一になるものと所見を改めている。第10・11・12号溝跡については、3条とも走向はほぼ同様で重複しているが、覆土と断面形から第12号溝跡が第7号溝跡と同一と判断し、これも所見を改める。

一方、第8号溝跡は第18・19トレンチで確認されている。第1次調査での第4トレンチでは攪乱と記録していたが、第4次調査での第4トレンチ再調査で、溝跡と所見を改めている。

第7・8号溝跡ともに、調査で確認された形状から中世の区画溝と考えられ、それぞれほぼ直線状に延びる。なお、この2条は重複しているが、新旧関係は不明である。

(4) まとめ

地中レーダー探査は、再葬墓であっても、第164号土坑のような大型土坑の底面を捉えるにはある程度効果があるようだが、第41号土坑のケースもあり、一概には言えない。その一方、溝跡のような性質の遺構の確認には十分な成果があり、今後の活用に期待が持たれる。



第103図 第7・8号溝跡を示す電波反射
(第18図から抜粋)

2 出土炭化物の放射性炭素年代測定

はじめに

茨城県常陸大宮市に所在する泉坂下遺跡からは、これまでの発掘調査によって、縄文時代の遺構・遺物、弥生時代中期頃の遺構・遺物が確認されている。本分析調査では、平成18年度の調査で検出された、弥生時代中期に比定される墓坑や不明遺構より出土した弥生土器、第1次調査～第4次調査で検出された各遺構から出土した縄文土器や弥生土器について、土器に付着した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を実施し、遺構および遺物の年代について検討する。

1. 試料

分析試料は、平成18年度の調査および第1次～第4次確認調査で出土した土器から採取した各調査次の分析対象試料について以下に示す。

平成18年度の調査では、弥生時代中期の墓坑とされるSK1、SK2、SK3、SK4、SK5、SK6から出土した弥生土器の付着炭化物および不明遺構とされるSX1から出土した弥生土器の付着炭化物を分析試料とする。各遺構の内訳は、SK1が3点（SK1土器2、SK1土器3、SK1土器4）、SK2が7点（SK2土器1、SK2土器4、SK2土器5、SK2土器8、SK2土器9、SK2土器10、SK2土器11）、SK3が6点（SK3土器1、SK3土器2、SK3土器3、SK3土器5、SK3土器6、SK3土器7）、SK4が6点（SK4土器1、SK4土器2、SK4土器3、SK4土器4、SK4土器5、SK4土器6）、SK5が4点（SK5土器1、SK5土器2、SK5土器3、SK5土器5）、SK6が3点（SK6土器1、SK6土器2、SK6土器3）、SX1が1点（SX1土器2）である。

第1次確認調査では、再葬墓であるSK23から出土した縄文土器（SK23No2）と、第8トレンチの遺構外から出土した縄文晩期の土器（第8トレンチNo21）に付着した炭化物を対象とする。

第2次確認調査では、縄文時代晩期に比定される住居跡SI9から出土した縄文土器2点（SI9No10、SI9No12）、弥生時代中期の土器棺墓から出土した弥生土器2点（SK67No6、SK67No9）、第12トレンチ遺構外から出土した縄文後・晩期の粗製土器1点（第12トレンチNo137）、第15トレンチ遺構外から出土した縄文晩期の土器1点（第15トレンチNo3）に付着した炭化物を対象とする。

第3次確認調査では、再葬墓SK110から出土した縄文土器1点（SK110No10）、C地区遺構外から出土した縄文晩期粗製土器1点（C地区No39）に付着した炭化物を対象とする。

第4次確認調査ではSK180から出土した縄文時代晩期の土器1点（SK180No2）、縄文時代後期に比定される住居跡SI26から出土した縄文土器1点（SI26No1）に付着した炭化物を対象とする。

試料採取は弊社技師3名が遺物整理場所に赴き実施した。試料採取にあたっては、候補となる土器を観察し、年代測定に必要である炭化物が多く付着しているものを選択する。炭化物はカッター、スパーテル、スクレーラー等を用いて、土器の傷を最小限に抑えるよう留意しながら削り取る。炭化物の付着は煤状に薄くついている程度で、特に平成18年度調査の土器はその傾向が強い。このため、採取試料の中に素地が一部混じる試料が多かった。また、極力内側を採取するよう努めたが、接合が終わった試料や、内側にほとんど炭化物が付着していない試料など、内側からの採取が難しい試料は、外側から採取している。採取量は、炭化物の量が少ないことを考慮し、50mgを目安に採取する。予定では40点であったが、炭化物が少なく、年代測定ができない可能性も考慮し、予備試料も含め43試料を採取した。

2. 分析方法

分析は、予備試料も含め43点全てを分析する。分析試料は、1mol/Lの塩酸(HCl)により炭酸塩等可溶成分を除去する。次に水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去する。水酸化ナトリウム使用にあたっては、試料の炭化物が微量かつ脆弱であるため定法(1mol/L)の1/500の濃度に薄めて分析を実施する。その後1mol/LのHClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AaA:Acid Alkali Acid)。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(13C/12C)、¹⁴C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

δ¹³Cは試料炭素の¹³C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLibbyの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.2(Bronk&Lee,2013)である。また、較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)を用いる。

3. 結果

結果を第29表に示す。分析の結果、炭素量が少なく、通常量(1mg)の約1/10以下の試料が5点存在する(SK1土器2, SK1土器4, SK2土器1, SK2土器4, SK6土器2)。これらは他に比べ測定誤差が大きくなっており、参考値程度にとらえておいた方が無難である。

SK1土器2は 4500 ± 130 BP, SK1土器3は 2230 ± 25 BP, SK1土器4は 3370 ± 90 BP, SK2土器1は 2645 ± 35 BP, SK2土器4は 3600 ± 1000 BP, SK2土器5は 2220 ± 30 BP, SK2土器8は 2750 ± 30 BP, SK2土器9は 2290 ± 25 BP, SK2土器10は 2410 ± 25 BP, SK2土器11は 2310 ± 25 BP, SK3土器1は 2410 ± 30 BP, SK3土器2は 2670 ± 30 BP, SK3土器3は 2310 ± 25 BP, SK3土器5は 2245 ± 30 BP, SK3土器6は 2295 ± 25 BP, SK3土器7は 2485 ± 30 BP, SK4土器1は 2735 ± 30 BP, SK4土器2は 2320 ± 30 BP, SK4土器3は 3720 ± 35 BP, SK4土器4は 2270 ± 30 BP, SK4土器5は 2185 ± 30 BP, SK4土器6は 2520 ± 30 BP, SK5土器1は 2510 ± 30 BP, SK5土器2は 2240 ± 30 BP, SK5土器3は 2605 ± 25 BP, SK5土器5は 2240 ± 25 BP, SK6土器1は 2245 ± 30 BP, SK6土器2は 3115 ± 50 BP, SK6土器3は 2345 ± 25 BP, SX1土器2は 2355 ± 25 BP, SI9No10は 2915 ± 25 BP, SI9No12は 2930 ± 25 BP, SK180No2は 2920 ± 25 BP, SI26No1は 3160 ± 25 BP, SK110No10は 2250 ± 25 BP, 第8トレンチNo21は 2895 ± 25 BP, 第12トレンチNo137は 2885 ± 25 BP, 第15トレンチNo3は 2885 ± 20 BP, SK67No9は 5425 ± 35 BP, SK67No6(表)は 2825 ± 25 BP, SK67No6(内)は 3330 ± 30 BP, C地区No39は 2510 ± 25 BP, SK23No2は 2635 ± 25 BPである。

第29表 放射性炭素年代測定結果

試料名	調査次	土層の概要	採取場所	磁場	$\delta^{13}C$ (‰)	pMC(%)	年代値 (BP ± σ)	暦年較正用 (BP ± σ)	Code No. pa1- P1D-	備考
SK1土器2	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-31.13±0.48	56.89±0.20	4500±130	4630±125	10032	32077 *
SK1土器3	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-29.30±0.20	75.77±0.24	2220±25	2228±25	10033	32078 *
SK1土器4	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-28.53±0.21	65.78±0.21	2710±30	2719±30	10034	32079 *
SK1土器1	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-27.74±0.25	71.95±0.31	2645±30	2644±30	10035	32080 *
SK2土器4	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	57.55±5.69	63.54±7.47	1600±1000	3842±1004	10036	32081 *
SK2土器5	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-31.82±0.19	75.84±0.28	2220±30	2221±30	10037	32082 *
SK2土器8	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-26.96±0.30	70.02±0.25	2750±30	2749±28	10038	32083 *
SK2土器9	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-29.60±0.22	75.20±0.25	2290±25	2289±27	10039	32084 *
SK2土器10	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-28.17±0.32	74.07±0.28	2410±25	2410±27	10040	32085 *
SK2土器11	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-24.13±0.25	75.05±0.21	2310±25	2309±28	10041	32086 *
SK2土器12	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-28.02±0.42	74.98±0.27	2410±30	2412±28	10042	32087 *
SK2土器7	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-28.17±0.30	71.71±0.27	2670±30	2671±30	10043	32088 *
SK3土器3	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-32.78±0.20	75.02±0.24	2310±25	2309±26	10044	32089 *
SK3土器5	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-34.28±0.21	75.81±0.29	2245±30	2246±30	10045	32090 *
SK3土器6	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-31.04±0.19	75.17±0.25	2295±25	2293±28	10046	32091 *
SK3土器7	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-24.97±0.31	73.41±0.28	2485±30	2483±28	10047	32092 *
SK3土器8	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-29.12±0.28	71.12±0.28	2725±30	2731±28	10048	32093 *
SK3土器9	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-35.79±0.32	74.92±0.27	2320±30	2319±28	10049	32094 *
SK3土器2	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-30.81±0.41	62.95±0.27	3720±35	3718±34	10050	32095 *
SK4土器4	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-33.12±0.33	75.39±0.27	2270±30	2269±28	10051	32096 *
SK4土器5	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-30.12±0.26	76.16±0.27	2185±30	2187±28	10052	32097 *
SK4土器6	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-28.23±0.28	73.05±0.28	2520±30	2522±28	10053	32098 *
SK5土器1	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-29.06±0.37	73.15±0.27	2510±30	2511±29	10054	32099 *
SK5土器2	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-23.45±0.29	75.85±0.27	2240±30	2241±28	10055	32100 *
SK5土器3	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-26.07±0.25	72.21±0.24	2695±25	2692±28	10056	32101 *
SK5土器5	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-33.40±0.30	75.66±0.28	2240±25	2240±27	10057	32102 *
SK5土器6	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-28.13±0.27	75.59±0.28	2245±30	2247±29	10058	32103 *
SK5土器7	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-28.81±0.48	67.86±0.43	3115±50	3115±50	10068	32104 *
SK5土器2	平成18年度調査	粘土土層(中期)	外側	AaA	-24.08±0.44	74.70±0.24	2345±25	2342±25	10070	32106 *
SK1土器2	平成18年度調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-24.94±0.35	74.57±0.22	2355±25	2357±23	10069	32105 *
SK19m.10	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	外側	AaA	-27.21±0.32	69.55±0.21	2915±25	2916±24	10071	32107 *
SK19m.12	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	内側	AaA	-29.48±0.29	69.45±0.22	2935±25	2928±24	10072	32108 *
SK19m.2	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	採取溝	AaA	-37.79±0.32	69.50±0.21	2920±25	2922±23	10073	32109 *
SK19m.10	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	採取溝	AaA	-31.43±0.34	67.49±0.20	3160±25	3158±23	10074	32110 *
SK19m.10	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	外側	AaA	-32.60±0.37	75.55±0.23	2250±25	2252±24	10075	32111 *
SK19m.21	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	内側	AaA	-26.78±0.40	69.74±0.22	2895±25	2895±24	10076	32112 *
SK19m.127	第2次復旧調査	縄文土層(晩期、難解)	外側	AaA	-34.64±0.34	69.83±0.21	2885±25	2884±23	10077	32113 *
SK19m.3	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	外側	AaA	-26.24±0.34	69.81±0.20	2985±20	2986±22	10078	32114 *
SK19m.9	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	外側	AaA	-27.82±0.44	59.90±0.24	3425±35	3424±32	10079	32115 *
SK19m.6	第2次復旧調査	縄文土層(晩期)	外側	AaA	-26.88±0.31	70.35±0.23	2825±25	2824±26	10080	32116 *
SK67m.6	第2次復旧調査	粘土土層(中期)	内側	AaA	-26.32±0.35	66.05±0.23	3330±30	3331±28	10081	32117 *
C地区地39	第2次復旧調査	縄文土層(晩期、難解)	内側	AaA	-23.78±0.30	73.19±0.24	2510±25	2508±26	10082	32118 *
SK23m.2	第1次復旧調査	縄文土層(晩期)	内側	AaA	-39.08±0.33	72.02±0.21	2635±25	2635±23	10083	32119 *

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) 暦年較正は、1950年を基準として何年前であるかを示す。

3) 付記した調査は、測定誤差 σ (測定値の50%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) Aaは、陽、アルカリ、難解に因って、アルカリ磁場の濃度を定法より低濃度にした場合に記す。

5) >は炭素量が少ない試料

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪(年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している)等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13(Reimer et al.,2013)である。また、較正年代を求めるソフトウェアはいくつか公開されているが、今回はOxcal4.2(Bronk & Lee,2013)を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが(Stuiver and Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値(1年単位)を記す(第30表)。

誤差 2σ の値を示すと、SK1土器2はcalBC3625-2910、SK1土器3はcalBC380-205、SK1土器4はcalBC1885-1455、SK2土器1はcalBC895-785、SK2土器4はcalBC4790-AD130、SK2土器5はcalBC375-205、SK2土器8はcalBC975-825、SK2土器9はcalBC405-235、SK2土器10はcalBC730-400、SK2土器11はcalBC410-260、SK3土器1はcalBC735-400、SK3土器2はcalBC895-800、SK3土器3はcalBC410-260、SK3土器5はcalBC390-205、SK3土

第30表 暦年較正結果

試料名	年代値	較正年代 (calBC)				較正年代 (calBP)				Code No.	
		σ		2σ		σ		2σ		pal-	PLD-
		年代値	%	年代値	%	年代値	%	年代値	%		
SK1土器2	4530± 125	3492-3469	3.5	3626-3597	1.7	5441-5418	5575-5546	10032	32077		
		3374-3081	58.1	3526-2911	93.7	5323-5030	5475-4860				
		3069-1026	6.5			5018-4975					
SK1土器3	2228± 25	364- 352	8.5	381- 342	18.3	2313-2301	2330-2291	10033	32078		
		296- 228	52.7	326- 204	77.1	2247-2177	2275-2153				
		222- 211	7.0			2171-2160					
SK1土器4	3367± 87	1752-1531	68.2	1887-1494	93.8	3701-3480	3836-3443	10034	32079		
SK2土器1	2644± 34	829-796	68.2	895-866	6.8	2778-2745	2844-2815	10035	32080		
				860-787	88.6		2809-2736				
SK2土器4	3642± 1004	3495-3466	0.6	4789-AD128	95.4	5444-5415	6738-1822	10036	32081		
		3375-898	67.6			5324-2847					
SK2土器5	2221± 30	361- 351	6.4	376- 203	95.4	2310-2300	2325-2152	10037	32082		
		305- 210	61.8			2254-2159					
SK2土器8	2749± 28	916- 843	68.2	974- 956	4.5	2865-2792	2923-2905	10038	32083		
				942- 825	90.9		2891-2774				
SK2土器9	2289± 27	400- 362	68.2	404- 356	74.9	2349-2311	2353-2305	10039	32084		
				287- 234	20.5		2236-2183				
SK2土器10	2410± 27	511- 410	68.2	732- 691	8.9	2460-2359	2681-2640	10040	32085		
				660- 650	1.7		2609-2599				
				545- 402	84.8		2494-2351				
SK2土器11	2309± 25	401- 379	68.2	408- 359	93.3	2350-2328	2357-2308	10041	32086		
				272- 262	2.1		2221-2211				
SK3土器1	2412± 28	516- 409	68.2	735- 688	10.6	2465-2358	2684-2637	10042	32087		
				663- 648	2.6		2612-2597				
				547- 402	82.2		2496-2351				
SK3土器2	2671± 30	842- 801	68.2	896- 798	95.4	2791-2750	2845-2747	10043	32088		
SK3土器3	2309± 26	402- 379	68.2	409- 358	91.9	2351-2328	2358-2307	10044	32089		
				275- 258	3.5		2224-2207				
SK3土器5	2246± 30	382- 354	21.9	393- 346	28.6	2331-2303	2342-2295	10045	32090		
		291- 232	46.3	321- 206	66.8	2240-2181	2270-2155				
SK3土器6	2293± 26	399- 367	68.2	405- 357	80.0	2348-2316	2354-2306	10046	32091		
				285- 235	15.4		2234-2184				
SK3土器7	2483± 28	756- 730	11.5	774- 508	94.6	2705-2679	2723-2457	10047	32092		
		692- 679	5.4	501- 490	0.8	2641-2628	2450-2439				
		671- 659	5.2			2620-2608					
		651- 544	46.1			2600-2493					
SK4土器1	2737± 29	904- 840	68.2	969- 963	1.0	2853-2789	2918-2912	10048	32093		
				933- 816	94.4		2882-2765				
SK4土器2	2319± 29	405- 380	68.2	416- 357	90.6	2354-2329	2365-2306	10049	32094		
				285- 235	4.8		2234-2184				
SK4土器3	3718± 34	2194-2175	11.1	2206-2021	94.7	4143-4124	4155-3970	10050	32095		
		2145-2117	17.2	1992-1984	0.7	4094-4066	3941-3933				
		2098-2039	39.9			4047-3988					
SK4土器4	2269± 28	394- 357	45.3	400- 351	50.5	2343-2306	2349-2300	10051	32096		
		282- 257	19.2	301- 210	44.9	2231-2206	2250-2159				
		243- 237	3.7			2192-2186					
SK4土器5	2187± 28	354- 291	46.6	360- 176	95.4	2303-2240	2309-2125	10052	32097		
		232- 199	21.6			2181-2148					
SK4土器6	2522± 28	786- 749	23.6	794- 730	30.9	2735-2698	2743-2679	10053	32098		
		684- 667	10.7	692- 659	14.8	2633-2616	2641-2608				
		640- 589	28.4	651- 543	49.7	2589-2538	2600-2492				
		578- 566	5.5			2527-2515					
SK5土器1	2511± 29	772- 747	13.8	791- 727	24.8	2721-2696	2740-2676	10054	32099		
		685- 666	10.6	721- 702	2.4	2634-2615	2670-2651				
		642- 556	43.8	696- 540	68.2	2591-2505	2645-2489				
SK5土器2	2241± 28	377- 354	18.3	390- 346	25.3	2326-2303	2339-2295	10055	32100		
		291- 231	49.9	321- 206	70.1	2240-2180	2270-2155				
SK5土器3	2603± 26	807- 788	68.2	816- 771	95.4	2756-2737	2765-2720	10056	32101		

試料名	年代値	校正年代 (calBC)				校正年代 (calBP)		Code No.	
		σ		2σ		σ	2σ	pal-	PLD-
		年代値	%	年代値	%				
SK5土器5	2240± 27	376- 354 292- 231	17.5 50.7	389- 346 321- 206	24.6 70.8	2325-2303 2241-2180	2338-2295 2270-2155	10057	32102
SK6土器1	2247± 29	382- 354 291- 232	22.6 45.6	394- 347 321- 206	29.3 66.1	2331-2303 2240-2181	2343-2296 2270-2155	10058	32103
SK6土器2	3115± 50	1436-1372 1358-1300	37.4 30.8	1498-1261	95.4	3385-3321 3307-3249	3447-3210	10068	32104
SK6土器3	2343± 25	410- 389	68.2	484- 376	95.4	2359-2338	2433-2325	10070	32106
SK1土器2	2357± 23	429- 391	68.2	507- 501 491- 387	1.1 94.3	2378-2340	2456-2450 2440-2336	10069	32105
SI9 No.10	2916± 24	1188-1182 1157-1146 1129-1052	3.6 6.5 58.1	1207-1141 1135-1024	27.5 67.9	3137-3131 3106-3095 3078-3001	3156-3090 3084-2973	10071	32107
SI9 No.12	2928± 24	1194-1142 1133-1076 1065-1058	32.6 32.1 3.5	1215-1043	95.4	3143-3091 3082-3025 3014-3007	3164-2992	10072	32108
SK180 No.2	2922± 23	1189-1180 1159-1145 1130-1056	6.2 9.8 52.2	1211-1031	95.4	3138-3129 3108-3094 3079-3005	3160-2980	10073	32109
SI26 No.1	3158± 23	1490-1484 1452-1412	5.0 63.2	1497-1401	95.4	3439-3433 3401-3361	3446-3350	10074	32110
SK110 No.10	2252± 24	383- 357 285- 235	26.6 41.6	393- 350 306- 209	34.9 60.5	2332-2306 2234-2184	2342-2299 2255-2158	10075	32111
第8トレンチ No.21	2895± 24	1116-1030	68.2	1193-1173 1163-1144 1131-1004	3.5 3.6 88.3	3065-2979	3142-3122 3112-3093 3080-2953	10076	32112
第12トレンチ No.137	2884± 23	1109-1099 1089-1017	7.9 60.3	1189-1180 1155-1148 1128- 994 986- 980	0.9 0.7 93.3 0.5	3058-3048 3038-2966	3138-3129 3104-3097 3077-2943 2935-2929	10077	32113
第15トレンチ No.3	2886± 22	1109-1098 1090-1021	9.5 58.7	1189-1179 1156-1147 1129- 997	1.1 0.8 93.5	3058-3047 3039-2970	3138-3128 3105-3096 3078-2946	10078	32114
SK67 No.9	5424± 37	4333-4311 4305-4260	21.7 46.5	4349-4231 4192-4179	93.7 1.7	6282-6260 6254-6209	6298-6180 6141-6128	10079	32115
SK67 No.6(外)	2824± 26	1008- 968 963- 932	39.0 29.2	1047- 912	95.4	2957-2917 2912-2881	2996-2861	10080	32116
SK67 No.6(内)	3331± 28	1662-1607 1583-1559 1553-1547	48.3 16.9 3.0	1687-1530	95.4	3611-3556 3532-3508 3502-3496	3636-3479	10081	32117
C地区 No.39	2508± 26	770- 747 685- 666 642- 556	12.9 10.8 44.6	788- 727 718- 706 695- 541	23.4 1.6 70.4	2719-2696 2634-2615 2591-2505	2737-2676 2667-2655 2644-2490	10082	32118
SK23 No.2	2635± 23	816- 797	68.2	830- 792	95.4	2765-2746	2779-2741	10083	32119

1) 計算には、Oxcal V4.2を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 析目を丸めるのが煩瑣だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1析目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である

器6はcalBC405-235、SK3土器7はcalBC775-490、SK4土器1はcalBC970-815、SK4土器2はcalBC415-235、SK4土器3はcalBC2205-1985、SK4土器4はcalBC400-210、SK4土器5はcalBC360-175、SK4土器6はcalBC795-545、SK5土器1はcalBC790-540、SK5土器2はcalBC390-205、SK5土器3はcalBC815-770、SK5土器5はcalBC390-205、SK6土器1はcalBC395-205、SK6土器2はcalBC1500-1260、SK6土器3はcalBC485-375、SK1土器2はcalBC505-385、SI9No10はcalBC1205-1025、SI9No12はcalBC1215-1045、SK180No2は

calBC1210-1030, SI26No1はcalBC1495-1400, SK110No10はcalBC395-210, 第8トレンチNo21はcalBC1195-1005, 第12トレンチNo137はcalBC1190-980, 第15トレンチNo3はcalBC1190-1000, SK67No9はcalBC4350-4180, SK67No6(外)はcalBC1045-910, SK67No6(内)はcalBC1685-1530, C地区No39はcalBC790-540, SK23No2はcalBC830-790である。

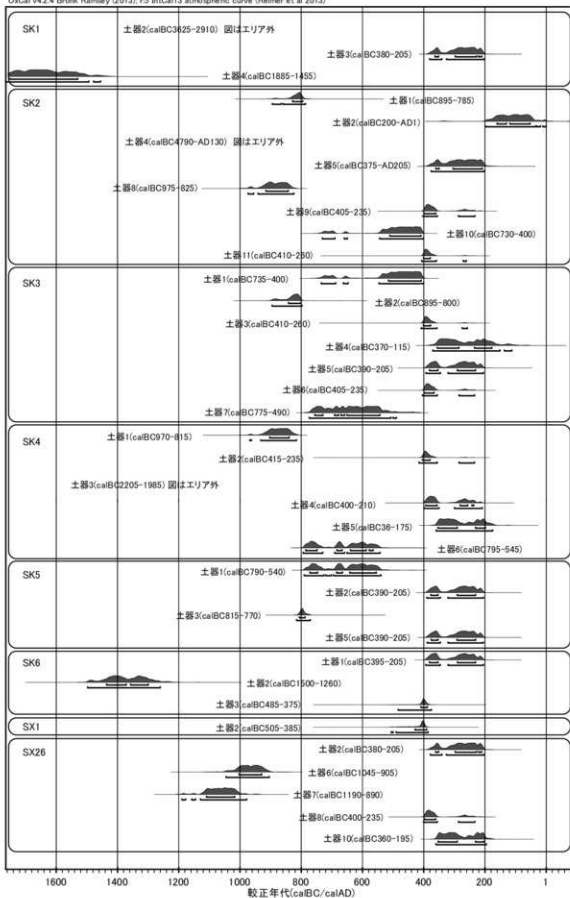
4. 考察

本分析調査では、墓坑を中心として1遺構から検出された複数個体の土器付着炭化物について年代測定を行っている。このため、弥生時代中期の墓坑(SK1, SK2, SK3, SK4, SK5, SK6, SK26)および不明遺構であるSX1の結果をわかりやすいように第104図に遺構毎の暦年代をまとめた。この中には、弊社が平成27年度に実施したSK26の年代測定結果および吉田邦夫氏により実施された平成18年度調査の年代測定結果(吉田, 2011)も加えてある。各遺構ともに、calBC200~400年あたりに分布の中心があるようにみえるが、これより古い値を示す試料も散見される。このように値がばらつく原因として、炭化物が遺構の外側に付着した煤を対象にしていることや、炭化物が脆弱でアルカリ処理を十分にできなかったことから、古い炭素の影響を受けている可能性がある。おそらく、遺構の時期としては、値の分布の中心にあたるcalBC200~400年あたりと推定されるが、これは発掘調査所見から見た年代観とも矛盾しない。

第1次~第4次確認調査の暦年較正結果を第30表に示す。これらは縄文時代晩期の土器が多いが、年代値も概ねその範囲に入っている。しかしながら、SK110No.10のように弥生時代の遺構から出土した縄文土器の時代観が弥生時代を示したり、SK67No.9のように弥生時代の土器が極端に古い年代を示したりする例もある。なお、弥生時代の土器であるSK67No.6は、古い値が出ているほか、内側と外側で数百年の時代の開きがある(内側の方が古い)。これらの原因として、埋没中に炭素の汚染を受けたこと、試料が脆弱のため前処理の段階で汚染の影響を排除できなかったことなどが考えられる。

引用文献

- Bronk Ramsey, C., & Lee, S., 2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.
- Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hafidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J, 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Stuiver Minze and Polach A Henry, 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 吉田邦夫, 2011, 土器付着炭化物の放射性炭素年代, 茨城県常陸大宮市泉坂下遺跡, 常陸大宮市教育委員会, 100-103



第104図 遺構毎の較正年代

3 泉坂下遺跡における石棒製作について

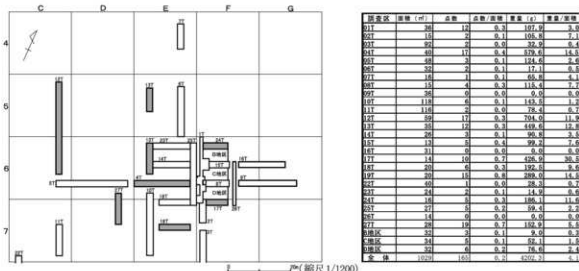
(1) はじめに

そもそも2006年に実施した常陸大宮市泉坂下遺跡の発掘調査は、2001年の常陸太田市本覚遺跡と同じく「関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作」の研究を目的に企画したものである。調査地の地権者である菊池榮一氏が当時の大宮町歴史民俗資料館と上野小学校に寄贈された資料の中に、石棒の未成品が含まれていたことが手掛かりであった。しかし、菊池氏の話によれば、採集した7点の石棒は特定の箇所に集中していたのではなく、広い範囲から拾い集めたものだという。一方で、これも資料館に寄贈されていた弥生時代中期の壺形土器については、出土位置を鮮明に記憶されていたことから、再葬墓の確認も調査の目的に加え、その地点が掛かるように第1トレンチを設定したのであった。この調査区からは、石棒製作の遺物も検出されたが、人面付土器が出土し、再葬墓群の調査に主力を注ぐ結果となった。

出土した遺物の全てを移管し報告書を刊行した後、常陸大宮市教育委員会により、泉坂下遺跡の保存整備を目的とした確認調査が実施されることになった。遺跡の範囲を確定するために調査区が拡大されることは、石棒製作の痕跡を把握する上でも期待が持たれた。本稿では、2012～2015年の調査で検出された遺物の中から、石棒製作に関わる遺物を抽出し、泉坂下遺跡における石棒製作について考察を加えておきたい。

(2) 石棒の分布

2012～2015年調査の遺物から抽出された石棒は点数が207点、重量が7123.0gであった。他に、第27トレンチの土壌サンプルから水洗選別で検出された石棒があり、その点数は170点、重量は57.8gである。2006年調査の第1トレンチから出土した石棒は点数が22点、重量が248.6gであった。この調査でも他に、土器内土壌などの水洗選別で検出された石棒があり、その点数は100点、重量は8.7gである。



*2006年調査を含めて、遺構出土と水洗選別を除いた資料による。

第105図 調査区における石棒の分布密度

まずは、未成品や剥片、碎片を含めて、泉坂下遺跡における石棒の分布について概観する。確認調査は、遺跡の全面を対象としておらず、トレンチの面積も一定しないので、各トレンチにおける1mあたりの出土量で比較することになる。したがって、地表面で採集されたトレンチ外のはを除く。また、必要に応じて調査が及んだ遺構もあるが、原則として遺構内の掘削は実施していないことから、遺構覆土のものを除き、一部に実施した水洗選別も除く。第1トレンチについては、2006年調査から同様に選択して加えた。このようにして点数165点、重量4202.3gの石棒を対象に、地点ごとの出土量を点数と重量で比較した(第105図)。

点数で最も高い数値は第19トレンチの0.8点/m²であり、第17トレンチと第27トレンチの0.7点/m²の順位を示す。以下は漸移的に数値が減少する。重量で最も高い数値は第17トレンチの30.5g/m²であり、第4トレンチと第19トレンチの14.5g/m²、第13トレンチの12.8g/m²、第12トレンチの11.9g/m²、第24トレンチの11.6g/m²の順位を示す。以下は数値が隔絶して少なくなる。グリッドE6区の東端からF6区の中央にかけて再葬墓が集中する範囲の調査区は、点数、重量ともに低い数値を示した。2006年調査の第1トレンチは、石棒の分布密度が低い地点に設定されていたことがわかる。

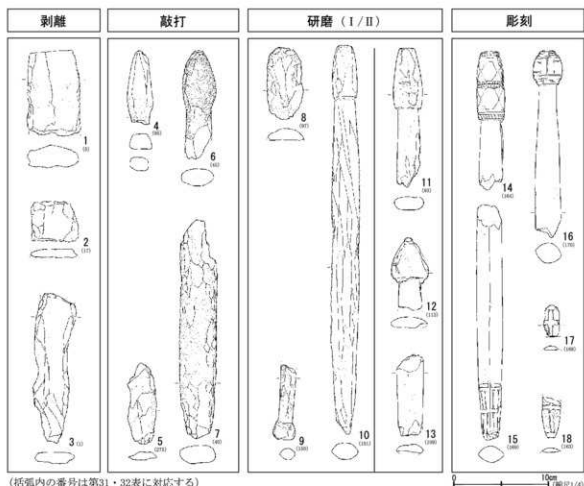
点数による分布密度が高い数値を示した第27トレンチにおいては、第26号竪穴住居跡という縄文時代晩期の遺構が検出され、その覆土中に石棒製作の痕跡が集中していた。石棒の分布密度が、縄文時代晩期の遺跡の実態を反映していることは確かであろう。しかし、2006年調査の第1トレンチで再葬墓の土器内土壌を水洗選別したところ、石棒製作の剥片や碎片が検出されており、これらは、周囲の土壌に含まれていたものが土器内に流入したものと推定された。したがって縄文時代晩期には、ここにも石棒製作の痕跡が残されていたことになる。その痕跡が希薄なのは、弥生時代以降に遺跡が重複することにも原因を考える必要がある。石棒の重量による分布密度が第24トレンチと第19トレンチという、再葬墓群の南北の限界に相当する地点で高い数値を示すのは、後世に移動された可能性もあり、縄文時代晩期の遺跡の実態をそのまま反映するとは限らない。これは、今後の課題としておきたい。

(3) 石棒の石材

石棒の石材については、日立市の宮脇A遺跡〔鈴木2015〕、上の代遺跡〔鈴木2016〕と同じ基準で比較するために、田切美智雄氏に同定を依頼した。また、本覚遺跡には日立変成岩の鮎川層だけでなく、八溝山地の粘板岩も混じることを以前に指摘いただいたので、粘板岩については、この両者の識別をも併せてお願いした。観察の対象とした石棒は、水洗選別を含まない206点である。

206点の石棒は、粘板岩と非粘板岩に分けられる。粘板岩の点数は188点(91%)、重量は6071.2g(85%)であった。非粘板岩の点数は18点(9%)で、重量は1023.1g(15%)。各石材の点数と重量は、クロリトイド片岩が2点で38.6g、雲母片岩が2点で92.6g、白雲母片岩が3点で265.3g、千枚岩が4点で127.8g、変成砂岩が1点で155.8g、ホルンフェルスが1点で19.6g、砂岩片岩が1点で51.9g、礫質片岩が1点で31.0g、凝灰岩が3点で240.5gであった。粘板岩が際立って多く、他の石材はいずれも僅かである。

粘板岩の識別は、「鮎川層：A」「八溝山地：Y」の二者択一ではなく、「不明：N」さらに「不明だが鮎川層に近い：N(A)」「不明だが八溝山地に近い：N(Y)」の5つに判定を区分した。判定の結果、「鮎川層：A」は点数が96点(51%)で重量が33875.0g(64%)、「不明だが鮎川層に近



第106図 泉坂下遺跡における石棒の製作工程

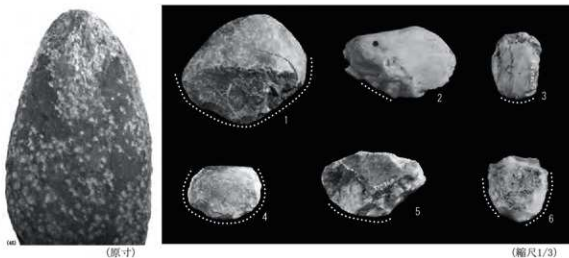
い：N (A) は点数が44点 (23%) で重量が1277.0g (21%)，「八溝山地：Y」は点数が28点 (15%) で重量が634.1g (10%)，「不明だが八溝山地に近い：N (Y)」は点数が17点 (9%) で重量が221.4g (4%)，「不明：N」は3点 (2%) で重量が63.7g (1%) であった。粘板岩の75～85%を「鮎川層」，25～15%を「八溝山地」が占めると推定される結果である。なお，「不明：N，N (A)，N (Y)」の判定は，研磨状態で被熱のもの，破片が小さなものが多い。

非粘板岩の石材であるクロリトイド片岩，雲母片岩，白雲母片岩，千枚岩，変成砂岩，砂岩片岩，礫質片岩についても日立変成岩と同定されており，やはり80%近くを占めている。石棒の石材のほとんどは，日立変成岩が堆積する多賀山地から供給されていたと考えられる。

(4) 石棒の製作

粘板岩の石棒は，点数でも重量でも85%以上を占め，その製作の痕跡が遺跡に残されていた。泉坂下遺跡においても粘板岩に限定して，石棒の製作工程が復元される。

原石 宮脇A遺跡の観察により，石棒の原石は河川礫で，断面の大きさと形状から素材礫A・B・Cの3つを認めている。素材礫A—断面の長軸40～52mm，短軸25～33mmの棒状礫を典型とする。素材礫B—断面の長軸56～60mm，短軸10～16mmの薄い板状礫を典型とする。素材礫C—断面の長軸60mm以上，短軸25mm以上と推定される厚い板状礫。泉坂下遺跡においても，未成品に残る自然面に円磨が進行していることから，原石は河川礫と判断されるものがある(第106図1，第111図1)。これらは，素材礫A (第111図1)，素材礫C (第106図1) に，それぞれ推定される。



第107図 敲打段階の工具

このような素材礫の異なりは、特に厚みを必要とする頭部の断面形状に影響したと考えられる。断面形状が円形から楕円形の頭部(第106図14・16)がある一方で、扁平な頭部(第106図11・12)も見られるのである。

剥離 189点のうち剥離の痕跡だけを残すものは39点である。点数で21%、重量で13%が剥離段階の資料ということになる。点数と重量の比率の差は、比較的小さな資料が多いことによる。

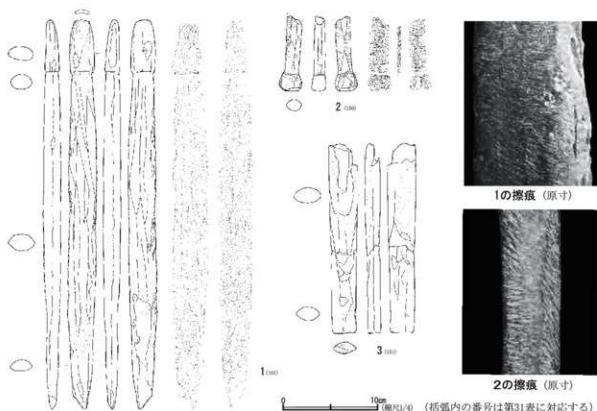
剥片には、長さ10cmを超える大型のものや、背面に大きく自然面を残すものは見られず、剥離成形の初期を示す痕跡は含まれていない。この工程はもっぱら他所で行なわれて、未成品が持ち込まれたものと推定される。但し、1点のみ剥離成形の初期の未成品(第106図1)があり、原石のまま持ち込まれることが全くなかったとは断言できない。剥離は、両極打法によるもので、この工具に相当する敲石と台石を、出土した遺物の中に見出す。ただ、これらを石棒製作だけの工具と限定することはできない。

敲打 189点のうち剥離に敲打が複合した痕跡を残すものは46点、敲打の痕跡だけを残すものは7点である。点数で28%、重量で38%が敲打段階の資料ということになる。点数と重量の比率の差は、比較的大きな資料が多いことによる。

剥離が形成した稜などの突出部分を除去するのが敲打段階の初期に相当し、敲打を繰り返しながら全体の形状が整えられる。その初期は、円礫状の敲石でも対応できる作業であり、未成品の稜線に残された大きめの衝突痕は、このような敲石が形成したものであるであろう。一方、細かな衝突痕は、先端が尖るような敲石により形成されたものである。衝突痕はいくつかが列状に並ぶことが観察された(第107図の左)。1つ1つが独立に形成されたものではなく、敲石の端部には、このような衝突痕を形成する加工があった。それはピックのような形状ではない。泉坂下遺跡では、礫の縁辺が部分的に剥離され、その剥離の端部が敲打により潰れた状態の敲石が6点(第107図1~6)抽出された。石材はホルンフェルス(1・4)と石英(2・3・5・6)。宮脇A遺跡ではチャート、ホルンフェルス、変成閃緑岩、本覚遺跡では砂岩、石英斑岩が利用されている。硬質の石材で、片手での操作に便利な量と形態の礫が選択されたのであろう。

研磨 189点のうち研磨の痕跡を残すものは80点である。点数で42%、重量で46%が研磨段階もしくは成品ということになる。点数と重量の比率はほぼ等しい。

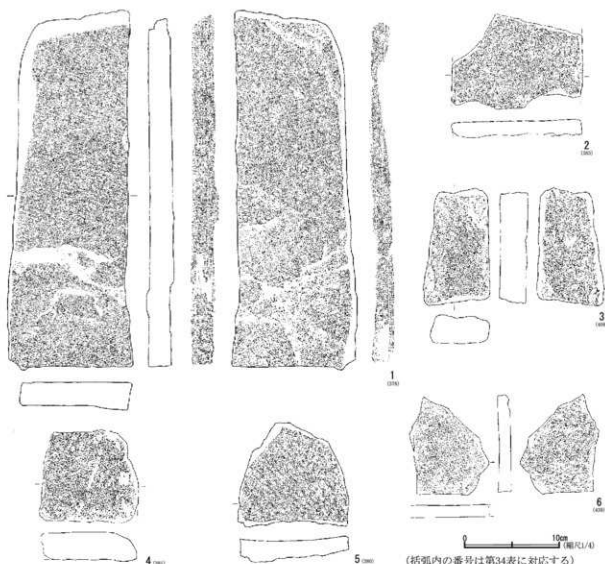
2015年調査で第26号竪穴住居跡の覆土から出土した石剣の未成品(第108図1)は、全体が判明す



第108図 研磨段階Ⅰの未成品と成品

る唯一の資料である。法量は長さ411mm、幅31mm、厚さ19mmで、重量は320.0g。単頭の石剣であり、一部に剥離と敲打の痕跡を残すが、ほぼ全面が研磨されている。研磨に伴う擦痕は全体的に横位からやや右下がりの斜位に残されており、研磨面の境界には稜が形成されている。これは、固定された砥石の上で、当てる箇所を変えながら研磨することにより残された痕跡と考えられた。同じように稜を形成した研磨の痕跡は、両頭と推定される石刀の未成品(第108図2)にも観察される。この擦痕は太く明瞭である。横位の擦痕を残し、固定された砥石による研磨が推定される工程を「研磨段階Ⅰ」と呼ぶ。研磨段階の前半期に位置付けられるが、この工程だけで研磨段階を完了し、成品化されたものもある。第26号竪穴住居跡から出土した石剣の基部(第108図3)は、被熱により赤化し破碎した状態で検出されており、成品として扱われたものと見られるが、製作痕跡は研磨段階Ⅰのものである。

研磨段階Ⅰの工具には、本覚遺跡の「砥石Ⅱ類—砥石を固定し、対象物を動かして研磨したと考えられる形態、法量、重量、使用面の位置を示すもの」が相当する。これは「固定式」あるいは「置き砥石」と表現される。砥石Ⅱ類で全体が判明する唯一のもの(第109図1)も、第26号竪穴住居跡において石剣の未成品(第108図1)の近くから出土した。この砥石は後に、第4号掘立柱建物跡の柱穴が掘り込まれた位置にあったと捉えられたが、それでも本来は、住居跡に埋没していたものが流れ込んだと考えられる状況にある。法量は長さ376mm、幅132mm、厚さ30mmで、重量は1791.0g。略長方形で板状の礫を素材とし、石材は軟質砂岩である。表裏面及び長軸の側面が研ぎ面として使用され、表裏面は、図示した中央から上位に顕著な磨滅が観察される。擦痕は明瞭でないが、対象物を長軸方向に動かして研磨したと考えられる研ぎ面の分布である。この砥石の幅は、石剣の未成品(第108図1)に残された研磨面の痕跡とよく一致する。表裏面の下位は、磨滅

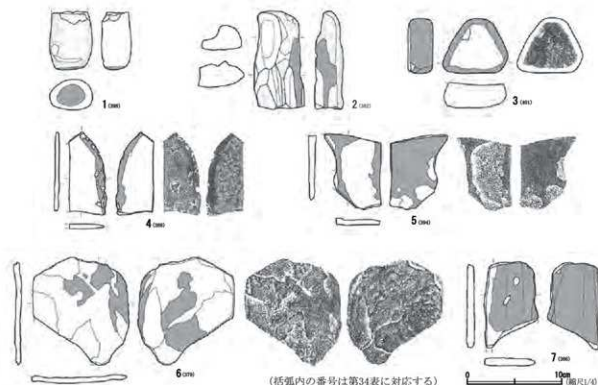


第109図 研磨段階Ⅰの工具

しない状態のままであり、特に表面には礫面が段差をもって突出した部分があり、これを避けて使用された。このような部分だけの破片について、砥石の一部であったと判断することは難しい。研ぎ面が残存することから、砥石と判断された破片には、もとは板状の大きな砥石であったと推定されるものがある(第109図2~6)。石材は軟質砂岩(2~5)、凝灰岩(6)、砂岩、安山岩で、軟質砂岩が際立って多い。軟質砂岩には、粒子の粗いもの(3)と細かなもの(1・2・4・5)とがあり、凝灰岩はさらに粒子のきめが細かい。石刀の未成品(第108図2)の擦痕は粒子の粗い砥石に、石剣の未成品(第108図1)の擦痕は粒子の細かな砥石に、それぞれ対応した痕跡なのであろう。

一方で、縦位の擦痕を残す研磨が認められる(第106図11~13)。右下がりの斜位もあるが、それは急傾斜である。文様の彫刻までが施され、成品と捉えられるものほとんどに観察される。縦位の擦痕を残し、砥石を動かす研磨が推定される工程を「研磨段階Ⅱ」と呼んで、研磨段階の後半期に位置付ける。

研磨段階Ⅱの工具には、本覚遺跡の「砥石Ⅰ類一対象物を固定し、砥石を動かして研磨したと考えられる形態、法量、重量、使用面の位置を示すもの」が相当する。これは「可動式」あるいは「手持ち砥石」と表現される。砥石Ⅰ類には、円摩が進行した礫の一部を素材としたもの(第

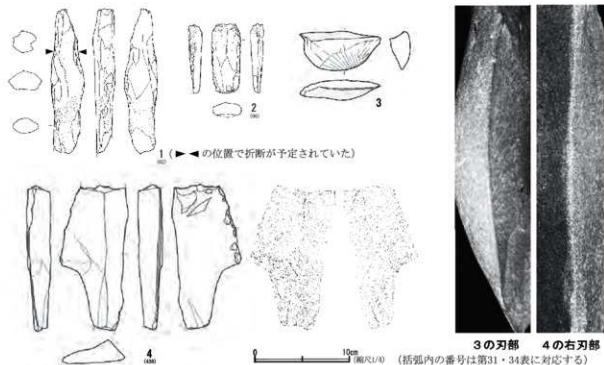


第110図 研磨段階Ⅱの工具

110図1・2)があり、長軸の端部(1)や側面(2)に研ぎ面が位置する。また、板状の礫の破片を素材としたもの(3-7)があり、砥石Ⅱ類の破片を再利用したもの(3・5)も含まれている。側面(5)や、側縁(4・5・6)、表裏面の一部(6・7)に研ぎ面が位置する。側縁の使用は、特に石棒の括れ部を研磨するのにも効果的と考えられる。表裏面の使用には、石棒の体部の湾曲に相当するような溝状の窪みが認められたもの(7)もある。研磨段階Ⅰが形成した後は、研磨段階Ⅱで削られて、表面が平滑に整えられることになる。

砥石Ⅰ類の中には、砥石Ⅱ類を再利用したものがあつた。砥石Ⅱ類を素材として砥石Ⅰ類が製作されるわけであり、そこには砥石Ⅱ類の分割と、分割された破片からの選択を考えなければならない。砥石Ⅱ類のほとんどが破片であることは、再利用の痕跡とも考えられるわけである。また、分割された端部が再利用の選択から漏れたとすれば、それは礫片にしか見えないものと化している。特に軟質砂岩については、砥石以外の用途のために持ち込まれたことは考え難く、これを抽出してみたところ、23点を数えた(第34表)。砥石Ⅱ類の破片が2点だけという宮脇A遺跡とは異なり、砥石の在り方は、本覚遺跡に近い。

折断 石棒の素材を横に折断する方法には、「擦り切り」と、敲打で溝を切つて細らせる「敲き切り」がある。宮脇A遺跡では敲き切り、上の代遺跡では擦り切りと敲き切り、本覚遺跡では擦り切りが確認されている。泉坂下遺跡では、2006年調査で擦り切りが検出されていたが、敲き切りと擦り切りを併用して折断されたもの(第111図2)も見出された。素材の長さを調整するための折断や未成品の破損部分の折断、さらには転用に伴う素材獲得のための折断も想定されるが、製作が進行し欠損も見られない端部が折断されていることには、これらとは異なる目的を考える必要がある。泉坂下遺跡では、一際長く不整な形状の頭部を有する未成品(第111図1)が検出されている。余分と見られる部分には敲打が加えられておらず、ほぼ素材のままの状態である。いずれは折断する部分を残したまま、敲打段階まで製作を進行させているのであり、折断という



第111図 擦り切り折断の資料

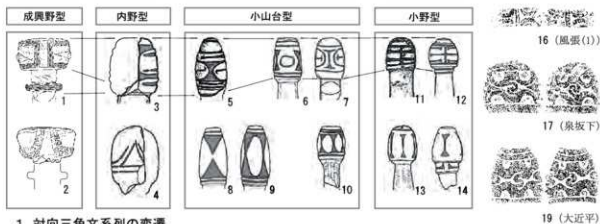
技法が、予定されたものとして製作工程に組込まれていたことも考えなければならない。石剣の端部は、研磨段階にもひび割れ薄い板状に剥がれて欠損しやすい。研磨段階Ⅰの未成品(第108図1)の裏面下部端にも、これが観察されている。全体的に製作工程を進行させながら、研磨段階Ⅰの後に下部部を折断すれば、欠損の無い基部に仕上げられるはずであり、基部が直線的な成品(第108図2)には、折断部分を研磨したことが推定される。これに対応するように、折断で除去された破片(第111図2)にも、研磨段階までの痕跡が残されている。

折断の工具は、擦り切りの削器が2点(第111図3・4)抽出された。2006年調査の1点と合せて3点を見出している。石材はホルンフェルス(3)と砂岩(4)であり、硬質な石材で比較的大きな剥片が選択され、その鋭利な縁辺が使用されている。本覚遺跡においては、直刃か凹刃であったが、泉坂下遺跡では、直刃・凹刃(4)に凸刃(3)が伴う。このような工具は、折断の他に、頭部の括れや太い直線を彫刻するのにも使用されたことが想定される。

彫刻 189点のうち文様が彫刻されたものは10点である。研磨段階の80点のうちでは、点数で13%、重量で21%である。彫刻までが完了したものはほぼ成品とみなすことができるが、一方で彫刻が施されないまま成品化された事例も少なくないことが知られている。

彫刻段階の工具は、硬質な石材の剥片であったと推定されるが、出土した多量の剥片の中から、これを抽出することはほとんど不可能である。したがって、文様の彫刻が製作工程の一部として連続するのか、これは実証が難しい。連続するという視点から、宮脇A遺跡においては、彫刻途中の未成品の存在を指摘したことがある〔鈴木2016〕。泉坂下遺跡では、基部文様の一部が欠損した石剣(第106図15)に、その可能性を考えておきたい。この石剣は、1字文が彫刻された後に、文様の端部を含む基部に欠損が生じた。その欠損部分には研磨が施され、研磨の状態に体部の研磨との明瞭な異なりは認められない。補修ではあっても、製作に伴うものであったと見ている。

泉坂下遺跡における石棒製作には、剥離・敲打・研磨・彫刻の各段階が認められた。つまり一連の工程が窺えるわけではあるが、剥片や欠損品を生成することがもっとも多いと考えられる剥



1. 対向三角文系列の変遷



2. 入組み文系列の変遷

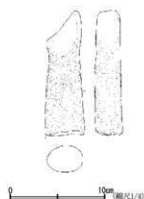
第112図 関東地方東部における石棒の変遷

離段階の痕跡は希薄で、剥片や欠損品を生成することが少ないと考えられる研磨段階の痕跡の方が濃厚である。一連の工程の中では、主に研磨段階から彫刻までの仕上げを主体とした遺跡ではないかと考えられる。なお、「鮎川層：A」と「八溝山地：Y」にそれぞれ推定された石材産地と製作工程の関連についても検討したが、特徴的な差異を見出すことはできなかった。

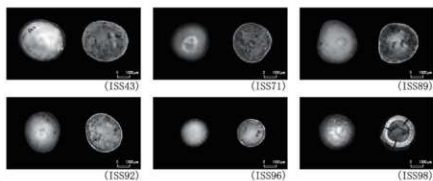
(5) 石棒の型式

関東地方東部の石棒については、量と形態の異なりに加えて頭部文様を重視し、「成興野型」「内野型」「小山台型」「小野型」という変遷を提示してある〔鈴木2015〕。これに拠れば、泉坂下遺跡の石棒には、「小山台型」(第106図14)と「小野型」(第106図15・16)が確認できる。石材は粘板岩であり、石棒製作の痕跡も、これらの型式の製作に伴うものと推定される。長頭形の未成品(第106図4・6・8・10・11)は「小山台型」の、石刀の未成品(第106図9)は「小野型」の、それぞれ未成品に相当し、主に粘板岩を石材として、この2つの型式の石棒が製作されていたことは確実に考えられる。

粘板岩以外の石材で製作された石棒の中には、「小山台型」「小野型」とは異なる形態の頭部で、対向三角文やI字文とは異なる文様が彫刻されたもの(第112図2-17)が検出されている。石材は凝灰岩である。頭部だけでなく体部も幅広で、頭部の形態は「内野型」に共通する。文様は、彫り窪めた半月形が片面の上下左右に位置し、その中央に入組み三叉状文が刻まれている。この文様の祖形は、青森県風張(1)遺跡などの「成興野型」に認める(第112図2-15・16)。弧状の区画内はやはり彫り窪められていて、これがそのまま半月形へと継承される。三叉状文は、中央で区画された左右の枠内に独立していたが、この枠が消失し、三叉状文は互いに入組むようになる。さらに、側面には突起が作出され、ここに穿孔がみられた。この突起は、痕跡器官のような穴に置換



第113図 小野天神前遺跡の石棒未成品(江幡武雄氏採集)



第114図 泉坂下遺跡第27トレンチ土壌サンプルから水洗選別で検出されたタイ科の菌

されることになる。鐮状の隆起帯が頭部と融合する変化は、「成興野型」から「内野型」への変遷のものである。千葉県下ヶ戸宮前遺跡(第112図2-18)も、このようにして成立した文様構成の1つであり、「内野型」の段階に位置付けられるものと考えられる。これが「小山台型」の段階になると、長頭形の頭部に変化する。日立市大近平遺跡(第112図2-19)は、泉坂下遺跡の文様構成から側面の穴が消失した文様構成であり、入組み三叉状文が4単位で頭部を巡る。御霊前遺跡(第112図2-20)は、半月形の彫刻に対向三角文が組合う事例として掲げておく。「成興野型」から「小野型」のI字文への変遷は既に示してある〔鈴木2015〕。これを「対向三角文系列」(第112図1)と呼ぶならば、「成興野型」から「小山台型」までには、もう1つの系列が認められるのであり、これを「入組み文系列」(第112図2)と呼んでおきたい。

入組み文系列の石材は、「内野型」の泉坂下遺跡が凝灰岩、下ヶ戸宮前遺跡が砂岩、「小山台型」の大近平遺跡がクロリトイド片岩であり、御霊前遺跡は黒色片岩であった。つまり、この系列には、粘板岩とは異なる石材の利用が特徴として指摘できそうである。泉坂下遺跡では「内野型」の石棒製作を確認するに至らないものの、常陸大宮市小野天神前遺跡では、砂岩の石棒未成品(第113図)が採集されており、「内野型」もまた茨城県北部において製作されたことが考えられてくる。そうであるならば、「成興野型」を祖形とした石棒製作の当初には多様な石材が利用されていたが、「小山台型」「小野型」と変遷する過程で、入組み文系列が途絶えるとともに、石材の利用は、次第に粘板岩へと収束することを認める。粘板岩が石棒製作に適した性状の石材であったことは確かであろうが、多賀山地の日立変成岩に粘板岩の原石が卓越していたことも、これを支えた要因と考えられる。

(6) おわりに

本稿では、泉坂下遺跡において「小山台型」「小野型」の石棒が製作されていたことを推定した。粘板岩を素材とした、剥離・敲打・研磨・切断・彫刻の各段階の製作痕跡を抽出し、工具との対応を解説してある。一連の製作工程の中では、研磨段階を主体とした遺跡と捉えた。石材は日立変成岩の鮎川層の粘板岩が80%ほどを占めており、これは、太平洋岸沿いの多賀山地に由来する。原産地付近の宮脇A遺跡や上の代遺跡では、主に剥離・敲打段階の痕跡が残されており、泉坂下遺跡や本覚遺跡とは対照的である。宮脇A遺跡や上の代遺跡から泉坂下遺跡や本覚遺跡へと工程途中の未成品が持ち込まれて、一連の製作工程が完結するというシステムが確立されていたことが推定されよう。

第27トレンチの土壌サンプルの水洗選別は、主に石棒製作の微細な痕跡を回収するために実施したものであり、石棒とともに砥石の破片(第35表)なども検出されている。サンプル中に、エイ尾棘が素材と見られる刺突具の破片が1点、タイの歯(第114図)が9点など、海岸部との関係を示す遺物も見出された。主目的のための作業効率から、水洗選別は3mm方眼を選択したが、1mm方眼までを実施すればタイの歯などはさらに多くが回収できたものと思われる。これらを獲得できる最寄りには久慈川河口部であり、現在の流路で18kmほどの距離がある。そこは多賀山地の南端部に相当し、日立市の南高野・上の台・泉前・宮脇A遺跡の久慈遺跡群〔鈴木2005〕が位置する地域であった。日常的な往來の距離ではないものの、直接的な関係を窺うことのできる痕跡の1つではないかと考えている。

さらに、「内野型」に遡る石棒が、茨城県北部で製作されていたことについても言及した。但し、その痕跡は未だ希薄である。縄文時代晩期の前葉から中葉に位置付けられる「成興野型」「内野型」「小山台型」「小野型」の変遷についても、土器型式との対応は確定しておらず、ともに今後の重要な課題となる。その解決の手がかりが、泉坂下遺跡には埋没しているのかもしれない。

本稿の成立にあたり、田切美智雄氏には石材の同定をはじめ多くのご教示をいただき、小宮孟氏には主に魚骨についてのご助言をいただいた。また、猪狩俊哉氏・大滝駿介氏(日立市郷土博物館)、石田守一氏(我孫子市教育委員会)、山ノ上拓己氏(八戸市埋蔵文化財センター)、江幡武雄氏には資料の観察でお世話をいただいた。心より感謝申し上げる。

【註】

- 1 具体的には、「本覚遺跡の研究」第31図6の未成品について八溝山地の粘板岩とご指摘いただいた。
- 2 変成作用を受けた深度により、再結晶の有無、結晶の並びが異なることを、ルーペを使用した観察により判断する。
- 3 「本覚遺跡の研究」において用いた石材の記載に準じる。砂岩を主体とするが、一部に砂質な凝灰岩、泥岩、礫岩も含まれる。
- 4 鮎川で採集した鮎川層の粘板岩を使用し、石剣の研磨実験を行った際の所見による。
- 5 発掘調査で出土した遺物を総覧し石棒を抽出した宮脇A遺跡では、点数57点で重量81638gのうち、剥離段階が19点(33%)で3220.6g(39%)、敲打段階が33点(58%)で4690.0g(57%)、研磨段階が5点(9%)で253.2g(3%)であった。
- 6 3mm方眼の水洗選別で検出されたのは全て大型の臼歯である。1mm方眼までの水洗選別を実施しても犬歯や小型の円錐状歯、顆粒状歯が検出されないとすれば、食料残渣ではなく、富山県小竹貝塚で検出された「鯛の歯を象徴した漆製品」〔山崎2014〕のような製品の一部であった可能性が考えられてくる。その場合、入手先は、最寄りの海岸部とは限らない。

【参考文献】

- 我孫子市史編集委員会原始・古代・中世部会編 2005 『我孫子市史 原始・古代・中世編』我孫子市教育委員会
大賀 健也 2015 『大近平遺跡発掘調査報告書—中所沢川尻線(市道640号線)道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』日立市文化財調査報告第101集 日立市教育委員会
後藤俊一・萩野谷悟・中林香澄 2013 『泉坂下遺跡Ⅱ—保存整備事業に伴う第1次確認調査報告書—』茨城県常

第31表 泉床下遺跡2012-2015年度調査の粘板岩製石棒一覧表

番号	出土遺跡	器種	産地	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	製作痕跡	結晶	調査	備考
1-0902	石棒	4	124	33	11.1	6.0	2013-12-11			
1-0120	石棒	4	124	33	6.0	6.0	2015-			
3-047	石棒	4	111	36	11.1	6.0	2012-10-13			
4-1121	石棒	4	111	36	11.1	6.0	2012-10-13			
5-47	石棒	NA1	90	37	20.1	6.0	2013-			
6-097	石棒	NA2	76	47	16.1	6.0	2013-			
7-171	石棒	NA3	103	37	11.1	6.0	2013-			
8-0112	石棒	4	76	25	7	11.2	2013-			
9-137	石棒	4	76	25	8	9.9	2013-			
10-1257	石棒	4	76	25	11	6.2	2013-			
11-257	石棒	4	52	4	5.4	3.0	2014-			
12-103	石棒	4	54	39	7	10.3	2013-			
13-171	石棒	4	49	24	6.1	3.0	2013-			
14-0422	石棒	4	49	15	6.2	3.0	2013-			
15-065	石棒	4	45	30	7	4.4	2013-			
16-0110	石棒	4	44	21	5.5	3.0	2013-			
17-0120	石棒	4	42	31	8	25.7	2013-			
18-0824	石棒	4	42	30	4	3.2	2014-			
19-137	石棒	4	40	23	3	6.9	2013-			
20-44	石棒	4	38	25	4	6.7	2013-			
21-103	石棒	4	38	17	2	2.0	2014-			
22-103	石棒	4	35	12	4	4.2	2014-			
23-103	石棒	4	34	17	2	4.2	2014-			
24-0601	石棒	4	32	12	4	1.1	2014-			
25-103	石棒	NA3	62	19	4	10.3	2014-			
26-0112	石棒	NA1	62	22	7	6.2	2013-			
27-117	石棒	NA1	54	27	6	5.0	2013-			
28-0626	石棒	NA2	52	36	3	6.0	2014-			
29-177	石棒	NA1	45	36	3	4.2	2014-			
30-0626	石棒	NA1	43	33	3	4.2	2014-			
31-137	石棒	NA1	35	45	4	2.3	2013-			
32-0126	石棒	NA1	33	43	5	3.4	2013-			
33-177	石棒	NA1	32	43	5	3.4	2014-			
34-257	石棒	NA1	30	31	3	1.3	2014-			
35-277	石棒	NA1	17	49	2	6.5	2013-			
36-44	石棒	4	14	24	2	0.5	2013-			
37-121	石棒	4	13	22	2	0.5	2013-			
38-103	石棒	4	12	36	4	1.2	2014-			
39-44	石棒	4	10	4	4.2	2.0	2014-			
40-1126	石棒	4	10	22	6	19	2012-06-06			
41-07	石棒	4	170	32	67	70.1	2013-11-10	[注]		
42-0112	石棒	4	132	41	14	19.2	2014-			
43-44	石棒	NA1	92	36	25	10.6	2013-10-20			
44-121	石棒	4	124	36	25	10.6	2013-10-20			
45-103	石棒	4	110	35	18	8.4	2014-11-26			
46-177	石棒	4	106	39	25	9.5	2014-			
47-44	石棒	NA1	74	39	24	11.4	2014-05-21			
48-121	石棒	4	103	46	14	3.3	2013-06-31			
49-121	石棒	4	102	29	18	6.9	2012-06-06	[注]		
50-137	石棒	4	102	36	19	10.6	2014-04-17			
51-243	石棒	4	77	47	22	11.1	6.0	2014-04-17		
52-147	石棒	4	74	32	14	36.7	2013-06-20			
53-121	石棒	4	68	41	6	6.0	2014-04-17			
54-126	石棒	4	69	40	17	20.0	6.0	2013-04-02		
55-44	石棒	4	62	27	7	14.8	2014-			
56-0626	石棒	NA1	62	36	11	11.2	2014-09-06			
57-103	石棒	4	62	34	9	11.2	2014-			
58-44	石棒	4	54	31	5	7.2	2013-06-06			
59-137	石棒	4	45	27	7	5.1	2013-			
60-0626	石棒	4	27	23	5	3.9	2014-			
61-177	石棒	NA1	107	40	37	16.5	6.0	2014-05-18		
62-0605	石棒	NA1	110	34	22	13.6	6.0	2013-03-2		
63-0112	石棒	NA1	116	23	13	7.2	6.0	2012-11-15		
64-04	石棒	NA1	109	36	9	4.5	3.0	2013-06-07		
65-137	石棒	NA1	96	30	18	10.9	6.0	2012-10-20		
66-177	石棒	NA1	90	34	15	6.2	6.0	2014-03-19		
67-177	石棒	NA1	84	29	15	7.7	6.0	2014-		
68-103	石棒	NA1	83	34	5	3.2	6.0	2014-03-01		
69-0626	石棒	NA1	77	30	17	5.9	6.0	2013-11-23		
70-0626	石棒	NA1	77	29	7	5.3	6.0	2014-		
71-121	石棒	NA1	76	27	13	5.4	6.0	2013-		
72-44	石棒	4	112	36	11	36.6	6.0	2012-11-09		
73-44	石棒	4	102	36	11	36.6	6.0	2013-11-09		
74-103	石棒	4	77	30	9	15.7	6.0	2013-11-04		
75-44	石棒	4	42	31	7	6.2	6.0	2012-		
76-103	石棒	NA1	42	31	7	6.2	6.0	2012-11-04		
77-0126	石棒	4	47	25	7	10.7	6.0	2013-05-10(3)		
78-0824	石棒	4	42	38	4	16.9	6.0	2014-		
79-177	石棒	4	34	24	3	13.2	6.0	2014-		
80-103	石棒	4	34	24	3	13.2	6.0	2014-		
81-103	石棒	NA1	61	30	7	10.6	6.0	2014-01-01		
82-0112	石棒	NA1	45	17	6	6.6	6.0	2014-		
83-177	石棒	NA1	24	30	3	1.6	6.0	2014-		
84-121	石棒	NA1	23	31	4	1.6	6.0	2014-		
85-167	石棒	4	14	16	4	5.2	6.0	2013-		
86-121	石棒	4	13	16	4	5.2	6.0	2013-07-24		
87-117	石棒	4	10	20	10	47.7	2013-			
88-44	石棒	4	56	30	7	16.7	6.0	2013-11-09		
89-117	石棒	4	56	27	7	16.7	6.0	2014-01-4	[注]	
90-103	石棒	4	56	27	7	16.7	6.0	2014-		
91-07	石棒	NA1	50	28	3	6.6	6.0	2013-11-10		
92-04	石棒	NA1	42	17	4	1.6	6.0	2014-		
93-103	石棒	NA1	42	17	4	1.6	6.0	2014-11-11		
94-137	石棒	4	95	25	13	38.2	6.0	2013-12-06		
95-0112	石棒	4	79	27	17	5.1	6.0	2013-04-09		
96-127	石棒	4	72	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
97-177	石棒	4	72	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
98-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
99-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
100-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
101-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
102-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
103-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
104-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
105-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
106-177	石棒	NA1	70	26	14	7.2	6.0	2013-12-11		
107-0605	石棒	4	107	33	15	86.1	6.0	2013-03-4	[注]	
108-177	石棒	NA1	107	33	15	86.1	6.0	2013-11-20		
109-0126	石棒	4	120	33	14	3.4	6.0	2014-		
110-0126	石棒	4	119	33	14	3.4	6.0	2014-		
111-177	石棒	4	116	33	14	3.4	6.0	2014-		
112-177	石棒	4	116	33	14	3.4	6.0	2014-		
113-177	石棒	4	116	33	14	3.4	6.0	2014-		
114-177	石棒	4	116	33	14	3.4	6.0	2014-		
115-177	石棒	4	116	33	14	3.4	6.0	2014-		
116-177	石棒	4	116	33	14	3.4	6.0	2014-		
117-177	石棒	4	116	33	14	3.4	6.0	2014-		
118-177	石棒	4	116	33	14	3.4	6.0	2014-		
119-0126	石棒	4	119	33	14	3.4	6.0	2014-		
120-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
121-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
122-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
123-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
124-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
125-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
126-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
127-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
128-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
129-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
130-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
131-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
132-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
133-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
134-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
135-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
136-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
137-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
138-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
139-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
140-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
141-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
142-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
143-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9	6.0	2013-		
144-177	石棒	NA1	122	33	12	8.9				

第32表 泉坂下遺跡第27トレンチ土壌サンプルから水洗選別で検出された粘板岩製石棒一覧表

番号	アゾッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	製作痕跡	状態	備考	番号	アゾッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	製作痕跡	状態	備考
106	D6h.0	東上10～20cm	20	14	0.7	1.7	磨削	有		176	D7h.1	東上10～20cm	11	20	2	0.7	磨削	有	
107	D6h.0	東上10～20cm	13	6	1	0.5	磨削	有		177	D7h.1	東上10～20cm	10	12	2	0.2	磨削	有	
108	D6h.0	東上10～20cm	9	6	1	0.1	磨削	有		178	D7h.1	東上10～20cm	11	6	1	0.1	磨削	有	
109	D6h.0	東上10～20cm	16	1	6	0.4	研削	有		179	D7h.1	東上10～20cm	11	4	2	0.1	磨削	有	
114	D6h.0	東上10～20cm	23	14	2	1.1	研削	有		180	D7h.1	東上10～20cm	9	12	2	0.3	磨削	有	
115	D6h.0	東上10～20cm	16	2	1	0.2	磨削	有		181	D7h.1	東上10～20cm	7	7	1	<0.1	磨削	有	
136	D6h.0	東上10～20cm	9	6	1	0.1	磨削	有		202	D7h.1	東上10～20cm	7	3	2	<0.1	磨削	有	
137	D6h.0	東上10～20cm	8	3	2	<0.1	磨削	有		203	D7h.1	東上10～20cm	7	2	1	<0.1	磨削	有	
139	D6h.0	東上10～20cm	9	4	1	<0.1	磨削	有		204	D7h.1	東上10～20cm	24	13	2	0.4	研削	有	
140	D6h.0	東上10～20cm	6	2	1	<0.1	磨削	有		205	D7h.1	東上10～20cm	10	6	2	0.2	磨削	有	
190	D6h.0	東上10～20cm	3	2	1	<0.1	磨削	有		206	D7h.1	東上10～20cm	20	12	3	1.0	有		
201	D6h.0	東上10～20cm	10	7	1	0.2	磨削	有		207	D7h.1	東上10～20cm	22	16	1	0.4	有		
202	D6h.0	東上10～20cm	9	5	1	0.1	磨削	有		208	D7h.1	東上10～20cm	12	12	2	0.5	有		
203	D6h.0	東上10～20cm	11	3	1	<0.1	磨削	有		209	D7h.1	東上10～20cm	17	8	1	0.2	有		
204	D6h.0	東上10～20cm	16	2	1	0.2	研削	有		210	D7h.1	東上10～20cm	16	7	1	0.2	有		
205	D6h.0	東上10～20cm	8	2	1	<0.1	磨削	有		211	D7h.1	東上10～20cm	11	9	1	0.2	有		
206	D6h.0	東上10～20cm	7	4	1	<0.1	磨削	有		212	D7h.1	東上10～20cm	9	8	3	0.2	有		
207	D6h.0	東上10～20cm	7	2	1	<0.1	磨削	有		213	D7h.1	東上10～20cm	9	7	2	0.2	有		
208	D6h.0	東上10～20cm	4	2	<0.1	磨削	有			214	D7h.1	東上10～20cm	12	6	1	<0.1	有		
209	D6h.0	東上10cm	9	4	1	0.1	磨削	有		215	D7h.1	東上10～20cm	13	5	1	0.1	有		
210	D6h.0	東面直上	27	16	2	1.1	研削	有		216	D7h.1	東上10～20cm	11	2	1	0.1	有		
211	D6h.0	東面直上	24	10	1	0.2	研削	有		217	D7h.1	東上10～20cm	10	6	1	0.1	有		
212	D6h.0	東面直上	18	6	2	0.1	研削	有		218	D7h.1	東上10～20cm	10	4	1	0.1	有		
213	D6h.0	東面直上	19	6	1	0.1	研削	有		219	D7h.1	東上10～20cm	11	5	<0.1	磨削	有		
214	D6h.0	東上10～10cm	18	6	2	0.3	磨削	有		220	D7h.1	東上10～20cm	8	4	1	0.1	有		
215	D6h.0	東上10～10cm	6	5	1	0.1	磨削	有		301	D7h.1	東上10～20cm	8	4	1	0.1	有		
216	D6h.0	東上10～10cm	23	6	2	0.1	磨削	有		302	D7h.1	東上10～20cm	11	4	1	0.1	有		
217	D6h.0	東上10～10cm	10	2	1	0.1	磨削	有		303	D7h.1	東上10～20cm	11	5	<0.1	磨削	有		
218	D6h.0	東上10～10cm	8	2	2	0.1	磨削	有		304	D7h.1	東上10～20cm	8	4	<0.1	磨削	有		
219	D6h.0	東上10～10cm	9	2	1	<0.1	磨削	有		305	D7h.1	東上10～20cm	7	2	1	<0.1	有		
220	D6h.0	東上10～10cm	22	15	2	0.5	有		306	D7h.1	東上10～20cm	7	2	1	<0.1	有			
221	D6h.0	東上10～10cm	18	9	1	0.2	有		307	D7h.1	東上10～20cm	5	4	2	<0.1	有			
222	D6h.0	東上10～10cm	17	7	1	0.2	有		308	D7h.1	東上10～20cm	6	2	<0.1	磨削	有			
223	D6h.0	東上10～10cm	15	7	1	0.2	有		309	D7h.1	東上10～20cm	6	2	1	<0.1	有			
224	D6h.0	東上10～10cm	13	7	1	0.2	有		310	D7h.1	東上10～20cm	6	2	<0.1	磨削	有			
225	D6h.0	東上10～10cm	14	7	1	0.2	有		311	D7h.1	東上10～20cm	5	4	2	<0.1	有			
226	D6h.0	東上10～10cm	12	6	1	0.2	有		312	D7h.1	東上10～20cm	2	4	1	<0.1	有			
227	D6h.0	東上10～10cm	19	9	1	0.1	有		313	D7h.1	東上10～20cm	2	3	1	<0.1	有			
228	D6h.0	東上10～10cm	15	6	1	0.1	有		314	D7h.1	東上10～20cm	2	2	1	<0.1	有			
229	D6h.0	東上10～10cm	13	6	1	0.2	有		315	D7h.1	東面直上	10	2	1	0.1	磨削	有		
230	D6h.0	東上10～10cm	14	7	1	0.2	有		316	D7h.1	東面直上	12	2	1	<0.1	磨削	有		
231	D6h.0	東上10～10cm	13	5	1	0.2	有		317	D7h.1	東面直上	14	11	1	0.2	研削	有		
232	D6h.0	東上10～10cm	12	7	1	0.1	有		318	D7h.1	東面直上	11	5	1	0.1	有			
233	D6h.0	東上10～10cm	10	4	1	0.2	有		319	D7h.1	東面直上	6	4	1	0.2	有			
234	D6h.0	東上10～10cm	10	1	6	0.2	有		320	D7h.1	東面直上	7	2	1	<0.1	有			
235	D6h.0	東上10～10cm	9	6	1	0.2	有		321	D7h.1	東面直上	6	2	1	<0.1	有			
236	D6h.0	東上10～10cm	8	6	1	0.2	有		322	D7h.1	東面直上	5	2	1	<0.1	有			
237	D6h.0	東上10～10cm	9	2	1	<0.1	磨削	有		323	D7h.1	東面直上	4	3	1	<0.1	有		
238	D6h.0	東上10～10cm	8	2	<0.1	<0.1	磨削	有		324	D7h.2	東上10～20cm	15	7	1	0.1	磨削	有	
239	D6h.0	東上10～10cm	6	2	1	<0.1	磨削	有		325	D7h.2	東上10～20cm	12	2	1	<0.1	磨削	有	
240	D6h.0	東上10～10cm	6	2	1	<0.1	磨削	有		326	D7h.2	東上10～20cm	27	19	4	1.2	研削	有	
241	D6h.0	東上10～10cm	6	4	<0.1	<0.1	磨削	有		327	D7h.2	東上10～20cm	22	12	4	1.2	研削	有	
242	D6h.0	東上10～10cm	6	2	1	<0.1	磨削	有		328	D7h.2	東上10～20cm	8	7	2	0.2	研削	有	
243	D6h.0	東上10～10cm	6	1	1	<0.1	磨削	有		329	D7h.2	東上10～20cm	6	6	1	0.1	研削	有	
244	D6h.0	東上10～10cm	5	4	1	<0.1	磨削	有		330	D7h.2	東上10～20cm	24	14	1	0.4	有		
245	D6h.0	東上10～10cm	3	2	1	<0.1	磨削	有		331	D7h.2	東上10～20cm	19	14	1	0.3	有		
246	D6h.0	東上10～10cm	3	2	<0.1	<0.1	磨削	有		332	D7h.2	東上10～20cm	19	12	1	0.2	有		
247	D6h.0	東上10～10cm	4	2	1	<0.1	磨削	有		333	D7h.2	東上10～20cm	15	9	1	0.2	有		
248	D6h.0	東面直上	8	2	1	0.1	磨削	有		334	D7h.2	東上10～20cm	11	5	1	0.1	有		
249	D7h.0	ペルト	13	7	2	0.2	磨削	有		335	D7h.2	東上10～20cm	8	6	1	0.1	有		
250	D7h.0	ペルト	9	3	2	0.1	磨削	有		336	D7h.2	東上10～20cm	10	2	1	<0.1	有		
251	D7h.0	ペルト	7	4	1	<0.1	磨削	有		337	D7h.2	東上10～20cm	8	2	1	<0.1	有		
252	D7h.0	ペルト	23	6	2	0.2	磨削	有		338	D7h.2	東上10～20cm	7	2	1	<0.1	有		
253	D7h.0	ペルト	12	6	1	0.1	磨削	有		339	D7h.2	東上10～20cm	6	2	1	<0.1	有		
254	D7h.0	ペルト	8	2	1	0.1	磨削	有		340	D7h.2	東上10～20cm	6	4	1	<0.1	有		
255	D7h.0	ペルト	7	4	1	0.2	磨削	有		341	D7h.2	東上10～20cm	8	2	1	<0.1	有		
256	D7h.0	ペルト	11	2	1	<0.1	磨削	有		342	D7h.2	東上10～20cm	8	4	1	<0.1	有		
257	D7h.0	ペルト	6	1	1	<0.1	磨削	有		343	D7h.2	東上10～20cm	2	2	1	<0.1	有		
258	D7h.0	ペルト	6	2	1	<0.1	磨削	有		344	D7h.2	東面直上	14	4	2	0.1	磨削	有	
259	D7h.0	ペルト	2	3	1	<0.1	磨削	有		345	D7h.2	東面直上	9	2	1	<0.1	磨削	有	
260	D7h.0	東面直上	15	7	2	0.2	研削	有		346	D7h.2	東面直上	7	2	1	<0.1	磨削	有	
261	D7h.0	東面直上	12	4	3	0.2	有		347	D7h.2	東面直上	14	6	1	0.2	研削	有		
262	D7h.0	東面直上	4	4	<0.1	<0.1	有		348	D7h.2	東面直上	14	7	1	0.2	有			
263	D7h.1	ペルト	26	9	2	0.2	磨削	有		349	D7h.2	東面直上	9	2	1	<0.1	有		
264	D7h.1	ペルト	44	15	2	1.2	磨削	有		350	D7h.2	東面直上	8	2	1	<0.1	有		
265	D7h.1	ペルト	19	9	2	0.2	磨削	有		351	D7h.2	東面直上	8	2	1	<0.1	有		
266	D7h.1	ペルト	14	9	2	0.4	有		352	D7h.2	東面直上	6	2	1	<0.1	有			
267	D7h.1	ペルト	20	10	1	0.2	有		353	D7h.2	東面直上	2	4	1	<0.1	有			
268	D7h.1	ペルト	9	4	1	0.2	有		354	D7h.2	東面直上	2	3	1	<0.1	有			
269	D7h.1	ペルト	8	4	1	<0.1	有		355	D7h.2	東面直上	2	2	1	<0.1	有			
270	D7h.1	ペルト	11	2	1	<0.1	磨削	有		356	D7h.2	東面直上	2	2	1	<0.1	有		
271	D7h.1	東上10～20cm	23	12	0.7	1.3	磨削	有		357	D7h.2	東面直上	2	2	1	<0.1	有		
272	D7h.1	東上10～20cm	17	9	2	0.7	磨削	有		358	D7h.2	東面直上	2	2	1	<0.1	有		
273	D7h.1	東上10～20cm	19	10	2	0.2	磨削	有		359	D7h.2	東面直上	12</						

第33表 泉坂下遺跡2012-2015年度調査の非粘板岩製石棒一覽表

番号	土器遺	器種	素材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	製作段階	調査	解説	備考
360	137	石棒	カホクノイロ河原	45	22	7	11.3	前期	---	2013	47-57
361	137	石棒(断)	カホクノイロ河原	40	42	10	27.3	断・中	---	2013	---
362	47	石棒	豊後片野	34	39	19	65.1	断・中	---	2012	---
363	277	石棒	豊後片野	61	36	4	7.3	前期	有	2013	---
364	137	石棒	白雲母片野	30	28	11	36.4	前期	---	2013	47-55
365	360	石棒(刀)	白雲母片野	80.5	29	19	176.8	前期	---	2013	47-5
366	197	石棒	豊後片野	71	34	30	52.3	断・中	---	2014	51-57
367	127	石棒(断)	手取砂	53	30	34	46.2	前期	有	2013	52-203
368	247	断石	手取砂	68	35	13	28.9	断・中	---	2014	---
369	47	石棒(断)	手取砂	34	28	13	18.9	断・中	---	2013	60-32
370	5126	石棒(断)	手取砂	56	36	14	23.8	前期	有	2015	45-56
371	5126	石棒(断)	豊成砂	166	29	18	135.8	断・中	---	2013	45-97
372	3083	石棒(断)	カホクノイロ河原	41	27	11	19.6	前期	---	2014	112-108
373	147	石棒(断)	砂野片野	63	27	19	51.9	前期	---	2013	77-60
374	147	石棒	鎌野片野	56	24	13	31.9	断・中	---	2013	14-46
375	127	石棒	断石	45	30	5.2	前期	---	2013	22-199	
376	5126	石棒(断)	断石	41	30	13	41.9	前期	---	2013	44-60
377	363	石棒(断)	断石	122	47	27	146.4	断・中	---	2015	64-4

第35表 泉坂下遺跡第277トレンチ土壌サンプルから水洗選別で検出された砾石一覽表

番号	グランド	層位	器種	素材	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	形状
441	D7h1	床土10～20cm	砾石	断石	63	4	1	0.1
442	D7h2	床土10～20cm	砾石	断石	19	18	4	1.7
443	D7h1	床土10cm	砾石	断石	14	14	4	0.4
444	D6h9	床土10～16cm	砾石	断石	16	14	3	0.7
445	D7h2	床土10～20cm	砾石	断石	19	12	2	0.5
446	D7h1	床土10～20cm	砾石	断石	23	20	4	1.4

備考 器打製石棒に転用、磨製器打製、器打加工品に転用
 ●「器種」は、「石棍・石刀・石棒」を一括して「石棍」と表記し、細部は「棍・刀・棒」で括弧内に記載した。
 ●「素材」は、当該発掘層位による判定である。
 ●「形状」は、調査年度ごとの報告書に掲載された測量図の番号を記載した。

第34表 泉坂下遺跡2012-2015年度調査の砾石一覽表

番号	土器遺	器種	素材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	調査	解説	
378	184	砾石	断石	276	132	30	1794.0	---	2013	94-10
379	9126	砾石	断石	116	100	7	48.7	---	2015	---
380	147	砾石	断石	118	118	26	353.0	---	2013	78-68
381	237	砾石	断石	103	98	30	435.0	---	2014	---
382	表段	砾石	断石	70	53	31	144.9	---	2013	94-2
383	237	砾石	断石	100	128	29	204.0	---	2013	---
384	147	砾石	断石	97	94	23	215.0	---	2014	---
385	5126	砾石	断石	56	64	18	118.9	有	2015	---
386	5126	砾石	断石	91	76	9	56.0	---	2015	67-124
387	277	砾石	断石	80	80	17	306.1	---	2015	---
388	127	砾石	断石	80	40	30	26.4	---	2013	47-56
389	147	砾石	断石	87	66	10	50.9	有	2013	---
390	3083	砾石	断石	87	50	36	113.0	有	2014	---
391	277	砾石	断石	86	55	36	145.8	有	2015	66-16
392	277	砾石	断石	85	52	30	163.1	有	2015	---
393	277	砾石	断石	84	49	16.0	71.1	有	2015	---
394	5126	砾石	断石	79	60	8	35.5	---	2015	67-123
395	37	砾石	断石	78	68	26	130.5	有	2012	---
396	表段	砾石	断石	69	49	27	132.0	有	2014	---
397	277	砾石	断石	67	66	14	75.2	---	2015	---
398	47	砾石	断石	63	46	31	107.0	---	2012	22-106
399	137	砾石	断石	61	43	6	15.1	---	2013	---
400	5116	砾石	断石	60	36	16	35.0	---	2013	---
401	147	砾石	断石	56	69	36	120.7	---	2013	14-50
402	C8C4	砾石	断石	57	41	11	32.2	---	2014	---
403	5112	砾石	断石	56	52	28	122.3	---	2013	---
404	127	砾石	断石	54	45	14	50.8	---	2013	---
405	277	砾石	断石	54	52	17	63.0	---	2015	---
406	C8C4	砾石	断石	53	36	7	16.4	---	2014	---
407	137	砾石	断石	41	21	7	8.1	有	2013	---
408	519	砾石・断石	断石	176	94	37	949.0	有	2013	17-25
409	137	砾石・断石	断石	124	70	36	265.0	---	2013	67-56

陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第16集 常陸大宮市教育委員会
 後藤俊一・萩野谷悟・中林香澄 2014 「泉坂下遺跡Ⅲ 一保存整備事業に伴う第2次確認調査報告」 茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第21集 常陸大宮市教育委員会
 後藤俊一・中林香澄・萩野谷悟 2015 「泉坂下遺跡Ⅳ 一保存整備事業に伴う第3次確認調査報告」 茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第23集 常陸大宮市教育委員会
 後藤信祐 2001 「御堂前遺跡Ⅱ 主要地方道宇都宮・笠間線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」 栃木県埋蔵文化財調査報告書第248集 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団

- 鈴木素行 2002 「ケンタウロスの落とし物 ―関東地方東部における縄文時代晩期の石棒について―」『婆良岐考古』第24号 15-38頁
- 鈴木素行 2005 「本覚遺跡の研究 ―関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について―」（私家版）
- 鈴木素行 2011 「泉坂下遺跡の研究 ―人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について―」（私家版）
- 鈴木素行 2015 「緑泥片岩の石剣 ―関東地方西部における石剣の成立と展開―」『考古学集刊』第11号 37-57頁
- 鈴木素行 2016 「イクシオンも落とし物 ―関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について・Ⅱ―」『茨城県考古学協会誌』第28号 149-168頁
- 鈴木素行 2016 「茨城県北部における石剣の製作」『縄文時代の剣（つるぎ）』公開講座「ひたちなか市の考古学」第9回 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 42-53頁
- 西脇対名夫 1998 「石剣ノート」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会 209-224頁
- 藤田亮一 1991 「八戸市内遺跡発掘調査報告書2 風張（1）遺跡Ⅰ」八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集 八戸市教育委員会
- 山崎 健他 2014 「銅の歯を象嵌した漆製品」『小竹貝塚発掘調査報告 ―北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告X―（第二分冊 自然科学分析編）』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書第60集 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

第5節 まとめ

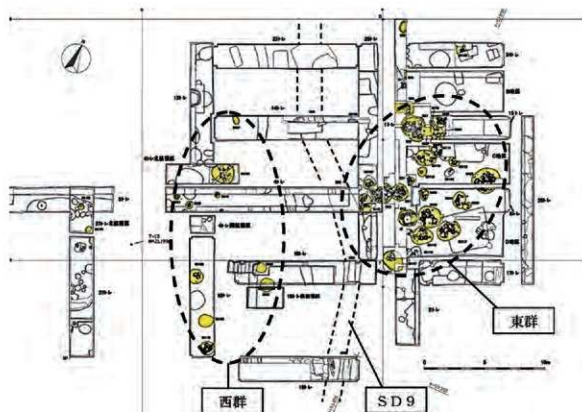
当初、3か年計画で立案された泉坂下遺跡確認調査であるが、第2次調査を終えた時点でいくつかの課題が浮上した。これらを補足するため、追加で行われたのが今次調査である。

以下、課題ごとに今回の調査で明らかになった点を記して総括する。

(1) 再葬墓西群の範囲 (第115図)

第3次調査では、再葬墓が密に分布する範囲を面的に調査して、再葬墓19基等が長軸約13m、短軸約10m、主軸方向N-20°-Eの範囲に密集して分布することが確認できた。その一方、第10トレンチ1・2区において、再葬墓2基を新たに確認し、再葬墓群が2つの群を成すことが判明し、すでに範囲を把握した分布域を東群、第10トレンチ1・2区付近の新たに確認した分布域を西群とし、ここまでで、西群の範囲確認、特に西の限界の確認が課題として残った。

このため、第4次調査では西群西方に第27トレンチを設定して調査したところ、縄文時代晩期と考えられる第26号堅穴住居跡を確認したが、新たな再葬墓の分布は確認できなかった。第1次調査における第5トレンチ付近でも、再葬墓の時代の遺物散布は薄い傾向が認められていたため、第27トレンチ付近は再葬墓の分布域からは外れるものと結論付けた。



第115図 再葬墓西群分布範囲図

(2) 第9号溝跡 (第62・102図)

第9号溝跡は、第1次調査時にその存在が判明し、4次にわたる確認調査で毎次調査された唯一の遺構である。この第9号溝跡は、第1次調査時点での最西端の再葬墓である第5号土坑の西側約2mに位置し、当遺跡の所在する舌状台地の尾根部で等高線に直交して南北に走る状況が確認され、その性格解明がその後の調査での課題となっていた。

第3次までの調査結果から、第9号溝跡は緩やかに走向を変えながら概ね南北に走るものと考えられた。しかし、これ以上の追跡は遺跡を損ねる恐れがあるため、全体像の把握には地中レーダー探査を用いることとした。その結果、第9号溝跡は、第102図のとおり幾度も走向を変えながら、当遺跡の所在する舌状台地を南北に切る様子が確認された。これは、第3次までの調査結果を裏付けするものとなった。

また、第4次調査では、第9号溝跡の廃絶時期の下限を確定させることを試みた。第2次調査時の第14トレンチにおいて、平安時代の竪穴住居跡2軒に切られているものと考えられており、この重複関係をセクションで確実に押さえておこうというものである。その結果、第62図のとおり、第9号溝跡を平安時代の竪穴住居跡が切って構築されている様子を確認することができた。

これまでの調査結果で、第9号溝跡から出土した遺物のうち最も新しいものは弥生時代後期十王台式期である。この遺物は、覆土下層からの出土であり、重複関係とも矛盾しないため、時期決定に採用した。

4次にわたった確認調査も、今次調査で一区切りとなり、所期目的は達成することができた。その一方、再葬墓時代の生活の様子や縄文晩期との関係といった再葬墓研究の課題に対しては積み残しも多い。これについては、今後の資料の蓄積や研究の進展が待たれる部分が多いが、そのためにも、保存状態が良好な当遺跡を将来に伝えていくことの意義は大きい。確認調査で得られた成果をもとに、当遺跡の適切な保護・保存・活用を進めていきたい。

【参考文献】

- 後藤俊一、萩野谷悟、中林香澄『泉坂下遺跡Ⅱ 保存整備事業に伴う第1次確認調査報告』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第16集 常陸大宮市教育委員会 平成25年7月
- 後藤俊一、萩野谷悟、中林香澄『泉坂下遺跡Ⅲ 保存整備事業に伴う第2次確認調査報告』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第21集 常陸大宮市教育委員会 平成26年7月
- 後藤俊一、中林香澄、萩野谷悟『泉坂下遺跡Ⅳ 保存整備事業に伴う第3次確認調査報告』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第23集 常陸大宮市教育委員会 平成27年7月
- 鈴木素行『泉坂下遺跡の研究―人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について―』（私家版）平成23年8月

第 2 部

調 査 の 総 括

第1章 調査の成果

泉坂下遺跡では、平成18年に鈴木素行氏によって学術調査が行われ、人面付壺形土器が出土する等大きな成果が挙げられた。これを受け、平成24から27年にかけて、常陸大宮市教育委員会によって4次にわたる確認調査が行われた。この確認調査にあたっては、グリッド割やトレンチ配置等、基礎的情報の多くを平成18年の調査を参考としている。

本章では、鈴木氏の御好意により平成18年調査を含め、これまでに行われた全5回の調査成果を総括する。図表中で用いた遺構記号については、奈良文化財研究所のものに倣っている。

第1節 調査概要 (付図、第36表)

泉坂下遺跡での5回の調査で掘割されたトレンチは付図のとおりで、調査面積は計940.1㎡である。再・再々調査した部分が計119.65㎡あり、延べでの調査面積は1,059.75㎡となる。

平成18年に鈴木素行氏が行った学術調査では、地権者が弥生土器を掘り出した地点付近に、周辺地形を考慮して幅1m、長さ20mのトレンチを設定し、遺構が確認できた付近を適宜拡張し、36㎡が調査された。これが第1トレンチで、人面付壺形土器をはじめとする多くの土器が出土し、再葬墓群の所在確認等の成果が挙げられたことで、以降の調査に続くこととなった。

第1次調査では、原地形の確認と遺構の分布範囲を掴むことを目的に、第1トレンチを中心として南方向に第2・3トレンチ、西方向に第4・5トレンチ、北方向に第6・7トレンチ、東方向に第8・9トレンチをそれぞれ設定し、調査した。その後、補足が必要と考えられた区域に第10～16トレンチを設定し、第11・16トレンチを調査した。これらのトレンチで計379㎡を調査し、遺跡の所在する台地の北と東の限界を掴むことができた。

第2次調査では、第10・12～15トレンチを調査した。さらに補足が必要となった区域に第17～24トレンチを設定し、第18・23トレンチを調査した。これらのトレンチで計246.5㎡を調査し、縄文晩期の集落が所在することが確認できた。

第3次調査では、第10トレンチ1・2区、第17・19・24トレンチを調査した。さらに補足が必要となった区域に第25・26トレンチを設定し、また第24トレンチ南側・第15トレンチ北側をB地区、第15トレンチ南側・第8トレンチ北側をC地区、第8トレンチ南側・第17トレンチ北側をD地区とそれぞれ呼称し、調査し、再葬墓群の分布域を面的に調査した。これらのトレンチ等で計263㎡を調査し、再葬墓群の分布範囲を掴むことができたほか、再葬墓1基をサンプル的に調査した。その一方で、再葬墓群はもう1群所在することも判明した。

平成27年5月には、地中レーダー探査を実施し、懸案となっていた第9号溝跡の走向を把握することができた。さらに同年9・10月の第4次調査では、第22トレンチを調査したほか、課題のあった第4・14トレンチを再調査した。さらに補足の必要となった区域に第27トレンチを設定し、調査した。これらのトレンチで計135.25㎡を調査し、もう1群の再葬墓群の分布範囲を掴むことができたほか、縄文晩期の堅穴住居跡を掘り込んで調査した。

これらの調査で確認された遺構については、第36表のとおり各報告書に掲載されている。なお、本章末には各報告書の正誤表を付した。

第36表 泉坂下遺跡遺構一覧表

No	遺構番号	時期	調査年次及び各調査報告書掲載ページ					確認した トレンチ等	備 考
			平成18年 (原本30頁)	第1次 (Ⅱ)	第2次 (Ⅲ)	第3次 (Ⅳ)	第4次 (Ⅴ)		
1	SB 1	近世			50			12T	
2	SB 2	中世					80	22T	
3	SB 3	中世					125	27T	
4	SB 4	平安					122	27T	
5	SB 5	中世					82	22T	
6	SD 1	中世		130				11T	
7	SD 2	中世		130				11T	
8	SD 3	中世		130	28			10・11T	
9	SD 4	不明		34				3T	
10	SD 5	不明		72				5T	
11	SD 6	中世			28			10T	
12	SD 7	中世			121・172		57	4・14・23T	1次調査のSK 34、2次調査のSD 12
13	SD 8	中世		157	83		58	4・18・19T	1次調査のK。2次調査で溝跡と判明
14	SD 9	弥生		154	77・109		56・68	4・14・18・19・25T	1次調査のSX 4・5
15	SD 10	不明		157	84			18・19T	
16	SD 11	不明		158	84			18・19T	
17	SD 12	不明		159	84			18・19T	
18	SE 1	中世		173				23T	レーダー探査でSD 7と同一と判明
19	SI 1	平安	9			109		1・25T	
20	SI 2	平安		30				3T	
21	SI 3	平安		30				3T	
22	SI 4	平安		121				9T	
23	SI 5	平安		121				9T	
24	SI 6	平安		50			57	4T	
25	SI 7	平安		50				4T	
26	SI 8	平安		127				11T	
27	SI 9	縄文			43			12T	
28	SI 10	縄文			43			12T	
29	SI 11	縄文			48			12T	
30	SI 12	縄文			48			12T	
31	SI 13	平安			22			10T	
32	SI 14	平安			118		70	14T	
33	SI 15	平安			119	110	73	14・25T	
34	SI 16	平安			170			23T	
35	SI 17	平安			137			15T	
36	SI 18	平安			138			15T	
37	SI 19	平安				67		17T	
38	SI 20	平安				171		D地区	
39	SI 21	平安				147		C地区	
40	SI 22	平安				112		25T	2次調査のSX 7
41	SI 23	平安				115		25T	
42	SI 24	平安				94		24T	
43	SI 25	平安					79	22T	
44	SI 26	縄文					87	27T	
45	SK 1	弥生	11					1T	複数土器再葬墓
46	SK 2	弥生	17					1T	複数土器再葬墓
47	SK 3	弥生	32					1T	複数土器再葬墓
48	SK 4	弥生	38					1T	複数土器再葬墓
49	SK 5	弥生	47	42		105	49	1・4・25T	複数土器再葬墓
50	SK 6	弥生	54					1T	複数土器再葬墓
51	SK 7	弥生	64					1T	
52	SK 8	弥生	64					1T	一次葬墓か
53	SK 9	弥生	66					1T	一次葬墓か
54	SK 10	不明		24				2T	
55	SK 11	平安		23				2T	
56	SK 12								欠番
57	SK 13								欠番
58	SK 14	不明		24		69		2・17T	
59	SK 15	不明		91				6T	
60	SK 16	不明		71				5T	

No	遺構番号	時期	調査年次及び各調査報告書掲載ページ					確認したトレンチ等	備考
			平成18年(実木201)	第1次(Ⅱ)	第2次(Ⅲ)	第3次(Ⅳ)	第4次(Ⅴ)		
61	S K17							欠香	
62	S K18	中世		128				11T 墓塚	
63	S K19	弥生		45			51	4T 単数土器再葬墓	
64	S K20	弥生		45			51	4T 単数土器再葬墓	
65	S K21	弥生		46			51	4T 単数土器再葬墓	
66	S K22	中世		51				4T	
67	S K23	弥生		101		22-142		8T・C地区 複数土器再葬墓	
68	S K24	弥生		102		28		8T 複数土器再葬墓	
69	S K25	弥生		104		29		8T 複数土器再葬墓	
70	S K26	弥生		104		29-164		8T・D地区 複数土器再葬墓	
71	S K27							欠香	
72	S K28							欠香	
73	S K29	平安		50				4T	
74	S K30	弥生		106		45		8T 単数土器再葬墓	
75	S K31	中世		129				11T 墓塚	
76	S K32	縄文		69				5T 袋状土坑	
77	S K33	不明		71				5T	
78	S K34			46				4T 4次調査でS D7と同一と判明	
79	S K35							欠香	
80	S K36							欠香	
81	S K37	中世		70				5T	
82	S K38	中世		70				5T	
83	S K39	不明		24				2T	
84	S K40	不明		52			59	4T	
85	S K41	不明		52			59	4T	
86	S K42	弥生		47				4T	
87	S K43	不明		52				4T	
88	S K44							欠香	
89	S K45	不明		92				6T	
90	S K46	不明		92				6T	
91	S K47	不明		93				6T	
92	S K48	不明		93				6T	
93	S K49	不明			29			10T	
94	S K50	中世			26			10T 墓塚	
95	S K51							欠香	
96	S K52	中世		27				10T 墓塚	
97	S K53	不明		30				10T	
98	S K54	不明		54				12T	
99	S K55	中世		50				12T 墓塚	
100	S K56	不明		56				12T	
101	S K57	中世		50				12T 墓塚	
102	S K58	近世		93				13T 粘土貼土坑	
103	S K59	弥生		132		60		15T 単数土器再葬墓 平成18年調査のS X 2	
104	S K60	弥生		132		60		15T 複数土器再葬墓	
105	S K61	弥生		135		62		15T 複数土器再葬墓	
106	S K62	不明		30				10T	
107	S K63	不明		31				10T	
108	S K64	不明		31				10T	
109	S K65	不明		98				13T	
110	S K66							欠香	
111	S K67	弥生		113				14T	
112	S K68	不明		100				13T	
113	S K69	不明		101				13T	
114	S K70	不明		101				13T	
115	S K71	不明		101				13T	
116	S K72	不明		101			59	4・13T	
117	S K73	不明		102			59	4・13T	
118	S K74	不明		102			60	4・13T	
119	S K75	不明		102				13T	
120	S K76	不明		103				13T	
121	S K77	不明		103				13T	
122	S K78	不明		103				13T	

No	遺構番号	時期	調査年次及び各調査報告書掲載ページ					確認した トレンチ等	備 考
			平成18年 (街木201)	第1次 (Ⅱ)	第2次 (Ⅲ)	第3次 (Ⅳ)	第4次 (Ⅴ)		
123	S K 79	中世			170			23T	墓塚
124	S K 80	中世			170			23T	墓塚
125	S K 81	弥生			147			18T	再葬墓か
126	S K 82								欠番
127	S K 83	弥生			151			18T	再葬墓か
128	S K 84	弥生			135			15T	
129	S K 85	不明			154			18T	
130	S K 86	不明			32			10T	
131	S K 87	中世			27			10T	粘土貼土坑
132	S K 88	中世			27			10T	墓塚
133	S K 89	不明			32			10T	
134	S K 90	不明			33			10T	
135	S K 91	不明			33			10T	
136	S K 92	中世			28			10T	墓塚
137	S K 93	不明			57			12T	
138	S K 94	不明			57			12T	
139	S K 95	不明			58			12T	
140	S K 96	不明			103			13T	
141	S K 97	不明			103			13T	
142	S K 98	不明			104			13T	
143	S K 99	平安				68		17T	
144	S K 100	不明				69		17T	
145	S K 101	不明				69		17T	
146	S K 102	不明				69		17T	
147	S K 103	不明				95		24T	
148	S K 104	不明				95		24T	
149	S K 105	不明				95		24T	
150	S K 106	不明				96		24T	
151	S K 107	不明				96		24T	
152	S K 108	弥生				49		10T	複数土器再葬墓
153	S K 109	弥生				51		10T	
154	S K 110	弥生				51		10T	複数土器再葬墓
155	S K 111	不明				70		17T	
156	S K 112	不明				70		17T	
157	S K 113	弥生				142	C 地区		複数土器再葬墓
158	S K 114	弥生				143	C 地区		複数土器再葬墓
159	S K 115	弥生				145	C 地区		複数土器再葬墓
160	S K 116	弥生				146	C 地区		単数土器再葬墓
161	S K 117	弥生				164	D 地区		複数土器再葬墓
162	S K 118	弥生				168	D 地区		複数土器再葬墓
163	S K 119	弥生				168	D 地区		
164	S K 120	不明				171	D 地区		
165	S K 121	不明				149	C 地区		
166	S K 122	不明				149	C 地区		
167	S K 123	縄文				48		10T	
168	S K 124	不明				133	B 地区		
169	S K 125	不明				134	B 地区		
170	S K 126	不明				134	B 地区		
171	S K 127	不明				134	B 地区		
172	S K 128	不明				96		24T	
173	S K 129	不明				96		24T	
174	S K 130	不明				97		24T	
175	S K 131	不明				97		24T	
176	S K 132	不明				97		24T	
177	S K 133	不明				98		24T	
178	S K 134	不明				98		24T	
179	S K 135	不明				98		24T	
180	S K 136	弥生				93		24T	単数土器再葬墓
181	S K 137	不明				116		25T	
182	S K 138	不明				81		19T	
183	S K 139	不明				81		19T	
184	S K 140	不明				82		19T	

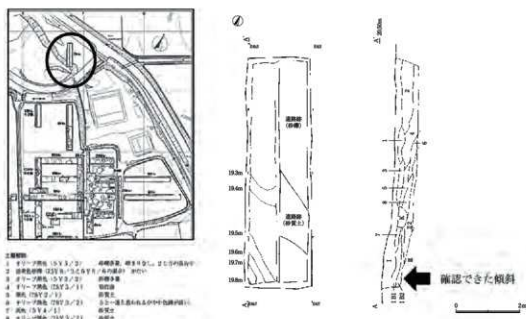
No	遺構番号	時期	調査年次及び各調査報告書掲載ページ				確認した トレンチ等	備 考	
			平成18年 (街木201)	第1次 (Ⅱ)	第2次 (Ⅲ)	第3次 (Ⅳ)			第4次 (Ⅴ)
185	S K 141	不明				82	19T		
186	S K 142	不明				82	19T		
187	S K 143	不明				82	19T		
188	S K 144	不明				83	19T		
189	S K 145	不明				83	19T		
190	S K 146	不明				83	19T		
191	S K 147	不明				175	D地区		
192	S K 148	不明				125	26T		
193	S K 149							欠番	
194	S K 150	不明				125	26T		
195	S K 151	不明				175	D地区		
196	S K 152	弥生				107	52	4・25T 複数土器再葬墓	
197	S K 153	弥生				108	52	4・25T 複数土器再葬墓	
198	S K 154	不明				116	25T		
199	S K 155	不明				118	25T		
200	S K 156	平安				116	25T		
201	S K 157	弥生				168	D地区		
202	S K 158	弥生				147	C地区		
203	S K 159	不明				149	C地区		
204	S K 160	弥生					54	4T	
205	S K 161	不明					60	4T	
206	S K 162	不明					60	4T	
207	S K 163	縄文					47	4T	
208	S K 164	弥生					54	4T	複数土器再葬墓
209	S K 165	弥生					66	14T	
210	S K 166	不明					76	14T	
211	S K 167	不明					82	22T	
212	S K 168	不明					83	22T	
213	S K 169	不明					83	22T	
214	S K 170	不明					83	22T	
215	S K 171	不明					83	22T	
216	S K 172	不明					76	14T	
217	S K 173	平安					75	14T	
218	S K 174	不明					60	4T	
219	S K 175	不明					60	4T	
220	S K 176	弥生					119	27T	
221	S K 177	不明					126	27T	
222	S K 178	不明					126	27T	
223	S K 179	縄文					118	27T	
224	S K 180	弥生					120	27T	
225	S K 181	不明					126	27T	
226	S K 182	不明					127	27T	
227	S K 183								欠番
228	S K 184	不明					61	4T	
229	S K 185	不明					128	27T	
230	S K 186	不明					83	22T	
231	S K 187	不明					84	22T	
232	S K 188	不明					84	22T	
233	S K 189	不明					84	22T	
234	S K 190	不明					84	22T	
235	S K 191	不明					85	22T	
236	S K 192	不明					85	22T	
237	S K 193	不明					85	22T	
238	S X 1	弥生	59					1T	複数土器再葬墓
239	S X 2		63					1T	2次調査でS K 59に改称
240	S X 3	不明	63					1T	
241	S X 4			48				4T	2次調査で溝状と判明しS D 9に改称
242	S X 5			93				6T	レーダー探査でS D 9と同一と判明
243	S X 6	不明			34			10T	レーダー探査で埋没谷と判明
244	S X 7				122			14T	3次調査でS 122に改称
245	S X 8	不明				71		17T	
246	S X 9	不明				149		C地区	

第2節 遺跡の範囲 (第116～118図)

泉坂下遺跡の範囲を確認することは、確認調査当初からの重要な目的の一つであった。

泉坂下遺跡は、鷺子山塊に連続する那珂台地から、東に比高30mほどを下った久慈川右岸の低位段丘上に立地する。遺跡の立地する低位段丘は標高20mほどで、東側の水田面からの比高は2mほどである。この低位段丘は、台地からの湧水によって切断されながら、玉川との合流点まで南東に大きく展開している。従って遺跡の範囲確認は、東向きの小規模な舌状台地の範囲を掴むことと同義と考えられる。このため範囲考察にあたっては、東側については、東側の沖積低地に広がる水田面との高低差、南・北側については、那珂台地から小支谷の確認がポイントになる。しかし、遺跡付近は水田の造成によって原地形が改変されていることが想定されたため、トレンチ調査によって地中の状況を確認し、原地形を掴む手法を採った。なお、西側については那珂台地との大きな比高があり、地形的限界は明白である。

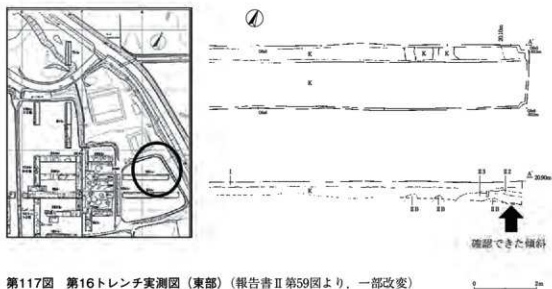
まず北側については、数年前まで農道として利用されていたため現代の改変はあるものの、遺跡の所在する舌状台地の北の限界と推定された地点であるE4h3区からE4h6区に、第7トレンチを設定して第1次調査時に調査した。直前に盛られた表土を除去すると、淡黄色の砂礫、さらにオリブ黒色の砂質土が堆積しており、これらは、農道造成の際に盛られたものと考えられる。これらの層の下には、他トレンチでも普遍的に確認できる基本土層の一つである第Ⅱ層が確認でき、攪乱が及ぶのは、第Ⅱ層中までであることが判った。第Ⅱ層下には第Ⅲ層が確認でき、この第Ⅲ層上面は北へ向けて傾斜するため、舌状台地の北縁と判断した。



第116図 第7トレンチ実測図 (報告書Ⅱ第36図より)

東側については、現状で舌状台地の先端に見えるF6h8区からG6f8区に第9トレンチ、F6g5区からG6e5区に第16トレンチの二本を設定し、第1次調査時に調査した。両トレンチを設定した水田は、平成18年調査で再幕墓が確認された水田の東隣にあたり、再幕墓分布域の

東の限界を捉える目論見もあった。しかし、両トレンチとも第Ⅰ層を除去すると全面的に攪乱されていた。地権者によると、昭和50年代に住宅が火災にあった際、その廃材を重機で埋めたとのことで、その話のとおり第ⅠB層以下には住宅廃材が多量に埋藏されていた。サブトレンチを入れて調査したところ、大半は第Ⅲ層中まで攪乱が続くが、所々に第Ⅱ・ⅡB層が残存しており、その下に攪乱を受けていない第Ⅲ層が確認できるところもあった。特に第16トレンチの東端となるG6d5区東部とG6e5区では、第ⅡB層上面が東へ向けて傾斜することが確認でき、これを舌状台地の東縁と判断した。なお、両トレンチの攪乱からは弥生土器片は確認できず、再葬墓の分布域からは外れている可能性が高い。



第117図 第16トレンチ実測図(東部)(報告書Ⅱ第59図より、一部改変)

南側については、第1次調査時の第3・11トレンチ、第2・3次調査時の第10トレンチの3本で確認を試みた。まず、最も西寄りとなるC7f5区からC9h8区、C7i5区からC9i8区に設定した第11トレンチでは、南端付近に溝跡が確認された。この溝跡北側の第Ⅲ層上面は標高約20.2m、第11トレンチ3・4区北端の第Ⅲ層上面は標高約20.6mで、比高は約40cmあり、両地点は45mほど離れているが、緩やかな南向きの傾斜が認められる。次に、E6c0区からE9e9区に設定した第10トレンチでは、やはり南端に溝跡が確認された。この溝跡北側の第Ⅲ層上面は標高約20.2m、第10トレンチ3・4区北端の第Ⅲ層上面は標高約20.3mで、比高は約10cmあるが、両地点は48mほど離れる。最も東寄りとなるF7a6区からF9a9区、F7b6区からF9b9区に設定した第3トレンチでも、やはり南端付近に溝跡が確認された。この溝跡北側の第Ⅲ層上面と、第3トレンチ北端の第Ⅲ層上面の高さはいずれも標高約20.0mでほぼ変わらず、第Ⅲ層上面が南に傾斜する様子は認められない。これらとおり、遺跡の所在する舌状台地の南側については、段状になるような明瞭な傾斜は確認できなかった。台地南縁は、第11トレンチで見られたような緩やかな傾斜を以って形成されているものと考えられる。

これらのことから、泉坂下遺跡の範囲は、第118図のとおりと考えられる。

第3節 遺跡の変遷

泉坂下遺跡における平成18年の調査と第1～4次確認調査の全5回の調査では、縄文、弥生、古代、中世、近世という幅広い時代の遺構・遺物が確認されている。以下、遺跡の所在する低位段丘の土地利用の変遷を時代順に総括していく。

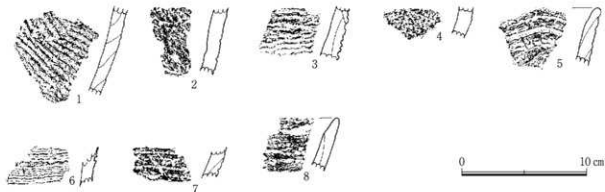
大きな割合を占めるのは、縄文時代晩期の住居跡、弥生時代の再葬墓遺構、平安時代の住居跡、中世～近世の墓塚である（第119～183図）。

なお、確認調査では遺構が検出された時点で掘り下げを止めるため、年代ごとの正確な遺構数の把握が困難である。そのため、遺物の出土量や分布範囲を押さえることで考察している場合がある。なお、以降に掲載されている出土遺物に付与されている番号は、最初に報告された際の番号をそのまま使用している。

1 縄文時代（第119～132・137図）

（1）前期

縄文時代前期の遺物は、土器片がごく数片しか出土していないが、その大部分が第3トレンチから出土している（第119図）。縄文時代前期中葉（植房式）の深鉢の細片である。遺構は確認されていないが、同様の土器片が第19トレンチと第27トレンチで1片ずつ出土している。集落があったとは考えにくい出土状況ではあるが、少なくともこの時期にこの場所で何らかの活動があったと考えられる。

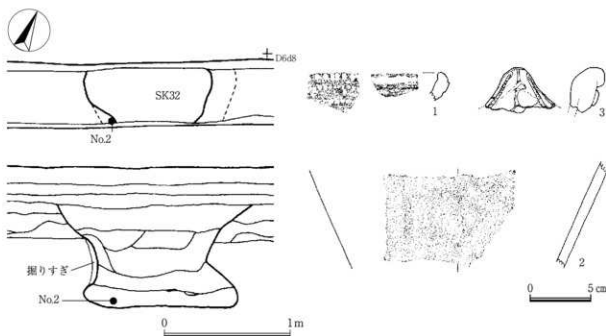


第119図 縄文時代前期の主な出土遺物実測図（報告書Ⅱ第9図より）

（2）中期～後期

縄文時代中期の遺物は、ほぼ遺跡全体に散らばっているが、後期～晩期の土器と比較すると少数である。中期所産の遺構は第5トレンチの第32号土坑の袋状土坑1基である（第120図）。中期前葉の阿玉台式土器が出土している。

後期の遺物は土器片が複数出土しているが、遺構は確認されなかった。



第120図 第32号土坑・出土遺物実測図（報告書Ⅱ第24・25図より、一部改変）

（3）晩期

晩期前葉から中葉にかけての遺物は突出して数が多く、ほぼ調査区域全域から出土しているが、特に出土数が多いのが第121図で示した区域である。第10トレンチの7・8区で旧地形の谷が確認されたことから、この区域にはほぼ沿った形でやや高い土地が尾根状に、台地側から東側の久慈川側に向かって延びていたことが確認された。このゆるやかな尾根上で主に集落が営まれたと考えられる。

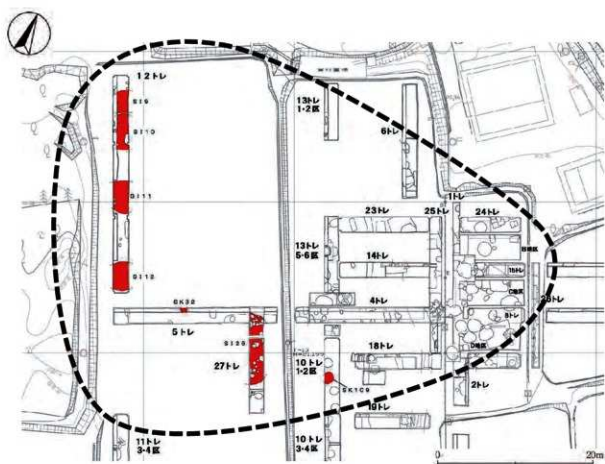
遺構は、晩期の住居跡が第12トレンチに4軒、第27トレンチに1軒確認された。

第2次確認調査の第12トレンチの第9～12号堅穴住居跡（第122～128図）は、確認面で調査をとめている。覆土と確認面であるⅡ層の土の違いの判別が非常に難しかったため、遺物の集中地点が確認された後に、その場所を精査しプランを確認して住居跡とした。そのため今回の掲載遺物には、プラン確定以前に取り上げた遺物であるが出土場所から帰属すると判断しているものを含む。第1次確認調査の第5トレンチの西側でも同じような遺物の集中が確認されている。

第4次確認調査で見つかった第27トレンチの第26号堅穴住居跡（第78図）は、トレンチ部分を遺構底面まで掘り込んで調査した。床面直上から晩期初頭安行3a式（第131図No.1）の大型破片が出土したため、この時期の所産と考える。覆土上層には晩期中葉の大洞C1～C2式のものが多く見られ、埋没過程が確認された（第130図No.40）。

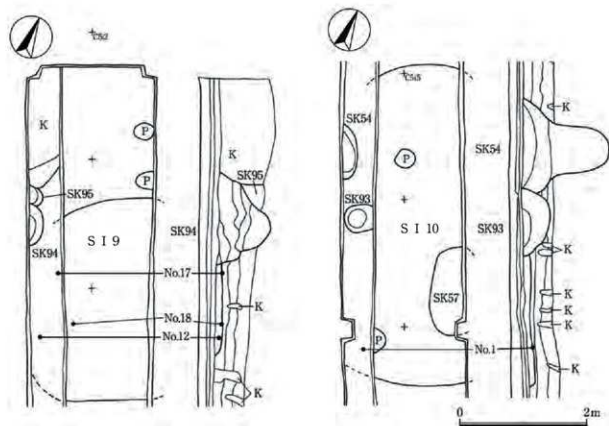
また、泉坂下遺跡は石棒製作遺跡としての性格も重要視されており、これらの住居跡からは石棒類の完成品・未成品や、石棒製作に係わると考えられる砥石等がそれぞれ出土している（第84・85・87図）。なお、石棒については第1部第4章第4節3で詳しく述べられている。

晩期後葉の遺物も、遺構は確認されていないが、中葉の土器とほぼ同じ範囲から出土している。晩期後葉から弥生時代前期の遺物数は減少するが、弥生時代再葬墓の営まれる中期前半まで継続して確認されている。

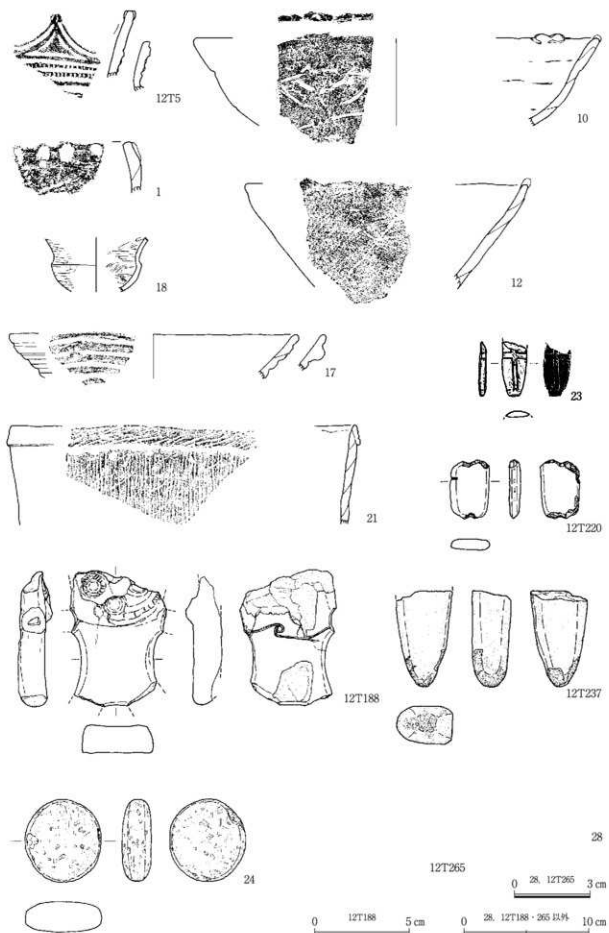


第121図 縄文時代遺構分布拡大図

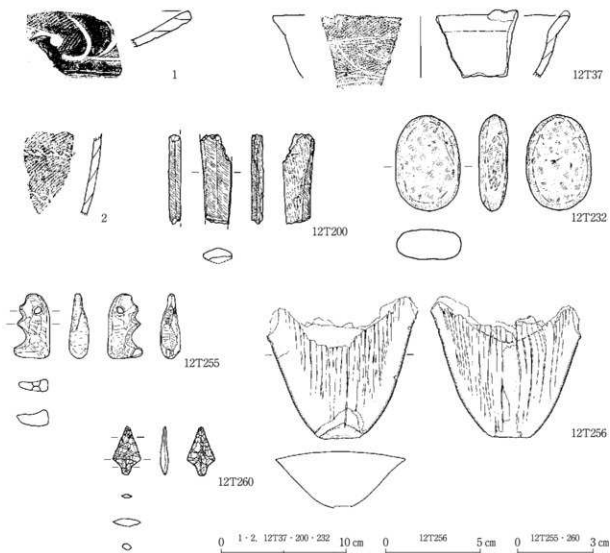
--- 縄文時代晩期出土遺物集中範囲



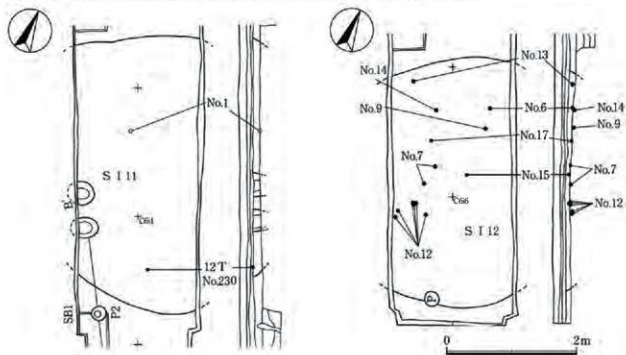
第122図 第9・10号竪穴住居跡実測図（報告書Ⅲ第15図より、一部改変）



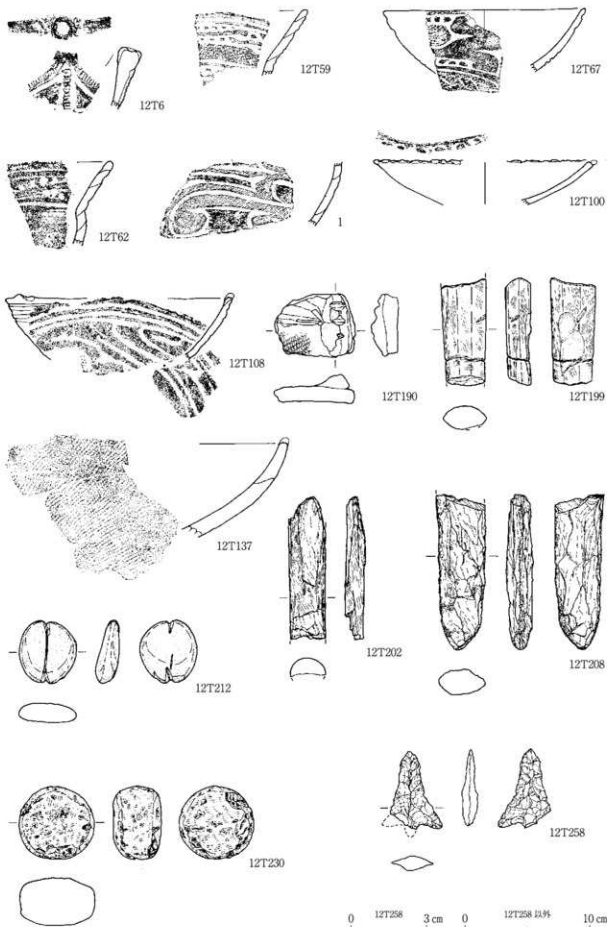
第123图 第9号竖穴住居跡出土遺物実測図（報告書Ⅲ第16・17・26・31・33・35・38図より）



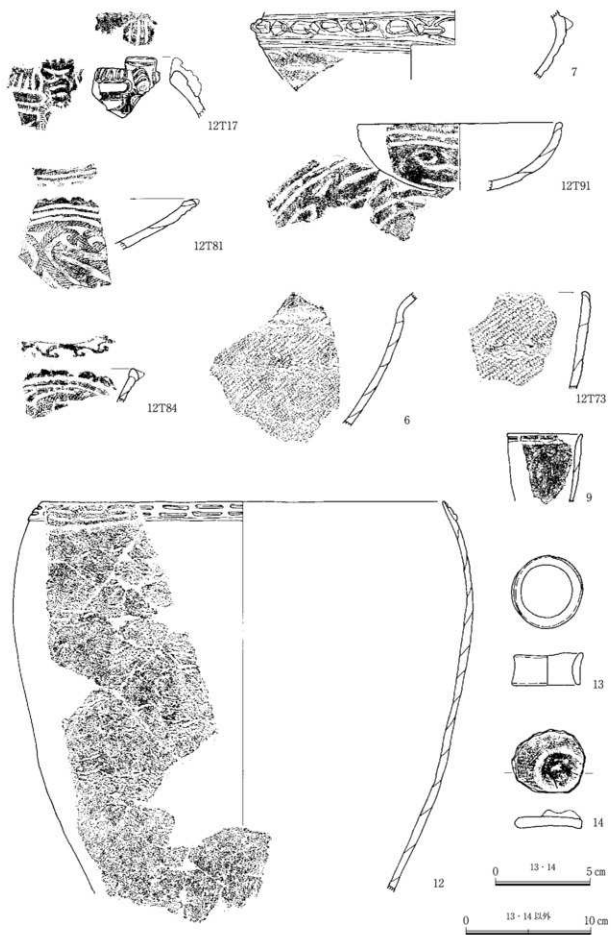
第124図 第10号竪穴住居跡出土遺物実測図 (報告書Ⅲ第18・27・32・34・38図より)



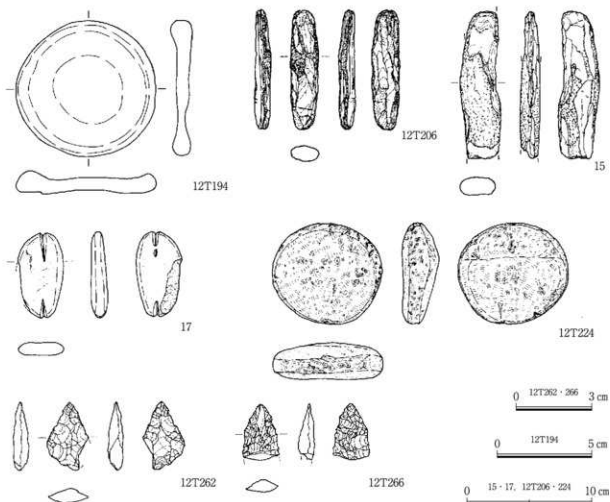
第125図 第11・12号竪穴住居跡実測図 (報告書Ⅲ第15図より、一部改変)



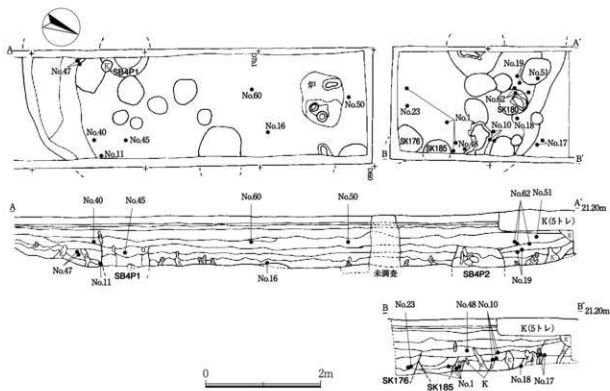
第126图 第11号竖穴住居跡出土遺物実測図 (報告書Ⅲ第19・26・27・29～34・38図より)



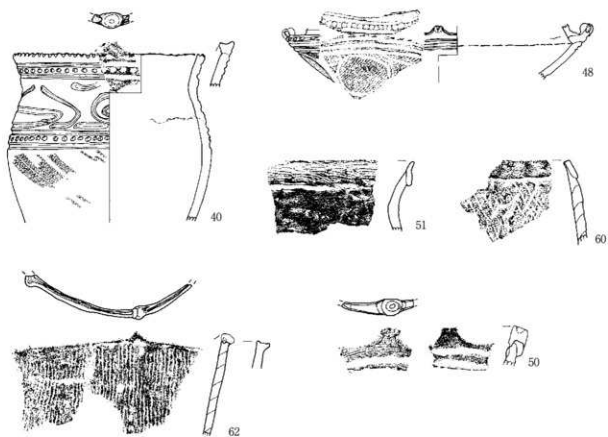
第127图 第12号竖穴住居跡出土遺物実測図(1)(報告書Ⅲ第20・26・27・28図より)



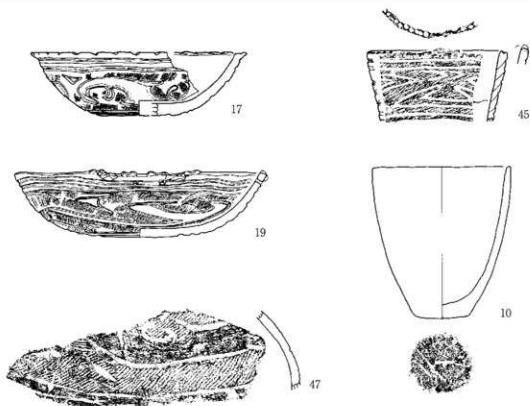
第128图 第12号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) (報告書Ⅲ第21・32・34・38図より)



第129图 第26号竪穴住居跡実測図 (本書第78図より、一部改変)



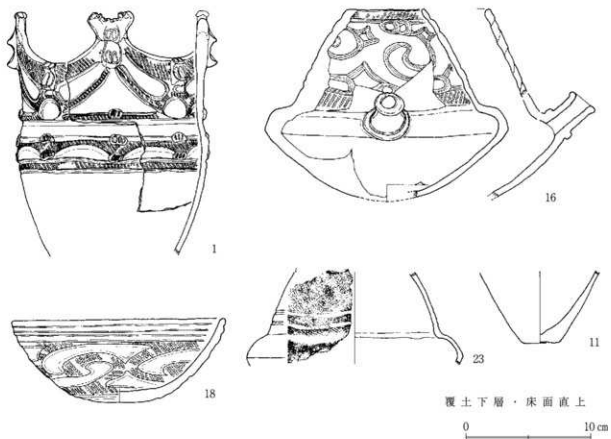
覆土上层



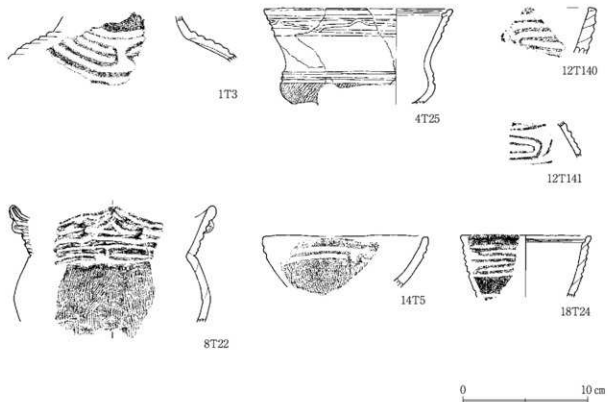
覆土中层

0 10 cm

第130图 第26号竖穴住居跡出土遺物実測図(1)(本書第79~82図より)



第131図 第26号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) (本書第79・80図より)



第132図 縄文時代晩期後葉の主な出土遺物実測図 (報告書Ⅱ第18・46図, Ⅲ第30・55・75図, Ⅳ第6図より)

2 弥生時代 (第133・134・138図)

(1) 前期～中期

弥生時代前期の土器は、数が少ないが土器片が散見される (第133図)。

中期の遺構は、ほとんどが弥生時代再葬墓遺構で、住居跡等は見つかっていない。遺構数は他の時代と比べ圧倒的に多く、当遺跡の主要な位置を占めている。そのため再葬墓については改めて後述することとし、ここでは割愛する。



第133図 弥生時代前期の主な出土遺物実測図 (報告書Ⅱ第48図、本書第83・93図より)

(2) 後期

第9号溝では、弥生時代後期後葉 (十王台式) の壺の口縁部が底面付近から出土しており (第134図)、現段階ではこの頃のものとして推定している。レーダー探査の結果、遺跡を南北に貫く非常に規模の大きいもので、弥生時代再葬墓の分布とは関わりのない走行を示していることが判明した (第46図)。また、第4次確認調査では、弥生時代再葬墓を切っており、かつ平安時代の住居に切られていることが確認されている (第62図)。



第134図 弥生時代後期の出土遺物実測図 (報告書Ⅲ第73図より)

3 古墳時代 (第135図)

第6トレンチから前期の壺の口縁部が出土しているが、遺構は確認されていない。

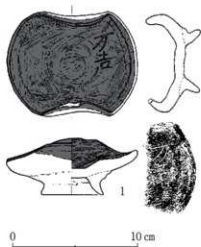


第135図 古墳時代の出土遺物実測図 (報告書Ⅱ第35図より)

4 古代 (第136・139図)

奈良時代の遺構・遺物は確認されていない。平安時代の遺構は、21軒の竪穴住居跡と土坑5基、掘立柱建物跡1棟が確認されている。竪穴住居跡は調査区域の全域に広く分布しており(第139

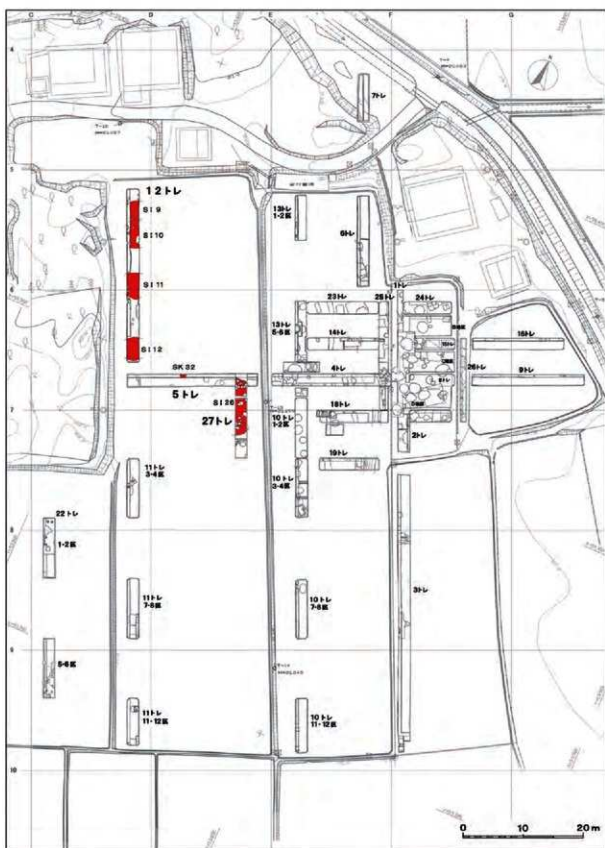
図)、出土遺物から、9世紀後半頃のもの、10世紀後半頃のものも多く確認されている。刻書「万吉」のある耳皿(第136図)や「□□大宅」の墨書土器といった特殊な遺物も確認されており、ある程度の規模の集落が所在したと考えられる。管状土錘も各住居から出土しており、近くを流れる久慈川との関係性が窺える。



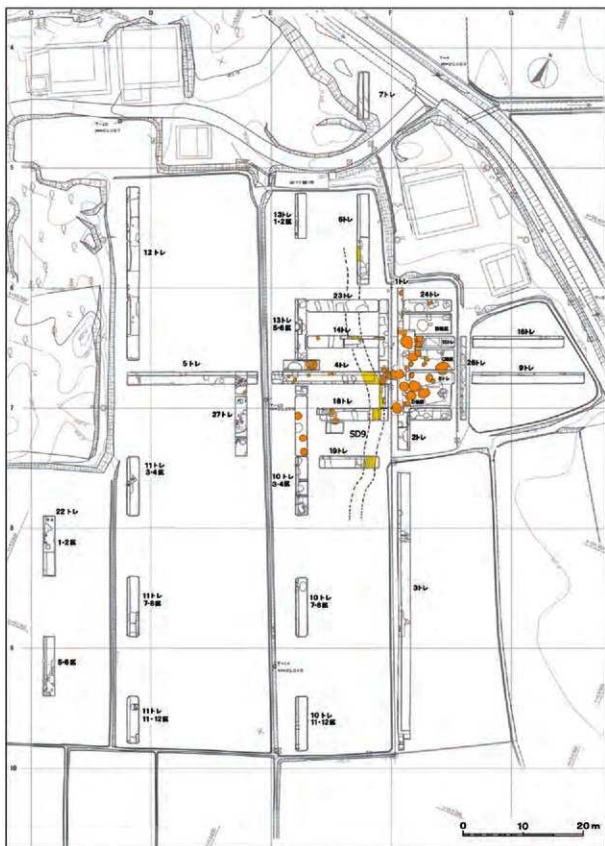
第136図 第3号竪穴住居跡出土遺物実測図(報告書Ⅱ第8図より)

5 中近世 (第140図)

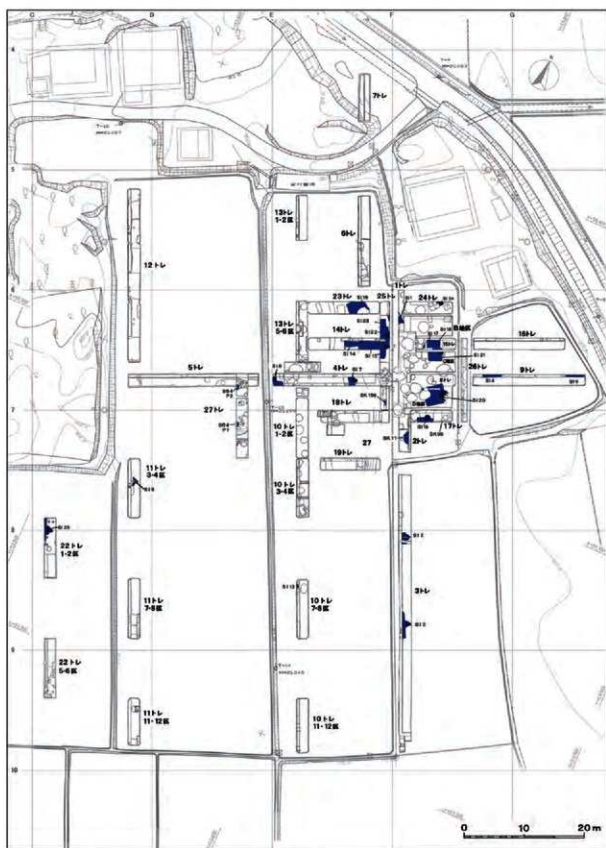
中世の遺構は、土坑15基と溝跡6条が遺跡全体に広く所在し、掘立柱建物跡や井戸も確認されている。土坑の多くが縦長の墓墳であり、中でも第58号土坑は、粘土貼りや石積み、木棺などの構造が確認され、副葬品も出土している。これらの墓墳は南北方向に複数本走る溝跡より西側にあり、調査区の南には東西方向に走る溝跡がある。このことから、溝により墓域が区切られていた可能性も考えられる。出土遺物から14世紀中頃～15世紀の遺物と、16世紀末から17世紀初頭にかけての遺物が、比較的多く見られる。



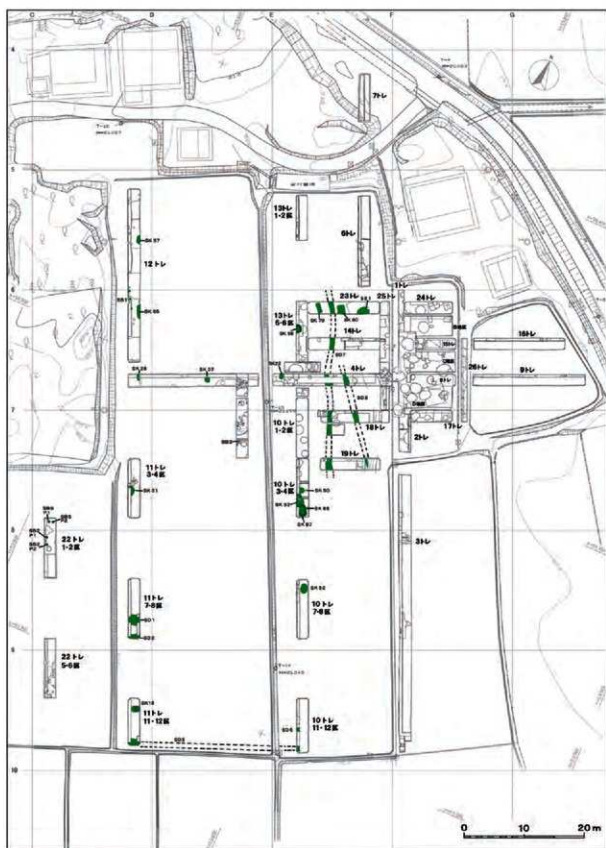
第137図 縄文時代遺構分布図



第138図 弥生時代遺構分布図



第139図 古代遺構分布図

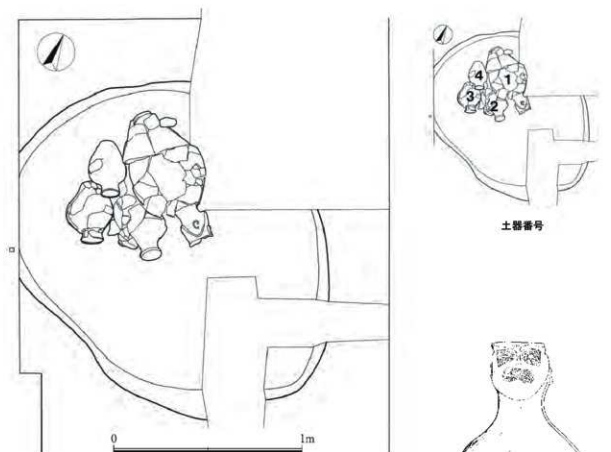


第140図 中近世遺構分布図

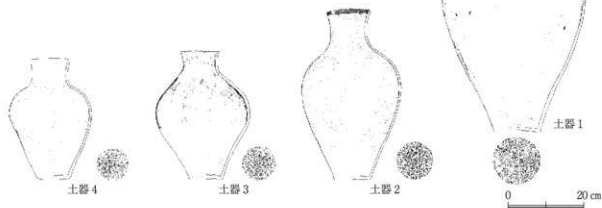
第4節 弥生時代再葬墓遺構と出土遺物

1 検出された再葬墓及び再葬墓関連遺構と出土遺物

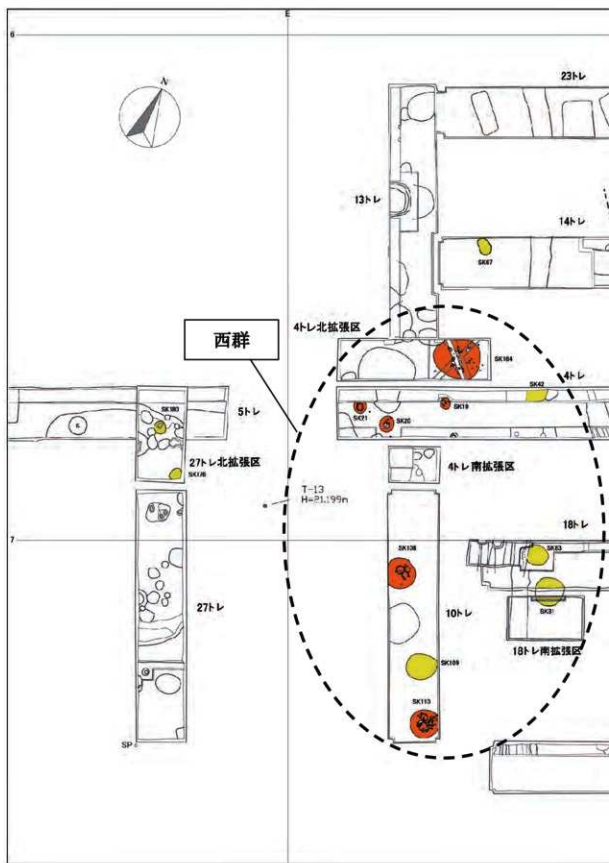
平成18年度の調査と、第1～4次確認調査の結果、弥生時代再葬墓関連遺構は、約30mの範囲内に集中しており、多数の土器が埋納される大型の再葬墓が密集している地域（東群）と、単数土器再葬墓と中規模の再葬墓がまばらに分布している地域（西群）が確認できた（第143図）。弥生時代の土坑は46基確認された。このうち、再葬墓と呼べるものは30基で（第141～178図）、1基あたりの埋納土器の数は1点から15点とバラつきがある。蓋などの、骨蔵器以外の用途の土器も含めると、確認されているすべての再葬墓内の土器は計153点にのぼる（第37表）。



第141図 第1号土坑実測図（鈴木2011第12図より、一部改変）



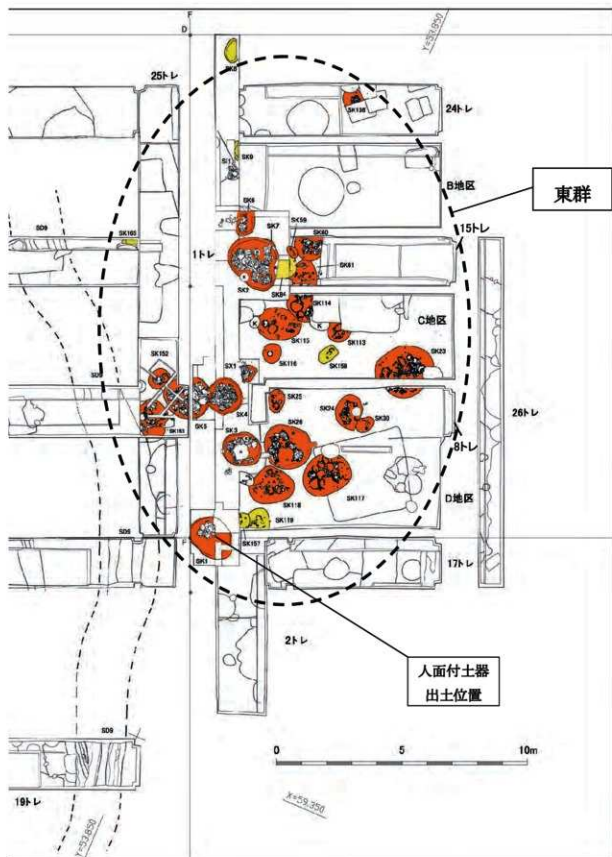
第142図 第1号土坑出土遺物実測図（鈴木2011第14・16・17図より、一部改変）



第143図 弥生時代再葬墓等遺構分布図

■ 弥生時代再葬墓

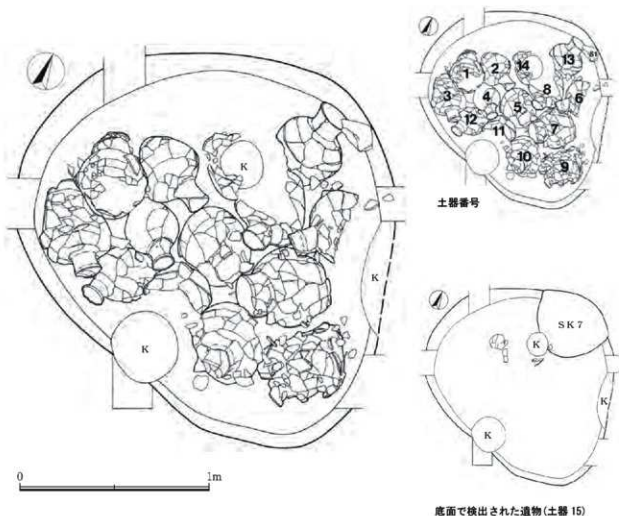
■ その他の弥生時代の土坑



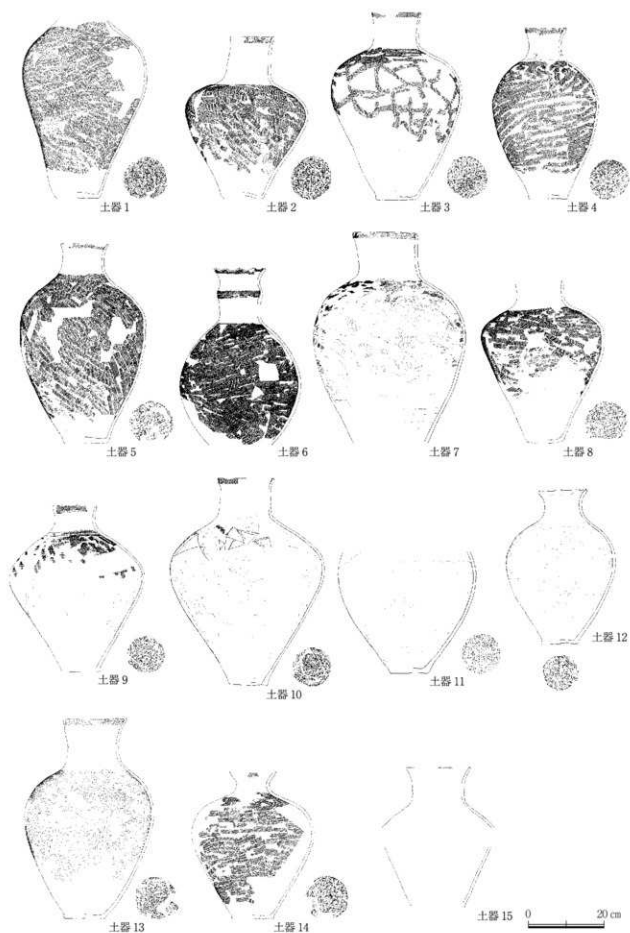
また、残りの16基の土坑は、再葬墓と同時代のものと推測される性格不明の土坑である。中でも第9・67・81・83号土坑は、出土遺物から再葬墓との関係性が伺える遺構である（第180～183図）。一次葬に伴う土坑である可能性が高いが、それぞれ様相が異なるため、一概には言えない。

確認調査では、遺構の保存を念頭に置いているため、原則として遺構の掘り込みはしていない。従って、これら未掘の遺構の下に、未発見の再葬墓等が所在している可能性は十分にあることは考慮しておかなければならない。

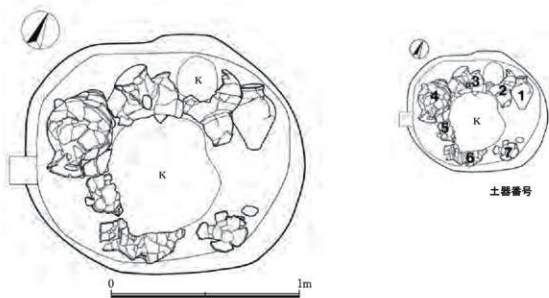
以下に弥生時代再葬墓を遺構番号順に掲載する。第37表の埋納土器一覧に確認された再葬墓内の土器の出土状況をまとめており、第38表に掘り込みを行った再葬墓の埋納土器の観察表を掲載する。平成18年調査の第1～6号土坑、第1号性格不明遺構、平成26年度第3次確認調査の第26号土坑については出土遺物を取り上げているため、遺構実測図と土器実測図を掲載しているが、その他の再葬墓については、土中に大部分が埋没している状態で観察を行い、その後埋め戻しをしている。現在100個体近くの土器が埋没保存という形で遺跡に残されている。



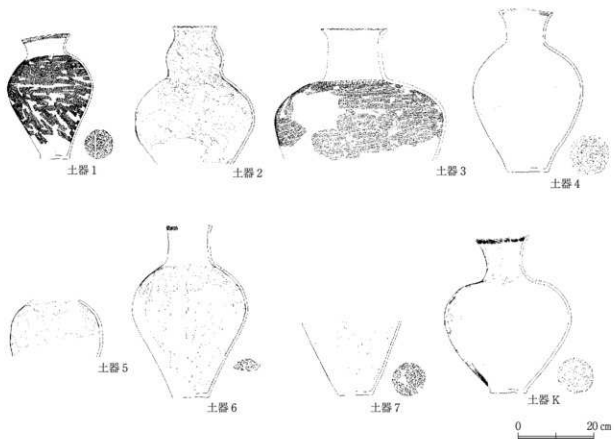
第144図 第2号土坑実測図（鈴木2011第18図より、一部改変）



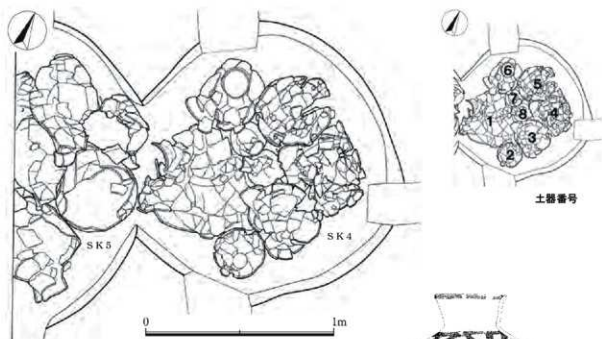
第145図 第2号土坑出土遺物実測図（鈴木2011第20～31・33・34図より，一部改変）



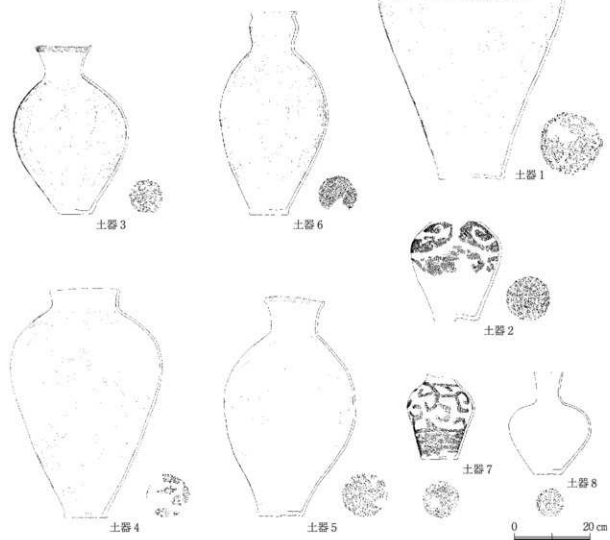
第146図 第3号土坑実測図（鈴木2011第35図より、一部改変）



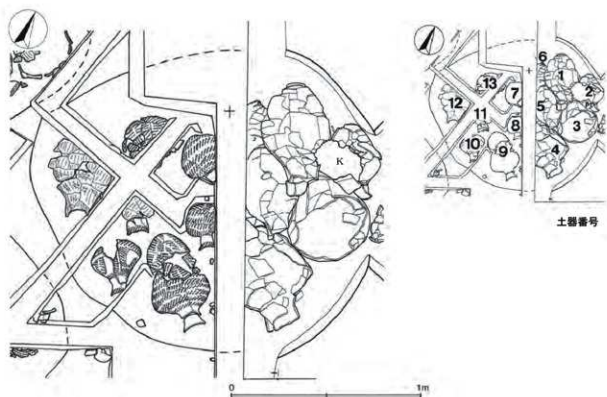
第147図 第3号土坑出土遺物実測図（鈴木2011第4・37～40図より、一部改変）



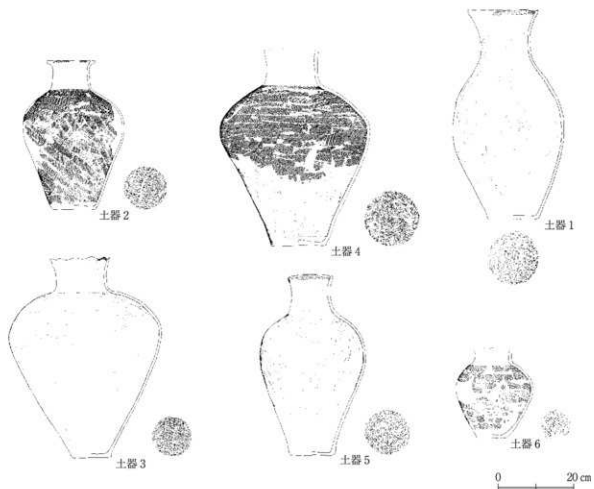
第148図 第4号土坑実測図（鈴木2011第41図より、一部改変）



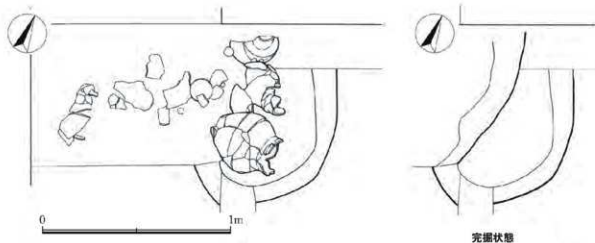
第149図 第4号土坑出土遺物実測図（鈴木2011第43～49図より、一部改変）



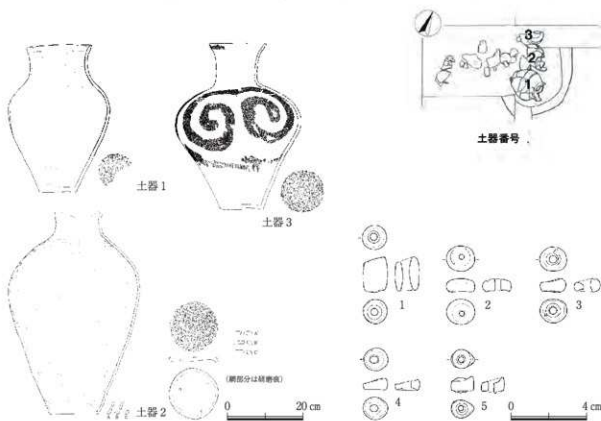
第150図 第5号土坑実測図（鈴木2011第50図、本書第52図より、一部改変）



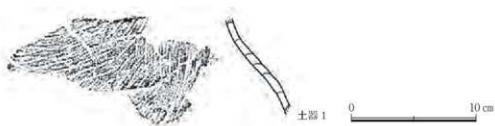
第151図 第5号土坑出土遺物（土器1～6）実測図（鈴木2011第52～56図より、一部改変）



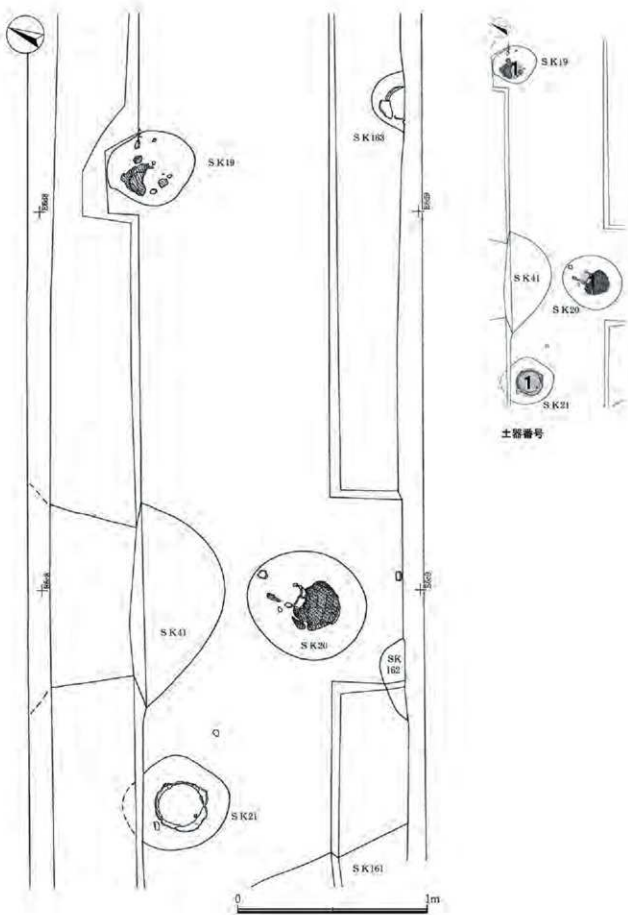
第152図 第6号土坑実測図（鈴木2011第57図より、一部改変）



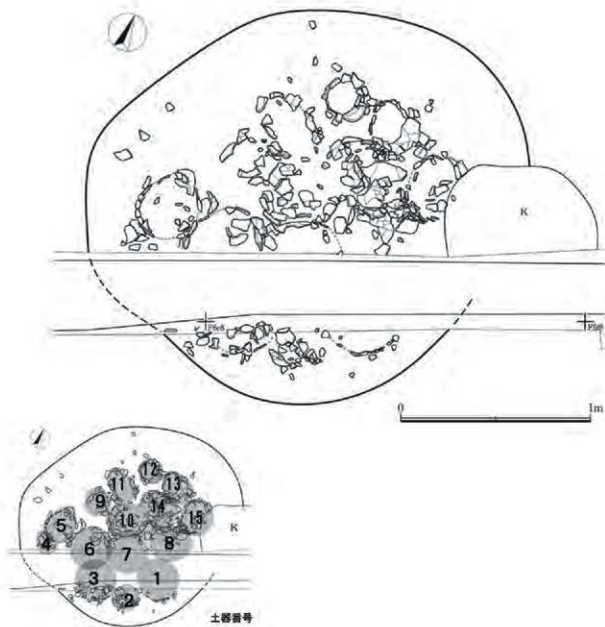
第153図 第6号土坑出土遺物・土器1内遺物実測図（鈴木2011第59～62図より、一部改変）



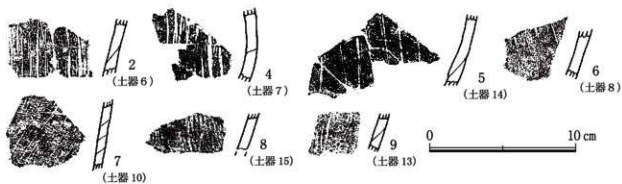
第154図 第21号土坑出土遺物実測図（報告書Ⅱ第13図より）



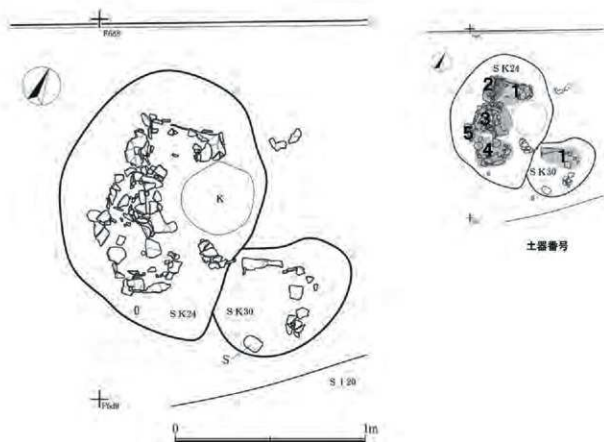
第155図 第19～21号土坑実測図（本青第50図より、一部改変）



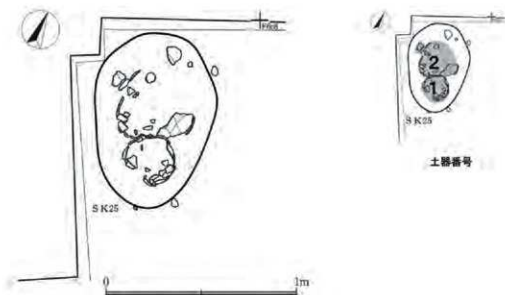
第156図 第23号土坑実測図（報告書IV第9図より、一部改変）



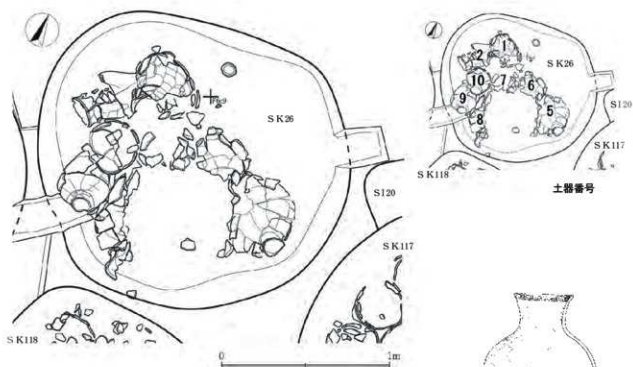
第157図 第23号土坑出土遺物実測図（報告書IV第10図より、一部改変）



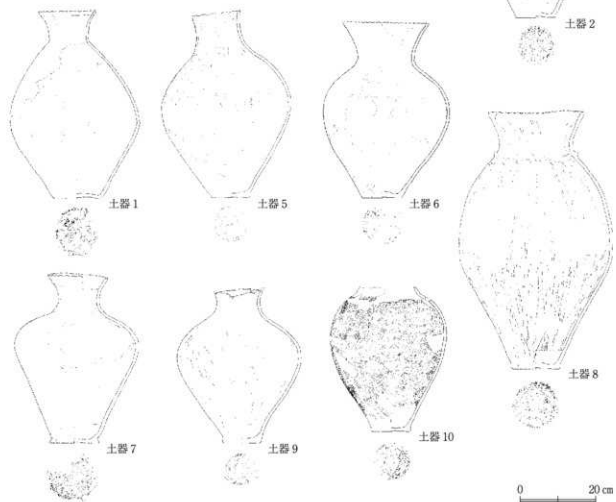
第158図 第24・30号土坑実測図（報告書Ⅱ第41図より、一部改変）



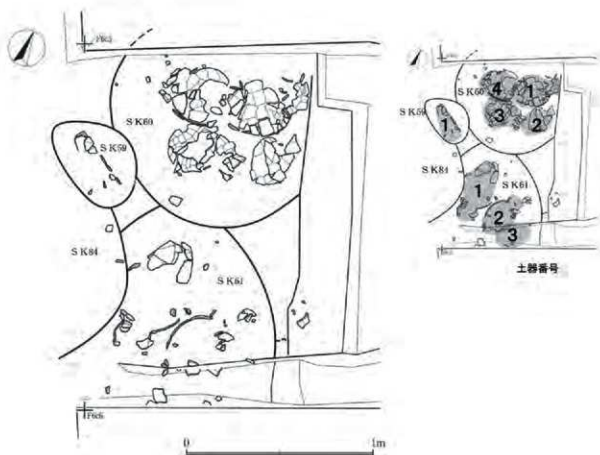
第159図 第25号土坑実測図（報告書Ⅱ第43図より、一部改変）



第160図 第26号土坑実測図（報告書IV第13図より，一部改変）



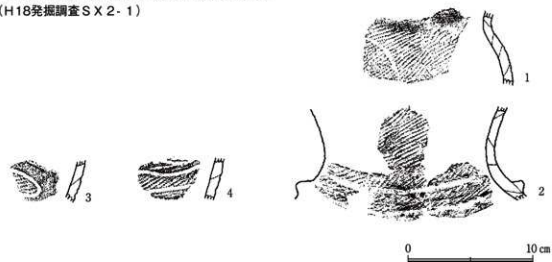
第161図 第26号土坑出土遺物実測図（報告書IV第16～23図より）



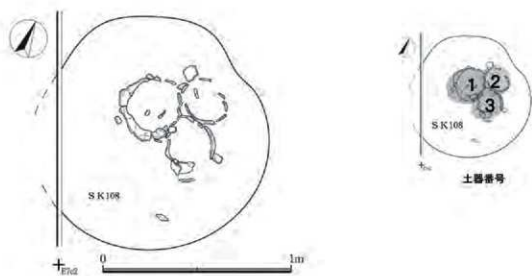
第162図 第59～61号土坑実測図（報告書IV第36図より、一部改変）



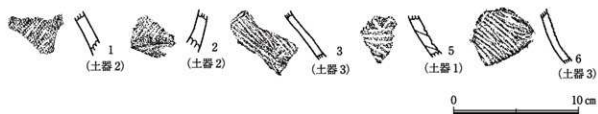
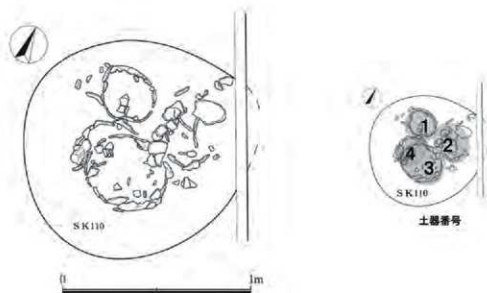
第163図 第59号土坑土器1実測図（鈴木2011第68図より）
（H18発掘調査S X 2- 1）



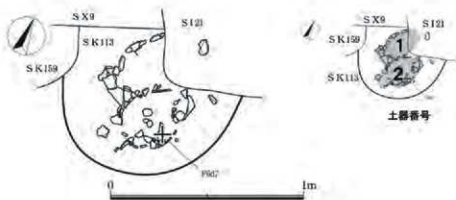
第164図 第61号土坑土器1実測図（報告書IV第37図より）



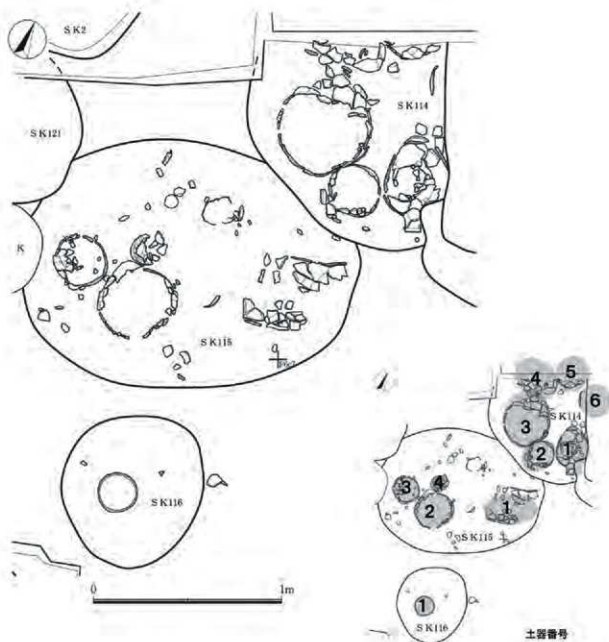
第165図 第108号土坑実測図（報告書IV第28図より、一部改変）



第166図 第110号土坑・出土遺物実測図（報告書IV第32・33図より、一部改変）



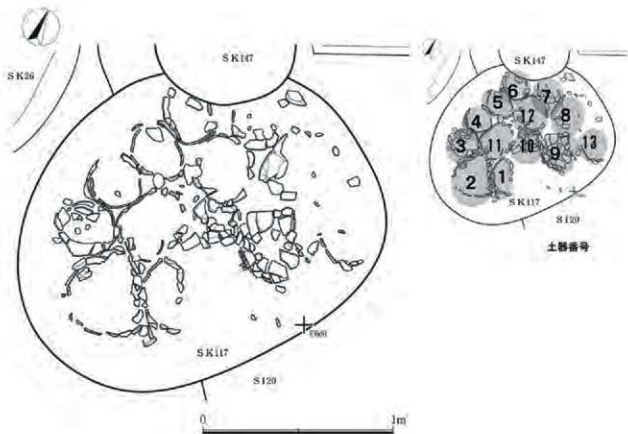
第167図 第113号土坑実測図（報告書Ⅳ第88図より、一部改変）



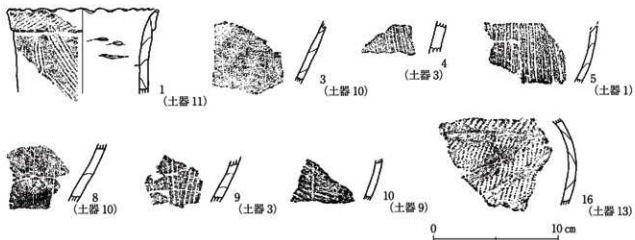
第168図 第114～116号土坑実測図（報告書Ⅳ第90図より、一部改変）



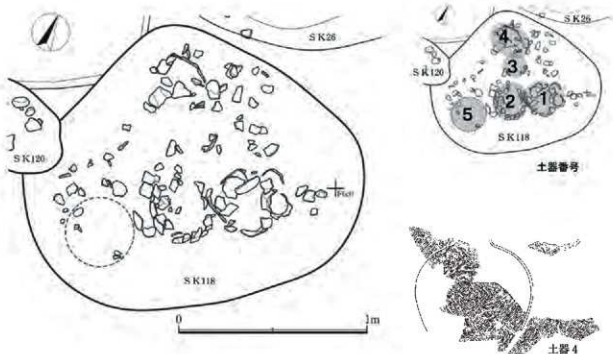
第169図 第115号土坑出土遺物実測図（報告書IV第92図より）



第170図 第117号土坑実測図（報告書IV第101図より、一部改変）



第171図 第117号土坑出土遺物実測図（報告書IV第102図より）

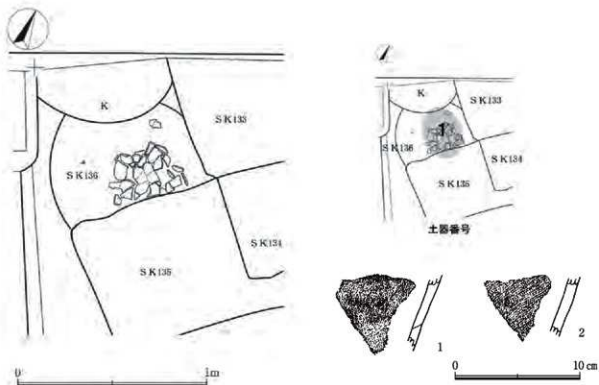


第172図 第118号土坑実測図（報告書Ⅳ第103図より、一部改変）

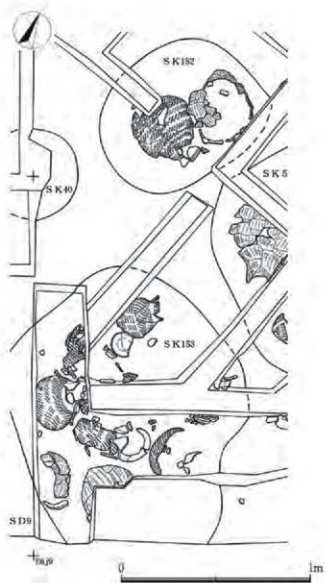
(H18発掘調査SX3-2)



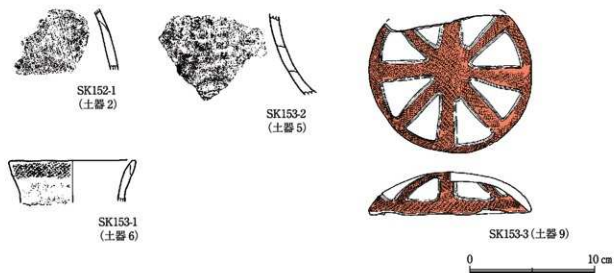
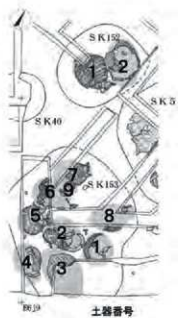
第173図 第118号土坑出土遺物実測図（鈴木2011第68図、報告書Ⅳ第104図より）



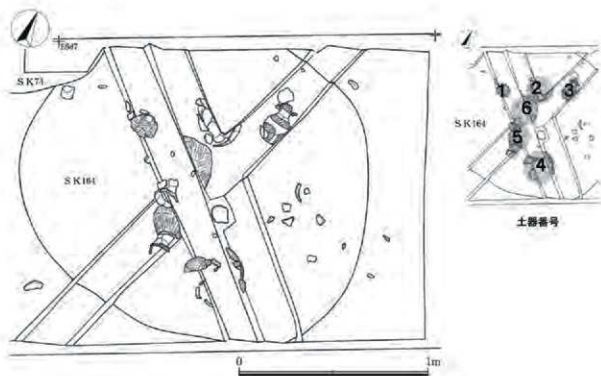
第174図 第136号土坑・出土遺物実測図（報告書Ⅳ第54・55図より、一部改変）



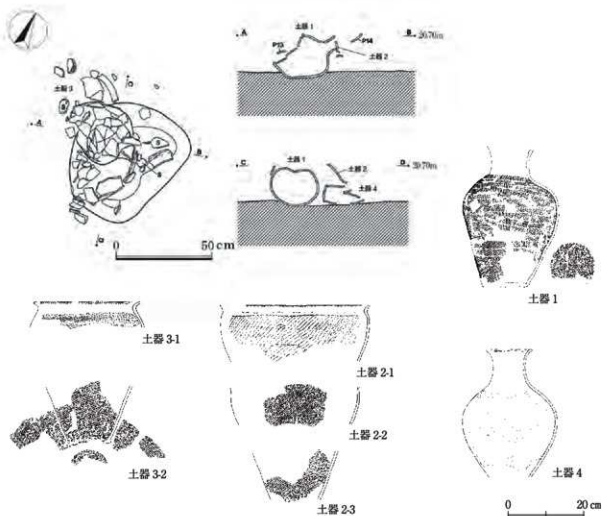
第175図 第152・153号土坑実測図（本書第52図より、一部改変）



第176図 第152・153号土坑出土遺物実測図（本書第54・55図より）



第177图 第164号土坑实测图 (本书第56图より、一部改变)



第178图 第1号性格不明遺構・出土物实测图 (鈴木2011第63~67图より、一部改变)

土坑 番号	出土 位置	調査	点数	土器 番号	器種	主軸 方向	器高 (cm)	口縁部	頸部	胴部	底面	備考	
5	1・4・ 25トレ	平成 18・ 第1・ 3次・ 4次	13点	1	壺	南南東	取り上げ。第38表参照						
				2	壺	南南東							
				3	壺	南南東							
				4	壺	南南東							
				5	壺	南南東							
				6	壺	南南東							
				7	壺	南南東	[35~40]	—	無文	疑縄文（オオバコ）	—	埋没保存	
				8	壺	南南東	[35~40]	平縁、 複合口縁に縄 文	無文	縄文もしくは L R	—	埋没保存	
				9	壺	南南東	[50~55]	平縁、 単純口縁[口径 14]	無文	附加条縄文L R + R,まばらに結 節縄文	—	埋没保存	
				10	壺	南南東	[35~38]	波状、複合口 縁に縄文L R [口径12]	無文	沈線で区画した 磨消縄文による 文様	—	埋没保存	
				11	壺	東南東	[45~50]	複合口縁に縄 文、 [口径12]	無文	条痕文	—	埋没保存	
				12	壺	南南東	—	平縁、 単純口縁[口径 14]	条痕文	条痕文	—	埋没保存	
				13	壺	南南東	—	—	無文	縄文、結節縄文	—	埋没保存	
6	1トレ	平成 18年	3点	1	壺	東南東	取り上げ。第38表参照						
				2	壺	東							
				3	壺	東							
19	4トレ	1・4 次	1点	1	壺	南南東	—	—	無文	縄文L R	—	埋没保存	
20	4トレ	1次	1点	1	壺	北	—	平縁、 単純口縁[口径 14]	無文	附加条縄文	—	埋没保存	
21	4トレ	1次	1点	1	壺	倒立、底部 がやや西に 傾く	—	—	無文	縄文L Rもしく は附加条縄文	—	埋没保存	
23	8トレ・ C地区	1・3次	15点	1	壺	直立、やや 西に傾く	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	
				2	壺	直立	—	—	無文	条痕文	—	埋没保存	
				3	壺	南	—	—	無文	L R 縄文	—	埋没保存	
				4	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	
				5	壺	南	—	—	—	縄文L R	—	埋没保存	
				6	壺	直立、やや 東に傾く	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	
				7	壺	直立、やや 東に傾く	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	
				8	壺	東	[30]	—	—	中央部：縄文L R、 下部：条痕文	無文	埋没保存	
				9	壺	北	—	—	無文	条痕文	—	埋没保存	
				10	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	
				11	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	
				12	壺	直立、やや 東に傾く	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	
				13	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	
				14	壺	南南東	[50~55]	平縁、複合口 縁に縄文	無文	上部：条痕文、 下部：無文	—	埋没保存	
				15	壺	直立	—	—	—	条痕文	—	埋没保存	

土坑 番号	出土 位置	調査 回数	点数	土器 番号	器種	主軸 方向	器高 (cm)	口縁部	頸部	胴部	底面	備考											
24	8トレ	1・3次	5点	1	壺	西南西	[45]	—	—	条痕文	無文	埋没保存											
				2	壺	—	—	—	—	—	—	—	埋没保存 1の蓋か										
				3	壺	南西	—	—	—	条痕文	—	—	埋没保存										
				4	壺	西	—	—	—	条痕文	—	—	埋没保存										
				5	壺	—	—	—	—	条痕文	—	—	埋没保存 4の蓋か										
25	8トレ	1・3次	2点	1	壺	北西	—	—	—	条痕文	—	埋没保存											
				2	壺	西北西	[40~45]	—	—	条痕文	—	埋没保存											
26	8トレ・ D地区	1・3次	8点	1	壺	南	取り上げ。第38表参照																
				2	壺	南西																	
				5	壺	南東																	
				6	壺	南東																	
				7	壺	南																	
				8	壺	南																	
				9	壺	南																	
				10	壺	直立																	
				30	8トレ	1・3次								1点	1	壺	東北東	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				59	15トレ	1・2・ 3次								1点	1	壺	南東	—	—	—	条痕文	—	H18年調 査でSX2 として一 部取り上 げ。残り を埋没保 存
60	15トレ	2・3次	4点	1	壺	北東	[50~55]	縄文L R	方形帯 縄文	上部：渦状文、 下部：縄文L R	—	埋没保存											
				2	壺	北東	[40~55]	—	無文	縄文L R	—	埋没保存											
				3	壺	東南東	[45~50]	縄文L R	条痕文	条痕文	—	埋没保存											
				4	壺	直立	[35~38]	—	無文	条痕文	—	埋没保存											
61	15トレ	2・3次	3点	1	壺	南	[70]	—	縄文	上部：磨消縄文 のヒトデ文、 下部：条痕文	—	埋没保存											
				2	壺	北東	—	—	—	縄文L R	—	埋没保存											
				3	不明	北東か	—	—	—	—	—	埋没保存											
108	10トレ	3次	3点	1	壺	西	—	—	—	中央部：縄文L R、 下部：磨消縄文	—	埋没保存											
				2	壺	西	—	—	—	無文	—	埋没保存											
				3	壺	西	—	—	無文	上部：縄文L R、 下部：条痕文	—	埋没保存											
110	10トレ	3次	4点	1	壺	南南西	—	—	羽状 文、平 行沈線	上部：羽状文、 平行沈線、 下部：条痕文	—	埋没保存											
				2	壺	北西	—	—	—	縄文L R+R R	—	埋没保存											
				3	壺	西北西	[45~50]	—	—	条痕文	—	埋没保存											
				4	壺	倒立	—	—	—	縄文L R+R R	—	埋没保存 3の蓋											
113	C地区	3次	2点	1	壺	南西	[40]	平縁、複合口 縁、縄文L R	無文	条痕文	—	埋没保存											
				2	壺	南西	[46]	—	—	粗い縦ナデ	—	埋没保存											

土坑番号	出土位置	調査	点数	土器番号	器種	主軸方向	器高(cm)	口縁部	頸部	胴部	底面	備考
114	C地区	3次	6点	1	壺	南南東	[45]	—	—	上部：結節文3列、中央部～下部：縄文LR+R	—	埋没保存
				2	壺	西南西	[33～35]	—	—	上部：結節文、中央部～下部：条痕文	—	埋没保存
				3	壺	南	[55]	—	—	条痕文	—	埋没保存
				4	壺	北西	—	—	—	—	—	埋没保存
				5	壺	北東	—	—	—	縄文LR	—	埋没保存
				6	壺	北か	—	—	—	中央部：縄文LR、下部：条痕文	—	埋没保存
115	C地区	3次	4点	1	壺	東北東	(55)	—	—	条痕文	木炭痕	埋没保存
				2	壺	南東	(40)	—	無文	条痕文	—	埋没保存
				3	壺	南南西	[20]	平縁	条痕文	条痕文	—	埋没保存
				4	壺	直立	—	—	—	上部：カナムグラ回転文、下部：無文	—	埋没保存
116	C地区	3次	1点	1	壺	直立	(12)	—	—	無文	—	埋没保存
117	D地区	3次	13点	1	壺	南	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				2	壺	南	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				3	壺	南	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				4	壺	北	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				5	壺	西北西	(35)	—	—	条痕文	—	埋没保存
				6	壺	直立	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				7	壺	南	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				8	壺	南	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				9	壺	南南西	—	—	—	無文	—	埋没保存
				10	壺	南南東	—	—	—	中央部：条痕文、下部：無文	—	埋没保存
				11	壺	南南西	[45～50]	—	—	—	—	埋没保存
				12	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				13	壺	南南西	—	—	—	縄文LR	—	埋没保存
118	D地区	3次	5点	1	壺	東北東	[45～50]	—	—	中央部：縄文LR、下部：無文	—	埋没保存
				2	壺	北北西	—	—	—	縄文LR	—	埋没保存
				3	壺	直立	—	—	—	無文	—	埋没保存
				4	壺	北西	—	—	—	縄文LR	—	SX3として一部取り上げ、残りを埋没保存
				5	壺	直立か	—	—	—	—	—	埋没保存
136	24トレ	3次	1点	1	壺	南東	—	—	—	下部：L R R R R または L R + 2 R 縄文	無文	埋没保存
152	25トレ	3次	2点	1	壺	東南東	[45]	平縁、複合口縁、縄文LR	無文	縄文LR	—	埋没保存
				2	壺	南南東	(35)	—	—	条痕文	—	埋没保存

土坑 番号	出土 位置	調査	点数	土器 番号	器種	主軸 方向	器高 (cm)	口縁部	頸部	胴部	底面	備考	
153	25トレ	3・4次	9点	1	壺	東	—	平縁、単純口縁、縄文L R	—	縄文L R	—	埋没保存	
				2	壺	東	—	平縁、単純口縁、縄文L R	無文	上部～中央部：条痕文、下部：縄文L R	—	埋没保存	
				3	壺	東南東	—	—	—	—	—	埋没保存	
				4	壺	南東	(30)	—	—	—	条痕文	—	埋没保存
				5	壺	東	—	—	無文	縄文L R	—	埋没保存	
				6	壺	東北東	—	平縁、単純口縁、縄文L R	無文	縄文L R	—	埋没保存	
				7	壺	東北東	—	平縁、単純口縁、縄文L R	無文	単節縄文L R・	上げ底	埋没保存	
				8	壺	東北東	—	平縁、複合口縁、縄文L R	—	—	—	埋没保存	
				9	蓋	倒立	3.4	平縁	—	磨消縄文のヒトデ状文、赤彩	—	取り上げ [V第7 表3]	
164	4トレ	4次	6点	1	浅鉢	倒立	—	平縁、横走沈線、穿孔。口径[16]	—	縄文L R	—	埋没保存	
				2	壺	西南西	—	—	—	無文	—	埋没保存	
				3	壺	北	—	口径[6～7]	—	磨消縄文	—	埋没保存	
				4	壺	南	—	平縁、複合口縁、縄文L R	—	縄文L R	—	埋没保存	
				5	壺	南	—	小波状、複合口縁、縄文L R	無文	条痕文	—	埋没保存	
				6	壺	南	—	波状、複合口縁、縄文L R	無文	条痕文	—	埋没保存	
S X I	1トレ	1次	4点	1	壺	東	取り上げ。第38表参照					埋没保存	
				2	甕	—						埋没保存	
				3	甕	—						埋没保存	
				4	壺	東						埋没保存	

第38表 再葬墓出土土物観察表

土坑番号	土器番号	器種	器高 口径 胴径 底径 (cm)	残存率	形態・技法等	備考
1	1	人面付 壺形土 器	77.7	95%	口縁部一部欠。口縁部から頸部にかけて人頭を表現し、正面に人面を表す。平縁の複合口縁で、口縁部内面に輪痕が残り、口唇部は無文、口縁部は単節縄文L.R。口縁部前面は大半を欠く。この残存部には縄文が施文されず、棒状工具による沈線文が斜めに施される(層表現の可能性ある)。眼の周囲には、三角形の頂点に丸みを持たせ、それを横に向かい合わせた形に粘土が貼り付けられている。その輪部を棒状工具による沈線文で区画し、細く鋭利な工具による短線を羽状に充填する(眼の隙取りの表現か)。眼は棒状工具、またはへら状工具により施文。左眼には施文し直した痕跡があり、粘土のめくり上がり認められる。鼻は、粘土線を貼り付けて描出。鼻筋と鼻の両側面に沿って棒状工具による沈線文。鼻孔は、先の尖った棒状工具により2箇所、かなり深く刺突。口の両側には円形に粘土を貼り付け、その輪部を棒状工具による沈線文で区画し、細く鋭利な工具による短線を羽状に充填する(口周りの隙取りの表現か)。口は、粘土線を菱形に貼り付け、その輪部を棒状工具による沈線文で区画。耳は、粘土線を貼り付けて描出。右耳はC字状、左耳は渦巻状である。両耳ともに棒状工具による焼成帯の穿孔があり、施文は上から下、右耳には2箇所、左耳には3箇所貫通孔がある。顎は突出し、立体的に表現されている。貼り付けではなく、成形段階で作成されたもの。顎のツインの延長線から、耳の上を通過して後頭部にかけて粘土線が貼り付けられている。赤色顔料が右眼下や右額等に部分的に残存している(人面部は赤彩されていたと考えられる)。頸部から底部付近にかけては条痕文。条痕文は、8本以上一単位で施文され、概ね斜位。底部は平底で、木葉痕がある。胎土に骨針を多量、雲母を少量含み、焼成は良好。色調は内外面ともに淡褐色～黒褐色。内外面一部黒色物附着。府中工房により解体修理済。	第142図 PL43
			140			
			380			
			125			
			45.4			
1	2	壺	11.5	100%	胴部・底部一部欠。平縁の複合口縁。口縁部は単節縄文L.R。頸部から底部付近にかけては、縦位の短縄文(「縦位短条痕文」)が施される。沈線文は2本一単位で施文され、一方が先割れして細い半軟竹管のように見える。縦列に施文した後、その列間を充填する。施文は上から下。底部付近はナデ調整。底部は平底で、中央やや肥厚し、木葉痕がある。焼成は比較的良い。色調は、外面上部が褐色、下部が淡褐～黄褐色・暗褐色、内面が淡褐色・灰褐色。胴部上半に歪みあり。内外面一部に黒色物附着。	第142図 PL43
			26.4			
			9.4			
			33.9			
1	3	壺	10.2	95%	口縁部・頸部一部欠。口縁は、口唇部が小刻みに押圧されて微波状を呈する。単純口縁。口縁部から胴部には条痕文が施される。条痕文は、頸部が縦位またはやや右下がりの斜位、胴上部が左下がりの斜位、胴下部にかけて縦位からやや右下がりの斜位。頸部は施文後にナデ調整。条痕文のほとんどが削れている。条痕文は5本一単位で施文され、施文具の一部が先割れして細い半軟竹管のように見える部分と沈線のような太さで施文された部分もある。胴下部から底部付近は縦位にナデ調整されているが、一部に輪痕を残す。底部は平底で、中央が肥厚し、木葉痕がある。器内面は、口縁～胴部が横位に、底部付近が斜位にナデ調整され、胴上部には輪痕が残る。胎土に雲母を極少量含み、大粒の赤色粒子が目立つ。焼成は普通～やや不良。色調は、外面胴部が淡暗褐色。他が淡褐色、内面が淡褐色。内外面一部黒色物附着。	第143図 PL43
			25.0			
			9.0			
			32.5			
			10.2			
1	4	壺	10.2	95%	口縁部・胴部一部欠。平縁の単純口縁。頸部は無文で、ナデ調整。胴部には、短縄文(「縦位短条痕文」)が施され、頸部との境界では横位に施文された部分もある。沈線文は2本一単位で施文される。この沈線文は、縦列を施した後、列間が充填された部分もある。施文は上から下。胴下部には輪痕が残る。胴上部は指頭圧痕が見られる。焼成は比較的良い。色調は、外面が淡褐～黒褐色、内面が淡褐色。内外面一部黒色物附着。	第142図 PL43
			21.7			
			8.6			
			(47.0)			
2	1	壺	—	60%	口縁部～胴上半部欠。残存部分から、頸部はナデ調整による無文と推定される。胴部には単節縄文L.Rが施される。この縄文は横位あるいは斜位に施文されるが、急勾で右下がりとなる部分も見られる。底部付近は、縄文施文後に、横位のケズリ～ナデ調整される。底部は平底で、中央が肥厚し、ケズリ調整される。焼成は普通～良い。色調は、外面上部が褐～茶褐色、中部が暗褐色、下部が褐色・赤褐色。内面上部が褐～茶褐色、下部が黒褐色。内外面一部黒色物附着。他に未接合細片2点別置。	第145図 PL43
			32.9			
			11.0			
2	2	壺	43.3	90%	口縁部・胴部一部欠。全体がやや傾く。平縁の複合口縁。口縁部には単節縄文L.Rが施される。頸部はナデ調整の無文で、へら状の工具痕が残る部分もある。胴部にも単節縄文L.Rが施され、一部に結節縄文も認められる。縄文は、胴上部は概ね横位、胴下部は縦位から右下がりの斜位に施文される。胴下部には、輪痕が見られる。底部付近はナデ調整。底面周縁には、ケズリ調整が施され、凹んだ中央部に木葉痕が残る。胎土に赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は、茶褐～褐色。外面一部黒色物附着。	第145図 PL43
			11.7			
			32.7			
			11.2			
2	3	壺	49.6	90%	口縁部・胴部一部欠。平縁で、口唇外面に単節縄文L.Rを施文。頸部はナデ調整の無文。胴部には、単節縄文L.Rによる縄文帯を連結させて文様を構成。文様のモチーフは、三角形や四角形の無文帯を囲み込む「枠状文」と、その先頭が連結せずに突出する「ヒト状文」の組合せである。縄文帯は、沈線で区画されることはなく、無文帯がナデ～マガキ調整され、輪部が決定される。文様のモチーフは胴部を全周せず、胴上部の5分の1周ほどは縄文が全面施文される。胴下部は、底部付近が縦位、それ以外が横位のナデ調整。底部はやや凸面の平底で、底面はナデ調整され、中央に木葉痕の痕跡を残す。胎土に赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通～良い。色調は、外面が淡褐～褐色、内面が褐色。	第145図 PL43
			12.9			
			34.8			
			10.6			

土坑 番号	土器 番号	器種	器高 口径 胴径 (cm)	残存率	形態・技法等	備考
2	4	壺	45.4	95%	口縁部小欠、胴部一部欠（故意欠損の可能性）。平縁で、複合口縁を呈する部分と単純口縁に見える部分がある。口縁部には単節縄文L.R。頸部はナデ～ミガキ調整の無文。頸部と胴部の境界には、3孔一組の補修孔3組がある。このうち、いずれも中央の孔の下部は欠損し、切れ込み状を呈する。胴部にも単節縄文L.R。縄文は横位が緩やかな斜位施文であるが、胴上部には急角度に施文された部分もある。縄文の間は無文部を挟むのは、なで消されたのではなく、外面のナデ調整後、やや乾燥が進んだ状態で縄文が施文されたことによる。底部付近はケズリ～ナデ調整。底部はやや揚げ底で、木葉痕がある。胎土に赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、外面が淡褐～暗褐色・黒色、内面が淡暗褐色。内外面一部黒色物附着。	第145図 PL44
			11.1			
			28.1			
			10.5			
2	5	壺	52.9	70%	口縁部小欠、胴部・底部一部欠。平縁で、複合口縁を呈する部分と単純口縁に見える部分がある。口縁部は単節縄文L.R。頸部はミガキ調整の無文で、調整は、縄文施文後に施されている。胴部にも単節縄文L.Rが施されており、結節文も一部に観察される。施文は、頸部付近が横位。全体には右下がりの斜位。底部付近はナデ～ミガキ調整。底部は平底で、中央が肥厚し、ケズリ調整。胎土に赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は、外面が茶褐～赤褐色、内面上部が茶褐～赤褐色、下部が橙色。内外面一部黒色物附着。他に未接合細片2袋（別個体片を含む可能性あり）別置。	第145図 PL44
			12.6			
			33.5			
			11.6			
2	6	壺	(46.8)	60%	口縁部一部欠、頸部～胴部2分の1残欠、底部欠。所謂「瓢形」で、頸部中位が膨らむ。波状口縁で、6箇所波頂部が残存する。複合口縁を呈する部分と単純口縁に見える部分がある。外反した口縁部の外面及びその内面には縄文が施される。頸部中位に帯状の縄文、その上下の無文部には、ミガキ調整が施される。胴部にも単節縄文L.Rが施され、結節文も一部にある。施文は、頸部付近が横位。全体には緩やかな斜位である。胎土に赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は、内面上部が茶褐～赤褐色、下部が暗褐色、内面が褐色。内外面一部黒色物附着。頸部と胴部に分断、破損。他に未接合細片4袋別置。	第145図 PL44
			13.8			
			32.2			
			—			
2	7	壺	(55.8)	80%	口縁部一部欠、胴部3分の1欠、底部欠。平縁で、成形時の粘土帯を残して複合口縁を呈する。口縁部には指頭圧痕が見られ、その上に単節縄文L.Rが施される。頸部は縦位のミガキ調整による無文。胴部には単節縄文L.Rと結節文が施される。施文は、頸部付近が横位。全体には右下がりの斜位である。縄文の施文は全体に不明瞭である。胴下部にはケズリ調整に伴う推痕もある。焼成は良い。色調は褐～黒褐色。他に未接合破片1点を含む細片1袋別置。	第145図 PL44
			17.3			
			40.2			
			—			
2	8	壺	(44.1)	80%	口縁部欠（擬口縁か）。胴部3分の1欠、底部一部欠。頸部はナデ調整による無文。胴部には単節縄文L.Rと結節文が施される。施文は、胴上部が横位から緩やかな斜位。胴下部が右下がりの斜位から縦位。胴上部の縄文の上に曲線を組み合わせた尖頭状の細線文がある。胴下部には縦位のケズリ調整が施される。底面もケズリ調整である。胎土に赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、外面頸～胴上部が褐色・茶褐～赤褐色、胴中央部が黒褐～暗褐色、胴下部が赤褐色、内面が褐～淡褐色。全体に接合面が分離。外面一部黒色物附着。	第145図 PL44
			(12.7)			
			32.4			
			11.0			
2	9	壺	44.2	60%	口縁部～胴部3分の1欠。平縁で、口縁部はやや肥厚するが単純口縁。口唇部及び口縁部には単節縄文L.Rが施され、口縁部の下端は結節文で区画。頸部はミガキ調整による無文。胴上部にも単節縄文L.Rと結節文が施される。頸部付近には、縄文と結節文が2段の横位。それより下位は右下がりの斜位を基本とする。縄文の施文後、胴下部には縦位の条痕文が施される。条痕文は6、7本一単位で施文される。底部付近はミガキ調整。条痕文の下部は消されている。底部は平底で、中央が肥厚し、木葉痕がある。胎土に泥岩片を多量に含む。焼成は不良。色調は、外面が淡褐～黄褐色・暗褐色、内面が淡灰褐色・灰色。内外面一部黒色物附着。全体に接合面が分離。他に未接合細片2袋別置。	第145図 PL44
			11.6			
			35.7			
			10.0			
2	10	壺	55.0	50%	口縁部・胴部一部欠。平縁の複合口縁。口唇部及び口縁部には単節縄文L.R。頸部はミガキ調整による無文。この調整は、胴部の条痕文の上部を消す。胴部には条痕文。条痕文は3、4本一単位で施文される。施文は、胴上部が横位、胴下部が右下がりの斜位を基本とするが、胴上部から胴下部まで縦位に施文された部分もある。胴上部の一部に、三角形を組み合わせて構成した縦線文が加付されている。この縦線文の左上には、単節縄文L.Rが帯状に施されている。さらにその左側には、一際大きな三角形が描かれている。底部は平底で、ナデ調整されている。胎土に赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は、外面上部が褐色・茶褐色、下部が暗褐色。内面が褐色。内外面一部黒色物附着。	第145図 PL44
			15.0			
			40.9			
			10.2			
2	11	壺	(32.3)	40%	胴下半部残欠。胴部は条痕文。条痕文は、縦位及び斜位に4、5本一単位で施文される。底部付近は、横位にナデ調整され、条痕文が消されている。底部には平底で、木葉痕がある。焼成は良い。色調は、外面が褐～黒褐色、内面も褐～黒褐色。内外面一部黒色物附着。全体に接合面が分離。他に未接合破片1組、細片1袋別置。	第145図 PL44
			—			
			—			
			—			

土坑番号	土器番号	器種	器高 口径 胴径 底径 (cm)	残存率	形態・技法等	備考
2	12	壺	41.2	95%	胴部一部欠。波状の複合口縁で、9箇所の波頂部がある。口唇外面には、一部に指状の痕跡がある。この複合口縁には、右下がり斜位の条痕文が施されている。頸部はナテ調整による無文。この調整は、胴部の条痕文の上端を消す。胴部には、右下がり左下がりの条痕文が格子状に施されている。施文方向とその順序に相関関係は窺えないが、一部に追加の施文も見られる。条痕文は4本一単位で施文される。底部はやや掲げ底となり、木葉痕がある。胎土に赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通～良い。色調は、外面が暗褐～黒褐色、内面が暗褐色。	第145図 PL44
			12.7			
			29.0			
			9.9			
2	13	壺	52.9	90%	口縁部小欠、胴部一部欠。平縁の複合口縁。口縁部は単節縄文L R。頸部はミガキ調整による無文。胴部も単節縄文L R。施文は、頸部付近が横位、胴中央部が縦やかな斜位。胴下部は縦位から急角度の右下がり斜位。底部付近はケズリーナテ調整される。一部に凹線状のケズリ痕がある。胴下部には円蓋状の付着物が認められる。底部は平底で、中央がやや肥厚し、木葉痕が僅かに残る。胎土に赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は褐色で、一部が暗褐色・黒褐色・淡褐色。	第145図 PL45
			17.2			
			34.3			
			11.0			
2	14	壺	39.1	40%	図上復元の残欠。平縁で、口縁部は複合口縁を呈する部分と単純口縁のように見える部分がある。口縁部は単節縄文L R。頸部はミガキ調整による無文。胴部は上端が結節文で区画される。結節文は1段であり、施文が重なる部分のみが2段となる。胴部には単節縄文L Rが施され、結節文も一部に観察される。施文は、概横位であり、一部に斜位が混じる。胴上部の縄文の上に、縦位の直線が1本線刻される。底部付近はナテ調整される。底部は平底で、中央がやや肥厚し、木葉痕がある。胎土に赤色粒子を含む。焼成は普通。色調は、外面が淡褐色、内面が褐～淡褐色。一部接合面が分離。他に未接合破片(底部)1組、細片3袋別置。	第145図 PL45
			12.2			
			32.6			
			11.0			
3	1	壺	33.2	100%	全体が傾く。胴上部が歪み、接合がずれる。平縁で複合口縁。口縁部は単節縄文L R。頸部はミガキ調整による無文。胴部にも単節縄文L Rが施され、結節文も一部に観察される。胴上部は概横位。胴下部は右下がりの斜位に施文。底部付近は、縦位から斜位にケズリーナテ調整。底部は平底で、木葉痕がある。胎土に赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、外面が暗褐色、内面が暗灰褐色。外面一部黒色物附着。	第147図 PL45
			13.0			
			22.7			
			8.0			
3	2	壺	(36.8)	50%	口縁部・胴部一部欠、底部欠。所謂「鷹形」で、頸部中位が膨らむ。口縁は単純口縁で、口唇部には小短みな波状文がある。口唇部直下から胴下部まで条痕文。条痕文は、4本一単位で施文され、右下がりの斜位であるが、胴下部には縦位の部分もある。内面は、口縁部のみミガキ調整、以下はナテ調整で、胴上部に輪積痕を残す。胎土に赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、内外面とも茶褐～褐～淡褐色。外面一部黒色物附着。他に未接合破片1袋別置。	第147図 PL45
			11.3			
			31.7			
			—			
3	3	壺	30.0	50%	胴部一部欠、底部欠。扁平な壺形。平縁で、内面が突出する複合口縁。口唇部は単節縄文L R。口唇部直下から頸部はミガキ調整の無文。胴部の上端は3段の結節文で区画。胴部にも単節縄文L Rが施される。施文は右下がりの斜位。内面は、頸部がミガキ調整、胴部はナテ調整で、胴上部に輪積痕を残す。胎土に白色粒子を多量に含む。焼成は普通～良い。色調は、内外面とも褐～茶褐色。外面一部黒色物附着。他に未接合破片3袋別置。	第147図 PL45
			17.6			
			45.4			
			—			
3	4	壺	43.6	80%	口縁部・胴部一部欠。平縁で複合口縁。口縁部は単節縄文L R。頸部はナテ調整による無文。輪積痕を残す。胴部には条痕文。条痕文は、縦位から斜位。底部は平底で、木葉痕がある。胎土に白色粒子を少量含む。焼成は良い。色調は、内外面とも褐～黒褐色。内外面一部黒色物附着。	第147図 PL45
			14.3			
			29.1			
			10.9			
3	5	壺	(15.4)	30%	胴部残欠。頸部はナテ調整による無文と推定される。胴部には条痕文。条痕文は、6本一単位で施文され、縦位から斜位。条痕文の一部が太い凹線状を呈する。胎土に少量の赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、外面が褐色・暗褐色、内面が淡褐色・褐色。外面一部黒色物附着。他に未接合破片1点別置。	第147図 PL45
			—			
			24.5			
			—			
3	6	壺	45.6	60%	口縁部・胴部・底部一部欠。平縁で複合口縁。口縁部は単節縄文L R。頸部はナテ調整による無文。頸部には2孔一対の輪積孔が3箇所あり、うち1箇所は1孔を欠損する。胴部は条痕文。条痕文は、4～6本一単位で施文され、縦位から斜位。底部付近は、縦位から斜位にケズリーナテ調整される。底部は平底で、ナテ調整される。焼成は普通～良い。色調は、外面上部が暗褐色、胴下部が淡暗褐色。底部付近が暗褐～黒褐色、内面が淡褐色・淡暗褐色。内外面一部黒色物附着。未接合破片2袋別置。	第147図 PL45
			12.0			
			30.6			
			9.6			

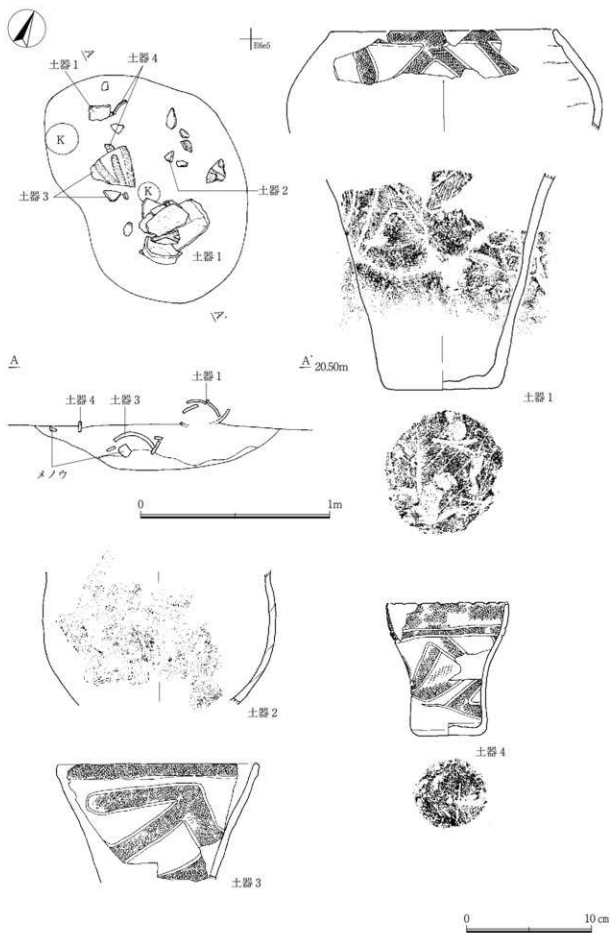
土坑番号	土器番号	器種	器高 口径 胴径 底径 (cm)	残存率	形態・技法等	備考
3	7	壺	(19.8)	30%	胴下半部～底部残欠。胴部は条痕文。条痕文は、4本一単位で施文され、縦位から斜位。底部付近は、横位にナゲ調整される。底部は平底で、木葉痕がある。胎土に赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、外面が暗褐色、黒褐色、内面が淡褐色・黒・灰色。内外面一部黒色物付着。未接合破片1点別置。	第147回 PL45
3	土器 K	壺	41.7 14.2 33.6 9.8	95%	口縁部・胴部・底部一部欠。波形の小さな波状口縁で、全部で16箇所と推定される波頂部のうち15箇所が残存。複合口縁は単節縄文L R、頸部から底部付近まで条痕文。口縁部の下位は、横位のナゲ調整により条痕文が消される。条痕文の痕跡は刷毛状。胴部には、全周する破断を挟んで2孔一対の補修孔が7対ある。底部は木葉痕がある。胎土に軟質泥岩片多量。焼成は良。色調は、外面が淡褐～黒褐色。内面が淡灰褐色。外面胴部中程に黒色物付着。昭和55年出土し、平成7年に地権者の菊池榮一氏から大宮町歴史民俗資料館へ寄贈。	第147回 PL46
4	1	壺	73.5 19.0 49.3 17.0	80%	胴部小欠、底部一部欠。平縁で複合口縁。口縁部は単節縄文L R。口縁部内面は、ナゲ調整で、受け口状を呈する。頸部はミガキ調整による無文。頸部～胴上半部には2孔一対の補修孔が4箇所あり、うち2箇所は1孔を欠損する。胴上部には、単節縄文L Rによる縄文帯を組み合わせて上下を区画した「ヒトア状文」が構成されている。この縄文帯は、沈確で区画されたことはなく、無文部がナゲ～ミガキ調整されている。胴下部には条痕文が施される。縄文との間は横位にナゲ調整され、これにより条痕文の上部が消されている。条痕文は、5、6本一単位で施文され、概ね縦位。底部はやや掲げ底で、木葉痕がある。胎土に泥岩片を含む。焼成は普通～良い。色調は、外面が褐～淡褐～淡暗褐色。内面が淡褐～淡暗褐色。内外面一部黒色物付着。他に未接合破片1点別置。	第149回 PL46
4	2	壺	(26.2) 12.0 24.2 12.0	60%	口縁部～胴上半部欠。胴上部には単節縄文L Rによる縄文帯で、縄文帯が構成されている。この縄文帯は、無文部がナゲ～ミガキ調整されて輪郭が決定されている。無文部はやや凹み、縄状の先端付近は、凹線状を呈する。胴中央部の無文帯は全周し、正面で上方に突き抜ける。胴下部は、横位もしくは右下がり斜行縄文。施文は無文帯の付近に限られ、以下はミガキ調整される。底部中央付近は掲げ底となり、木葉痕がある。内面胴上部には横位の条痕がある。胎土に白色粒子を少量含む。焼成は普通。色調は、外面上部が黒褐色、下部が暗褐色。内面が暗褐～灰褐色。外面一部黒色物付着。他に未接合破片2点別置。	第149回 PL46
4	3	壺	44.6 14.8 30.6 8.8	60%	口縁部小欠、胴部一部欠。平縁で複合口縁。口唇部にはへら状工具で内側に向け刻み。複合口縁外面には、付加条縄文(無節L+単節L R)が施される。頸部はミガキ調整による無文。胴部には条痕文。条痕文は、6本以上一単位で施文され、縦位。胴下部には、部分的に右下がり斜位の線刻が複数認められる。また、外面一部に赤色物付着痕がある。底部はやや凸面がある平底で、木葉痕がある。内面胴上部には輪積痕がある。胎土に、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、内外面とも淡褐色・暗褐色。外面一部黒色物付着。胴上半部～頸部は接面分離、3点別置。	第149回 PL46
4	4	壺	60.9 18.7 40.2 11.5	60%	胴部3分の1欠。口縁上面観は楕円形を呈する。頸部が短く、ほぼ直立する。平縁の単純口縁。口唇部直下から底部付近まで条痕文。条痕文は、7本程度が一単位で施文され、口頸部から胴上部が斜位。胴中央部が横位。胴下部が縦位を主とする。底部は平底で、中央がやや肥厚し、木葉痕がある。内面胴上部には輪積痕が残る。胎土に赤色粒子・泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、外面が淡褐色・褐色・暗褐色を呈し、底部付近は黒褐色。内面は褐色。内面一部黒色物付着。他に未接合破片(多数)3点別置。	第149回 PL46
4	5	壺	58.2 16.0 35.0 12.0	60%	口縁部～胴部一部欠。胴部上面観は楕円形。平縁で複合口縁。口唇部及び口縁部は単節縄文L R。頸部はナゲ調整による無文。胴部には条痕文。条痕文は、6本程度一単位で施文され、縦位。底部はやや掲げ底で、木葉痕がある。胎土に泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、外面が淡褐～淡暗褐色。内面が淡褐色。内外面一部黒色物付着。他に未接合破片(多数)3点別置。	第149回 PL46
4	6	壺	53.7 12.7 28.8 10.4	70%	口縁部小欠、胴部一部欠。所謂「瓢形」であり、頸部の中位が若干膨らむ。口唇部は、わずかに外反する。平縁で、複合口縁状を呈する。口縁部は無文。頸部から胴部まで条痕文。条痕文は、2本一単位で施文され、縦位。条痕の幅は広く、短矢線文(縦位短条痕文)に共通する。底部は平底で、中央がやや肥厚し、網代痕がある。胎土に赤色粒子を含む。焼成は普通。色調は、外面が茶褐色・褐～暗褐色。内面が茶褐色・褐～淡褐色。外面一部黒色物付着。	第149回 PL46
4	7	壺	(22.8) 46.7 17.9 9.4	70%	口縁部～頸部欠。底部には打撃による故意穿孔がある。胴部の上位3分の2に、単節縄文L Rで磨消縄文の文様で構成される。文様構成は、上下の縄文帯を挟み、その内部に「ヒトア状文」が施される。無文部はミガキ調整されている。胴上部には、単節縄文L Rが横位に施文される。底部は平底で、木葉痕がある。胎土に泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、内外面とも褐～暗褐色。外面一部黒色物付着。	第149回 PL46

土坑番号	土器番号	器種	器高 口径 胴径 底径 (cm)	残存率	形態・技法等	備考
4	8	壺	22.1	80%	口縁部・頸部一部欠。平縁で単純口縁。外面はミガキ調整による無文。頸部は縦位、胴上～中央部は横位、胴下部は縦位に調整される。底部は平底で、ナデ調整され、中央に木葉痕を残す。胎土に赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、内外面とも淡褐～灰褐色。外面一部黒色物附着。他に未接合細片(4点)1袋別置。	第149回 PL46
			7.6			
			21.8			
			7.4			
5	1	壺	50.6	80%	口縁部・胴部一部欠。平縁で複合口縁。口縁部は単節縄文LR。頸部はナデ調整による無文。頸部から底部付近まで短沈縄文(「縦位短条痕文」)。短沈縄文は3本一単位で施文され、一方が先割れして細い半軟竹管のように見える部分もある。短沈縄文は、縦位に施文した後、その列間を充填する。底部は平底で、木葉痕がある。胎土に赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、外面が淡褐～黒褐色。内面が灰褐色。他に未接合細片(多数)2袋別置。	第151回 PL47
			18.9			
			29.7			
			13.8			
5	2	壺	39.5	50%	口縁部・胴部半欠。平縁で、受け口状に器内面が突出した複合口縁。内面の突出部の直下は凹線状を呈する。口唇部は単節縄文LR。口唇部直下から頸部まではミガキ調整の無文。胴部上端は結節文で区画される。胴部にも単節縄文LRが施される。施文は、胴上部が横位、胴中央～下部が右下がりの斜位で、結節文も一部に見られる。底面付近は横位にナデ調整され、縄文が消されている。底部は平底で、中央が肥厚し、布目痕がある。内面は、頸部がミガキ調整、胴部はナデ調整。胎土に赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、内外面とも褐～赤褐色。内外面一部黒色物附着。他に未接合細片(多数)1袋別置。	第151回 PL47
			13.0			
			26.8			
			11.0			
5	3	壺	53.3	80%	口縁部・胴部一部欠。波状口縁で、3箇所の波頂部が残存する。複合口縁であり、外面には横位あるいは緩やかな斜位の条痕文。内面には単節縄文LRを施文。内面の口縁部下には凹線がある。頸部は縦位のナデ調整による無文。胴部との境界付近は横位になでられて凹む。胴部には条痕文が施される。条痕文は、3、4本一単位で施文され、胴上部は緩やかな斜位で弧状を描くように、胴下部は右下がりの斜位に施文される。底部付近はケズリ調整。胴部内面には、ナデ調整に伴う横位の条痕文が残される。底部は平底で、網代痕がある。胎土に赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通～やや不良。色調は、外面が暗褐色・黄褐色、内面が淡褐色。内外面一部黒色物附着。他に未接合細片(多数)1袋別置。	第151回 PL47
			16.0			
			40.5			
			10.6			
5	4	壺	(52.9)	80%	口縁部・胴部一部欠。頸部はミガキ調整による無文。胴部の上～中央部には単節縄文LRが横位に施文される。上部の縄文施文の後に、下部に底部直上まで条痕文が施される。条痕文は、10本前後が一単位で施文され、概ね縦位である。胴中に2孔一対の補修孔が4箇所ある。内面は肌荒れが顕著。底部は平底で、木葉痕がある。胎土には少量の雲母とともに、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通～良い。色調は、外面が淡褐色・淡暗褐色、内面が淡褐色。他に未接合細片1袋別置。	第151回 PL47
			14.5			
			39.9			
			14.6			
5	5	壺	47.9	90%	平口縁で、複合口縁を呈する部分と肥厚した単純口縁に見える部分がある。頸部は縦位の磨き調整による無文。胴部との境界付近は横位に撫でられている。胴部には条痕文が施される。条痕文は、7本が同時に施文され、縦位から斜位である。底部付近は縦位に撫で調整されている。底部は上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、器内外面とも茶褐～赤褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着している。帯状に付着する炭化物は、底面と平行するような水平を示さずに傾いており、器外面の傾きに器内面の傾きが対応する。	第151回 PL47
			11.7			
			28.1			
			12.0			
5	6	壺	(23.9)	70%	頸部は横位の磨き調整による無文。胴部上端が結節文で区画されている。胴部には単節LRの縄文が横位に施文され、一部に結節文も見られる。底部付近は横位に削り調整されている。底部は平底であり、中央が僅かに肥厚する。底面には剥落があり、沈線状の痕跡が木葉痕の一部とも思われるが、確実ではない。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。また、骨針を多量に含むことに特徴がある。焼成は普通。色調は、器外面が暗褐色、一部淡褐色・黒褐色。器内面が暗褐色を呈する。器外面には炭化物が付着し、器内面には変色が見られる。	第151回 PL47
			10.3			
			20.4			
			8.0			
6	1	壺	39.1	70%	平口縁で複合口縁。口縁部は無文であり、指頭で調整された圧痕が残る。頸部から胴部には条痕文が施される。条痕文は6本が同時に施文されており、間隔をあけて縦位に施文されている。底部は平底であり、底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、焼成は良い。色調は、器外面が褐～黒褐色、器内面が暗褐～黒褐色を呈する。器内外面の一部に炭化物が付着している。	第153回 PL47 滑石玉 胡帝
			17.2			
			27.0			
			10.3			

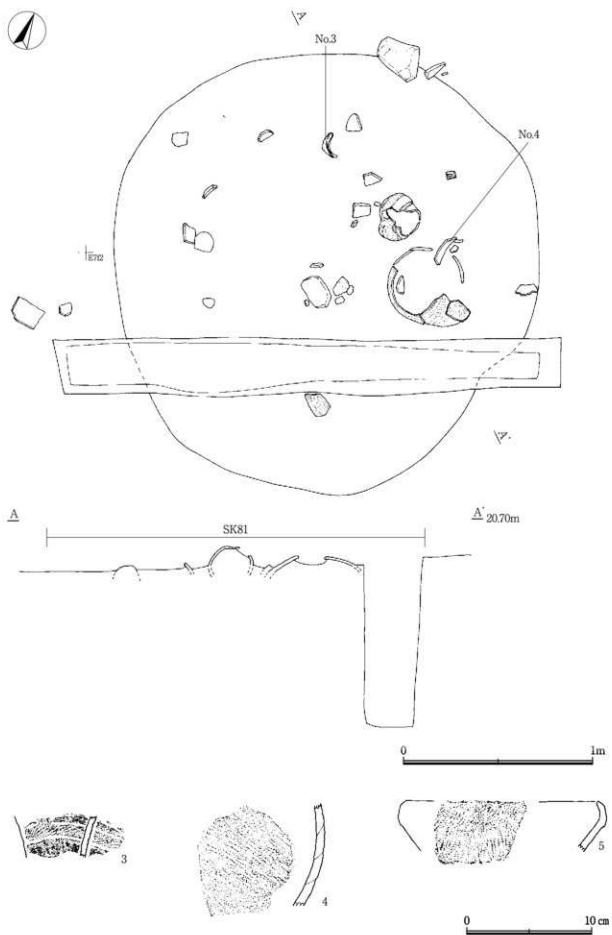
土坑番号	土器番号	器種	器高 口径 胴径 底径 (cm)	残存率	形態・技法等	備考
6	2	壺	(53.6) (12.6) 35.0 12.9	70%	頸部は撫で調整による無文。胴部との境界に僅かに稜を形成する部分もある。胴部は縦位調整糸痕文。糸痕文は、8本ほど同時刻に施文される。胴部の上・中央・下部に分けて施文されており、いずれも縦列を施文した後列間が充填される。施文方向は、上から下が主であるが、下からの箇所もある。底面の穀物の痕跡は不明。胎土に金雲母は認められず。赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通〜良い。色調は、器外面が淡褐色・灰褐色。器内面が白みを帯びた淡褐〜淡灰褐色を呈する。器内外面の一部に僅かな炭化物の付着が、器内面にはクレーター状の剥落が見られる。土器2に付属する底部破片は残存高15mm、底径128mm（残存率100%）。平底であり、底面には木葉痕が残る。胎土に金雲母は認められず、骨針が目立つ。焼成は普通。色調は、器外面が淡暗褐色、器内面が黒色を呈する。	第153図 PL47
6	3	壺	44.0 15.1 33.4 11.2	80%	平口縁の複合口縁。口唇部及び口縁部には単筋LRの縄文が施文されている。頸部は縦位の磨き調整による無文。胴部には、帯状の縄文で渦状文が構成されている。縄文は単筋LR。渦状文は、渦巻きの方向が異なる2つが上部で連結する。この連結渦状文が2単位であり、単独の渦状文が加わる。帯状の縄文は、波線で区画されることはなく、無文部が無で磨き調整されて輪郭が決定されている。方向を変えながら縄文が施文されていることから、下書きに使う充填縄文もしくは想定されるが、下書きと縄線の重跡は観察できない。胴下部は、横位もしくは右下がり斜位の斜位に縄文が施文される。施文は渦状文に伴う無文帯の付近に限られ、疎らな部分もあり、以下は磨き調整されている。底部は上げ底となる。底面は木葉痕であり、2葉分の痕跡が残されているのは、土器を擦り直したことによる。器内面の胴上部には成形の積上痕が残る。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、器外面が褐〜赤褐色、器内面が褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着している。	第153図 PL47
26	1	壺	50.0 14.9 35.0 12.0	70%	口縁部・頸部一部欠。小波状の複合口縁。頸部はナゲ調整の無文。胴部外面は糸痕文。糸痕文は5本一単位で施文される。内面はナゲ調整。底部はケズリ調整され、一部に縄状の圧痕がある。胎土は、泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、外面が明赤褐色。内面に黄褐色・黒褐色。内面が明赤褐色・内面に黄褐色。一部内面黒色物付着。他に未接合破片（口縁部含む）3葉別置。	第161図 PL48
26	2	壺	42.0 15.5 30.0 10.4	80%	頸部一部欠。胴部小欠。平縁で複合口縁。口唇部外面には単筋縄文RL。頸部から胴部まで糸痕文。糸痕文は5本一単位で施文され、概ね縦位。一部左下がりの斜位。内面はナゲ調整。底部は平底で、中央がやや肥厚し、木葉痕がある。胎土に白色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、外面が内面に黄褐色。内面が内面に黄褐色。内外面に一部黒色物付着。他に未接合破片3葉別置。	第161図 PL48
26	5	壺	49.6 12.4 34.5 94.8	95%	口縁部・胴部小欠。小波状の単純口縁か。口縁部から胴下部まで糸痕文。糸痕文は5本一単位で施文される。底部付近は無文。内面はナゲ調整。底部は平底で、木葉痕がある。胎土は白色粒子を含む。焼成は普通。色調は、外面が赤色・橙色。内面が内面に黄褐色。内外面に一部黒色物付着。	第161図 PL48
26	6	壺	46.8 23.0 33.0 10.4	60%	口縁部・頸部残欠。胴部2分の1欠。小波状の複合口縁。口縁内面直下に凹線文。口縁部から頸部はミガキ調整の無文。胴部は糸痕文。糸痕は4本一単位として施文される。内面はナゲ調整。底部は平底で、中央が肥厚し、木葉痕がある。胎土は白色粒子を含む。焼成は良い。色調は、外面が内面に黄褐色。一部黒褐色。内面が内面に黄褐色。外面一部黒色物付着。他に未接合破片（多数）1葉別置。	第161図 PL48
26	7	壺	45.2 15.8 33.0 13.0	60%	口縁部・頸部・底部一部欠。胴部2分の1欠。小波状の複合口縁。口縁内面直下に凹線文。外面は、口縁部は無文。頸部から底部まで糸痕文。内面は、口縁部ミガキ。胴部ケズリ。胴部ナゲ。輪積痕が残る。底部は平底で、木葉痕がある。胎土は白色粒子と泥岩片を含む。焼成はやや不良。色調は、外面が灰黄褐色・黒褐色。内面に黄褐色。内面が灰黄褐色・黒褐色。内外面一部黒色物付着。他に未接合破片（多数）1葉別置。	第161図 PL48
26	8	壺	68.8 25.1 42.7 12.6	50%	口縁部・底部半欠。小波状の複合口縁。頸部に突帯を貼り付け、連続刺突。口縁部から底部付近まで糸痕文。糸痕文は、2本または3本一単位で施文される。内面はナゲ調整。胴部内面の一部輪積痕が残る。底部は平底で、木葉痕がある。胎土は、泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、外面が灰黄褐色。一部黒褐色。内面が黄白色。土器断面は内部黒灰色。一部内面黒色物付着。他に未接合破片（多数）1葉別置。	第161図 PL48

土坑番号	土器番号	器種	器高 口径 胴径 (cm)	残存率	形態・技法等	備考
26	9	壺	41.1 (12.7) 32.8 9.4	90%	口縁部欠、胴部小欠。頸部はナデ調整の無文、胴上部から中央部は外面糸直文。糸直文は4本一単位で施文される。胴下部はナデ調整の無文。内面はナデ調整。底部は平底で木葉痕がある。胎土は白色粒子と泥岩片(多数)を含む。焼成は普通。色調は、内外面ともにぶい橙色、底部付近が褐色。内外面一部黒色物付着。	第161図 PL48
26	10	壺	38.5 — 30.8 10.0	70%	口縁部~胴上半部欠。胴部は単節縄文LRを横位に施文、底部付近はナデ調整の無文。内面はナデ調整。一部ケズリ調整。底部は平底で、線状の圧痕がある。胎土は、泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、外面が赤色、橙色。内面がぶい橙色。一部内外面黒色物付着。他に未接合破片2枚別置。胴部外面に栴枝痕2か所(栴枝痕のある個体はこの1点のみ)。	第161図 PL48
SX I	1	壺	(37.7) (12.2) 25.5 12.0	60%	成形の歪みにより全体が傾く。歪みは底部に起因し、器内面には底部と胴部を繋ぐ調整が欠落して接合痕がそのまま残された部分も見られる。底部の上げ底は、この歪みによるものと考えられる。口縁部は、器内面に突出した複合口縁が推定される。口縁部は撫で調整、頸部は磨き調整によりそれぞれ無文。胴部には縄文が施される。縄文は単節LRで、概ね横位に施文されている。底部は布目痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通~良い。色調は、器外面が淡褐色、褐色。器内面が褐色を呈する。器外面の一部に僅かな炭化物が付着する。器内面には、炭化物の付着や変色は見られない。	第178図 PL48
SX I	2	甕	— 40.0 39.8 —	20%	口縁は屈曲して外反する。口唇部には、胴部と同じ原体で縄文が施されている。口頸部は横位の撫で調整による無文。口縁部を成形した種上痕が残されていて、複合口縁のように見える。胴部上端は結節文で区画され、胴部には縄文が施されている。縄文は、付加条第一種LR+Rであり、軸線のLRは直前段3条と観察された。胴上部から中央部にかけては横位に、胴下部には斜位に施文されており、一部に結節文も見られる。胴上部の縄文上に沈線文が施文されており、これは線描による文様と考えられる。線描文の全体は欠損により明らかでない。上方に漢字文が位置している。胎土に金雲母と骨針を多量に含むことに特徴があり、赤色粒子と泥岩片も含む。焼成は良い。色調は、器内外面とも淡褐色~褐色を呈する。胴中央部の器外面には炭化物の付着、胴下部の器内面には変色が認められる。	第178図 PL48
SX I	3	甕	— 28.0 — 11.6	15%	口縁は屈曲して外反する。口唇部には、胴部と同じ原体で縄文が施されている。口頸部は横位の撫で調整による無文。胴部上端は結節文で区画され、胴部には単節LRの縄文が施されている。施文は、胴上部が横位、胴下部が斜位であり、底部直上まで及ぶ。底面は布目痕。器内面は磨き調整されている。胎土に金雲母と骨針を多量に含むことに特徴があり、泥岩片も含む。焼成はかなり良い。色調は、器外面が淡褐色~淡褐色、器内面が淡褐色を呈する。胴中央部の器外面には炭化物の付着、胴下部の器内面には炭化物の付着と変色が見られる。	第178図 PL48
SX I	4	壺	(33.7) 12.2 25.1 —	40%	平口縁で単純口縁。口唇部直下には、口唇部施文に相当するような幅で縄文が施された部分がある。縄文は、単節LRが付加条第一種LR+Rかと判然としにくい。頸部は磨き調整による無文。胴部は、撫で調整の後に、糸直文が施される。糸直文は、4本ほどが同時に施文され、右下がりとし左下がりの斜位である。格子状を構成する部分もあるが、全体的に雑然としている。器内面は、口頸部が磨き~撫で調整、胴部が撫で調整されている。胎土に金雲母は認められないが、骨針が目立ち、赤色粒子と泥岩片も含む。焼成は良い。色調は、器外面が灰褐色~灰色、暗灰色。器内面が淡褐色~灰褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着する。器内面には、炭化物の付着や変色は見られない。	第178図 PL48

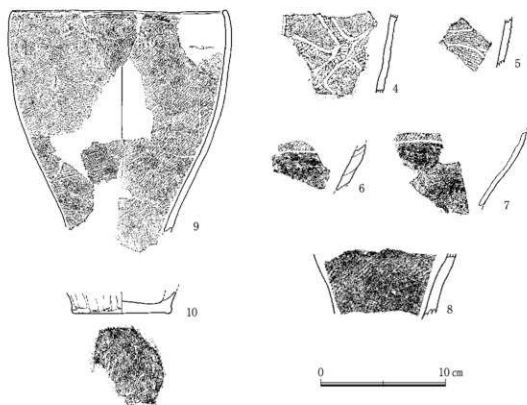
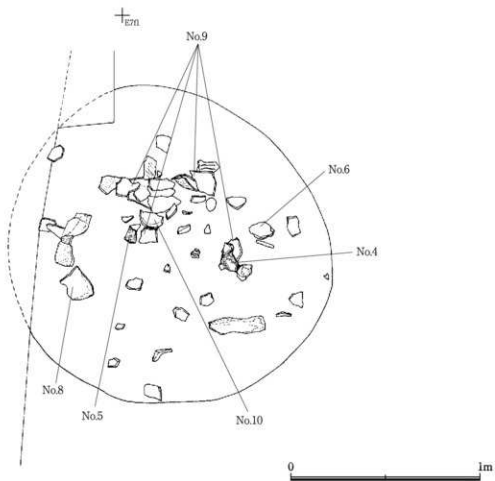
土坑番号	遺物番号	長 (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	品質形状等	出土状況	備考
SK6	1	1.9	1.3	0.4	4.7	不整形な管玉。両面穿孔。黒灰色。	土器1内	第153図 PL47
SK6	2	0.7	1.5	0.3	2.1	扁平な小玉。両面穿孔。黒灰色。	土器1内	第153図 PL47
SK6	3	0.7	1.4	0.4	1.7	扁平な小玉。両面穿孔。黒灰色。	土器1内	第153図 PL47
SK6	4	0.6	1.3	0.4	1.2	扁平な小玉。片面穿孔。黒灰色。	土器1内	第153図 PL47
SK6	5	0.9	1.2	0.3	1.4	不整形・扁平な小玉。両面穿孔。黒灰色。	土器1内	第153図 PL47



第181図 第67号土坑・出土遺物実測図 (報告書Ⅲ第49・50図より、一部改変)



第182図 第81号土坑・出土遺物実測図（報告書Ⅲ第69・70図より、一部改変）



第183図 第83号土坑・出土遺物実測図（報告書Ⅲ第71・72図より、一部改変）

2 遺構及び出土遺物の観察・分析結果

(1) 一次葬

①骨化の手段

再葬とは、遺体を一旦火葬あるいは土葬等の手段（一次葬）で骨化し、その後骨を土器に納めて再び埋納（再葬）するというプロセスを踏むことである。

平成18年調査の際には、土器内の土にロームブロックが混入していることについて、一次葬墓から掘り上げた骨に付着したものが土器内に入ったと考察している。ロームが付着したままの骨を土器に入れて埋納し、その骨が腐食する前に土壌が流入して、骨に付着したロームの原位置を残して堆積したため、ブロック状に土層中に残ったという考えである〔鈴木2011〕。第3次確認調査で掘り込んだ、第26号土坑の土器内にも同様に、ロームブロックが含まれていた。

以上の事実や、遺跡内から焼人骨は確認されていないこと、土器内部の煮沸痕も人肉を煮たものではないことが確認されている〔鈴木2011〕ことから、泉坂下遺跡では、土葬によって骨化したと考えている。ただし、再葬墓内の土壌洗浄や、リン酸・カルシウム等の成分分析を実施したが、はっきりとした人骨の痕跡は今のところ確認できていない。

②一次葬の土坑

弥生時代の所産とされる再葬墓以外の土坑は現在16基程度であり（第179図）、再葬墓の数に比べ、一次葬墓になる可能性のある土坑が少ない。このことから第3次確認調査の報告では、泉坂下遺跡に再葬された人々の一次葬墓が、必ずしも泉坂下遺跡内に所在するものではないと考えたほうが自然であるとした〔報告書Ⅳ〕。

しかし今回の調査で、過去に確認調査を行った範囲にも土坑が残っている可能性が高くなった。それというのも、第4次調査で確認された第165号土坑（第63図）は、地表面から約80cm掘った所でようやく確認でき、遺構底面は1.2m以上の深さであった。他にも第176・180号土坑（第78図）は、縄文晩期の埋土を掘り込んでいく過程でようやく確認できたものである。確認調査では、再葬墓のほとんどが20～30cmで見つかるため、その高さで掘り込みを止めている。そのため、密集する再葬墓の下や弥生時代以降の遺構の下に、一次葬墓となる土坑がある可能性も考えられる。

検出された16基の土坑も大部分を確認調査にとどめているため、その性格を把握することは難しい。その中で、掘り込み調査を行った第67号土坑（第181図）は、再葬墓と同時期の土器片が複数出土しており、器種が甕や小型の筒形土器等、大型の壺が埋納される再葬墓とは様相が異なっている。さらに、これらの土器はいずれも破損後に埋められていることが確認できた。ただし、非常に浅く、成人を埋葬するには狭いため、平成18年の調査で確認された第8・9号土坑（第180図）とは様相が異なる。

第165号土坑は弥生時代の土器片が覆土に多数含まれており、埋葬のための十分な深さもあつたが、第8・9号土坑のような再葬のために掘り返された痕跡は、はっきりとは確認できなかった。しかし、土坑底面には粘土が貼られており、何らかの明確な意図を持ってつくられた土坑であることは間違いない。

(2) 再葬墓の形成

①埋納土器

先述したとおり、確認された弥生時代の再葬墓は30基あり、それに伴う埋納土器は153点である。このうち遺骨を収容する容器に使用されたと考えられる壺形土器は、145点に及ぶ。土器1点につき1体分の骨を入れたと想定すると、規模の大きな共同墓地であることがわかる。

確認調査で再葬墓遺構の掘り込みを行ったのは8基、取り上げた埋納土器は54点である。その内再葬墓内から出土し、かつ遺骨を収容する容器に使用されたと考えられる壺形土器は52点である。第1号性格不明遺構は再葬墓に含まれると考えるが、壺2点は、攪乱等により埋納状況が不明確なこともあり、遺骨を収容する容器の数からは除く。

この52点のうち人面付土器を含む32点の器内外面に炭化物が付着しており、そのほとんどが明らかに煮沸痕とわかるものであった。また土器表面が磨耗しているものが多いことや、煮沸等の使用後に土器の修復が見られる(第6号土坑土器2)ことから、再葬墓に埋納されている土器は、日常生活や煮沸を伴う儀礼などの使用を経て転用されたものと考えられる。そのほかの土器も日常生活の煮沸具を転用したものか、煮沸の伴う儀礼で使用したか、いずれにしろ何らかの用途で使用されたものを骨蔵器に再利用していると考えられる。

現在のところ副葬品などは、第6号土坑の土器1内から、滑石玉5点が出土したのみであるが、有機物の副葬品は、土器の内部や遺構内の土器がない空間に置かれた可能性もある。

また、第153号土坑からは、蓋(第176図)が出土しており、他の土坑でも他土器の口縁を塞ぐよう配置された土器が確認されている。第24号土坑の土器2・5、第110号の土器4がそれであり、その他の土器にも、何らかの蓋がされていたものと考えている。平成18年の調査時にもすでにこの点は検証されており、土器内に土壌の流入が見られない土器が第4号土坑にあることなどから、布のような有機物で口縁が塞がれていたことを想定している(鈴木2011)。蓋がされたことによって、埋納から一定期間は土器内に空洞が残されていて、有機物の蓋が腐食するか、土器の蓋がずれるかして土器内に土壌が流入し、自然堆積していったものと考えられる。

②埋納の据え置き方(第37・38表)

土器の埋納方法や向きについては、すでに過去の調査で検討されてきたが、第4次確認調査や資料の見直しをもとに若干の修正を加えて集計した。

口縁部が向く方向	再葬墓の数	東群	西群
南	5	SK 2・26・113・117	SK 164
南東	6	SK 1・5・23・59・136・152	
東	6	SK 6・30・60・153・SX 1	SK 19
西	4	SK 24・25	SK 108・110
北	1	—	SK 20
不規則	5	SK 3・61・114・115・118	—
倒立	1	—	SK 21
直立	2	SK 4・116	—

※赤字…単数土器

最も多い置き方は、同一土坑内の大半の土器の口縁部を同じ方向に向けて、横転させるか傾けて置かれているものである。先に横並びに埋設した土器と土器の間に、収まりよく口頸部を載せている。

小野天神前遺跡も同様の埋納状況が見られるため、この地域の特徴的な埋納方法といえる。壺形土器の頸部と胴下部を重ね合わせることで再葬用の堅穴の底面積を減

らし、掘り込みも比較的浅くて済む。結果として掘削土量を少なくする効果もあったと考えられる。

一方で、土器の向きに統一性がなく、直立と横転が混じる遺構もある(第3・61・114・115・118号土坑)。また、直立して埋納されたと考えられる土器は第3・60・117・118号土坑にも各1点見られ、また第116号土坑のように単数の再葬墓でも見られるが、土器の大半を直立させて並べる形は第4号土坑でのみ確認されている。

土器の向きはⅠ期よりもⅡ期(第1・5・6号土坑)の土坑のほうが土器を埋設する姿勢や方向に統一性が見られるとしている[鈴木2011]。

土器が一定方向に向けられている遺構の多くが、南から東を向いている。遺跡の東は久慈川が流れており、南東はその久慈川が流れていく方向であり、低位段丘が大きく展開する方向である。

また、再葬墓密集地からやや離れた西群の第108、110号土坑に埋設された土器は、西側の比高30mほどの那珂台地方向に向いている。遺跡から北方向に、奥久慈の男体山等の山々を望むことができるが、埋納土器の埋設方法からは山々の存在を意識した様子は伺えなかった。

③土器の埋納されない空間

第1号土坑等に土器の埋納されていない空間があった。この空間は、土器の掘え置き手順からすると作業足場と見るには矛盾しており、何らかの有機物が先に置かれ、それを避けて土器を並べた可能性が指摘されている[鈴木2011]。第26号土坑では、西から東へと順に土器を並べて置いた結果として、埋納土器8点の北東側に土器の置かれなかった空間が残っている。この空間は、最も幅の広がる部分で約50cmあり、土器の掘え置き作業足場や有機物の供物等が置かれた可能性がある。ただし、この空間の覆土サンプル(試料No124・125)のリン酸、カルシウム等の成分分析を行い、さらに土壌(1・2区)の水洗選別により確認された微細物の分析を実施したが、特定の傾向を示す結果は得られなかった。

その他の掘り込みを行っていない再葬墓にも、土器のない空間が確認されている。第164号土坑の東側の空間には、土器片が多く散在するが、ピンボールで確認しても完形の土器は存在しない場所があった。土器片は埋め戻しの土に含まれていたと考えられる。

④埋め戻し

壺形土器は横倒しという不安定な状態で置かれているにもかかわらず、ほとんど移動した様子が見られない。そのため、土器を丁寧に並べた後あまり時間を置かず、一度に土を掛けられて埋められたと考えられる。そして埋め戻した後の地表面には土器の体積分、マウンドが形成された可能性が高い。第4・5号土坑のように再葬墓どうしが切り合う例が複数あるが、大きく重複して破壊されている例はない。

(3) 泉坂下遺跡における再葬墓群形成時期

平成18年の調査報告で、鈴木素行が、弥生時代の泉坂下遺跡をⅠ・Ⅱ期に細別し中期の2a期[設楽2008]に相当するとした。その後の調査でもこの見解を否定するものはなかった。

放射性炭素測定年代については、平成18年報告の再葬墓出土の土器を資料として行い、すでに報告のある2点の測定も含み、計37点の年代測定を行ったが、大幅にずれているものを省いても、

1000年以上のばらつきがあった。このため確証のある測定結果とはいええないが、値の分布のおおよその中心は紀元前4～3世紀を示している。このことは、平成18年の調査の際の報告書で述べた、「再葬された時期は、さかのぼったとしても、紀元前2世紀以降」という結果〔鈴木2011〕を修正することになる。

また、弥生時代再葬墓と縄文時代晩期の遺構との関係性という面から縄文時代晩期の遺物も測定対象としたが、それによると縄文晩期の土器と弥生時代再葬墓の土器とでは、約600年もの開きがあるという結果が出た。

（4）再葬墓構築時期の周辺環境

遺跡の土壌からは、炭化種実が検出され、オニグルミ、クリ、ムクロジ、トチノキといった落葉広葉樹が、確認された炭化種実の大半を占める。特にオニグルミ、トチノキといった河畔林を形成する木本類は、久慈川右岸の低位段丘上という泉坂下遺跡の立地環境をよく反映している。ただし、泉坂下遺跡の第Ⅱ層は縄文時代の遺物包含層であり、これに含まれていたものが混入した可能性は十分にあるため、注意が必要である〔報告書Ⅳ〕。

第26号土坑土器10からは4箇所の種実等の圧痕が確認されており、分析の結果、うち2箇所がイネと同定されている〔報告書Ⅳ〕。さらに、イネ、オオムギ、コムギ等といった栽培種の炭化種実も確認されている。これらは平成18年の調査でも確認されており〔鈴木2011〕、再葬墓が構築された時期に、周辺でこれらの穀物の日常的な栽培が行われていた可能性がうかがわれる。

第5節 まとめ

過去の5回にわたる調査により、泉坂下遺跡で確認された遺構は、縄文時代中期の土坑が1基、後期の土坑1基、晩期の堅穴住居跡5軒、土坑が2基、弥生時代中期の再葬墓が30基、再葬墓に関連する土坑が16基、弥生時代後期の溝跡が1条、平安時代の堅穴住居跡21軒と土坑5基、中近世の土坑15基、溝跡6条、掘立柱建物跡4棟、井戸跡1基が確認されており、時代も種類も多岐にわたる。その中で特筆すべきは、ほぼ完形の国内最大の人面付土器を伴う、保存状態の優れた弥生時代再葬墓群の存在である。

このため本調査は、弥生時代再葬墓を主な目的としてきた。また、縄文時代晩期の石棒製作遺跡としての性格もあることから、この面でも調査を行っている。縄文時代・弥生時代の遺構及び遺物の分布は、尾根状の微高地を中心にまとまっていることが判明した。平安時代以降は、この尾根状地形がほぼ意識されずに分布範囲を拡大しており、中世の溝も尾根を貫いて走行している。

縄文時代の遺構の分布は、調査区の西側が調査できていないため、若干の不足があるが、弥生時代再葬墓の分布域はおおよそ把握することができた。

発掘調査と合わせて数種類の科学分析を行っており、初圧痕の確認や炭素年代測定など、ある程度の成果は得られたが、人骨が埋葬された痕跡や土器のない空間の解明など、まだ不明な点が多く更なる調査が必要である。

現在遺跡には、確認されただけで100個体近い再葬墓埋納土器が埋没保存されている。そのためこの先、科学分析技術の向上や、まだ行っていない調査方法の導入により、新たな発見も期待できる。

泉坂下遺跡報告書正誤表

報告書Ⅱ～Ⅳ共通

頁、箇所、内容	誤	正
例言10または11(遺物・資料保管者)	常陸大宮市教育委員会	常陸大宮市教育委員会
出土遺物観察表中、		
縄文土器で網目状然糸文のもの	後・晩期粗製土器	晩期粗製土器
縄文土器で複合口縁のもの	後・晩期粗製土器	晩期粗製土器
縄文土器で条線文のもの	後・晩期粗製土器	後期粗製土器
縄文土器で複合口縁に指頭またはヘラ圧痕を付するもの	後期末～晩期初頭の粗製土器	後期中～後葉の粗製土器
報告書抄録・遺跡番号	大034	大120
奥付(シリーズ名)	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財発掘調査報告書	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書

報告書Ⅱ

頁、箇所、内容	誤	正
凡例1	大調査区の名称は、・・・北から南へ0, 1, 2・・・, 小調査区は北から南へ0, 1, 2・・・0, 西から東へa, b, c・・・とし、 (スケール漏れ)	大調査区の名称は、・・・北から南へ1, 2, 3・・・, 小調査区は北から南へ1, 2, 3・・・0, 西から東へa, b, c・・・j, とし、 (縮尺1/2)
57. 第21図92石錘	浮島Ⅱ式	浮島Ⅲ式
79. 第15表1, 備考	加曾利E式	後期中葉
79. 第15表4, 備考	1411(明・永楽9)	1408(明・永楽6)
129. 第25表1, 初鑄年	(器表写真なく内面写真ダブリ)	(写真訂正省略)
図版24, No.22	(天地逆)	(写真訂正省略)
図版36, No.21		

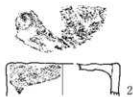
報告書Ⅲ

頁、箇所、内容	誤	正
凡例1	大調査区の名称は、・・・北から南へ0, 1, 2・・・, 小調査区は北から南へ0, 1, 2・・・0, 西から東へa, b, c・・・とし、	大調査区の名称は、・・・北から南へ1, 2, 3・・・, 小調査区は北から南へ1, 2, 3・・・0, 西から東へa, b, c・・・j, とし、
43. 48. 見出し	竈	竈・炉
45. 第17図1/4スケール該当番号	28～27	25～27
45. 第17図23, 第10表23, 形態・技法, PL24-33	頭部破片か。 (図・写真天地逆)	先端部破片。 (本書P.176第123図に訂正遺物実測図掲載。写真訂正省略)
72. 第17表3, 備考	中期	後期堀之内式
72. 第17表9, 備考	安行式	東北系縮付土器
74. 第17表23, 形態・技法	比厚	肥厚

76. 第17表53. 備考	安行3d式	大洞C2式
76. 第17表70. 備考	晩期中葉	大洞BC式
84. 第17表152. 備考	後・晩期粗製土器	加曾利E4式
116. 第50図9 (土器4)	(拓本貼り込みずれ)	(本書P222第181図に訂正実測図掲載)
119. 第23表5. 備考	(補足) 竈補強材と判断しSI14で扱ったが、本来の所属はSI15	
123. 第55図33, 128. 第25表33, PL44-33	高坏 (図・写真天地逆)	蓋 (説明・写真差替え省略, 訂正遺物実測図下掲1)
126. 第25表11器種	浅鉢(台付か)	高坏か
142. 第32表1. 備考	安行3c式	安行3b式
142. 第32表2. 備考	安行3d式	大洞C2式
150. 第33表2. 備考	加曾利E2式か	大洞C2式
158. 第74図1, 第36表1器種, PL52SD11-1	壺か (図・写真天地逆)	蓋 (説明・写真差替え省略, 訂正遺物実測図下掲2)

報告書Ⅳ

頁, 箇所, 内容	誤	正
iii, 例言(調査協力者)	小玉秀也	小玉秀成
4, 6行目	説明をするその際	説明をする。その際
39, 1行目	主軸をN-174°-Eに向けて倒れている。	ほぼ直立して出土した。
91, 第22表36, 厚さ	(2.8)	(1.8)
92, 第22表47, 形態・技法	摂理	節理
115, 第35表1, 種別, 器種	土師器, 甕	弥生土器, 壺か (説明差替え省略)
115, 第74図2, 第35表2	土師器, 小型鉢	弥生土器, 蓋 (説明・写真差替え省略, 写真訂正遺物実測図下掲3)
165, 第102図14	14 (土器8)	14
167, 下から4行目	土器8 (第102図14)	土器8



第2章 総括

第1節 弥生時代再葬墓遺跡の中の泉坂下遺跡

1 調査の目的及び方法

(1) 調査の目的

泉坂下遺跡は、平成18年の鈴木素行氏による学術調査（以下、「18年調査」）で初めて発掘調査が行われ、これを受けて平成24～27年度に常陸大宮市教育委員会が確認調査を行った。

18年調査の当初の目的は、縄文時代晩期の石棒製作遺跡を解明する点にあった。しかし、調査初日に弥生時代中期前葉の再葬墓から人面付土器が出土するに及んで、調査目的は再葬墓の解明に変更された。この調査以前から、当遺跡で弥生時代中期前葉のほぼ完形の壺形土器1個体が採集されており、再葬墓遺跡と推定されていた〔大宮町歴史1995〕が、この調査により弥生時代中期前葉の再葬墓遺跡であることが明確になった。遺構は、壺を主とする完形土器を納めた再葬墓（壺再葬墓）遺構が7基、土器を伴わない土坑3基が検出され、平安時代の竅穴住居跡1軒も一部ながら確認された〔鈴木2011〕。

弥生時代再葬墓の本格的な発掘調査は、平成12～16年の千葉県香取郡多古町境台遺跡（旧称志摩城跡）〔荒井2006、荒井ほか2006〕や平成14年の福島県大沼郡会津美里町油田遺跡〔梶原ほか2004〕以来であった。しかも、再葬墓遺構の保存状態はきわめて良好で、推定される遺構の広がりはいずれまで知られてきた再葬墓遺跡の中でも屈指の規模を誇るように思われた。さらにきわめて稀少な人面付土器が良好な出土状態で検出されたことから、当遺跡は学界及び一般から大きな注目を浴びた。

そこで常陸大宮市では、当遺跡の重要性に鑑み、将来にわたって遺跡を保存し、整備・活用を図ることとした。そのためにも国史跡の指定を受ける方針とし、指定申請のための基礎資料を得ることを目的とした確認調査を実施することとした。具体的目標は、遺跡の地形的条件、存続時期、弥生時代を主とする遺跡の広がり、弥生時代再葬墓の遺存状況と分布状態を確認することである。

(2) 調査の方法

18年調査では、南北20m・幅1mのトレンチ1本を設けて調査を進め、再葬墓遺構が確認された場合は周囲に拡張して遺構の全容を把握した。トレンチ内の再葬墓遺構の分布状態をみると、当然ながら遺構はさらに周囲に広がるのが確認された。

今般の確認調査では、専門家からなる「泉坂下遺跡保存委員会」を設置して調査体制の整備を行い、調査方法を策定し、現地調査でも随時指導を受け、調査成果の評価を明確にすることとした。調査計画は、当初、3年度・3次としたが、調査成果を受けてのちに1年を追加して4年度・4次の調査とした。

調査方法の基本は、遺跡の価値を損わないことであった。要点は次のとおりである。まず遺跡および周囲の詳細地形測量を行った上で、水田区画に従った18年調査のトレンチの方位に合わせて遺跡全体にグリッド（小グリッド2m四方、大グリッド20m四方）を設ける。次に、18年調査の成果を勘案しながら新たに各所をトレンチ調査し、遺構の遺存・検出状況をもとに面的な調査

へと進める。18年調査で、少なくとも当遺跡では縄文時代晩期・弥生時代中期・平安時代の遺構や遺物が確認されているので、各時代の遺構の基本的性格と広がり把握する。弥生時代の再葬墓遺構が検出された場合は、基本方針に従い、原則として遺構は確認面の調査に留めて掘り込まず、遺構内の遺物は取り上げないこととした。ただし、遺跡の歴史的価値をより確実にするためにサンプル的に1基に限って遺構を掘り上げる調査を行った。弥生時代以外の遺構も、遺構確認面までの調査を基本としたが、遺構の時期や性格、弥生時代遺構との重複関係の把握のため、一部サブトレンチを入れる調査方法を採用した。なお、遺構の保存のため、掘削・埋め戻しは重機を入れず、すべて人力によった。また、今後の活用に向けて、特に再葬墓部分については三次元計測を取り入れ、詳細なデータを残している。

以上のような調査方法を採用したことにより、遺構の保存については極めて高いレベルで実現しており、18年調査を含めた全体を見ても多くの遺構を保存できている。再葬墓については、確認した30基（後述）のうち22基は掘り込まずに保存しており、確認した埋納土器153個体のうち約100個体は掘り上げずに原状のまま保存している。

2 泉坂下遺跡調査の成果

当遺跡はその多くが水田（陸田）として利用されていたため、遺構の遺存状態が良好であった。遺跡は低位段丘上に立地しており、段丘面は本来若干の高低差をもつものの、水田化に際しての削平は縄文・弥生時代の包含層を大きく損なうほどではなかったと考えられる。そうした好条件もあり、周到な準備及び丁寧な調査により、18年調査及び確認調査では大きな成果を挙げることができた。

以下、一連の調査の成果について、他の調査例などを見ながら簡単に述べる。

（1）位置と立地（第184図）

まず、弥生時代再葬墓の分布の中での当遺跡の位置について述べておく。弥生時代再葬墓遺跡は、図に示したように、西は愛知県から東は岩手県まで東日本の広い範囲に、約140遺跡が分布する。その中でも北関東から東北地方南部の茨城・栃木・福島3県に特に分布密度が高い。

その一角を占める当遺跡は、久慈川と那珂川に挟まれた台地の東側（久慈川右岸）の裾部に立地する。比較的近在の再葬墓遺跡としては、当遺跡の西北西約6kmの那珂川左岸台地上に常陸大宮市小野天神前遺跡〔茨城県歴史館1978、阿久津1979・1980〕、当遺跡から久慈川の支流約10kmの右岸段丘上に常陸大宮市山方宿（中台）遺跡〔山方町誌編さん委1977〕、当遺跡から久慈川を約12km下った右岸台地上に那珂市海後遺跡〔川崎ほか1970〕が立地している。茨城県内でも再葬墓がやや集中する地域である。

今回の調査によって縄文・弥生時代の包含層の下層からローム層が確認されており、地形的には台地裾の更新世低位段丘上に立地する。当遺跡の乗る低位段丘は、東は久慈川の沖積低地に接し、氾濫原がつくる低地とは約2mの比高がある。遺跡の北と南は浅い谷状地形に限られており、南北約100m・東西約120m、約1万㎡の広がりがある。再葬墓遺跡でこのような台地裾の低位段丘に立地する例はなく、その特異性が注目される。微地形的には低位段丘の中でも中央北寄りから西から東に向かう緩やかな尾根状をなしていたようで、再葬墓はその尾根の先端に近い位置を占めている。

遺跡形成は、時期的には、弥生時代のほか、縄文時代、平安時代、中近世にも行われている。

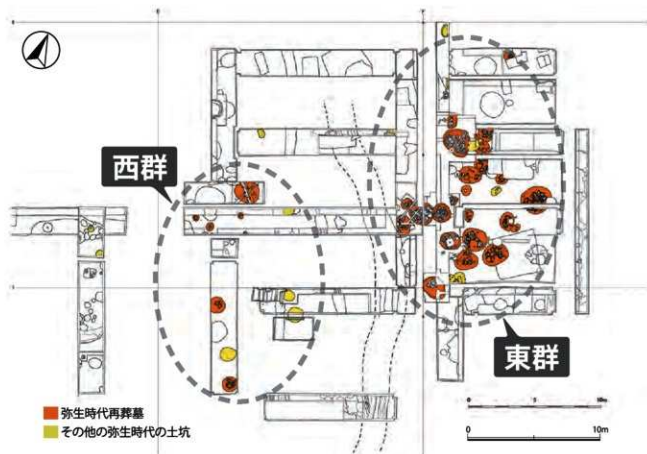
調査では、縄文時代晩期と平安時代の竪穴住居跡が確認されており、縄文時代晩期の遺物は、弥生時代と同じ緩やかな尾根状の高まりのほぼ全面に広がる。平安時代の竪穴住居跡は、低位段丘の広い範囲で確認された。また中世については、東西・南北方向に不規則に走る溝や墓と思われる遺構が各所で検出されており、平安時代とともにある程度の規模の集落の存在が考えられる。

当遺跡の弥生時代再葬墓を理解する上で重要なのは、縄文時代晩期の集落跡に形成されている点である。このことについては、後述する。

一方で、弥生時代の住居跡やそれに準じる生活関連遺構（土器や石器類の集中域など）は確認されなかった。また、確認調査中に遺跡周辺の踏査を試みたが、当該時代の遺物の散布は確認できなかった。弥生時代の再葬墓が遺跡内に居住域を伴わないことはすでに指摘されている〔石川2004a〕が、当遺跡の再葬墓も集落には付随しないものと判断される。

（2）再葬墓の様相（第185図）

再葬墓には「単数土器再葬墓」（「単数型」）と「複数土器再葬墓」（「複数型」）〔設楽2008〕があるが、調査の結果、当遺跡では単数型7基、複数型23基の都合30基が確認された。それらは、東・西2つのグループに分かれて存在する。東群はおおむね20m×15mの楕円形の範囲に納まり、単数型4基、複数型20基、計24基で構成される。大型の複数型の再葬墓が多く、再葬墓どうしが近接して設けられる密な分布状態である。一方、西群はおおむね20m×10mの長楕円形の範囲に納まり、単数型3基、複数型3基、計6基で構成される。規模は比較的小さく、再葬墓どうしは間隔を空



第185図 弥生時代再葬墓等遺構分布図（本書第143図より、一部改変）

けており、分布密度が低い。福島県根古屋遺跡〔梅宮ほか1986〕や福島県島内遺跡〔目黒ほか1998〕では、墓域の形状が弧状ないし環状をなすことが指摘されており〔設案2008〕、小野天神前遺跡では同心円環状、茨城県筑西市女方遺跡〔田中1944〕では環状、栃木県出流原遺跡〔杉原1981〕では複数の環状をなす可能性が指摘されている〔石川1987〕が、当遺跡の墓域は2群とも弧状ないし環状をなしていない。東西両群とも、弥生時代中期初頭～前葉に属しており、基本的に同時に造営されたと考えられる。にもかかわらず、2群の再葬墓群がその構成を全く異にするのは、その造営母体の違いによるのか、それともそれ以外の理由によるものなのか、再葬墓群が営まれる原理を知るうえで注目すべきであろう。なお、東・西群の間を南北に走る第9号溝が再葬墓群の造営と同時期である可能性を考慮して調査を行ったが、この溝は再葬墓である第153号土坑を切ることで、溝の覆土下層から弥生時代後期の十王台式土器片が出土したことから、再葬墓よりも新しい時期の遺構と判断した。ほかに同時期の溝等は確認されないことから、再葬墓群に溝など周囲と区画する施設は認められないことが判明した。

再葬墓どうしの重複は、第4号土坑と第5号土坑、第59号土坑と第60号土坑、第60号土坑と第61号土坑、第114号土坑と第115号土坑で確認されており、必ずしも少なくはない。しかしその一方で、墓域どうしが大きくは重複しないことにも注目する必要がある。墓域の深さが浅いことと土器の大きさを勘案すると多少の土盛りがなされていたと考えられるが、地表への標識はあまり明確なものではなかった可能性がある。大型の礫など墓標的なものの存在は確認できなかった。小野天神前遺跡では、弥生時代の土坑20基は16m×16mの狭い範囲にもかかわらず重複していない。これについて調査者である阿久津久は「何らかの意志が働いている」〔阿久津1979〕として土坑配列に一定の秩序があったと考えている。同様に重複がない例は出流原遺跡・新潟県村尻遺跡〔阿ほか1982〕などがあり、重複がないのが一般的である。重複がみられつつも大きな重複はない当遺跡のありかたは再葬墓の在り方を考えるうえで重要であろう。

埋設された土器は、完掘せず上面のみを確認した例が多いために、墓域内に埋もれて認識できていない例を含む可能性があるが、掘り上げたものを含め現状で合計153個体にのぼる。再葬墓に用いられた土器は壺形土器がほとんどで、蓋が1点のみ認められた。これまでの再葬墓遺跡では、壺形土器が70～80%台を占めるのが一般的であるから、壺形土器が占める割合が著しく高いことになる。

複数型再葬墓の土器は一括で埋納されており、追葬が行われたことを確認できた事例はない。発掘した複数型の土器出土状況を見ると、一部直立した土器もあるが、おおむね斜位で肩を並べ、あるいは一部折り重なるように出土している。ほぼ円形の墓域の壁側に土器を立て掛けるように据え、それを起点として順次土器を丁寧に配列していく様子を明瞭に復元することができる。

弥生時代の再葬墓は、これまで東北・関東・中部地方を中心に約140遺跡が知られている。しかしながら、偶発的に採集された資料により、その中の完形の壺形土器の比率が高いなどの理由から再葬墓と推定される事例が多く、正規の発掘調査によって遺構が具体的に把握できる遺跡は約40遺跡しかない。しかも、耕作などによって再葬墓の土器群がかなり損壊を受けている事例も多いなかで、当遺跡は再葬墓遺構および埋設土器の遺存度がきわめて良好である。

副葬品としては、第6号土坑の土器1の内部から滑石製の管玉1・白玉4が出土している。有機質の副葬品がないから自然科学的分析を試みたが、肯定的な結果は出なかった。

なお、各群内において埋設土器を伴わない土坑が確認されており、中には一次葬が想定される土坑も存在するが、そのように断定することもできない。

(3) 年代

弥生時代再葬墓に埋設された土器は、茨城県北部域に特徴的な土器群を主とし、それに福島方面と連動する磨滑縄文土器や、北西関東の岩櫃山式、西関東の平沢式に共通する要素が認められ、ほぼすべてが中期初頭～前葉の土器である。1点だけ、第26号土坑の土器8がやや古い前期の様相を示している。土器8のように頸部下に突帯を巡らす壺形土器は、前期の茨城県稲敷市殿内遺跡〔杉原ほか1969〕や福島県上野遺跡〔古川1979〕出土遺物に類例があり、やや太頸で長胴形を呈する点も前期の様相を示しているといえる。しかし、他の中期的土器との共伴が確認されていることから、埋設は中期初頭に下ると考えられる。

一方、猪2式や南御山2式に属する中期中葉以降の土器は確認されず、第26号土坑を含む再葬墓群は中期初頭～前葉の幅の中で捉えられる。遺構外出土土器の中に、猪2式や南御山2式の直前にまで下る土器が散見されるが、埋設土器の中には確認できない。

設楽博己は「壺棺再葬墓の基礎的研究」〔設楽1993、一部改変して設楽2008に再録〕の中で5期区分を提示した。西日本弥生土器編年のⅠ～ⅤないしⅥ期区分のうちⅠ～Ⅲ期に対応させて1～3期に大別し、それぞれをa、bの2期に細分し、1b期はさらに古段階と新段階に区分している。その中で設楽は泉坂下遺跡を弥生時代中期初頭に当たる2a期に所属させている〔設楽2008〕。設楽の判断は18年調査の成果を基にしたものであるが、確認調査で得られた知見を含めて考えてもその判断を変更する必要はない。

また、鈴木は当遺跡の土器を墓壇の切り合いと施文から2期に分け、「泉坂下Ⅰ・Ⅱ期」としている〔鈴木2011〕が、これらはいずれも「2a期」内の細別に相当する。

さらに弥生土器と再葬墓の数値年代を得るため、土器に付着した炭化物を採取して放射性炭素年代測定を行なった。18年調査の報告では「さかのぼったとしても、紀元前2世紀以降」〔吉田2011〕とされている。第3次確認調査報告では「紀元前3～4世紀」〔パリオ・サーヴェイ2015〕、本報告書ではこれまでの報告も踏まえて、遺構の時期を「calBC200～400年あたり」〔パリオ・サーヴェイ2016〕とした。放射性炭素年代測定・較正法で得られた年代数値は統計的数値であり、統計的信頼性をつねに考慮しなければならないものである。したがって、現状ではそれ以上絞り込むことはできず、やや広い年代幅の中で理解するのが適切である。しかし、東日本の弥生時代再葬墓出土土器の年代測定はまだごく一部にとどまっており、貴重な例となったと考える。

(4) 縄文時代の遺構との関係

当遺跡は弥生時代の遺構のほかに縄文時代、平安時代、中近世の遺構が検出されている。中でも縄文時代の遺構群は弥生時代再葬墓との関連において注目されるものである。縄文時代については、前期は土器片が散見される程度であるが、中期になると前葉段階の袋状土坑が検出されており、生活の痕跡がより確実になる。後期は土器片が散見されるが、遺構は検出されていない。

前述したとおり、弥生時代再葬墓は縄文時代晩期の集落跡に形成されている。遺跡北西部の第12トレンチで住居跡4軒と中央部の第27トレンチで住居跡1軒が検出されており、遺物量も他の時期を圧倒する。第12トレンチの住居跡は確認面までの調査に留めたために具体的内容は明らかではないが、第27トレンチの第26号堅穴住居跡はトレンチ幅で住居内を掘り下げて調査したことから、ある程度状況が明らかになった。床面直上から晩期初頭の土器の大型破片が出土したことから当該時期の住居跡と判断した。ただ、覆土中には晩期中葉の土器が大量に含まれており、堅

穴住居廃絶後の埋没過程で不要物の廃棄場所となった可能性が高い。また、この住居跡の周囲にも遺構に伴わないものの晩期中葉の土器片が多く散布することから、当遺跡には当該時期の住居跡等の生活痕跡が広がっている可能性が高い。さらに晩期後葉の土器片も少量ながら散見されることから、この時期にも当遺跡での生活が継続したと想定できる。晩期中頃から後半の大洞C1・C2・A式期を中心として長期間継続した集落遺跡と考えられるのである。土器以外の遺物については、石棒・石剣類は未成品から完成品までとその製作用具が揃っており、当遺跡で石棒・石剣類が製作・使用されたことが明らかである。また、土偶片などもやや多く出土しており、手燭形土器片などを含めて呪術的な遺物が顕著である。

当遺跡の弥生時代再葬墓は以上のような縄文時代晩期の集落跡と重複して形成されているが、同様の例は、当市小野天神前遺跡、筑西市女方遺跡、稲敷市殿内遺跡、千葉県天神前遺跡〔杉原・大塚1974〕・埴台遺跡、福島県根古屋遺跡・墓料遺跡〔会津若松市教委1977〕・鳥内遺跡・窪田遺跡〔古川ほか1987〕、新潟県村尻遺跡など、多く見られる。

こうしたことから、弥生時代再葬墓との連続性が注目されるが、当遺跡では縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺物が希薄であるので、縄文時代晩期の集落と弥生時代中期の再葬墓の間には空白期間があると考えられる。今回の一連の調査で行った、縄文時代晩期後半の土器と弥生時代再葬墓の埋納土器それぞれの付着炭化物を対象とした放射性炭素年代測定の測定値を比較すると、おおよそ500～600年ほどの空白があることになる。発掘調査区外に縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺構・遺物が存在する可能性はあるものの、調査成果からは積極的にそれを主張することはできない。しかし、上述のように、茨城・千葉・福島・新潟4県では縄文時代晩期の集落遺跡に重なるように弥生時代の前・中期の再葬墓群が形成されている例が多く、こうした重複が単なる偶然とも思えない。当遺跡の場合も、空白期間があるとしても、両者の関係については十分に考慮する必要があるだろう。

(5) 人面付壺形土器について (第39表, 第186図)

当遺跡では18年調査で第1号土坑からほぼ完形の人面付土器が出土し、このことにより当遺跡は脚光を浴びた。人面付土器は、顔面付土器・顔壺とも呼ばれ、壺形土器の口頸部に人の顔面や頭部を表現したものである。やや類似するものに土偶形容器があるが、土偶形容器との識別は、胴部の横断面形が円形で通常の壺形を呈する場合を人面付土器、胴部の断面形が偏平で土偶形を呈する場合を土偶形容器とする。人面付土器は、破片の場合土偶形容器と厳密に区分するのが難しいという問題があるものの、これまで福島・新潟両県から福井・愛知両県までの地域で26遺跡29例が知られるにすぎず、きわめて類例が少ないものである。弥生時代前期に属す確実な例はなく、中期初頭から後期まで存続し、関東および東北地方南部の弥生時代中期前半の例は、ほとんどが再葬墓遺跡からの出土である。その再葬墓遺跡出土例は、推定を含めても14遺跡17例しかない。中でも墓域内での出土状況が明確に把握できる例は、当遺跡と女方遺跡・小野天神前遺跡・出流原遺跡、及び埼玉県上敷免遺跡〔岡1983, 青木1999〕のわずか5遺跡であり、当遺跡の例は遺存状態が良好であるのに加えて、出土状況がもっとも詳細に把握できており、資料価値が高い。

当遺跡の人面付壺型土器は、高さ77.7cmと人面付土器の中で最大であり、人面の造作が著しく立体的で、むしろ頭部と表現するのが相応しいほどで、優品といえる。近隣の小野天神前遺跡の3例のように、壺形土器の口頸部に粘土紐を貼り付けて眉・目・鼻・口などを表現する例が多いのに比べ、本例は頸部を大きく張り出し、頭部も壺形土器の頸部を影らませるなどまさしく立体

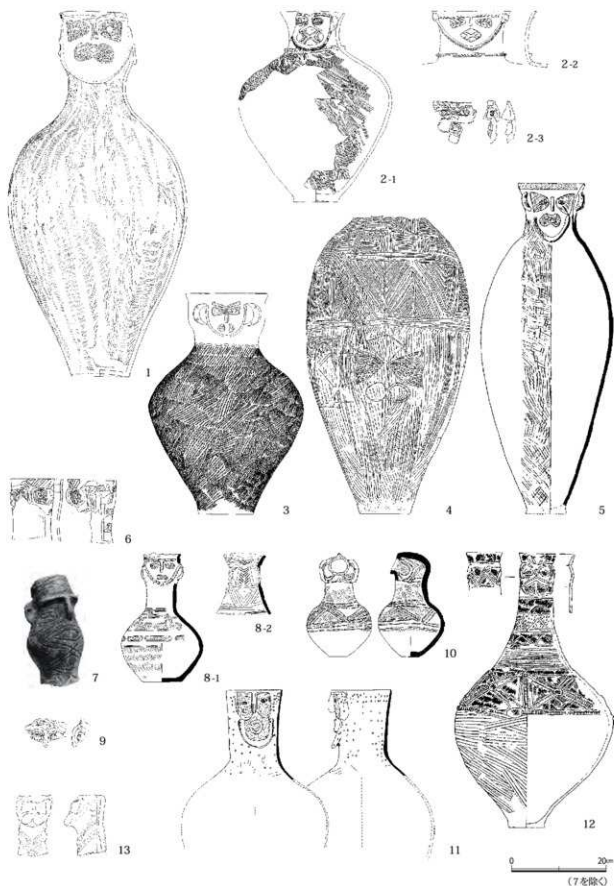
的な頭部表現が採られている。相対する2面に人面を表現する福島県滝ノ森B遺跡例(第186図8-1)〔亀井1957〕は壺形土器の頭部を膨らませた形状が頭部を思わせ、海後遺跡や上敷免遺跡例も壺形土器の頭部を膨らませた箇所に人面を配置しているが、当遺跡例のように耳が頭部の真横に位置してまさに頭部を表わしたような例は、土偶形容器の可能性が指摘されている静岡県角江遺跡例〔佐野ほか1996〕を除けば、他に類がない。

なお、茨城県内では人面画土器の北原遺跡〔石川2004b〕を含め5遺跡7例が出土しており、当該地域は、人面付土器の出土例が多いことで特異な位置を占める。中でも当遺跡付近は、12km圏内に小野天神前遺跡(3例)と海後遺跡が位置し、人面付土器出土遺跡が集中している。泉坂下遺跡例の立体的な表現の特異性は上述のとおりであるが、小野天神前遺跡の諸例の人面表現も泉坂下遺跡例に次いで立体的な表現となっている。人面付土器の成立や分布形成を考える上で注目される。

第39表 人面付土器出土遺跡一覧表

*弥生時代中期の出土例。再葬墓遺跡以外出土例を含む

No	所在地	遺跡名	出土遺構	時期	遺存状況等	採図番号
1	茨城県常陸大宮市	泉坂下遺跡	再葬墓	中期前半	ほぼ完形	第186図1
2	茨城県常陸大宮市	小野天神前遺跡	再葬墓	中期前半	3例(完形・口頸部・人面部各1例)	2-3
3	茨城県那珂市	海後遺跡	推定再葬墓	中期前半	完形	3
4	茨城県筑西市	女方遺跡	再葬墓	中期前半	ほぼ完形	5
5	茨城県筑西市	北原遺跡	推定再葬墓	中期前半	胴部人面画土器、壺形胴部	4
6	福島県会津若松市	墓料遺跡	再葬墓	中期前半	口頸部	7
7	福島県白河市	滝ノ森B遺跡	推定再葬墓	中期前半	2例(完形・口頸部各1例)	8-1・2
8	福島県石川町	島内遺跡	再葬墓	中期前半	頸部	6
9	福島県いわき市	番匠地遺跡	包含層。再葬墓由来か	中期前半	人面部破片	9
10	栃木県宇都宮市	野沢遺跡	再葬墓	中期前半	口頸部	11
11	栃木県佐野市	出流原遺跡	再葬墓	中期前半	完形	10
12	栃木県栃木市	大塚古墳群内	土坑墓	中期後半	口頸部	
13	埼玉県深谷市	上敷免遺跡	再葬墓	中期前半	完形	12
14	埼玉県熊谷市	前中西遺跡	集落・方形周溝墓	中期後半	口頸部	
15	埼玉県熊谷市	諏訪ノ木遺跡	集落	中期後半	完形、腕表現	
16	千葉県市原市	三島台遺跡	集落か	中期後半	完形、腕表現	
17	千葉県多古町	新城遺跡	集落・住居跡	中期後半	口頸部	
18	神奈川県横須賀市	ひる畑遺跡	集落	中期後半	頭部	
19	新潟県新潟市	緒立遺跡	再葬墓関連	中期前半	口頸部	
20	長野県長野市	松原遺跡	集落・住居跡	中期後半	完形	
21	山梨県都留市	尾咲原遺跡	不明	中期前半	口頸部片	
22	静岡県静岡市	有東遺跡	集落	中期後半	頭部	
23	静岡県浜松市	角江遺跡	自然河道。再葬墓由来か	中期前半	口頸部。土偶形容器の可能性	13
24	愛知県名古屋市	市場遺跡	不明	中期前半	口頸部	
25	石川県小松市	八日市地方遺跡	集落	中期後半	頭部片	
26	福井県福井市	糞置遺跡	集落	中期前半	口頸部片	



第186図 主な人面付土器

* 弥生時代中期の再葬墓遺跡（推定を含む）出土例

- 1 泉坂下遺跡（鈴木 2011） 2-1-3 茨城・小野天神前遺跡（茨城県歴史館 1978） 3 茨城・海後遺跡（川崎ほか 1970）
 4 茨城・北原遺跡（石川 2004b） 5 茨城・女方遺跡（田中 1944, 図；茨城県立歴史館 1991） 6 福島・鳥内遺跡（目黒ほか 1998）
 7 福島・葛科遺跡（会津若松市教育委員会 1977） 8-1-2 福島・滝ノ森 B 遺跡（1；亀井 1957, 2；福島県 1969） 9 福島・番匠地遺跡（末永ほか 2016） 10 栃木・出流原遺跡（杉原 1981） 11 栃木・野沢遺跡（小林・沼田 1900, 図；小林・杉原 1968） 12 埼玉・上敷免遺跡（青木 1999, 図；関 1983） 13 静岡・角江遺跡（佐野ほか 1996）

3 まとめ

以上、泉坂下遺跡の調査成果について、他遺跡とも比較しながら述べてきた。最後にその要点をまとめておくこととする。

当遺跡は弥生時代中期前葉の再葬墓遺跡で、人面付土器が墓域内から出土している。弥生時代の再葬墓遺跡は、東日本でも北関東から東北地方南部を中心として、前期から中期前半までの時期に約140遺跡が知られているが、そのうち発掘調査によって遺跡の具体的内容が把握できたのは約40遺跡しか存在しない。しかも、埋設された土器など再葬墓遺構の遺存状態が著しく良好である点も当遺跡の特色として挙げることができる。

18年の学術調査と今回の4次にわたる確認調査で確認された再葬墓は30基に上り、多数の土器を埋設する再葬墓が密に分布する東群と、少数の土器を埋設する再葬墓が散漫に分布する西群の2グループで構成されることが確認された。このように墓群構成が明確になった大規模再葬墓遺跡は、県内の女方遺跡・小野天神前遺跡、栃木県出流原遺跡などごくわずかである。そのような中、当遺跡では詳細な調査記録を作成することができた。

さらに、これまで主に再葬墓遺跡で発見される特異な遺物として知られている人面付土器も墓域内に埋設された状態で1例が発見された。これまで東日本各地で14遺跡17例発見されているが、墓域内に埋設された状況が明確に把握できる遺跡はわずか5遺跡しかない。しかも、人面部の表現がこれまでの発見例の中でもっとも立体的であり、なおかつもっとも大型の例である。学術的価値が高いうえに、遺存状態もほぼ完全な優品といえる。

一方、これら再葬墓を造営した人々の集落などの生活痕跡は、当遺跡内で確認することはできなかった。これまでの弥生時代前・中期の再葬墓遺跡でも、同時期の住居跡などが確認された例はない。再葬墓という墓制では同時期の集落は地点を異にすることが、当遺跡でも確認されたことになる。

なお、弥生時代前・中期の大規模な再葬墓遺跡が縄文時代晩期の集落遺跡と重複する事例はこれまでも注意されてきたが、当遺跡でこの種の事例が加わったことになる。当遺跡の場合は縄文時代晩期集落に直接後続して弥生時代の再葬墓が造営されたのではなく、空白期間を挟んでいることに十分注意する必要があるが、こうした事例が少なくないことには留意しておく必要があろう。

また、当遺跡の周辺には、同じ常陸大宮市内に小野天神前遺跡と山方宿（中台）遺跡、那珂市海後遺跡など、再葬墓遺跡が集中している。そして小野天神前遺跡で3例、海後遺跡でも1例の人面付土器が確認されており、人面付土器の集中度も高く、その造形も当遺跡例がもっとも立体的で、小野天神前遺跡の3例がそれに次ぐ。久慈川をさらに遡れば福島県崖ノ上遺跡〔福島県1969〕・鳥内遺跡・滝ノ森B遺跡、茨城県西部にも北原遺跡や女方遺跡など、再葬墓や人面付土器出土遺跡が存在する。当遺跡の学術的重要性は言うまでもないが、さらに周辺の遺跡群との関連にも目配りをする必要があろう。

以上のように、当遺跡は、再葬墓遺跡の中でも遺存状況が良好で、調査はその好条件のもと周到に行われ、大きな成果を挙げることができた。弥生時代再葬墓、その時代の社会・文化、および縄文時代から弥生時代への移行過程やその地域性を知るうえで貴重な資料・データを提供し、今後の研究と歴史理解に大きく貢献したといえよう。

今後はさらに十分な検討を重ね、地域のみならず国民すべての共有財産として保存・整備・活用する道を探らなくてはならない。すでに確認調査ではそうした目的に沿った調査方法を採用して

いる。今後の保存・活用等を視野に、遺跡の価値を損なわないよう、基本的に遺構の掘り込みは行わず、極力遺構の保存に努めた。再葬墓については、全体の約7割を埋納土器とともに埋没保存している。遺構の確認調査後に埋め戻した場合に、どのように埋没環境が推移・変動するのかについての基礎的データの把握にも務めた。現在、地域の中で当遺跡に対する関心が高まり、保存・活用等への気運が高まっているが、これを背景により高いレベルで保存・活用等を実現していく必要がある。

【引用・参考文献】 * 主要なもののみ。発行者は判別可能な範囲で省略した場合がある。

会津若松市教育委員会（編集・発行）1977『墓料』

青木克高1999「深谷市上敷免遺跡出土土器の共存関係」『埼玉考古』第34号、埼玉考古学会、pp.15-22、PL1-7

阿久津久1979「大宮町小野天神前遺跡の分析」『茨城県歴史館報』6、pp.26-54

阿久津久1980「大宮町小野天神前遺跡の分析（2）」『茨城県歴史館報』7、pp.1-20

荒井世志紀2006『志摩城跡—多古町遺跡群発掘調査報告書—』多古町教育委員会

荒井世志紀ほか2006『志摩城跡・二ノ台遺跡1』千葉県香取農林振興センター・多古町・香取郡市文化財センター

石川日出志1987「人面付土器」『季刊考古学』第19号、pp.70-74

石川日出志1989「再葬墓—研究の課題—」『月刊考古学ジャーナル』No.302、pp.17-22

石川日出志1999「東日本弥生墓制の特質」『新弥生紀行』朝日新聞社、pp.175-6

石川日出志2004a「再葬墓研究の現在と今後の課題」『月刊考古学ジャーナル』No.524、pp.3-6

石川日出志2004b「茨城県北原遺跡再葬墓の研究」『明治大学人文科学研究所紀要』54、pp.1-45

石川日出志2009「弥生時代・壺再葬墓の終焉」『考古学集刊』第5号、明治大学文学部考古学研究室、pp.21-38

茨城県立歴史館（編）1991『茨城県史料』考古資料編 弥生時代、茨城県

茨城県歴史館（編集・発行）1978『茨城県大宮町小野天神前遺跡（資料編）』（学術調査報告書1）

梅宮茂・大竹憲治ほか1986『霊山根古屋遺跡の研究—福島県霊山町根古屋における再葬墓群—』霊山根古屋遺跡調査団

大宮町歴史民俗資料館（編）1995『大宮の考古遺物』大宮町教育委員会

梶原文子ほか2004『高田中央地区遺跡発掘調査報告書2 油田遺跡（第2次）発掘調査概報』会津高田町文化財調査報告書第21集

亀井正道1957「人面土器の新例」『考古学雑誌』第43巻第1号

川崎純徳・川上博義・瀧田宏1970「茨城県海後遺跡出土の人面土器」『常総台地』5号、pp.20-22

後藤俊一・萩野谷悟・中林香澄2013『泉坂下遺跡Ⅱ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第16集

後藤俊一・萩野谷悟・中林香澄2014『泉坂下遺跡Ⅲ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第21集

後藤俊一・中林香澄・萩野谷悟2015『泉坂下遺跡Ⅳ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第23集

小林行雄・杉原莊介（編）1968『弥生式土器集成』本編2、東京堂出版

小林興三郎・沼田頼輔1900「下野国河内郡野沢村発見の土器について」『東京人類学会雑誌』第15巻第166号、pp.129-132

佐野五十三・篠原充男・岩本貴1996『角江遺跡Ⅱ』遺物編1（土器・土製品）、静岡埋蔵文化財研究所調査報告書第69集

設楽博己1993『壺棺再葬墓の基礎的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』50、pp.3-48

設楽博己2008『弥生再葬墓と社会』塙書房

末永成清・竹田裕子・鈴木隆康ほか2016『久世原遺跡5・香匠地遺跡4』いわき市埋蔵文化財調査報告第173冊

- 杉原荘介1967『群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址』『考古学集刊』第3巻第4号、東京考古学会、pp.37-56
- 杉原荘介1968『新潟県・六野瀬遺跡の調査』『考古学集刊』第4巻第1号、東京考古学会、pp.77-91
- 杉原荘介1981『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告 考古学第8冊
- 杉原荘介・大塚初重1974『千葉県天神前における弥生時代の墓址群』明治大学文学部研究報告考古学第4冊
- 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎1969『茨城県殿内(浮島)における縄文・弥生両時代の遺跡』『考古学集刊』第4巻第3号、東京考古学会、pp.33-71
- 鈴木素行2011『泉坂下遺跡の研究』(私家版。同年、常陸大宮市教育委員会から『泉坂下遺跡』として刊行)
- 関雅之・田中耕作・石川日出志ほか1982『村尻遺跡Ⅰ』新発田市埋蔵文化財調査報告第4
- 関義則1983『須和田式土器の再検討』『埼玉県立博物館紀要』10、pp.26-71
- 田中國男1944『縄文式弥生式接触文化の研究』大塚巧藝社(1972年、田中國男博士遺著刊行会再版)
- 栃木県立博物館(編集・発行)2013『弥生人の祈り—東国の再葬墓—』
- バリノ・サーヴェイ株式会社2015『土器付着炭化物の放射性炭素年代測定』『泉坂下遺跡Ⅳ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第23集、pp.210-212
- バリノ・サーヴェイ株式会社2016『出土炭化物の放射性炭素年代測定』『泉坂下遺跡Ⅴ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第23集(本書)、pp.139-145
- 春成秀爾1993『弥生時代の再葬制』『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集、pp.47-91
- 福島県(編集・発行)1969『福島県史』第1巻(通史編Ⅰ)
- 古川利意・和田聡・吉田博行1987『窪田遺跡』只見町教育委員会
- 古川利意1979『会津上野遺跡調査報告』高郷村教育委員会(現・喜多方市)
- 日黒吉明ほか1998『鳥内遺跡発掘調査報告書』福島県石川町教育委員会
- 山方町誌編さん委員会1977『山方町誌』上巻、山方町文化財保存研究会
- 吉田邦夫2011『土器付着炭化物の放射性炭素年代』『泉坂下遺跡の研究』(鈴木素行私家版)、pp.100-103
- 渡辺誠2013『弥生時代の人面装飾付土器』『橿原考古学研究所論集』第16、八木書店、pp.23-31

第2節 地域の文化遺産としての泉坂下遺跡

泉坂下遺跡は、地権者である菊池榮一氏（故人）が整地した際に弥生土器等の遺物が出土し、後に、当時の大宮町歴史民俗資料館等に寄贈したことによって注目され、平成18年調査へとつながったことは第1章で述べたとおりである。出土したという昭和55年頃、遺物を前にした菊池氏はどのようにお感じになり、どのようなお気持ちで寄贈なされたのだろうか。

昭和期の常陸大宮市域では、昭和39年山方遺跡、同48年一騎山古墳群、同50年梶巾遺跡、同51年小野天神前遺跡といった、学史に残る発掘調査が行われ、その成果が広く喧伝されていた。その一方で高度経済成長の時代であり、記録保存されることもなく失われていく遺跡があったことも事実で、埋蔵文化財行政に課せられた現在にも続く普遍的な課題が顕在化した時代でもある。後世に伝えるべき地域の文化遺産が隅の目を見ることなく消えていく状況について、当時、小学校の教員をされていた菊池氏は気づいていたはずで、自分たちの住んでいる土地に古くからの人々の営みがあって、その痕跡が残されていることを、地域の子供たちに知ってほしかったのではなかろうか。

時は流れて平成22年10月、常陸大宮市に泉坂下遺跡保存委員会が設置され、泉坂下遺跡の保護・保存策について検討が始まった。無論、平成18年の鈴木素行氏の学術調査によって、泉坂下遺跡が貴重な再葬墓遺跡と判明し、注目を浴びたことを受けてのものである。

平成24年に開始した確認調査も、平成27年の第4次調査をもって終了した。その調査成果はこれまで述べてきたとおりである。この確認調査自体も注目されたが、調査と並行して、泉坂下遺跡に関わる様々な取り組みも行われている。平成26年には、市歴史民俗資料館が企画展「Mission !! 東日本の弥生時代を解明せよ！～ここまでわかった泉坂下遺跡～」を開催し、期間中の11月9日には、教育委員会が午前第3次調査現地説明会、午後市文化センターで泉坂下遺跡シンポジウムを開き、市内外からの注目度はますますの高まりを見せた。

平成27年からは「泉坂下遺跡に学ぶ陶芸講座」と題した公民館講座が開催されている。これは市内陶芸家の協力を得て、いわゆる土器づくり教室に、人面付壺形土器を再現しようというベクトルを加えた講座であり、これまでの公民館講座とは一線を画した路線が異彩を放った。もちろん小学校の副読本等にも取り上げられ、今や泉坂下遺跡は、郷土学習に欠かせない存在として、地域の子供たちに最もよく



泉坂下遺跡保存委員会



泉坂下遺跡シンポジウム



小学校の遺跡見学



泉坂下遺跡に学ぶ陶芸講座



歴史民俗資料館大宮館



いずみと写真を撮ろう！



さかいひろこ氏のイラスト

知られる遺跡となっているのである。

その一方、今後に向けての課題も散見されるようになってきた。泉坂下遺跡の再葬墓出土遺物は、歴史民俗資料館大宮館に一部が展示されていて、とりわけ人面付壺形土器は、子供から大人まで惹きつけ、そのままの姿でマスコットキャラクターと化し、記念撮影も行われるほどである。しかし、大宮館は狭小な施設であるため、出土遺物のほとんどは公開されていない状況である。やはり、泉坂下遺跡に対する真の理解のため、施設面については今後解決していかねばならないだろう。史跡としての整備・活用についても課題がある。常陸大宮市には絶滅危惧種生息地が各地にあり、史跡整備にあたっては、周辺の貴重な自然環境との調和は大きなポイントになる。また、この確認調査によって生じた課題として、再葬墓の多くを確認面での観察に留め、埋納土器をそのまま土中に保存した点が挙げられる。遺跡を未来に伝えるため、今後は埋没保存した土器の保護と状態管理に、最大限の配慮が必要になってくるだろう。これらの課題については、今後十分に協議し、最善を尽くしていかねばならない。

泉坂下遺跡は、弥生の人々にとって聖域だったことだろう。弥生人の死生観が、そのまま埋められている土地であるがゆえに、弥生研究の上でその価値は計り知れない。一方で、良好な立地、比較的小規模で浅い造りから、再葬墓は攪乱を受けやすく、後世に伝わりにくい遺跡でもある。いくつもの偶然が重なって守られ、そして世に出た泉坂下遺跡は、常陸大宮市だけでなく、我が国の宝である。今回の確認調査では解明できなかった再葬墓研究上の課題も、技術の進歩とともに、いつの日か解明される時が来るだろう。泉坂下遺跡を守り、未来に伝えていくことは、現代を生きる私たちの責務である。

最後となるが、当調査の実施にあたっては、実に多くの皆様に御指導、御協力をいただいた。改めて感謝申し上げます。皆様のお気持ちに応えるためにも、地域の文化遺産のシンボルである泉坂下遺跡が、末永く愛されるように、適切に保護、保存していきたい。

写 真 图 版



道跡遠景 (1) (東南東から)



道跡遠景 (2) (東から)



道跡遠景 (3) (南東から)



調査区全景 (1) (北から)



調査区全景 (2) (北東から)



調査区全景 (3) (南東から)



調査区全景 (4) (東から)



調査区全景 (5) (南から)



調査区全景 (6) (南西から)



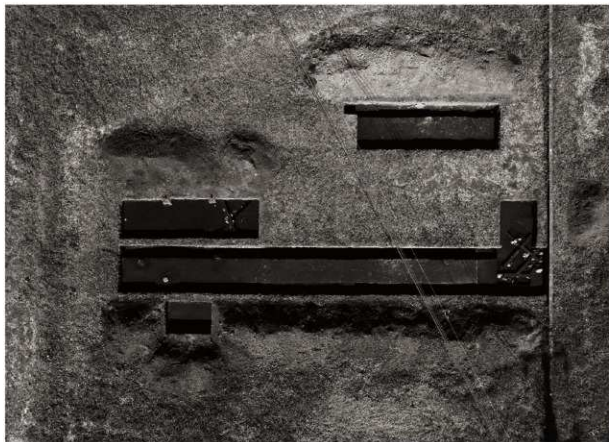
調査区全景 (7) (西から)



調査区全景（8）（北西から）



調査区全景（9）（鉛直）上が北



第4・14トレンチ全景（鉛直）上が北



第4トレンチ全景（1）（東から）



第4トレンチ全景（2）（西から）



第4トレンチ北拡張区確認状況（西から）



第4トレンチ南拡張区確認状況（北から）